

第2節 遺構

1 壊穴住居跡（註1）（第45～47図、第6表、PL3）

壊穴住居跡は、弥生時代中期後半栗林式期の2軒のみで、いずれも基本土層Ⅲ b層下部からⅣ層上面で検出している。調査途上でSB03とした壊穴状の遺構は、江戸時代後半から近代にかけての農地整備時の掘込みであることがわかったが、番号を付したまま扱った。また、溝跡（SD05）は壊穴住居跡の周溝の可能性もあるが、柱穴、炉跡等の施設がないことから、溝跡として報告した。

SB01（第45・46図、PL3）

位置：I S01・02・06・07 グリッド 規模：長軸4.3m×短軸<3.6m> 平面形：円形

主軸方位：N 面積：14.3m²

検出：表土、およびⅢ b層掘削中、ほぼ東西南北の方位に合う十字形の平成22年度中野市教育委員会による範囲確認調査トレンチを検出。その周囲で、ほぼ円形のプランを確認したことから、市教委が途中まで調査した壊穴住居跡と判断した。西壁および北側の一部はトレンチにより破壊され、南東側は範囲確認調査時に床面まで調査されている。Pit1は途中の深さまで、Pit2（炉跡）は南半分がほぼ底面まで掘削されていた。住居の埋土が完全に残存するのは、東西トレンチの北壁際と南側のPit8付近のわずかな部分であった。トレンチ断面で、住居跡の床面および掘方まで観察できた。北側の埋土残存部分は、断面を目安に掘下げたが固くしまった貼床は明瞭ではなかった。床面を精査しPit2～8を検出した。重複のあるPit8はPit5の掘直しと考えられる。また中野市のトレンチではPit9が検出されている。

重複関係：住居跡北壁がSK319を壊す形で重複する。

構造：西側の壁面は失われているが、南北方向で計測すると径約430cmのほぼ円形となる。壁高は、最深25cmを測る。ほぼ中央に炉跡を持ち、Pit1～Pit9のうち主柱穴はPit1、3、9の3本と考えられる。もう1本は中野市のトレンチで消失した可能性もあり、本来は4本の主柱穴と考えたい。主柱穴は径23～28cmで、深さ42、45、66cmを測る。そのほかの小柱穴は、棟持柱的なもの（Pit4）、補助的な柱となるものであろう。Pit2は、86×78cmの不整円形で深さ20cmを測る炉跡である。北側の壁面が橙色に変色しやや硬化していたが、そのほかの壁面は地山土（IV層）であり、被熱痕跡はない。東西の壁際には径16cm、深さ5、6cmの小穴がともなう。炉の補助的な柱の痕跡であろうか。埋土は、3層に分層でき、南側壁際のみにブロック状に地山を混入する崩落土（2層）がある。貼床と推定した土は、炉の南側、主柱穴間が最も固くなっていた。床下の掘方は、中央部分はほぼ平坦であったが、南側、北側の壁際付近が周溝状に凹む状況であった。

出土遺物：調査済みの部分が多く、出土遺物が集中する状況ではなかった。図化できたものは、南西の地区から出土したものがほとんどで、ほかに第46図に示した遺物が出土している。壺、甕等、栗林1式の様相を示す土器のほかに、土製円板、石鍬3点、石鍬未成品等の石器が出土した。剝片類も安山岩の石材を中心に、使用痕跡の残る剝片14点の出土がある。また、炉跡の東側、Pit5・8の周辺に、炭化材が少量まとまって床面や上より出土。AMS法によるC14年代測定したところPit5北東側の炭化材3（H24分析No.1）、Pit2・2の炭化材（H24分析No.2）は、それぞれ $2,210 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $2,290 \pm 30\text{yrBP}$ の測定結果で、弥生時代中期後半栗林式期前半期に矛盾しない数値が得られた。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：栗林1式土器が遺物の主体をなし、当該期の間に廃絶した住居であろう。剝片の出土も多く、石器

製作が周辺で行なわれていた可能性も示唆できる。北西 5m に長方形の堅穴住居跡 (SB02) が存在し、それぞれの住居埋没土の炭化物を C14 年代測定した結果、SB01 が SB02 より古いという値が得られたが、出土遺物の時期に大きな差はない。

SB02 (第 47 図、PL3)

位置：I N21、I S01 グリッド 規模：長軸 3.05m × 短軸 2.58m 平面形：長方形

主軸方位：N79° E 面積：6.0m²

検出：表土、およびⅢ層除去中に、土器の集中と一辺 2 ~ 3m ほどの方形プランを確認した。東側は削平により壁面は残存せず、床面が直接露出しており、埋土は西側半分が残るのみであった。ただし、東側の壁周溝を検出することはできた。中央部から南壁にかけて炭化物、土器の集中があった。土器、炭化物を取上げ、床面を精査して炉跡、Pit1 ~ 3 を検出した。貼床を掘下げる途中、西壁際に Pit4 を検出した。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：東側半分の壁面は失われているが、壁周溝を目印に計測すると主軸の東西方向 305cm、単軸の南北方向 258cm の長方形となる。中央に炉を持ち、Pit1 ~ 4 のうちで主柱穴は Pit2、4 の 2 本と考えられる。Pit2 が径 18 ~ 20cm、深さ 42cm、Pit4 が径 22cm、深さ 48cm を測り、直径 20cm に近い柱を深く打ち込み、棟持柱として屋根を支えたものであろうか。Pit1 は径 30 ~ 31cm、深さ 14cm、Pit3 は 55 × 36cm、深さ 10cm の楕円形を呈し、断面形もすり鉢状となることから、柱穴ではなく貯蔵穴的な施設の可能性も考えられる。炉跡は中央に位置し、35 × 33cm、深さ 5cm のほぼ円形で、浅いすり鉢状の断面形を呈する。焼土の残存はほとんどないが、床面とは違いやや黒ずんで固くしまっている。北壁、南壁中央から東側にかけては、周溝がみられる。幅 28 ~ 7cm で、深さは床面から最深 8cm を測るが平均 4cm ほどの深さである。埋土中に、炭化材、焼土が集中する箇所があり廃棄行為の痕跡である可能性が高い。掘方が深く、床下には掘方土が厚く堆積していた。

出土遺物：炭化材とともに、床面近くから栗林式土器がまとめて出土した。主な遺物は、Pit3 埋土を中心に出土した壺 (6)、壺の大形破片 (7)、大形の片口鉢 (8) である。さらに、西側埋土中より刃器 (14)、敲石 (17) などが出土した。また、炭化材が床面直上さらには Pit2 内より出土した。そのうちの 2 点を選び AMS 法による C14 年代測定したところ、炭化物集中の炭 2 (第 47 図中の C2) (H24 分析 No.3)、Pit4 の炭化物 1 (同図中の Pit4-C1) (H24 分析 No.4) は、両者とも 2250 ± 30 yrBP の測定結果が算出された。炭化物集中状況図・遺物出土状況図は、それぞれ断面図へ見通し投影図を作成した。

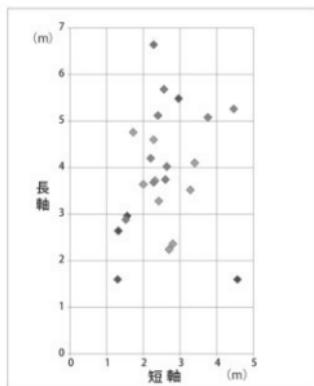
時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本住居跡の南東 5m に位置する円形の堅穴住居跡 (SB01) と比較すると、小形で平面形が異なる。前述したように、C14 年代測定の結果は SB01 が SB02 より古いという値が得られ、併せて本跡からは栗林 1 式土器の中では、やや後出的な器種のひとつと考えられる赤彩された片口鉢 (第 47・81 図 8) の出土がある。ただし、そのほかの出土遺物の時期には大きな差はない。2 軒がセットでほぼ同時期に存在したと考えると、本跡は SB01 とは性格が異なる作業小屋的な施設等の可能性が指摘できるのか。一方、本跡の南東側にある SK342、343、南西側にある SK337、338 は、2 本ずつセットで本跡に接する位置に存在し、住居の上屋構造に関連する柱穴になるかもしれない。

2 挖立柱建物跡 (第48~55図、第7表、PLA~7)

今回の調査区では、600基近い柱穴状の落ち込みがある。それらをひとつひとつ調査する過程で、形状や規模、埋土の種類、位置関係などから掘立柱建物跡を想定し調査した事例が25棟ある。柱配置は、2間×1間（長軸×短軸）が9棟と最も多く、3間×1間が5棟と続く。短軸1間で平面形が長方形となる建物が7割を占める。その点とも関わり、長軸は3~6m、短軸は2~3mの長さの間に半数近くの建物跡が納まる（第42図）。長軸方向は、ほぼ北方が5割を占め、それに直交する東西方向と北西方向が残りを2分する（第43図）。縄文時代もしくは弥生時代の掘立柱建物跡として報告される例に類似し、いずれかの時期に所属する事例もあると考えられるが、伴出遺物がほとんどなく、時期決定は困難であった。また建物跡として複数の配列が想定される場合もあり、本書では調査経過を重視し、A案やB案などと記述した。ただし整理の過程で、いずれか妥当性の高い配列の組み合わせを選択し、その結論を所見に記した。本節では結論づけられた案の配列を実線で表記し、選択しなかった建物跡の軸線を破線で示してある。

なお、全体図には決定した建物跡の軸線のみを表示し、検討の結果、建物跡ではないと判断し、個別に土坑として扱った遺構（ST20・21）もある。それらは本書中では欠番となる。



第42図 挖立柱建物跡の長軸と短軸の長さ

S T O 1 (第48図、PLA)

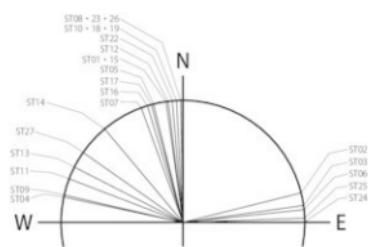
位置：I V20・25 グリッド　規模：5間（5.48m）× 2間（2.96m）　平面形：長方形

長軸方位：N8°W　面積：(16.2m²)

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。平面形が円形状を呈することから柱穴を想定し、そのなかで掘立柱建物跡の軸線が定められそうな落ち込みにPit1~5、8、9、12を符号する。また、建物跡の内側および周間に近接する落ち込みについても関連する柱穴を予想し、Pit6、7、10、11、13、14を符号し調査した。

重複関係：Pit9がSK01と重複し、断面の観察からSK01が新しいと考えられるが、両遺構からは遺物は出土せず時期は不明である。またSX03が軸線の内側にあるが、柱穴と直接重複しないため前後関係は不明である。

構造：各柱穴の平面形は、Pit1、3、4、10、11は楕円形、Pit2、7、12は隅丸形、Pit6、13、14は不整円形、Pit5、8、9は不整形。断面形は、Pit1~6、8~12、14は皿状、Pit7は深さのあるタライ状、Pit13はお椀状である。柱間は長軸方向80~160cm、短軸方向140~170cm。



出土遺物：Pit7の埋土より、弥生時代中期後半栗林1式の壺胴部小破片（20）が出土。

時期：不明。

所見：Pit3、6、13、14は、想定した建物の軸線から外れるが、本建物跡に関わる柱穴の可能性があるものと判断し図示した。

S T O 2 (第48図、PLA)

位置：I V24・25 グリッド **規模**：3間（4.2m）×2間（2.2m） **平面形**：長方形

長軸方位：N76°E **面積**：9.2m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。平面形が円形状を呈することから柱穴を想定し、そのなかで掘立柱建物跡の軸線が定められそうな落ち込みにPit1～11、15～19を符号する。想定した建物跡の軸線は、Pit8、19、18、1～7を組み合わせと考える3間×2間の建物跡をA案、Pit9～11、15～17、3～8、2、1、18、19を組み合わせと考える4間×3間（1面×1面）の廂付側柱建物跡をB案とした。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit2、19は円形、Pit6、8、11、15、18は梢円形、Pit1、4は隅丸方形、Pit5、16は不整梢円形、Pit3、7、9、10は不整形、Pit17は不明。断面形は、Pit1、2、4、6、8～11はタライ状、Pit3はすり鉢状、Pit15、5、7～9、17～19は皿状、Pit16はお椀状である。柱間は、A案が長軸方向112～200cm、短軸方向100～140cm、B案が長軸方向92～200cm、短軸方向100～140cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：柱穴の規模、配列の規格性を考えると、Pit9～11、15～17を軸線とするB案はやや妥当性に欠ける。ST01の柱間等の規格性を考慮すれば、Pit9～11、15～17を除く3間×2間の建物跡A案を採用すべきと考え、想定される軸線を図化し、第48図ST02とした。

S T O 3 (第48図、PLA)

位置：I V18・19・23・24 グリッド **規模**：3間（5.12m）×1間（2.4m） **平面形**：長方形

長軸方位：N82°E **面積**：12.3m²

検出：地山礫層（V層）上面にて、黒色の落ち込みを確認する。配列や規模から建物跡を想定できる柱状の落ち込みをまとめ、軸線の定められそうな落ち込みにPit1～4、6、7、11、14、16を符号してST03と仮称した。また、軸線に明瞭にのらないが建物跡に関連すると考えられる周辺の落ち込みにPit5、8、9、12、13、18、19を符合し調査した。想定した建物跡の軸線は、Pit11、1～4、6、14、16、20を組み合わせと考える3間×1軒の建物跡をA案、Pit10、11、1～4、6、7、15、14、16、20を組み合わせと考える3間×2間（3間×1面）の廂付側柱建物跡をB案とした。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit10、11は円形、Pit1、2、5、12、16、19、20は梢円形、Pit3、6、14は隅丸方形、Pit4、8、9、13は隅丸長方形、Pit7、15、18は不整形。断面形は、やや深さのあるタライ状を呈する。Pit2、4は地山の礫層の礫をのけるように掘削され、礫に埋まるように柱穴が穿たれている。Pit8、13、19には埋没土内に小礫が目立って混入していた。柱間は、A案が長軸方向140～240cm、短軸方向232～250cm、B案が長軸方向160～240cm、短軸方向160～250cm。

出土遺物：Pit15の埋土より栗林1式段階の壺胴部の小破片が出土。

時期：不明。

所見：柱穴の規模、埋土の違い、配列の規則性を考えると、Pit7、10、15を軸線とするB案はやや不自然な並びとなっており、本跡に含めない方が妥当と考えられる。さらに、Pit5、8、9、12、13、18、19は、想定した建物跡の軸線から外れるため本跡の柱穴にはならない可能性が高い。ST02の柱間等の規格性を考慮すれば、3間×1間の建物跡A案を採用すべきと考え、想定される軸線を図化し、第48図ST03とした。

STO4（第49図、PL4）

位置：I V20・25グリッド　　規模：3間（5.26m）×2間（4.46m）　　平面形：長方形

長軸方位：N78°W　　面積：23.5m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定し調査した。建物跡を想定する中で、ST01のPitと重複する位置に認められる柱穴が3基（ST01のPit1、3、4）あるが、ほぼ同一の位置に設けられた柱穴と考え、あえてどちらかのSTのみを残すことにはしなかった。本跡で軸線の定められそうな落ち込みに、新たにPit1～4、7～10、11を符号し、ST01と重複する柱穴にはPit3を本跡のPit6、Pit4をPit7、Pit1をPit9に充てて調査を行なった。

重複関係：Pit4がSK33、Pit5がSK32と重複し、断面の観察から本跡の柱穴の方が新しいと考えられるが両遺構から遺物は出土せず、時期は不明である。またSX01（第30図）が軸線の内側に位置するが、柱穴と直接重複しないため前後関係は不明である。

構造：各柱穴の平面形は、Pit1、4は円形、Pit2、3、6、7、9、11は楕円形、Pit8、10は隅丸方形、Pit5は不整形。断面形は、Pit1～5、7はすり鉢状、Pit10、11はタライ状、Pit6、8、9は皿状である。柱間は、長軸方向110～240cm、短軸方向200～240cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：本跡とST01は、今回の調査で唯一重複が想定された建物跡である。柱穴の配列から判断すれば、本跡のほうが、ST01よりも規則性が高いとみられる。

STO5（第49図、PL4）

位置：I V14・19グリッド　　規模：2間（3.52m）×2間（3.28m）　　平面形：長方形

長軸方位：N14°W　　面積：11.5m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定しST05と仮称し調査を行なった。軸線の定められそうな落ち込みにPit1～6、8、9を符号する。建物跡内側にあるSK80は、関連する柱穴と予想して調査したが、本建物跡の柱穴にはならない可能性が高い。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit8は円形、Pit3～6、9は楕円形、Pit2は隅丸方形、Pit1は隅丸長方形。断面形は、Pit1、6、9は深さのあるタライ状、Pit3、4、5は皿状、Pit2、8はすり鉢状である。柱穴の多くは非常に浅いものが多く、柱間は長軸方向136～230cm、短軸方向100～260cm。長軸方向の柱間は、東側100cm、西側260cmと東側が少し狭く、片寄っている。

出土遺物：Pit9の埋土中より弥生土器の小片が2点出土。

時期：弥生時代中期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

所見：短軸の東側にある柱間が狭くなってしまっており、廂付の建物跡も想定される。柱の位置が東側および南側にずれていることから、北あるいは南の妻側、西あるいは東の平側に入口が設けられた建物であろうか。

S T O 6 (第 49 図、PL4)

位置：I VI3・14・18・19 グリッド 規模：3間（5.08m）×2間（3.76m） 平面形：長方形
長軸方位：N84° E 面積：19.1m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定し ST06 を仮称する。軸線の定められそうな落ち込みに Pit1、4、5、6、8、9、10、11 を符号する。想定した軸線に明瞭には載らないが、軸線の交点付近にあり柱穴の可能性のある落ち込みに、それぞれ Pit2、3、7、12、13 を符号し調査した。

重複関係：Pit1 が SK53 と重複する。埋土の堆積状況から、本跡の Pit1 が新しいと思われる。

構造：各柱穴の平面形は、Pit3、11、13 は円形、Pit1、5、7、10、12 は梢円形、Pit2、4、8 は隅丸方形、Pit9 は隅丸長方形、Pit6 不整梢円形。断面形は、Pit2、3、4、6、7、10 は浅いタライ状、Pit5、9 は皿状、Pit11、12、13 はすり鉢状、Pit1 はお椀状である。Pit8 は Pit1 の様に壁が垂直に立ち上がる形状だが、ほかの柱穴が深さ 10cm 前後であるのに対し 50cm を測る円筒状である。柱間は、長軸方向 150～190cm、短軸方向 128～240cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：本跡は、長軸方向に 3 間、短軸方向に 2 間の規模を持つ。長軸の柱間はほぼ等間隔であるが、短軸は 240cm と 128cm で北半分の方が長い。その点を考慮すると、本跡は、南側に廂のある 3 間 × 2 間（3 間 × 1 間）の中世的な廂付側柱建物跡の可能性も高いと想定できるが、詳細は不明である。

S T O 7 (第 50 図、PL4)

位置：I R01・06 グリッド 規模：1 間（2.88m）×1 間（1.52m） 平面形：長方形
長軸方位：N20° W 面積：4.4m²

検出：表土掘削後、IV 層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から掘立柱建物跡を想定し ST07 と仮称する。軸線を想定できるものをまとめて、北西側から時計回りに Pit1～4 を符号した。また、想定した桁行の南側への延長線上にもいくつかの柱穴らしき落ち込みを確認し、5 基を単独の土坑として調査した。想定した建物跡の軸線は Pit1～4 を組み合わせと考える 1 間 × 1 間の建物跡を A 案、Pit1～3、SK177、180、175、179、178、Pit4 を組み合わせと考える 3 間 × 1 間の建物跡を B 案とした。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit4、SK177、179 は梢円形、Pit2、SK178 は隅丸方形、SK175 は隅丸長方形、Pit3 は不整隅丸方形、Pit1、SK180 は不整形。断面形は、いずれもすり鉢状であるが、Pit1、3 は大形の礫が入っていて歪な形になっている。柱間は、A 案が長軸方向 280～296cm、短軸方向 180cm、B 案が長軸方向 120～280cm、短軸方向 160～180cm。

出土遺物：Pit2 より、炭化物の付着した甕胴部破片、Pit3 より、甕口縁部破片、内外面赤彩のある鉢胴部破片、壺の胴部破片が出土。いずれも小破片であるが、弥生時代中期後半の栗林 1 式土器である。

時期：弥生時代中期後半の栗林式期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

所見：ST26 と同様に長大な建物跡として 3 間 × 1 間を想定し、南側への延長線上にあるいくつかの柱穴と考えられる遺構も合わせて調査した。配列や位置がやや不規則な点があり、後述する ST10 の柱穴配置も考慮した結果、1 間 × 1 間の建物跡 A 案を採用すべきと考え、それを選択した。

S T O 8 (第51図、PL4)

位置：I V15 グリッド 規模：3間（3.68m）× 2間（2.28m） 平面形：長方形

長軸方位：N1° W 面積：8.4m²

検出：表土掘削前、IV層上面～V層にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの規模と配列から掘立柱建物跡を想定しST08と仮称する。本建物跡の大部分は平成23年度調査時に検出、調査を行なったが、東側の一部は平成24年度に調査した。柱穴と想定される落ち込みにそれぞれPit1～43を符号し、掘下げでは想定される軸線に合わせて半截し断面観察を行なった。調査時にはPit12～19を中心とする総柱状の建物跡も予想したため、複数の柱穴状の遺構を合わせて調査したが、その結果、Pit14～18、9～13、19を軸線の組み合わせとする3間×2間の建物跡と判断した。

重複関係：各Pitと直接重複する遺構は確認されなかった。

構造：各柱穴の平面形は、円形、楕円形の整った形状のものが大半を占め、短軸30cm以上を測る規模を持つ。断面形は、掘込み面に含まれる礫により壁面、底面の形状は安定しないが、深さのあるタライ状、お椀状を呈する。柱間は、長軸方向100～132cm、短軸方向80～148cm。

出土遺物：Pit14より壺胴部の小破片1片、Pit16から壺口縁部、壺胴部の小破片が出土。いずれも小破片であるが、栗林1式土器である。

時期：栗林式期の建物跡と考えたいが、時期の判断はつかなかった。

所見：本跡は、総柱式の建物を想定した経過から周辺に複数の柱穴がある。それらの性格は不明だが、ST08南側の柱穴Pit26～30、34、40、42は直線的に並び、柵状の施設になる可能性もあるが、詳細は不明である。

S T O 9 (第50図、PL5)

位置：I V15 グリッド 規模：2間（1.6m）× 2間（1.3m） 平面形：長方形

長軸方位：N77° W 面積：2.1m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定しST09と仮称する。軸線の定められそうな落ち込みにPit1～9を符号する。また、これらの柱穴列の内側にある大形の落ち込みにPit10を符号する。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit1、7は円形、Pit2、3、8は楕円形、Pit4、5、9、10は隅丸長方形、Pit6は不整形。断面形は、Pit4、5、6は皿状、Pit2、7、10はすり鉢状、Pit8は深さのあるタライ状、Pit1、3はお椀状である。柱穴の多くは非常に浅いものが多い。柱間は、長軸方向60～80cm、短軸方向50～90cmと小規模。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：本遺跡で、ほかに類例をみない小形の建物跡になる。Pit10は、本跡に付属する施設の可能性もあるが、埋没土に黒色土、黄褐色土が混在して堆積している状況から、ほかのPitと様相が異なり、本跡とは別の土坑と考えた。

S T O 10 (第50図、PL5)

位置：I V14 グリッド 規模：1間（2.64m）× 1間（1.32m） 平面形：長方形

長軸方位：N3° W 面積：3.5m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から掘立柱建物跡を想定し ST10 を仮称する。軸線を想定できるものをまとめて、北西角から時計回りに Pit1 ~ 4 を符号した。

重複関係：各 Pit と直接重複する遺構は確認されなかったが、本跡の想定される範囲が SK185 の西側部分と重複する。

構造：各柱穴の平面形は、Pit3 は梢円形、Pit1、4 は不整隅丸方形、Pit2 は不整隅丸長方形。断面形は、Pit1、4 は浅いタライ状、Pit2、3 は皿状である。柱間は、長軸方向 256 ~ 268cm、短軸方向 128 ~ 132cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：1間 × 1間の掘立柱建物跡を想定した。本跡の範囲が SK185 と重なり合うが、時期差及び関連性は明確にはできない。

S T 1 1 (第 50 図、PL5)

位置：I V24、III B04 グリッド **規模：**2間 (2.36m) × 1間 (2.8m) **平面形：**亀甲形

長軸方位：N69° W **面積：**6.6m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて黒色の落ち込みを複数確認する。その規模と配列から、掘立柱建物跡 ST11 を想定し、柱穴と想定される落ち込みにそれぞれ Pit1 ~ 16 を符号する。Pit1 ~ 3、8 ~ 10 がそれぞれ 2間、それらに棟持柱と考えられる Pit14、16 を加えた建物跡を想定した。Pit11、15 は、補助的な柱の可能性もあるが明確ではない。

重複関係：Pit8、9 は不明遺構の SX05 上で検出された。このことから本跡は SX05 より新しい時期の遺構と考えられる。また、重複はないが、南側にある掘立柱建物跡 ST13 とはほぼ長軸方向を同じくして南北に並ぶことから、両者は併設されていた可能性も指摘できる。

構造：各柱穴の平面形は、Pit2、3、9、10、11、15 は円形、Pit1、14 は梢円形、Pit8 は隅丸方形、Pit16 は不整隅丸長方形。断面形は、深さ 10cm 以下の Pit1、11、16 がすり鉢状、それ以外は深さ 16 ~ 20cm のお椀状 (Pit15 のみ深さ 32cm を測り円筒状) である。柱間は長軸方向 108 ~ 132cm 短軸方向 280cm。

出土遺物：Pit1 の埋土より、弥生時代中期後半栗林 1式段階の壺胴部の小破片が出土。

時期：亀甲形の建物跡で、かつ柱穴から栗林式の土器片が出土していることから、弥生中期栗林式期の可能性が高い。

所見：亀甲形で棟持柱をもつ建物跡を想定 (註 2)。

S T 1 2 (第 52 図、PL5)

位置：I R06・11 グリッド **規模：**2間 (4.6m) × 1間 (2.28m) **平面形：**長方形

長軸方位：N7° W **面積：**10.5m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。検出した地区は、検出面まで及ぶ後世の削平があり、単独の土坑の検出も極めて少ない。その中で、建物跡の柱配列も想定できる柱穴状の遺構と考え、ST12 と仮称し調査した。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit2 は円形、Pit4 は梢円形、Pit1 は不整隅丸方形、Pit3 は不整形。断面形は、地山に含まれる礫により不定形であるが、概ね皿状を呈する、掘込みは非常に浅い。柱間は長軸方向 (216cm) ~ 240cm 短軸方向 228 ~ 240cm。

出土遺物：Pit3 の埋土から、弥生時代中期後半栗林 1式の壺の胴部破片が出土。

時期：弥生時代中期の可能性もあるが、時期については判断できない。

所見：本跡は柱穴の数や配列が不規則だが、ST10と同様な2間×1間の掘立柱建物跡を想定したい。

ST13（第52図、PL5）

位置：Ⅲ B04・05 グリッド　　規模：2間（3.72m）×1間（2.32m）　　平面形：長方形

長軸方位：N63°W　　面積：8.6m²

検出：表土掘削後、IV層上面にて黒色の落ち込みを複数確認する。規模と配列から、2間×1間の掘立柱建物跡ST13を想定し、Pit1～7を符合し調査した。

重複関係：ほかとの重複はないが、北側にある亀甲形の掘立柱建物跡ST11と長軸方向がほぼ同軸で南北に並ぶ。

構造：各柱穴の平面形は、Pit7は円形、Pit1、2は楕円形、Pit4、6は隅丸方形、Pit5は隅丸長方形、Pit3は不整円形。断面形は、Pit1～4、7がすり鉢状、Pit5、6がお椀状である。柱間は長軸方向110～250cm、短軸方向220～248cm。短軸西側の柱間が東側の半分以下になる。

出土遺物：Pit6から弥生時代中期後半の壺胴部小破片が出土。

時期：弥生時代中期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

所見：北側で検出した亀甲形の建物跡ST11とほぼ長軸方向を同じくすることから、併設された建物跡を考えたい。2棟の用途を追究する術は見当たらないが、今後類例を追跡してゆくべき事例である。

ST14（第52図、PL5）

位置：Ⅲ B04 グリッド　　規模：2間（3.28m）×1間（2.42m）　　平面形：長方形

長軸方位：N40°W　　面積：7.9m²

検出：地山礫層上面にて、ほぼ円形で柱状の規模をもつ黒色の落ち込みを確認する。落ち込みは複数箇所に認められ、検出時は土坑（SK）として調査を始めたが、規則的な配列が認められたため、掘立柱建物跡ST14と判断した。土坑番号SK152をPit1、SK154をPit2、SK148をPit3、SK147をPit4、SK189をPit5、SK149をPit6と符号する。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit1、5は円形、Pit2、6は楕円形、Pit4は隅丸方形、Pit3は隅丸長方形。断面形は、やや深さのあるタライ状を呈するが、Pit2、4は皿状となる。柱間は長軸方向148～196cm、短軸方向240～242cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：2間×1間の掘立柱建物を想定した。北東側に並んで位置するST11、13とはほぼ長軸方向を同じくし、本跡との同時性、関連性を指摘できるか。

ST15（第52図、PL5）

位置：I L20・25、I M16・21 グリッド　　規模：1間（1.6m）×1間（4.56m）　　平面形：長方形

長軸方位：N8°W　　面積：7.3m²以上

検出：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みは複数箇所に認められたが、その中で柱穴の配列が組めると思われるものをまとめST15と仮称する。検出時、土坑として調査を進めが、調査の過程で掘立柱建物跡を推定した。土坑番号SK172をPit1、SK170をPit2、SK174をPit3と符

号する。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit1、2は楕円形、Pit3は隅丸方形、直径 28 ~ 36cm である。断面形は、Pit1、3は皿状、Pit2はタライ状で深さはほかの Pit より深い 14cm を測る。柱間は長軸方向 104 ~ 160cm、短軸方向 456cm。

出土遺物：Pit3 より敲石（第 69 図 16）が出土。

時期：不明。

所見：本跡は 2 間 × 1 間、もしくはそれ以上の長軸を持つ掘立柱建物跡を想定できる。柱穴の多くは調査区北側に伸びていると考えられるか。第 52 図右下写真のように南側で検出された穴 72、76 も建物跡に組み入れていたが、明確な掘込みを示すもののみに限定した。

ST 16（第 53 図、PL5）

位置：I M14・19 グリッド **規模**：1 間（2.96m）× 1 間（1.56m）**平面形**：長方形

長軸方位：N17° W **面積**：4.6m²

検出：IV 層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列を持つことから掘立柱建物跡を想定し、Pit1 ~ 4 を符号し調査を行なう。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は 20 ~ 24cm。Pit の深さは、Pit1 が 15cm、Pit2 が 20cm、Pit3 が 17cm、Pit4 が 5cm で、Pit4 のみが浅い。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、円筒状となる。柱間は、長軸方向 296cm、短軸方向 156cm。

出土遺物：Pit3、4 の埋土中より栗林 1 式の壺胴部小片が出土。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定したいが、時期特定は難しい。

所見：本跡は、1 間 × 1 間の掘立柱建物を想定した。北西側に長軸方向をほぼ同じくする ST22 が位置し、本跡との関連を追究する必要がある。

ST 17（第 53 図、PL6）

位置：I N16・21 グリッド **規模**：2 間（4.1m）× 1 間（3.4m）**平面形**：長方形

長軸方位：N15° W **面積**：13.9m²

検出：表土、およびⅢ層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模がほぼ同じであることから、同一遺構の柱穴であると認定し、その配列から掘立柱建物跡 ST17 を想定した。

重複関係：各 Pit と直接重複する遺構は確認されなかった。ただし本跡の想定軸線は、北側で ST18 の軸線と重なることから、両者の間には時期差があるものと考えられる。

構造：各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は概ね 30cm 前後である。Pit6 は壁面が崩れたためか不整形となる。断面形は、深さのあるタライ状を呈する。西側の Pit は上部から削平され浅くなっている、特に Pit5 が顕著である。柱穴の土層断面には上部の柱痕跡が観察でき、柱は径 14cm 前後になるのではないかと考えられる。さらに、Pit3 を除き、2 層底面にはそれぞれ鉄分集積が確認でき、柱が立っていた痕跡と思われる。特に、Pit2 は底面中心部分が変色しており、柱の「当たり」にあたる部分であろうか。また、すべての Pit には径 10cm 程度の柱痕跡とみられる埋土（1 層）が認められた。柱間は、長軸方向 200 ~ 208cm、短軸方向 340cm。

出土遺物：Pit2 柱痕跡上層より壺胴部小片、Pit4 柱痕跡上層より壺胴部小片、掘方土中層から壺胴部小片、

Pit5 柱痕跡下層から壺口縁部小片が出土。いずれも栗林1式土器である。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本跡は、柱穴内に柱痕跡が残り、本遺跡中では良好な掘立柱建物跡のひとつといえる。

S T 1 8 (第53図、PL6)

位置：I N16 グリッド **規模：**1間以上 (2.44m) × — **平面形：**—

長軸方位：N3° W **面積：**— m²

検出：表土、およびⅢ層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模がほぼ同じであることから、同一遺構の柱穴であると認定し、掘立柱建物跡 ST18 を想定した。

重複関係：直接重複する遺構は確認されなかったが、想定した建物跡の軸線は、南側で ST17 の軸線と重なる。

構造：柱穴の平面形は、やや不整な円形、直径は 40cm 前後と大きい。断面形は、タライ状を呈し、土層断面には柱痕跡が観察できる。柱は径 14cm 前後になるのではないかと考えられる。柱穴 2 本のみの確認で、多くの柱穴が調査区外に存在するとみられ、全体構造は不明である。柱間は長軸方向 110 ~ 116cm。

出土遺物：Pit2 掘方土中層より壺胴部、甕胴部小片が出土。いずれも栗林1式土器である。

時期：弥生時代中期後半栗林式期の可能性が高いが、判断は難しい。

所見：重複関係のある ST17 も出土遺物から弥生時代中期を推定しており、本跡との関係性を追跡する必要があるか。

S T 1 9 (第53図、PL6)

位置：I N21・22 グリッド **規模：**2間 (2.24m) × 1間 (2.7m) **平面形：**長方形

長軸方位：N3° W **面積：**6.0m²

検出：表土、およびⅢ層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模等がほぼ同じであること、また、その配列から同一遺構の柱穴であると認定し、掘立柱建物跡 ST19 を想定した。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は 20cm 前後。Pit2、4 は楕円形。断面形は、壁が垂直で円筒形を呈する。Pit4 は、底面が平坦ではなくやや尖る。柱穴には柱痕跡とみられる埋土 (1 層) が認められ、斜断面のため明確ではないが、おそらく柱の太さは径 10cm 前後と推定される。さらに、Pit3、5、6 は、2 層底面にそれぞれ鉄分の集積が認められた。柱間は、長軸方向 110 ~ 128cm、短軸方向 240 ~ 286cm。

出土遺物：Pit2 柱痕跡中層より壺胴部小片が出土。そのほか、器種不明の小片も出土しているが、それぞれ栗林1式土器であろう。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本跡には 2 間 × 1 間の掘立柱建物跡を想定した。栗林式の土器片が Pit2 柱痕跡 (1 層) から出土している。Pit2 下部出土炭化材 (H24 分析 No.5)、Pit6 1 層上面出土炭化物 (H24 分析 No.6) の AMS 法による C14 年代測定では、それぞれ 2230 ± 30 yrBP、 2180 ± 30 yrBP の値が得られ、出土土器との相対年代値に矛盾がない。

S T 2 2 (第53図、PL6)

位置：I M13・14 グリッド **規模：**2間 (3.64m) × 1間 (2.0m) **平面形：**長方形

長軸方位：N5° W 面積：7.3m²

検出：IV層上面まで掘下げ後、同層上面に柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列を持つことから掘立柱建物跡 ST22 を想定し、Pit1～6 を符号し調査を行なう。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、円形か楕円形を呈し、長径 12～24cm。柱穴の深さは、Pit3 を除きいずれも 10cm かそれ以下で非常に浅い。断面状は、お椀状で底部は丸く、壁はほぼ垂直に立ち上がるか、やや開く。柱間は、長軸方向 170～200cm、短軸方向 180～200cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：本跡には、2間×1間の掘立柱建物跡を想定した。南東側 2m に長軸方向をほぼ同じくする ST16 が位置し、本跡との関連を考えていく必要がある。また、Pit3 裏土 1 層出土炭化物（H24 分析 No.7）の AMS 法による C14 年代測定では、 $3,980 \pm 30$ yrBP と縄文時代後期の年代値が算出された。本遺跡の中でも、縄文時代の掘立柱建物跡の存在も考えていく事例のひとつになるか。

S T 2 3 (第 54 図、PL6)

位置：I M19・24 グリッド 横幅：2間 (4.76m) × 1間 (1.72m) 平面形：長方形

長軸方位：N1° W 面積：8.2m²

検出：IV層上面まで掘下げ後、同層上面に柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。土杭（SK）として調査を行なったが、調査最終段階にそれらが掘立柱建物跡 ST23 である可能性を想定し、Pit1～6 と符号した。SK232 を Pit1、SK214 を Pit2、SK215 を Pit3、SK245 を Pit4、SK212 を Pit5、SK213 を Pit6 とする。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、円形か不整円形で、長径 12～16cm。柱穴の深さは 4～8cm で、いずれも非常に浅い。断面形は、お椀状で底部は丸い。柱間は、長軸方向 204～270cm、短軸方向 156～180cm。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：本跡には、2間×1間の掘立柱建物跡を想定した。北西側 5m に平面形状や長軸方向をほぼ同じくする ST22 が位置し、本跡と同様な用途を示す建物跡であろうか。

S T 2 4 (第 54 図、PL6・7)

位置：I S16・17 グリッド 横幅：3間 (3.74m) × 1間 (2.6m) 平面形：長方形

長軸方位：N90° E 面積：9.7m²

検出：IV b 層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列から掘立柱建物跡を想定し、柱穴 Pit1～8 を符号して調査した。

重複関係：想定される柱穴の配列から、ST25 の建物範囲と重複する。互いの柱穴には直接重複関係がないことから、前後関係は不明である（第 54 図）。

構造：各柱穴の平面形は、正円に近い円形で、長径 20～32cm である。断面形は、円筒形に近く、底部は平坦、立ち上がりはほぼ垂直である。ただし、Pit2、3、5、7、8 は壁面途中の片側に段を持つ。各柱穴の深さは、Pit8 の 12cm から Pit2 の 48cm までバラつきがある。柱間は、長軸方向 100～140cm、短軸方向 260cm。

出土遺物：Pit1～6 埋土より弥生時代中期後半栗林 1 式土器の破片（23・24）が出土。Pit2 から剥片、Pit5 より赤化した礫が出土している。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本建物跡は、各柱穴出土の土器や、埋土の特徴などから、SB01、02、SD01～03、ST25と同時期の弥生時代中期後半栗林式期の遺構と推定される。3間×1間の建物跡を想定したが、Pit8はほかの柱穴に比べ非常に掘込みが浅く、平面上軸線から少し外れることから、Pit1、Pit8を除外した2間×1間の建物跡の可能性も考えられる。また本跡の柱穴の規模、形状や埋土の特徴がST25と酷似しており、同時代の比較的近い時期に、建て替え等の理由により重複した可能性がある。

S T 2 5 (第54図、PL7)

位置：I S17 グリッド **規模：**3間 (4.02m) × 1間 (2.64m) **平面形：**長方形

長軸方位：N88° E **面積：**10.6m²

検出：IV b層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列をもつことから掘立柱建物跡を想定し、柱穴 Pit1～8 を符号し調査を行なう。

重複関係：ST24 の建物範囲と重複する。柱穴が直接重ならないため、前後関係は不明（第54図）。

構造：各柱穴の平面形は、正円に近い円形で長径は20～26cmである。断面形は、いわゆるタライ状であるが、底部は若干丸みを帯びる。各柱穴の深さは、Pit2、7の8cmからPit1、4の16cmまで幅があり、底面標高はPit4と8で20cmの差がある。柱間は、長軸方向130～140cm、短軸方向260～264cm。

出土遺物：Pit1～8 埋土より弥生時代中期後半栗林1式土器の壺、甕の小破片が15片出土（29）。Pit8からは赤化した礫が出土している。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：ST24 の所見でも述べたように、本跡は、埋土の特徴などからSB01、02、SD01～03とはほぼ同時期の遺構である可能性が高い。3間×1間の本跡は、ST24と重複関係にあり、いずれかからの建て替えと考えられる。Pit3、4 磁土出土炭化物（H24分析No.8、9）をAMS法によるC14年代測定した結果、2,180 ± 30yrBP、2,210 ± 30yrBPの値を得た。ST24では炭化物試料が得られなかつたため、両者の新旧関係は明確にできないが、SB01埋土のC14年代測定結果に近似し、本跡が弥生時代中期後半の遺構である可能性は高いと判断される。

S T 2 6 (第55図、PL7)

位置：III C04 グリッド **規模：**4間 (6.64m) × 1間 (2.28m) **平面形：**長方形

長軸方位：N1° W **面積：**15.1m²

検出：Ⅲ層を掘削し地山層（V層）上面にて、形状、規模から柱穴と考えられる黒色の落ち込みを確認する。配列から建物跡を想定しST26と仮称する。柱穴には、当初Pit1～5を符号し3間×1間の掘立柱建物跡を想定したが、南側調査区境界付近を精査した結果、SK536と580が確認され、それらが本跡の軸線上に位置することから、4間×1間の建物跡を想定しなおした。柱穴には北西角から時計回りにPit1～10と符合した。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit2は円形、Pit1、3、6、10は楕円形、Pit4、5は隅丸長方形、Pit7は不整円形、Pit8、9は不整隅丸方形。断面形は、タライ状と皿状に分けられ、Pit1、4～9がタライ状、Pit2、3、10が皿状になり、南側の柱穴が深くなる傾向にある。特にPit6～8は深さがある。埋土には地山の礫が混入し、礫をのけるように柱穴が掘削されたと考えられる。Pit4、5の底面近くには礎盤石状の石が入っていた。柱間は、長軸方向120～192cm、短軸方向228～240cm。

出土遺物：Pit1、5～9埋土より栗林1式の壺、壺小破片が出土。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定したい、炭素年代値から判断すると縄文時代後期の可能性もある。

時期決定は難しく、判断はつかない。

所見：本跡は上位段丘の東側縁部分に位置し、ほぼ等高線に沿うように長軸方向が真北を向く。ほかのいくつかの掘立柱建物跡にも共通するが、千曲川によって形成された地形に制約される形で建物が建てられたものと考えられる。また、Pit4 埋土出土炭化材（H25 分析 No.3）の AMS 法による C14 年代測定で、3,730 ± 30yrBP の縄文時代後期の年代値が算出された。

S T 2 7 (第 55 図、PL7)

位置：Ⅲ F25、Ⅲ G21、Ⅲ L01 グリッド **規模**：3間（5.68m）× 1間（2.56m）**平面形**：長方形

長軸方位：N55° W **面積**：14.5m²

検出：Ⅲ層を掘削し地山層（V層）上面にて、複数の黒色の落ち込みを確認する。当初、土坑としてそれを調査したが、規模、配列等から建物跡の柱穴と考え、桁と梁の軸線を想定し、ST27 と仮称する。土坑にはそれぞれ、Pit1～8 を符合し調査した。

重複関係：他遺構との重複はない。

構造：各柱穴の平面形は、Pit2 は円形、Pit4、5、6 は梢円形、Pit1、7 は隅丸方形、Pit8 は隅丸長方形、Pit3 は不整円形。断面形は、タライ状が Pit3、5～7、すり鉢状が Pit1、2、4 と大半を占め、Pit8 は浅く皿状となる。特に Pit6 は 36cm と深い。埋土は、シルトやシルト質砂であり、ボソボソする類似した層となる。柱間は、長軸方向 126～308cm、短軸方向 256cm。

出土遺物：Pit4、6 埋土より栗林1式の壺胴部小片が出土している。

時期：不明。

所見：本跡は、南側の離れた調査区（南区）で検出されており、北側調査区の遺構との関連は明確ではない。

3 溝跡（周溝跡を含む）(第 56～58 図、第 8 表、PL7～9)

溝跡として、弥生時代中期 4 基、近世以降 1 条を調査した。弥生時代の 4 基は通常の水が流れる溝跡とは異なり、平面形状が円形、馬蹄形となる。これらに平地建物跡等の周溝を想定したいが、周溝にともなう柱穴や炉跡等が確認できず、ここでは SD(周溝跡) として報告しておく。近世以降と考えられる SD04 は、調査区東端の千曲川縁にて検出された。

S D O 1 (第 56 図、PL7・8)

位置：I S23、I X03 グリッド **規模**：<5.84> (<6.2>) m × 5.6 (6.4) m

平面形：円形（円環状）**長軸方位**：N74° W **面積**：25.7m² * <> は推定値、() は外径

検出：表土掘削後 V 層上面にて、黒色の円環状の落ち込みを確認する。全体が近年の掘削により削平されていたものの、落ち込みが円環状であることから、竪穴住居跡、平地建物跡もしくは円形周溝墓の可能性を想定した。しかしながら落ち込みの内外に、遺構の性格を推定できる施設が確認できなかつたため、周溝跡（SD）として調査した。本跡は近年の水田造成による重機のキャビラー痕が遺構検出面にみられるほど、遺構上部がかく乱されていたが、小破片ではあるが出土遺物も確認された。

重複関係：SK228 が本跡東側の溝と重複する。埋土は本跡の 1 層と類似するが、断面観察から本跡の溝埋土を SK228 が掘込むことが観察された。SK228 の方が新しい時期と考えられる。また、周溝の内側に位置する SK231 は周溝の埋土と類似するが、本跡との新旧関係は明確ではない。

構造：本跡は、溝状の落ち込みが円環状にめぐる形状である。溝の幅は52cm。全体に底部は凹凸があり10～25cmの深さとなる。北東部の一部が60cm幅で落ち込み、深さ33cmを測る（第56図 SD01 spEF）。また、南東部に周溝の途切があるが、その幅は狭く上部からの削平により周溝の浅い部分が途切られたものと考えられる。全体の規模は周溝の内径で5.6～5.84mを測る。本跡周溝の西半部は、近年の耕作によつて削平、かく乱されている。さらに、本跡とその周辺は近年の水田造成の際に平坦面を造るため大幅に削平されており、本跡はV層中で検出した。同時期とみられる他遺構はIV層上部で検出可能であり、検出面の比高差は約20cmある。以上のことから本跡の溝は隣接するSD03と同じく、40cm以上の深さがあつたものと考えられる。形状も円形を想定しているが、SD03と同じく一部が途切れる可能性もある。

出土遺物：埋土1層より壺小片、鉢底部小片が出土。栗林1式段階に比定される。このほかに、敲石(21)と剝片1点が出土している。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本跡は、構築当初SD03と同様に周溝の深さが35cm～50cmはあったと推測される。周溝の断面図を縦割りに観察したが、柱穴跡は確認できなかつた。ただ、周溝底面は部分的に深くなる箇所がある（写真図版PL8）。周溝内側には柱穴、炉跡がなく、遺構の認定条件に欠けるが、上層の削平も考慮し、弥生時代中期にみられる平地建物跡等の周溝跡であるかもしれない。

SD02（第56図、PL7・8）

位置：I X02・03・07グリッド　　規模： $<5.12>$ （ $<5.6>$ ）m × $<4.0>$ （ $<4.64>$ ）m

平面形：馬蹄形　　長軸方位：N22°E　　面積：17.1m²　　※<>は推定値、（ ）は外径

検出：西側はIV層掘削後、東側は表土掘削後、V層上面にて黒色の弧状の落ち込み、暗褐色にぶい黄褐色の柱穴状の落ち込みを確認する。東から北側が近年の水田造成による削平、南側が調査区外となる。落ち込みは、検出された部分から馬蹄形状であると推定し、竪穴住居跡、平地建物跡の周溝の可能性を考えた。遺構の性格を推定できる施設が確認できなかつたため、周溝跡（SD）として符号し調査を行なう。また、北側で検出された柱穴状の落ち込みは周溝の底面の一部と考えられ、Pit1、2と符号し調査する。

重複関係：直接重複する遺構はないが、周溝の内側にSK305が位置する。本跡Pit1埋土と類似する埋土を持ち、SD02内の施設とも考えられるが明確ではない。

構造：本跡は、溝状の落ち込みが馬蹄形状にめぐる形状である。溝の幅は32cm。全体に底部は凹凸があり20～25cmの深さとなる。南端部が最も深く38cmを測る（第56図 SD02 spEF）。また、北側はかく乱により周溝が途切れるが、底面の深い部分のみが柱穴状に残り、本来の周溝は柱穴状の落ち込みを結ぶ形で調査区外へ続くと考えられる。全体の規模は、推定値で周溝内径4.0～5.12mを測る。

出土遺物：周溝南側の3層より壺胴部破片、同じく周溝南側埋土より壺胴部小片が出土。さらに断面spCD1層より壺胴部破片（38）が出土。栗林1式段階に比定されよう。

時期：弥生時代中期後半栗林式期。

所見：本跡は、SD01、SD03より規模は小さいが、形状等から考えると同様の遺構であった可能性が高い。平地建物跡、円形周溝墓、またそれらとは性格を異にする遺構空間が想定できる。北側周溝内に位置すると考えられるPit1、2に加え、周溝底面が部分的に深くなる箇所もみられ柱を立てた痕跡とも考えられる。また、周溝内側から検出されたSK305は貯蔵穴等の施設の可能性もある。

SD03（第57図、PL7・8）

位置：I S17・22グリッド　　規模： $<6.96>$ （ $<8.4>$ ）m × $<6.96>$ （ $<8.48>$ ）m

平面形：馬蹄形 長軸方位：N26° E 面積：38.9m² ※ < >は推定値、()は外径

検出：表土掘削後、IV b 層にて黒色の帯状の落ち込みを確認する。一部後世の掘削により削平されていたが、南西側が途切れる円形（馬蹄形）であることが推定でき、SD01 同様に平地建物跡もしくは円形周溝墓の可能性を想定したが、畠跡等の確認ができなかったことから周溝跡（SD）として調査した。断面 spCD は溝部分で掘込み面下部（IV b ~ V c 層）までトレンチ掘削を行ない、断面の観察を行なったが溝の内側に床面、硬化面などは確認できなかった。

重複関係：SK453 と重複する。SD03 よりも新しいが、時期は不明である。また、SK249・362・455 は周溝内側に位置し、SK514 は北側に隣接する。

構造：本跡は、溝状の落ち込みが馬蹄形状にめぐる形状である。溝の幅は上端を測ると 55cm ~ 75cm で、南西側開口部の溝先端は徐々に幅が細くなり深さも浅くなり嘴状を呈する。深さは一定ではなく、西~北西部付近 (spIJ) が最も深く 50cm ~ 55cm を測る。北西~北部 (spKL) が最も浅く約 10cm を測る。この部分の底面は他所に比べ固くしまっており、一部に鉄分集積が認められた。それ以外の底面も形状は平坦ではなく、所々に凹凸がみられる。本跡は東側の大部分が近年の造成により削平され、全体の規模は正確には把握できないが、長軸（南西~北東）方向の内径は約 696cm を測り、それに直交する短軸方向もほぼ同一の計測値が予想される。本跡の西側半分は、第 1 檜出面の遺構の下層にあること、また周溝が深く残存していることから、遺構上面の削平は少ないと予想されるが、周溝内側に SK249 以外に、掘込み、被熱、硬化面などの痕跡は確認できなかった。

出土遺物：北側・南側周溝埋土 1 層より、甕胴部破片が出土（41・42）。埋土 2 層からは甕胴部破片が出土、さらに西側周溝 1 層より鉢の口縁~全体部破片が出土。同一個体と思われる破片が、同じグリッドの上層の遺物包含層から出土している。そのほか、ビエス・エスキューユ、石核と思われる破片がそれぞれ 1 点、剝片が 3 点出土した。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：平地建物跡もしくは円形周溝墓のどちらかの可能性が高いと考えられるが、周溝以外の施設が確認できず、性格の判断はできなかった。SK249 は柱穴の可能性がある。周溝内側にはほかに落ち込みを検出していないため、柱穴の掘削時期は不明である。SK362・455 は溝が途切れる箇所に位置し、入り口施設である可能性もある。本跡周溝の南西部埋土 2 層から採取した炭化物（H24 分析 No.12）の C14 年代測定値は、 2250 ± 30 yrBP（弥生時代中期後半相当の年代）である。本跡底面の起伏が激しい点については、周溝外側に周堤を造る際の土取りで、柱穴が連なる様な凹凸の底面になるとの指摘がある（註 3）。なおトレンチ断面 (spIJ) の 2、3 層（H24 分析 No.2、3）および SK249 埋土（H24 分析 No.1）の珪藻分析を行なったところ、珪藻化石は全く検出されず、周溝内および SK249 内は常に湛水しているような状態ではなかつたと想定される。

SD04 (第 58 図、PL8)

位置：I S20・25、I X05 グリッド **規模：**長さ 15.8m × 幅 0.76m **平面形：**直線

流路方位：N

検出：表土掘削後、V 層にて南北方向に帯状に延びる黒色の落ち込みを確認する。規模形状から溝跡と認定し、SD01 を符合し調査を行なう。本跡は両端が調査区外に延びているため、南・北壁面と検出範囲の中央部にサブトレンチを設定し断面観察をした。また溝跡の堆積の走向（水流の方向）を観察するため、長軸方向に合わせて西側半分を先に掘下げたが、堆積の走向などは確認できなかった。

重複関係：なし。

構造：溝の幅は 70 ~ 90cm、深さ約 30cm を測る。断面形状は底面が平らなタライ状を呈し、立ち上がりはほぼ垂直に近い。溝の長さは調査範囲内で約 16m を測り、ほぼ直線に延びる。全長は不明。

出土遺物：埋土から弥生中期後半壺形部破片、平安時代壺口縁部破片が出土したが、埋土に混入したものと思われる。また本跡南端部分で木片が出土したが、埋土がかく乱されており新しい時期の遺物と判断した。すべての出土遺物は、遺構外として取り扱った。

時期：近世以降。

所見：本跡は、千曲川に沿って作られた溝であり、集落域を区画する溝の可能性を考えたいが、埋土が基本層序Ⅲ a 層であり、そこには上層のⅡ 層が混入していることを考えると、本跡は近世以降の可能性が高い。水田の排水路等に使用された溝跡であろうか。

SD05（第 57 図、PL9）

位置：I R10・14・15 グリッド 規模：2.08 (2.40) m × 0.56 (0.80) m 平面形：馬蹄形

長軸方位：N6° W 面積：— \triangleright < は推定値、() は外径

検出：表土および一部Ⅲ b 層を掘削し、Ⅳ b 層中に黒色のやや湾曲した帯状の落ち込みを検出。SD01 ~ 03 に比べ規模は小さいが、南北方向に長く延びる形状から SD05 と符号して調査した。

重複関係：SK426 が本跡北側の埋土を掘込む形で重複する。また SK373 は弧状の溝跡の東側に位置する。

構造：南北に延びる溝の先端がそれぞれ東側にやや湾曲し、馬蹄形の片側の形状に類似する。ただし東側に対となる溝跡は検出されなかった。溝跡の内側で長軸方向に 2.08m、短軸方向に 0.56m を測る。

出土遺物：なし。

時期：不明。

所見：SD01 ~ 03 に比べ規模が小さい。規模、形状からみると、堅穴住居跡の周溝の残存部分の可能性がある。

周溝跡（平地建物跡の可能性）について（第 44 図）

猿島遺跡では、周溝跡を 4 基調査した。形状は、円形、馬蹄形であり、規模は長軸内径で約 5 ~ 7m、周溝幅約 30 ~ 75cm、周溝深さ約 30 ~ 55cm を測る。これまで長野県内でも、中野市栗林遺跡、長野市松原遺跡等で「平地式建物址」として類似の報告例がある（中野市教育委員会 1997、長野県埋蔵文化財センター 2000）。ここでは、本遺跡出土の周溝跡について、遺構所属時期である弥生時代中期の北信地方および北陸地方の「平地建物跡」の類例（第 44 図）との比較を行ない、当該遺構の性格について考えたい。

「平地建物跡」は、堅穴を掘込まず床面が地表面と同一の高さとなる建物跡である。建物の周囲に円形、橢円形、馬蹄形等の周溝が掘込まれる特徴をもつ。周溝内側ないしは外側には、周溝掘削土を盛り上げた周堤がめぐる可能性が考えられている（浜崎 1993）。

「平地建物跡」と呼称される遺構が最初に発掘されたのは、1968 年の富山県高岡市石塚遺跡の調査である（上坂ほか 1968）。その後、「建物」として初めて認識されたのは、1979 年の新潟県柏崎市下谷地遺跡の報告においてである（高橋 1979）。現在、「平地式建物」「周溝をもつ建物」（岡本 2003）などと呼称され、報告されることも増えている。

「平地建物跡」という名称をもつ遺構でも、長野県内（北信地方）と北陸地方では様相が大きく異なる。規模は、北信地方に対して北陸地方の建物跡は 2 ~ 3 倍と大形である。周溝の形状（註 4）は、北信地方が周溝式、北陸地方が土坑式となる。富山・石川県例のなかにも、1m 以下の細い溝をもち北信地方の遺構に類似する周溝式の様相もみられる。一方、猿島遺跡の周溝内には凹凸があり、土坑式的な様相もある。



る。さらに、内部構造についてみると、北陸地方、松原遺跡で、周溝内側から多数の柱穴がみつかっているが、本遺跡と栗林遺跡例では柱穴が検出されていない。また、北陸地方の建物跡は、同時代の重複関係はほとんどない。猿島遺跡の遺構に重複関係はないが、栗林遺跡、松原遺跡では多くの建物跡が重複してみつかっている。

以上、北信地方と北陸地方の平地建物跡の基礎的な要素を比較してみたが、基本的に、それぞれの地域での特徴にまとまりがあることがわかる。そのまとまりが機能的な差を示しているのかは明確ではない。富山・石川県に、北信的な様相をもつ遺構が部分的にみられ、一方で猿島遺跡には北陸的な要素が入り込んでいる可能性がある。

「平地建物跡（周溝をもつ建物跡）」の機能面について、新潟県下谷地遺跡の報告のなかで「8本のピットは円形に並び…（中略）…中央には土坑が存在している…（中略）…一般的な竪穴住居跡と同じもの」（高橋 1979: 41）と記述し、周溝内側のピット（柱穴）および土坑をもって「平地建物跡」を住居として認定する根拠を提示している。北陸地方の平地建物跡については、多数の柱穴および炉跡を有する遺構が大半を占めている。北信地方の松原遺跡も同様である。それに対して、猿島遺跡で内部施設と考えられる柱穴は1基にとどまる。

SD01～03の項でも記述したが、周溝跡が検出された時点から、上部構造を考え周溝内外の検出作業を念入りに行なった。また、周溝は縦断面を取り、溝内部の観察をした。その結果、底面に顕著な凹凸も観察できた。しかしながら、柱穴や炉など通常の住居跡にみられる施設はなく、周溝内の遺物も他遺構に比べて多くはなかった。

上記のことから、本遺跡で「周溝跡」とした遺構は、住居としての条件がそろわざ「平地建物跡」とは認定できない。ただ、周溝を掘削した土砂によって柱を固定し、建物跡として機能していたかもしれない。猿島遺跡の3基の「周溝跡」は、今回、集落において何らかの役割を果たしていた遺構として提示するにとどめざるを得ない。今後、同種の遺構例が増加するなかで、周溝跡の機能・用途が想定できることを期待したい。

4 柵跡（第58図、第9表、PL9）

柵跡は、弥生時代中期2基を調査した。下位段丘の東縁で、南北方向に2基並ぶように検出された。2基の間隔は約63mある。

S A O 1（第58図、PL9）

位置：I X12・17グリッド　　規模：北側132cm×南側132cm　　平面形：「く」の字形

長軸方位：N13°W

検出：Ⅲb層掘削後、Ⅳa層中にて、円形で同規模の黒色の落ち込みを4か所検出する。規則的に等間隔で南北方向に並ぶところから、柵跡SAO1 Pit1～4と符号して調査する。調査のなかで、最も北側に位置するPit1を埋土、柱間の違いからSAO1から除外しSK472に変更した。

重複関係：なし。

構造：3基の柱穴が東側に向かって、「く」の字状に148°開いて配列する。それぞれの柱穴の平面形状は円形を呈し、長軸でPit2が32cm、Pit3が28cm、Pit4が20cmを測り、Pit4が小さい。断面はPit3が円筒状で34cmと最も深く、残り2つはタライ状で深さ6cmと8cmを測る。中央の柱穴が、壁面が垂直となり最も深い。

出土遺物：なし。

時期：弥生時代中期後半栗林式期。

所見：本跡は、埋土および周辺の遺構の状況から弥生時代中期後半栗林式期の所産であり、本跡南側約63mに位置するSA02とは南北方向に並列することから、SA02との組み合わせであると考えたい。その一方で、やや傾斜する東側は削平されたものと想定すると、長軸を東西方向にもつ亀甲形掘立柱建物跡の西側柱穴3基が残存した遺構の可能性も考えられる。亀甲形掘立柱建物跡ST11と比較すると、3本の柱穴の開きが広く、柱穴（中央）が深く2層となる点が異なる。この状況から、建物跡とする判断まではできない。

S A O 2 (第58図、PL9)

位置：I X07 グリッド **規模：**北側 144cm × 南側 152cm **平面形：**「く」の字形

長軸方位：N9° W

検出：Ⅲ b 層掘削後、Ⅳ a 層中にて、円形で同規模の黒色の落ち込みを3か所検出する。規則的に等間隔で南北方向に並ぶところから、横跡 SA02Pit1 ~ 3 と符号して調査する。

重複関係：なし。

構造：3基の柱穴が東側に向かって、「く」の字状に164°開いて配列する。柱穴の平面形状はPit2が円形、Pit1、3は楕円形を呈し、長軸でPit1が40cm、Pit2が28cm、Pit3が32cmを測る。断面は、Pit1が円筒状で28cmと最も深く、壁面西側に段差を持つ。残り2つはお椀状で深さ14cmと20cmを測る。

出土遺物：なし。Pit1の2層上面から検出された炭化物(H24分析No.14)をAMS法によるC14年代測定し、縄文時代中期に相当する古い値 4540 ± 30 yrBPが算出された。

時期：弥生時代中期後半栗林式期。

所見：本跡は、埋土および周辺の遺構の状況からSA01と組み合せて弥生時代中期後半栗林式期の遺構と考える。SA01と同様にST11と比較すると、柱穴の構造は類似するが、3本の柱穴の広さはさらに広くなる。

5 遺物集中 (第58図、第10表、PL9)

南側調査区で栗林式土器片が円形状にまとまり出土した箇所が確認され、それを遺物集中として調査した。同様に遺物の集中する範囲は、各段丘上、南区西側のⅡ J14・15・19・20 グリッド（第33図 弥生土器集中域）、東側Ⅲ L01・02・06 グリッド（第36図 弥生土器集中域）でも確認したが、掘込みなどの認められる遺構としては捉えられなかった。なお、東区上位段丘には、栗林式の壺（第83図71）がほぼ一個体分まとめて出土した箇所があり、単独土器として割付図8（第29図）に記録した。

S Q O 1 (第58図、PL9)

位置：Ⅲ F18・23 グリッド **規模：**長軸 328cm × 短軸 288cm × 深さ 36cm **平面形：**円形
面積：7.3m²

検出：Ⅲ層掘削中にV層上面にて、直径3m前後の黒色の広がりを確認するとともに多くの弥生土器片を検出した。周辺の地区から独立した形で遺物が集中して出土したため、遺物集中SQ01と符号して調査した。遺物の取上げに関しては、1m グリッドを設定して実施した（第2、58図）。

重複関係：SK573、575、583、586が本跡の底面から検出される。SK573は本跡より古く、ほかの3基は本跡より古いか同時期の遺構と考えられるが、関係性については不明。

構造：円形状にやや窪んだ場所に、弥生時代中期後半の遺物がほぼ水平に堆積して出土した。

出土遺物：栗林式土器の破片が上層を中心 145 片、硬砂岩製の礫器が下層で 1 点出土。遺構としての遺物集中の性格追究とは別に、本跡から出土した栗林式土器破片（第58図62）に付着した炭化物の成分

分析を行なった。炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析の結果、炭素安定同位体比 $\sigma^{13}\text{C}$ が -26.5\% 、窒素安定同位体比 $\sigma^{15}\text{N}$ が 9.01\% 、炭素・窒素に基づくC/Nモル比は52.4で、デンプンを主成分とするC3植物（註5）に近い値が出ている。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：本跡は、掘込みも明確ではなく住居的な遺構とするよりも、何らかの理由により、土器などが廃棄あるいは遺棄された遺構ではないか。出土土器は、栗林1式土器の範疇に入る資料である。外面に付着した炭化物のAMS法によるC14年代測定の結果、 $2,190 \pm 20\text{yrBP}$ であった。

6 土坑（第59～62図、第13表、PL9～11）

土坑は、576基を検出した。遺構の時期決定は極めて難しく、出土した土器より、縄文時代～平安時代、さらには、それ以降の土坑も含まれる可能性が考えられる。遺構図には、全土坑のうちから、時期がわかる土器が出土したか、または1m以上の規模で特徴のある形等をした土坑を選別して掲載した。さらに、そのなかから、主として各時代の遺存状態が良好な土坑、または、近接する他の遺構と関わりがあると考えられるものについて記述した。記述しない土坑については、第13表にまとめる。また、遺構図については、第12～36図の割付図①～⑮に、すべての土坑を掲載する。

なお、土坑には認定できなかったが、土坑状に埋土が落ち込んだ穴を「準土坑（穴）」として扱い、割付図中には網掛け表記で図示している。

S K 1 9 1（第61図、PL10）

位置：I R11・12グリッド **規模：**長軸290.0cm × 短軸100.0cm × 深さ56.0cm

平面形：隅丸長方形 **長軸方位：**N59°E **面積：**2.0m²

検出：III b層掘削後、IV a層上面で隅丸長方形に広がる黒色の落ち込みを検出。東側は市道下に入り込み、平成24年度に調査した。結果的に、2年間で遺構の東西半分ずつを調査する形となった。

構造：断面形状は箱形に近いタライ状を呈し、壁面がほぼ垂直に56cm立ち上がる。堆積土は、2種類のシルトが50%ずつ斑状に混入する人為埋没土的な層であった。

出土遺物：遺構底面から浮いた状態で埋土中位に、古墳時代中期の高坏（1～5）、埴形壺（6、7）が破碎して出土した。1か所にまとまるだけでなく離れた場所同士で接合する。器種は高坏、埴形壺のみで、ほかの器種は出土していない。坏中央部にタテハケを強く残す高坏部（3）を含む。さらに、高坏は坏部と裾部のみで、筒部は小片が1片出土しているのみである。破碎した高坏の脚柱部のみが除かれて破棄されたと考えられる。また、土器出土層の下層に「ロクロガンナ」（1）が出土。刃先を土坑の外側（南東方向）に向けている。該期の資料としては長野県初出であり、類例は近畿地方に求められるが希少である（村上ほか2003）。そのほか、弥生時代中期後半栗林式の土器片39片、刀器（PL16～（1069））、二次加工のある剥片、磨石、打製石器などが出土している。玉類等の抽出を目的に下層埋土の箇による水洗選別も行なつたが、炭化物と土器片、石器剥片・碎片を検出したのみである。

所見：但馬・丹後の弥生時代の墓でみられる特徴的な儀礼に「墓壙内破碎土器供獻」がある（肥後1994a、1994b）。「供獻土器には、葬送儀礼時に使用された土器などのけがれを払うために底部穿孔、破碎行為を受けて投棄されたもの」がある（吉田1990：21）。本跡は墓坑の木棺ないしは土盛り上に、破碎された土器と礫が投棄された状況と考えられる。本跡の性格を考える上で、前述例は参考となろう。同時期の古墳周溝内における「供獻土器」は東日本でもみられるが、単独の土坑（内）での供獻例は管見にない。さらに、同時期の他遺構は本遺跡内では発見されておらず、単独遺構である点も注目しておく必要がある。

S K 2 0 5 (第 62 図、PL11)

位置：I M24 グリッド 規模：長軸 62.0cm × 短軸 48.0cm × 深さ 14.0cm 平面形：楕円形

検出：表土層掘削後、IV b 層上面で楕円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：断面形状は皿状を呈し深さは 14cm と浅い。

出土遺物：1 層上部より、外面に「ウ」冠状の墨書がある平安時代後期土器器坏片（1）が出土し、近くに別個体の土器器坏口縁部破片がもう 1 点出土。なお埋土から出土した炭化物（H24 分析 No.15）を AMS 法による C14 年代測定したが、 $2,150 \pm 30$ yrBP の値を示している。

所見：性格は明確ではないが、炭化物とともに土器が廃棄された遺構であろう。

S K 2 8 5 (第 59 図、PL9)

位置：I X17 グリッド 規模：長軸 34.0cm × 短軸 32.0cm × 深さ 25.0cm 平面形：円形

検出：IV a 層掘削後、V 層上面にて暗褐色の円形の落ち込みを検出。

構造：断面形状は深さのあるタライ状を呈する。

出土遺物：埋土下層より、縄文時代前期前半期の深鉢胴部破片 2 点が出土した。

S K 2 8 9 (第 60 図、PL10)

位置：I X07 グリッド 規模：長軸 34.0cm × 短軸 29.0cm × 深さ 23.0cm 平面形：不整楕円形

検出：Ⅲ b 層掘削後、IV a 層中にて不整楕円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：断面形状が円筒状を呈し、φ 約 13cm の柱痕状の埋土が認められる。

出土遺物：埋土 1 層上層より弥生時代中期後半栗林 1 式壺胴部小片、先端に敲打痕のある棒状の敲石（19）が出土している。

S K 2 9 1 (第 59 図、PL9・10)

位置：I X12 グリッド 規模：長軸 100.0cm × 短軸 58.0cm × 深さ 55.0cm 平面形：楕円形

長軸方位：N56° E

検出：Ⅲ b 層掘削後、IV a 層下部にて楕円形の黒褐色の落ち込みを検出。

構造：長軸方位が等高線に直行する形で北東方向を示す。断面形状は深さのあるタライ状を呈し、長軸方向の北東側下部がややオーバーハングする。土坑底面中央部に逆茂木状の痕跡がみられ、深さ 16cm を測る。西側縁に段差があり、逆茂木の抜き取り痕跡であろうか。

出土遺物：2 層中位より炭化物（H24 分析 No.17）が出土し、AMS 法による C14 年代測定の結果、 $5,220 \pm 30$ yrBP の値が得られた。

所見：本跡は、形状、規模、逆茂木痕跡、さらに C14 年代測定の結果から、縄文時代前期の落し穴の可能性が考えられる。

S K 3 0 5 (第 60 図)

位置：I X02・03 グリッド 規模：長軸 78.0cm × 短軸 76.0cm × 深さ 11.0cm 平面形：円形

検出：表土層掘削後、V 層上面にて円形の暗褐色の落ち込みを検出。

重複関係：SD02 と重複するが新旧関係は不明。

構造：断面形状が浅い皿状を呈する。上層が削平され、実際の深さとは異なる。

所見：本跡は、SD02 の周溝内側北端に位置しており、SD02 の Pit1 埋土とも類似がみられ、SD02 内の施

設である可能性も考えられる。

SK314 (第60図、PL10)

位置：I X02・07 グリッド 規模：長軸 188.0cm × 短軸 40.0cm × 深さ 6.0cm 平面形：不整形
長軸方位：N3° E

検出：IV層掘削後、V層上面にて溝状に長い黒褐色の落ち込みを検出。

構造：断面形状は皿状を呈し、東側に隣接するSD02に沿う形で南北に延びる。

出土遺物：埋土より、弥生時代中期後半栗林1式の壺胴部横小破片が1点出土。

所見：本跡はSD02の西側に沿う形で位置し、SD02の付属施設の土坑とも考えられるが明確ではない。

SK358 (第59図、PL10)

位置：I S06 グリッド 規模：長軸 148.0cm × 短軸 76.0cm × 深さ 67.0cm 平面形：梢円形
長軸方位：N

検出：III層掘削後、IV層中にて梢円形の黒褐色の落ち込みを検出。

構造：長軸方位が等高線に沿う形で南北方位を示し、断面形状が深さのあるタライ状を呈する。

所見：本跡は、出土遺物がなく時期は明確ではないが、形状および規模からSK291と同様に縄文時代の落し穴の可能性がある。

SK361 (第62図、PL11)

位置：I S16 グリッド 規模：長軸 91.0cm × 短軸 41.0cm × 深さ 32.0cm 平面形：不整梢円形
長軸方位：N55° E

検出：表土層掘削後、東側にやや傾斜するIVa層上面で不整梢円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：東側にやや傾斜する斜面に対して長軸方位を北へ35°振って掘削。底面の深さは検出面から南西側で22cm、北東側で10cmを測り、断面形状は底面がほぼ水平となるタライ状を呈する。底面には、焼土の堆積、被熱は確認できない。

出土遺物：I層下面から2層にかけて、やや大きさのある椀形滓（PL29-1）をはじめ、8点の鉄滓（1-8）に番号を付けて取上げた。椀形滓2点、粘土滓5点、金床石1点で、すべて鍛冶に関わる遺物である。そのほか、自然礫の破片が3点出土した。また、埋土の篩による水洗選別により、少量の鉄滓、砂鉄を検出した。土器は、大形の壺破片（第83図78）をはじめ、弥生土器片が15片出土している。

時期：平安時代前期。

所見：本跡からは多くの鉄滓が出土したが、他遺構をはじめ今回の調査区からの鉄滓の出土はほかに1点も確認されていない。また、本跡出土土器は弥生土器のみであるが、2層出土炭化物（H24分析No.18）のAMS法によるC14年代測定の結果、 $1,140 \pm 30$ yrBPの値が得られ、10世紀中頃の平安時代前期を示す。東側8mにある第1検出面（IIIb層上面）出土のSF03の年代測定結果に近似している。本跡は平安時代前期の製鉄遺構のひとつである排滓土坑として捉えたいが、SF03はそれに関わる遺構の可能性があるかもしれない。

SK423 (第60図、PL10)

位置：I R17 グリッド 規模：長軸 72.0cm × 短軸 65.0cm × 深さ 20.0cm 平面形：梢円形
検出：IIIb層掘削後、IVa層上面にて梢円形の黒色の落ち込みを検出。

構造:断面形状はタライ状を呈する。平面形状が明確に確認できなかった部分には想定線を入れた。

出土遺物:埋土上層より栗林1式の無文の壺胴下半部(52)破片が集中して出土。そのほか、埋土より52と別個体の壺胴部破片と安山岩製のビエス・エスキューユ、二次加工がある剥片などが出土している。

所見:本跡は、遺物の出土状況から、栗林式期の埋没過程で遺物が廃棄された土坑か。

7 焼土跡（第62図、第11表、PL11）

焼土跡は、東区の第1検出面で、焼土ブロック、焼土粒、炭化物が集中する箇所を4か所確認した。明確な掘込みは認められないが、焼土粒が混入する範囲を遺構とした。出土層位等により平安時代の遺構と考える。

SFO1（第62図、PL11）

位置:I X07グリッド **規模:**長軸84.0cm×短軸42.0cm×深さ12.0cm **平面形:**不整形

検出:Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックを複数箇所確認。竪穴住居跡などの別の遺構がみられないことから、単独の焼土跡として調査を行なう。

構造:焼土ブロックが不整形に堆積し、底面も凹凸がある。本跡の南西20cmにSF側に被熱痕のある角礫(長さ20cm)が位置する。

出土遺物:上層より、弥生時代中期後半栗林式の壺胴部小破片2点出土。

所見:焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕はみられない。本跡は、被熱痕のある角礫も含め、他所で生成された焼土が廃棄された痕跡を示す遺構であろう。出土遺物は弥生土器であるが、本跡は第1検出面で検出され、平安時代の焼土跡である。

SFO2（第62図）

位置:I S22グリッド **規模:**長軸39.0cm×短軸30.0cm×深さ15.0cm **平面形:**梢円形

検出:Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックを複数箇所確認。単独の焼土跡として調査を行なう。

構造:焼土ブロックが不整形に堆積する。明確な火床、掘込みはない。中央上面にやや焼土の集中する箇所がある。縁に位置する角礫には被熱痕はない。

所見:焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕がみられない。本跡は第1検出面の遺構であり、出土遺物はないが平安時代の廃棄的な焼土跡であろう。

SFO3（第62図、PL11）

位置:I S22グリッド **規模:**長軸144.0cm×短軸76.0cm×深さ12.0cm **平面形:**不整形

検出:Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックと2点の炭化材を確認。いずれも長さ40cm前後、幅10cm前後の大型の炭化材である。竪穴住居跡等の遺構が確認できることから、単独の焼土跡として調査した。

構造:炭化材と焼土ブロックの集積遺構である。明確な火床、掘込みなどを確認することはできなかった。

出土遺物:炭化材と焼土に伴って黒色土器A塊の壺底部～高台部が出土。そのほか壺胴部破片が出土する。

時期:平安時代前期を推定。

所見:本跡出土の炭化材C2、C3について、AMS法によるC14年代測定を行ない、C2-1の試料(H24分析No.10)で $1,170 \pm 30$ yrBP、C3-1の試料(H24分析No.11)で $1,150 \pm 30$ yrBPの値を得た。9世紀中頃の平安時代前期の年代値である。本跡西側8mに位置する鉄津の出土したSK361は、C14年代測定で50

年ほど新しい年代値が出ている。本跡との直接の関連は明確ではないが、ほぼ同時期の遺構であろう。本跡の掘込みは明確ではなく、斜面上部にあった遺構が削平され、焼土および炭化材が再堆積した可能性も考えられる。本跡が製鉄に関わる遺構であるかは判断できないが、検出面、出土遺物から平安時代前期の焼土跡と考える。

S F O 4 (第 62 図)

位置：I S16 グリッド **規模：**長軸 68.0cm × 短軸 44.0cm × 深さ 10.0cm **平面形：**不整形

検出：Ⅲ a 層掘削後、Ⅲ b 層上面で焼土ブロックを複数箇所確認。単独の焼土跡として調査を行なう。

構造：焼土ブロックが不整形に堆積する。明確な火床、掘込みはない。

時期：平安時代前期。

所見：焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕はみられない。本跡は第 1 検出面の遺構であり、出土遺物はないが平安時代前期の廃棄的な焼土跡と考えられる。

8 不明遺構 (第 63 図、第 12 表、PL11)

性格不明遺構 (SX) は、西区、東区で 8 基を調査した。性格、所在時期については明確ではないが、層位、出土遺物等から弥生時代中期後半以前の風倒木痕の可能性が高い。観察記録等は、第 12 表にまとめる。なお、SX01 ~ 08 の遺構図は第 63 図に、SX01、05、08 の遺構写真については PL11 に掲載する。

註

- 1) 壁穴住居跡の名称については、文化庁文化財記念物課発行の『発掘調査の手引き』で、従来「壁穴住居(址、跡)」と呼称していたものについて、「それらが必ずしも居住施設とは限らないこと、掘立柱建物や礎石建物などの建築学用語との整合を図る必要から」、「壁穴建物」とすることが示されている。一方、県埋文センターの『遺跡調査の方針と手順』では「壁穴住居跡」の用語を用いており、住居の機能が確認できない壁穴を「壁穴状遺構」としている。また、学史的に「壁穴住居跡」は学術用語として用いられてきたと理解している。将来的には「壁穴建物跡」の用語に統一すべきであると考えるが、今回調査した遺構は炉跡等から居住施設と推定されることから、本書ではこれらを考慮し、「壁穴住居(跡)」の用語を用いた。
- 2) 本跡は、北陸地方に類例が求められる弥生時代中期後半の亀甲形掘立柱建物跡との関連を追究すべき資料である。「本来はいわゆる平地建物跡の周溝が存在した可能性がある。」(2012.6.28 石川県埋蔵文化財センター久田正弘・主幹の指導)
- 3) 「溝に立板、網代壁を立て、その外側に土盛りの壁(周堤)を築いたと思われる。」(同上)
- 4) 「周溝は、土坑を巡らす土坑式と周溝式に大別される(周溝式は溝幅 100cm 前後の広溝式と狭溝式に分類)。」(岡本 2003)
- 5) 「…光合成回路に基づいて食用植物を分類すると、イネ、ムギ等の穀物やクリ、クルミ等の木本、ヤマノイモ、ソバなどそのほとんどは C3 植物であり…」(赤澤ほか 1993: 446,447)

引用・参考文献

赤澤 咲、米田 槙、吉田邦夫 1993 「北村織文人骨の同位体食性分析」「北村遺跡 本文編」長野県埋蔵文化財センター発
掘調査報告書 14: 445-468

上坂誠次、上野 章 1968 「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」(オジャラ 3)

岡本淳一郎 1997 「“周溝をもつ建物”について」「埋蔵文化財調査概要－平成 8 年度」富山県文化振興財團埋蔵文化財調査
事務所

岡本淳一郎 2003 「周溝をもつ建物」の基礎的研究」「豪氣樓」富山大学考古学研究室: 123-152

赤澤正志 2012 「下谷地遺跡の集落構造について」「新潟考古」23: 37-54

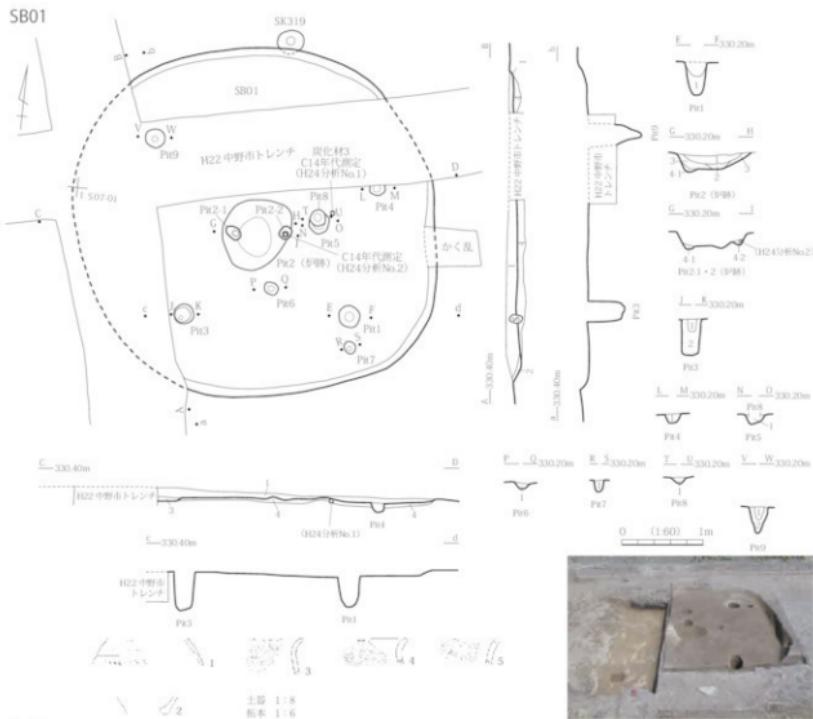
高橋 保 1979 「遺構の性格について」「下谷地遺跡」新潟県教育委員会: 41-44

中野市教育委員会 1997 「栗林遺跡発掘調査報告書」

富山県射水市教育委員会 2007 「高島 A 遺跡発掘調査報告書－射水市立新湊南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－」

- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 「下老子篠川遺跡」 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 長瀬 出 2000 「豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古』第 26 集 法政考古学会 : 1-26
- 長瀬 出 2003 「南関東地方における「周溝をもつ建物」の検討－東京都北区豊島馬場遺跡の再検討を中心に－」『法政考古』第 30 集 法政考古学会 : 205-223
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・墓地遺跡・於下遺跡・今里遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「松原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 浜崎悟司 1993 「加賀における集落構成要素・加賀の集落構造の推移」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 : 105-112
- 肥後弘幸 1994a 「墓壙内破碎土器供獻（上）－近畿北部弥生墳墓土器供獻の一様相－」「みずほ」12 : 18-23
- 肥後弘幸 1994b 「墓壙内破碎土器供獻（下）－近畿北部弥生墳墓土器供獻の一様相－」「みずほ」13 : 12-17
- 村上恭通、山村芳貴 2003 「農耕具」「考古学資料大観 第 7 卷 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品」小学館 : 265-271
- 吉田秀則 1990 「滋賀県下の方形周溝墓の“供獻土器”について」『紀要』3 滋賀県文化財保護協会 : 20-33

1 堅穴住居跡



掘方完城（西より）

【SB01】

1. 黒鶴¹ 黒鶴HOVYK2-2. 黒鶴ミント 黒鶴ミント² つまりより入り 黒鶴ミントや、黒鶴³ など な喫茶店であります。人気も少ないので、注文時、御断りをね。

2. 黒鶴⁴ 黒鶴HOVYK2-3. 黒鶴ミント 黒鶴ミント⁵ つまりより入り 黒鶴ミントや、黒鶴⁶ など な喫茶店であります。人気も少ないので、注文時、御断りをね。

3. 黒鶴⁷ 黒鶴HOVYK2-4. 黒鶴ミント 黒鶴ミント⁸ つまりより入り 黒鶴ミントや、黒鶴⁹ など な喫茶店であります。人気も少ないので、注文時、御断りをね。

4. 黒鶴¹⁰ 黒鶴HOVYK2-5. 黒鶴ミント 黒鶴ミント¹¹ つまりより入り 黒鶴ミントや、黒鶴¹² など な喫茶店であります。人気も少ないので、注文時、御断りをね。

1：暗褐色 (Hue10YR3/3) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。中野市試源で上層部崩

Pic2 (8)

- 1 黒色。(Hoe 10V2) 粘土土色。上り毛張り強度・吸水性、 $5 \sim 10$ mm の吸水材、吸水膨脹率は常に 20 ~ 30% 設定。 $\phi 10 \sim 20$ mm の黄褐色シート下層中心に 10% 黑色。

2 黒色。(Hoe 10V3) 黏土土色。上り毛張り強度・吸水性、 $5 \sim 10$ mm の吸水材、吸水膨脹率は常に 20 ~ 30% 設定。 $\phi 10 \sim 20$ mm の黄褐色シート下層中心に 10% 黑色。

3 黒褐色。(Hoe 10V3) 黏土土色。上り毛張り強度・吸水性と同様に、 $5 \sim 10$ mm の吸水材、吸水膨脹率は常に 20 ~ 30% 設定。 $\phi 10 \sim 20$ mm の黄褐色シート下層中心に 10% 黑色。

4 黒・黒色。(Hoe 10V3) 黏土土色。上り毛張り強度・吸水性、 $1.2 \sim 2$ g が黒色。黒、 $5 \sim 10$ mm の吸水化物土色。

Fig3

1：黒褐色（Hue10YR2-2）粘土質シルト。少し普通で粘性強い。中央10cm幅で柱痕跡状に黒ずむ。2番との境に黄褐色シルト混入。

2-1: 暗褐色 (Hue10YR3/3) 砂土質シルト。しまり普通で粘性38%、 ϕ 20 ~ 30mm の黄褐色シルトブロック30%混入。下層、粘性強くなり、黄色味増す。
2-2: 暗褐色 (Hue10YR3/3) 砂土質シルト。しまり普通で粘性38%、 ϕ 20 ~ 30mm の黄褐色シルトブロック30%混入。下層、粘性強くなり、黄色味増す。

131

130

11: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 軽土質シートト。こなれ目地で粘性高い、成膜近く、にせい黒褐色シルトブロック5%混入

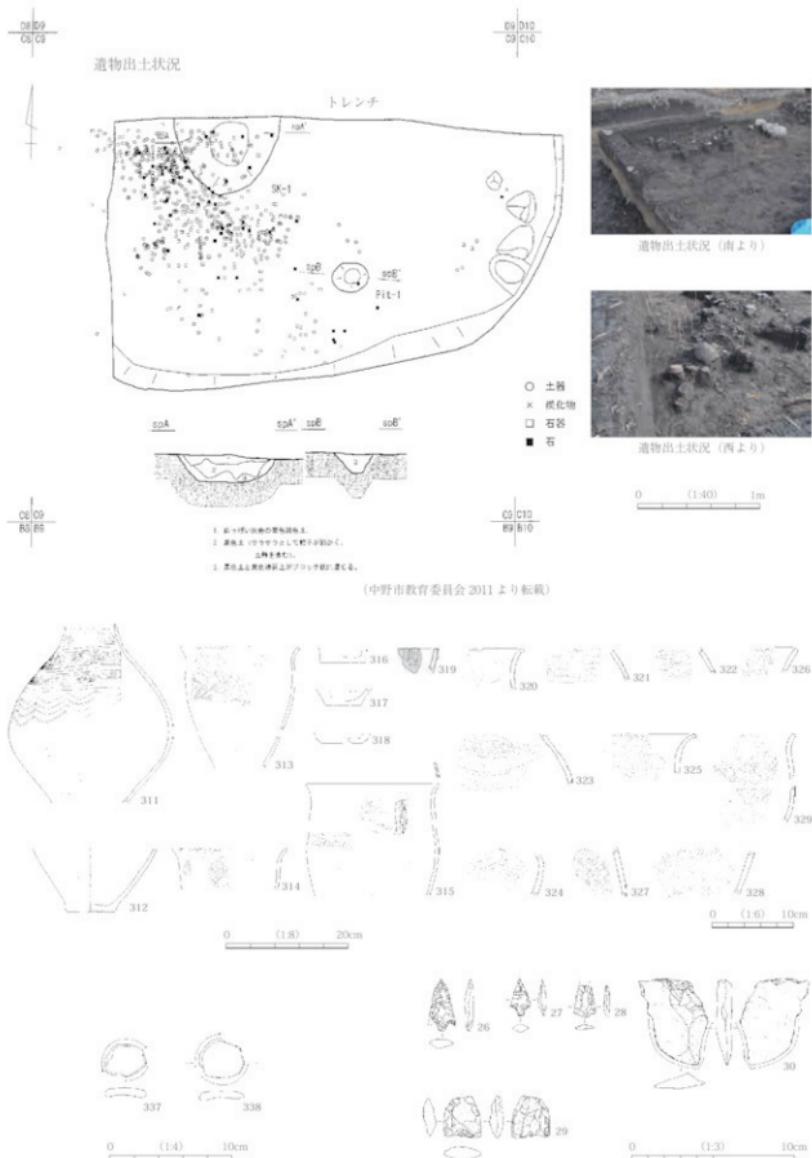
Pic9

1. 乳白色 (Hue10YR3/2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。にじみ、黄褐色シルトプロテク ID ~ 15% 認入。

231

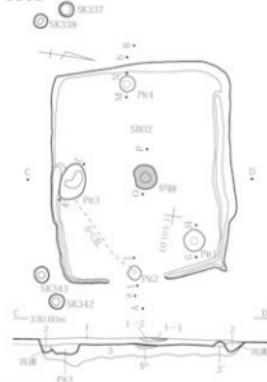
第45回 3501 道情回

第45図 SB01 遺構図



第46図 SB01 遺構図・出土遺物 (H22 中野市試掘調査分)

SB02



1：黒色（Hue10YR2/1）砂質シルト。しまり良く、南側が
鰐に泥炭化集中。

- 1-4. 黒上、橙一黒斑 (Hue75YB96-6~5) 伸育シート。
1-2. 黒上、黒斑、黒尾斑 (Hue10YR2-2) 肌上シートに橙一黒斑 (Hue75YB96-6~5) 伸育シートが30~40%混入。
2-2. 黒斑 (Hue10YR2-2) 伸育シート。しまり直毛性やや柔軟、 ϕ 5~20mmの黒斑伸育シートオフロ \pm 15%混入。 ϕ 1~5mmの花形化物が2%混入。周辺部、周辺部尾斑 (Hue10YR2-2) 伸育シート。
3-1. 黒斑 (Hue10YR2-2) 伸育シート。しまり直毛性やや柔軟。
3-2. 黑斑 (Hue10YR2-2) 伸育シート。しまり直毛性やや柔軟。周辺部シートオフロ \pm 20~25%混入。履足部。
3-3. 黑斑 (Hue10YR2-2) シート。しまり直毛性やや柔軟。周辺部シートオフロ \pm 15~20%混入。駆床部の一部。
3-4. 黑斑 (Hue10YR2-2) シート。しまり直毛性やや柔軟。周辺部シートオフロ \pm 15~20%混入。駆床部の一部である。

卷四

1. 黒毛 (*Hae10YR17-1*) 地土質シット。しまり普通で粘性強い。φ 20mm の灰黒褐色シルトプロック (結床土) 20%混入。

Pt1
1. 黒褐色 (*Hae10YR2-2*) 地土質シット。しまりやや良好粘性強い。φ 20mm の灰黒褐色シルトプロック下層中に 15%混入。

Pt2
1. 黑褐色 (*Hae10YR2-2*) 地土質シット。しまりよく粘性強い。φ 20mm の灰黒褐色シルトプロック地盤中に 20%混入。南側に底面から上 50mm に鉄分集塊あり。

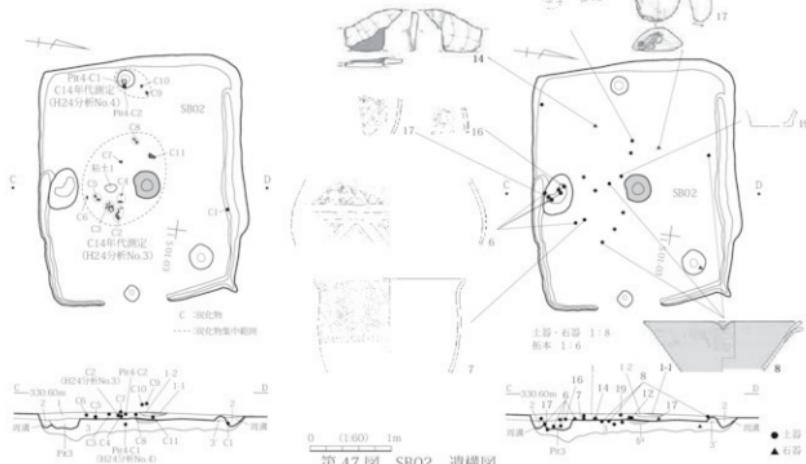
Pt3
1. 黑褐色 (*Hae10YR2-2*) 地土質シット。しまりよく粘性強い。φ 1mm の白色粘土粒、灰黒褐色シルトプロック 10%混入。

2. 黑褐色 (*Hae10YR2-2*) 地土質シット。しまり良好粘性強い。φ 5mm の灰黒褐色シルトプロック 30~40%混入。

1. 黑褐色 (*Hae10YR2-2*) 地土質シット。しまり良好粘性強く。50mm 等の初期に 5mm 程の灰黒褐色シルトを挟み互層となる。人为的に削除した層であろう。下層に φ 20~50mm の白色粘土 (M) あり。馬糞臭味と人間臭味有り。成層土上部 50mm 层は異常臭無し。

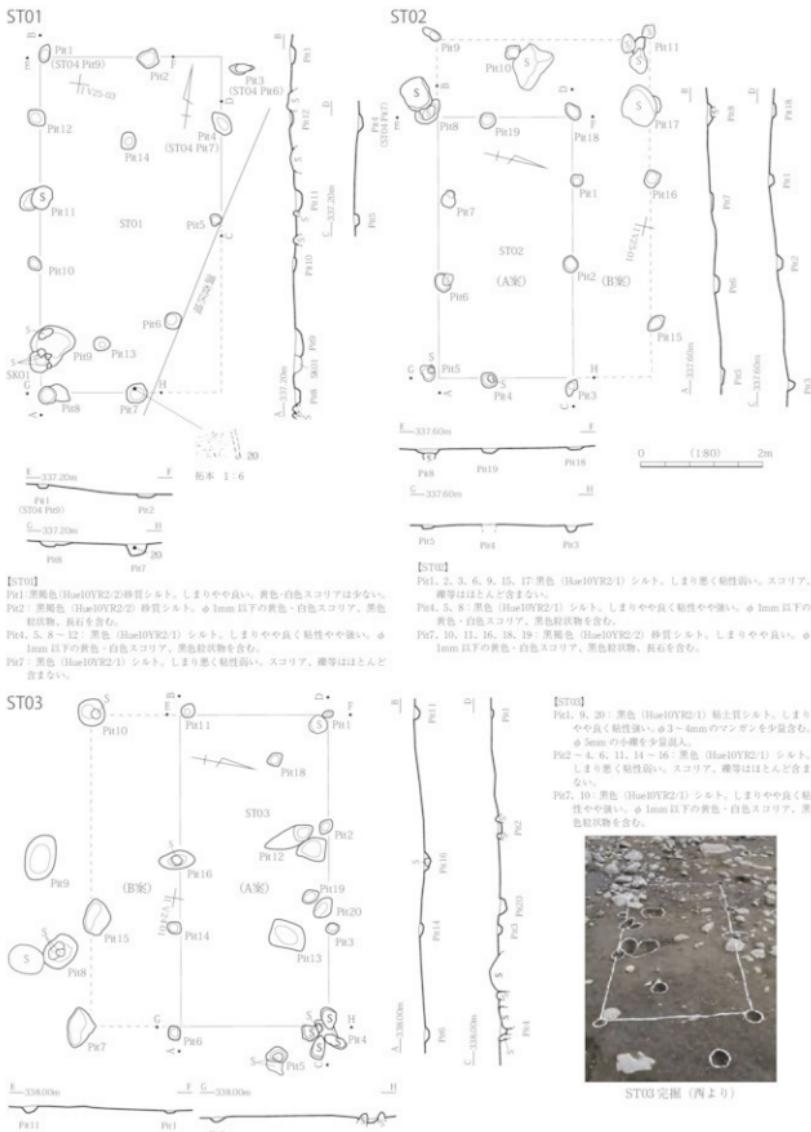
碳化物出土状况

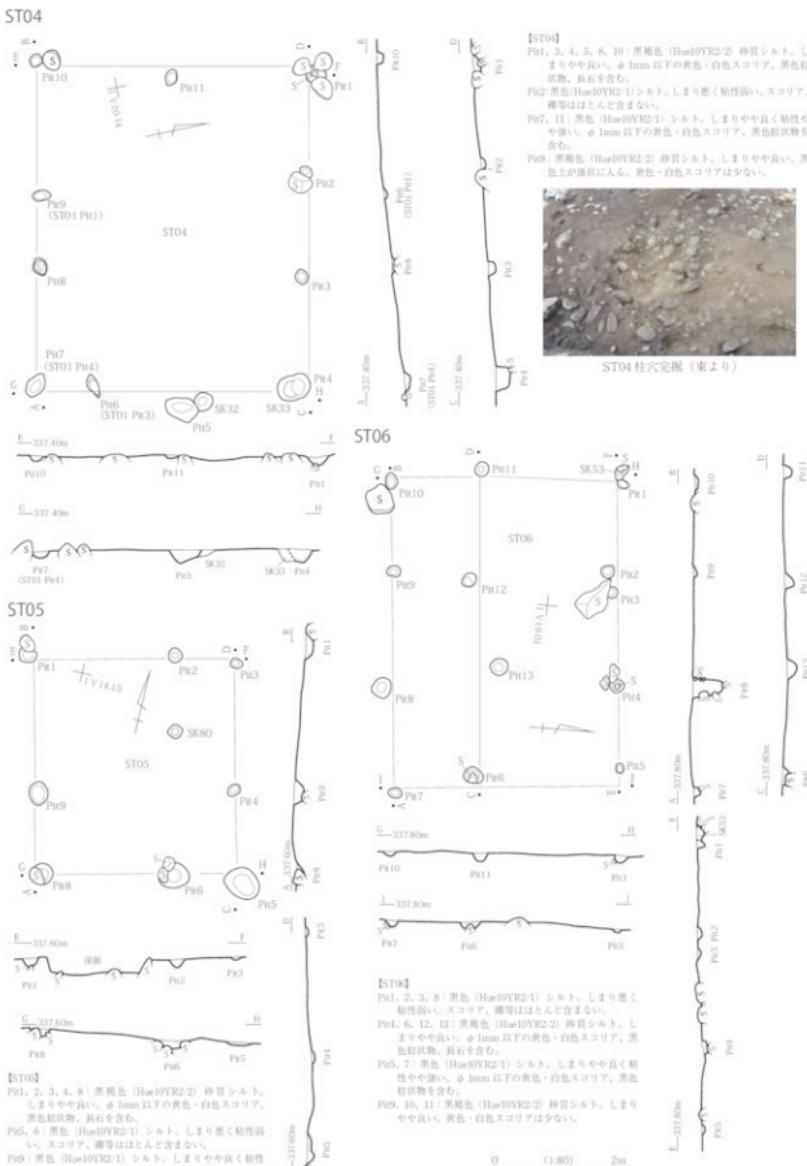
遺物出土狀況



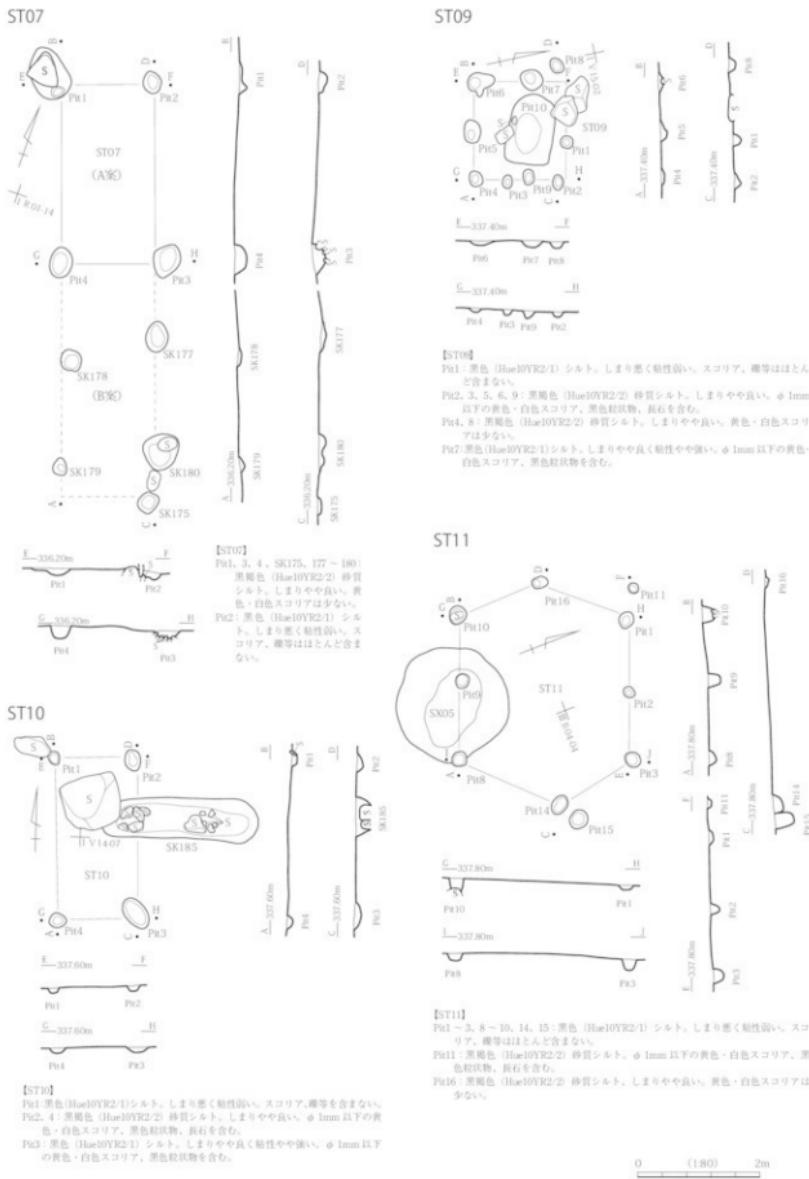
第47図 SB02 遺構図

2 捩立柱建物跡



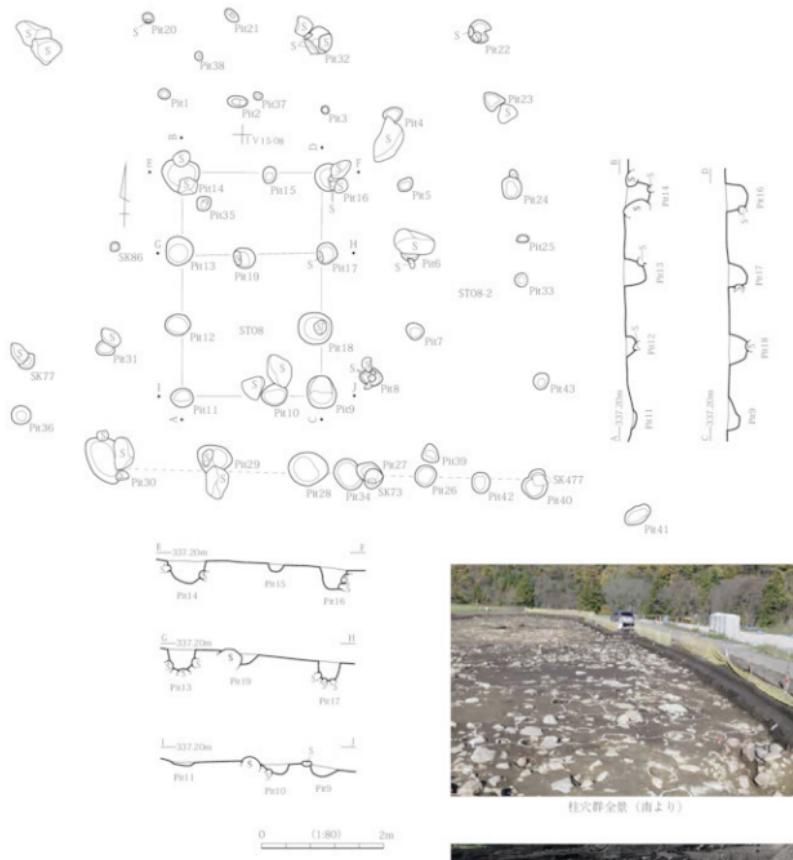


第40圖 ST04 ~ 06 遺構圖



第50図 ST07、09~11 遺構図

ST08



[STUB]

Pt9、10、12、17、18、40：黒色（Hue10YR2/1）シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

Pt11, 13, 15: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 純質シルト。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物、長石を含む。

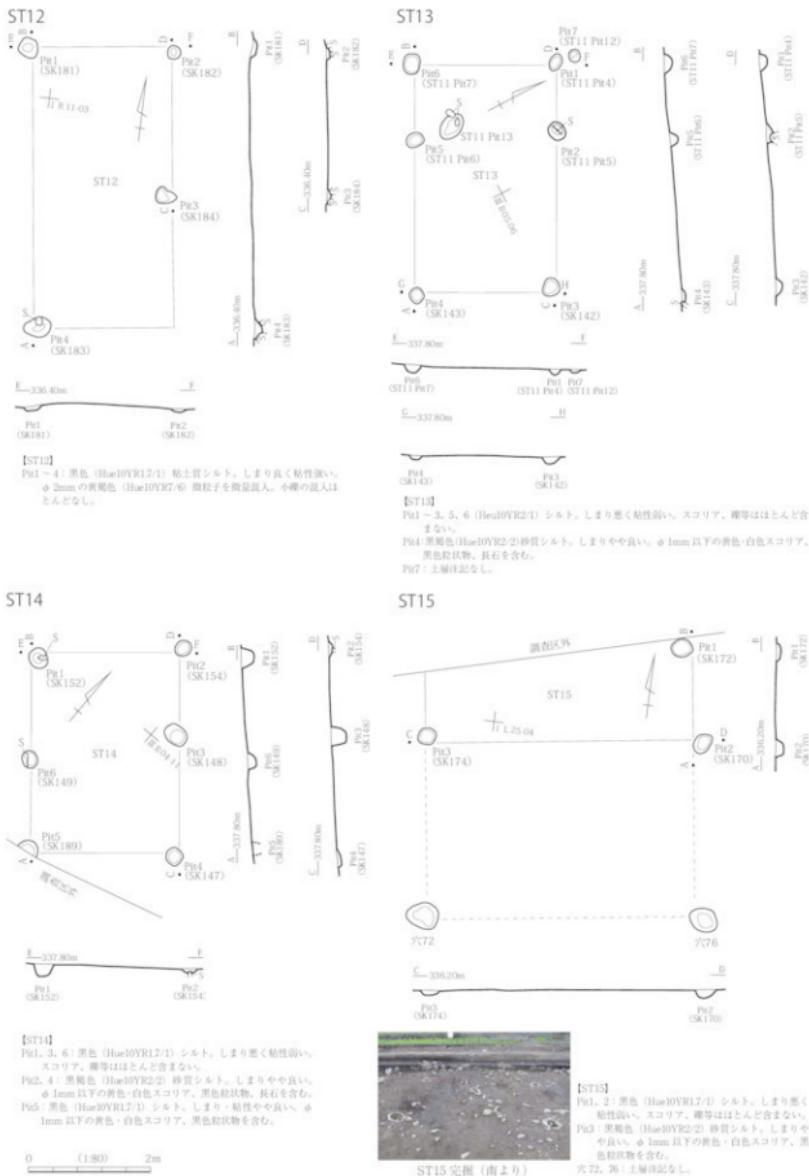
Pr14, 26 ~ 30, 34, 42 黒色 (Hue10YR2/1) シルト。しまり・粘性やや良い。♀ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。

Pr16, 19 黑褐色 (Hue10YR2/2) 硅藻をトルコ玉よりやや良い。黄色・白色スコリア

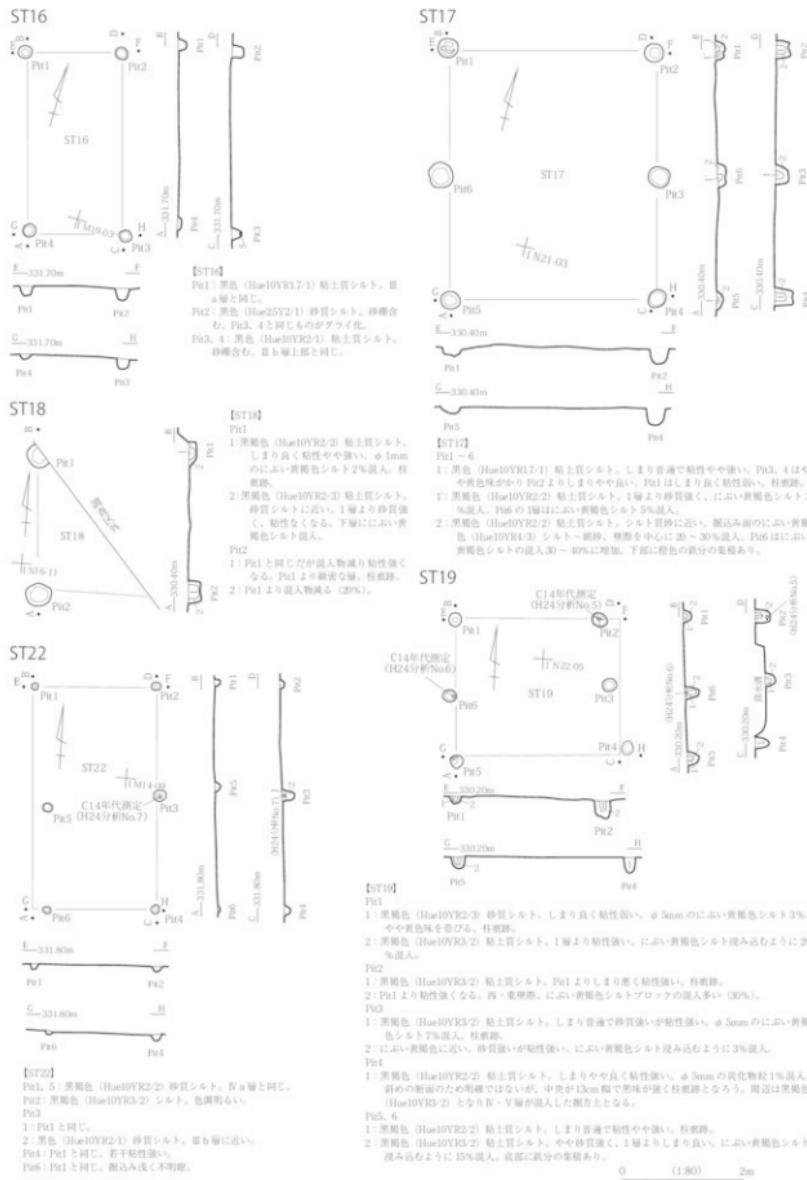


柱穴群全景（東より）

第51図 ST08 遺構図

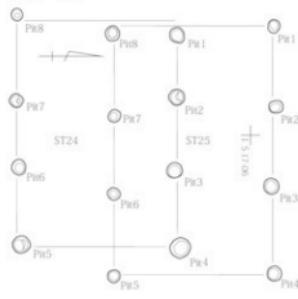


第52図 ST12～15 遺構図

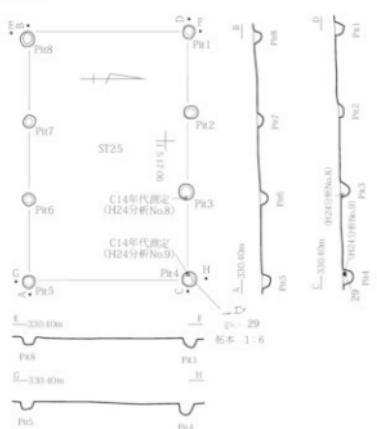


第53図 ST16≈19°22' 遺構図

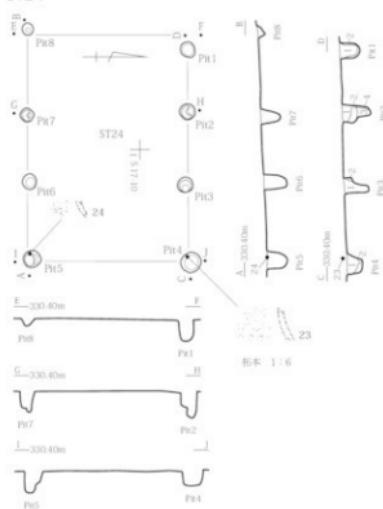
ST24・25



ST25



ST24



ST24

1: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。Ⅲb層と同じ。

2: 黑褐色 (Hae10YR2/2-2/3) シルト。地山 (V a層)との遷移層。

Pr2

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。Ⅲb層主体にV a層 (黄褐色シルト) 調入。Pr1より明るい色調。

2: 1層主体にV a層ブロック状に混入。しまり悪い。

3: 黑褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。V c層ブロック状に混入。(2層のV a層ブロックより小さい)。2層よりしまり良い。

4: 黑褐色 (Hae10YR4/6) シルト質砂。V c層主体に1層 (Ⅲb層) 20%混入。遷移層。

Pr3

1: Pr1 1層と同じ。

2: Pr1 2層と同じ。

Pr4

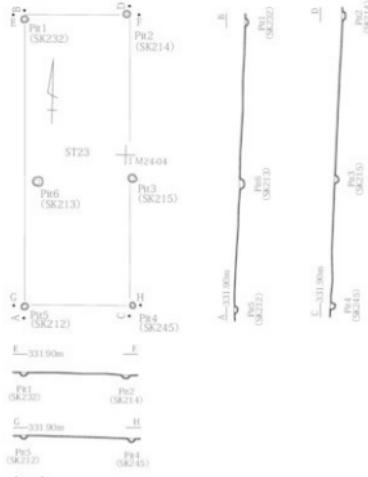
1: Pr1 1層と同じ。

2: Pr2 2層と同じ。

Pr5, 6, 8: Pr1 1層と同じ。

Pr7: Pr1 1層と同じ。

ST23



ST23

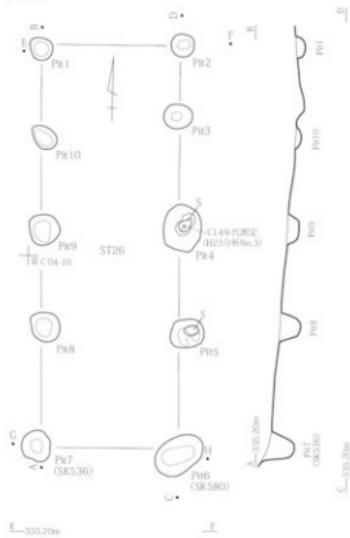
Pr1 - 6

1: 黑褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまりや良い。φ 1mm以下の黄色・白色スコリア。黒褐色块物を含む。Pr6, 6は複数。

0 (1.80) 2m

第54図 ST23～25 遺構図

ST26



Pit1, 10 黒色 (Hue10YR12/1) シルト。しまりやや悪く粘性弱い。微粒砂少
量混入。風化層・白色粒子少量混入。

Pit2 : 地山の裸層。

Pit3 : 裸層。

Pit4 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト。細繊維（※円錐）多く混入。下部にφ
50mm 前後の明瞭色 (Hue10YR3-4) シルト。細繊維 20%程度（地山層ブロック）
混入。

Pit5: 黒色 (Hue10YR12/1) シルト。しまりやや悪く粘性弱い。粗粒砂（白色）、
細繊維少量混入。中層 10%程度混入。

Pit6: 黒色 (Hue10YR2/1) 粘土質シルト。しまり普通で粘性やや強い。

φ 30mm ~ 70mm 級 10%混入。

Pit7: 黑色 (Hue10YR2/1) 粘土質シルト。しまりやや悪く粘性やや強い。

φ 20 ~ 50mm 級 5%混入。

Pit8 : Pit7 と同じ。φ 2 ~ 50mm の円錐 5%程度混入。

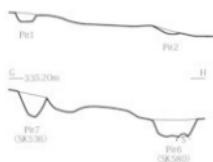
Pit9 : Pit7 と同じ。φ 3 ~ 50mm の円錐 10%程度混入。



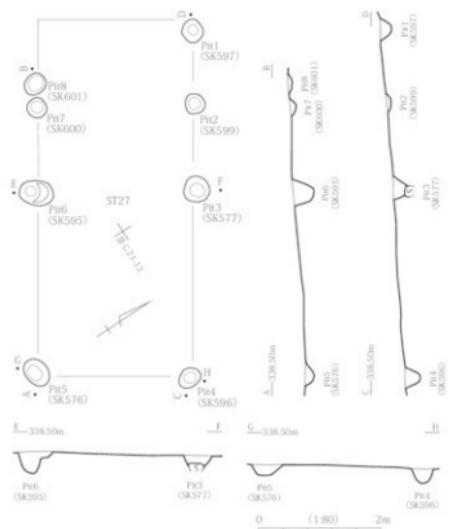
ST26 完掘
(Pit6-7 除く、南より)



Pit6 完掘（北より）



ST27



ST27

Pit1 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪い。ボクボクしている。

Pit2 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪く粘性弱い。ボクボクしている。

Pit3 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまり普通で粘性弱い。φ 30mm の裸
層少量混入。

Pit4 : 黒色 (Hue10YR2/1) 粘土質シルト。しまりやや悪い。小確少量含む。
ボクボクしている。

Pit5 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) 粘土質シルト。しまり普通で粘性弱い。

Pit6 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまり悪い。ボクボクしている。

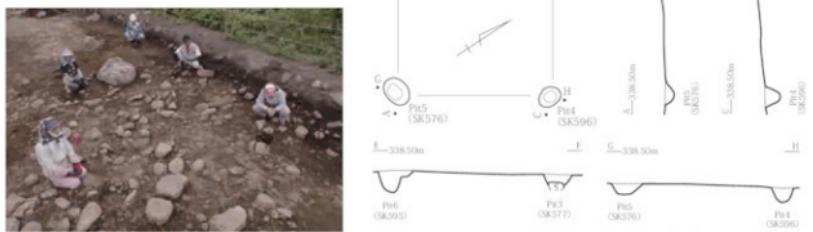
Pit7 : 黑褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまり普通で粘性弱い。

Pit8 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪く粘性弱い。

Pit9 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪い。小確少量含む。
ボクボクしている。

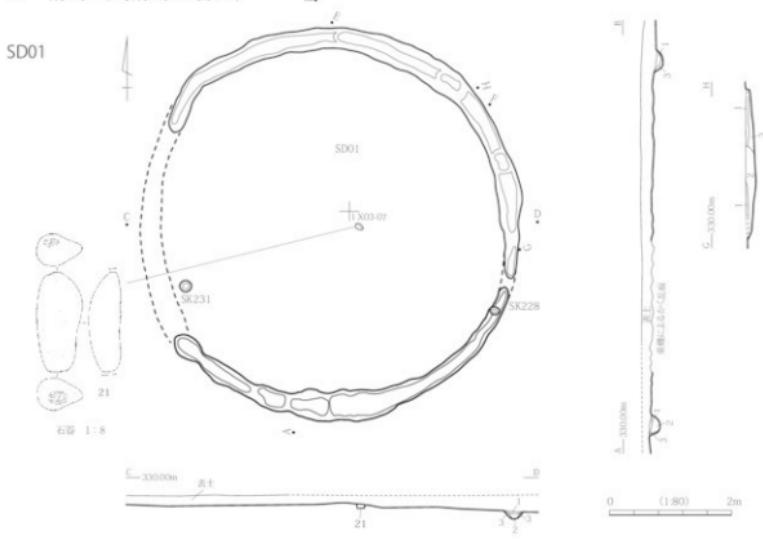
Pit10 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪い。小確少量含む。
ボクボクしている。

Pit11 : 黒褐色 (Hue10YR2/1) シルト質跡。しまりやや悪い。小確少量含む。
ボクボクしている。



ST27 完掘（南東より）

3 溝跡（周溝跡を含む）



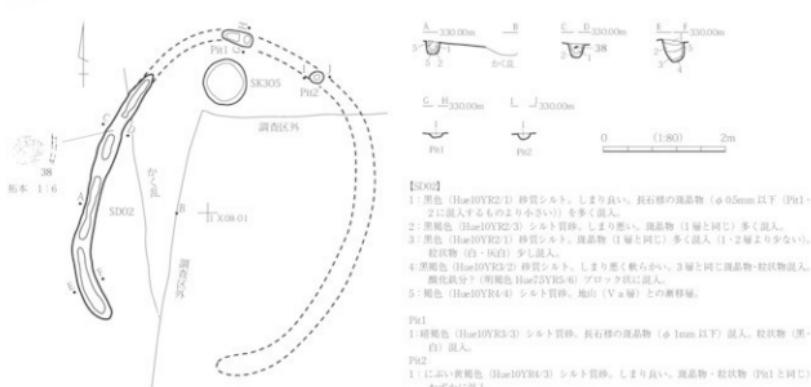
【SD01】

1: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 砂質シルト。しまり良い面。粒状物 (砂礫)・長石様の混晶物 ($\phi 0.5mm$) 5%混入。

2: 黄褐色 (Hue10YR3/3) シルト質粘土。しまり良いが固くない。1層と同様の粒状物 ($\phi 0.5mm$, 黒色・白色の含む) 20%、混晶物 ($\phi 0.5mm$) 3%混入 (含有物はV5層に近い)。

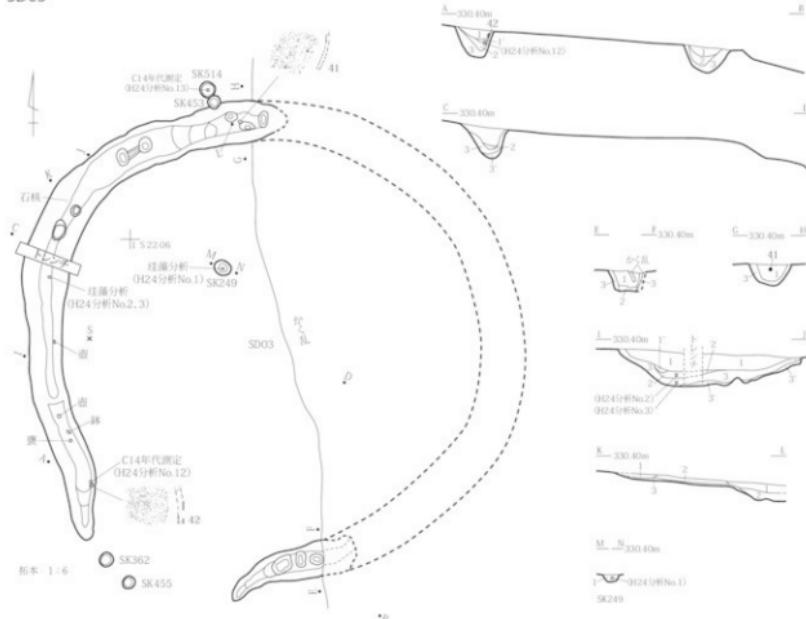
3: 黑褐色 (Hue10YR2/2-2/3の間) シルト質粘土。しまり良いが固くない。2層と同様の粒状物 (白色のもの多い)・混晶物混入。背景と地山 (V6層) の軽移層。

SD02



第56図 SD01、02 遺構図

SD03



【SD03】

- 1 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。しまり非常に悪くボロボロと崩れる。長石のような粗品物 (ϕ 1mm 以下) 10%、粒状物 (黒色・ ϕ 1mm 以下の粗砂) 流入。Ⅱ b 層とは界面だが、
φ 1.2 ~ 10cm の砂角礁が混入 (2% 未満)。
1' 1 層土上部付に、細颗粒 (Hae10YR2/4) 川砂の強烈な混入。
2 黒褐色～黒色 (Hae10YR2/2 ~ Hae7SYR1/1) 粘土質シルト。しまり良い。長石様粗品物 (ϕ 1mm 以下) 15%、粒状物 (黒色・ ϕ 1mm 以下の粗砂) 15% 流入。
3 細颗粒 (Hae10YR3/2) 粘土質シルト。しまり良い。2 層と同様の粗品物・粒状物を混入。殊土と山岸層 a、V b 層 (上層は V b 層混入) の兼移層。
3' 細颗粒 (Hae10YR3/3) 粒。兼移層 (V c 層土全体に 1~2 層厚)。

【SK05】

- 1 黒色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く良い。粗品物 (黒色・ ϕ 1mm 以下の砂礫) 5%、(白色・ ϕ 1mm 以下の砂礫) 3% 流入。

SD05

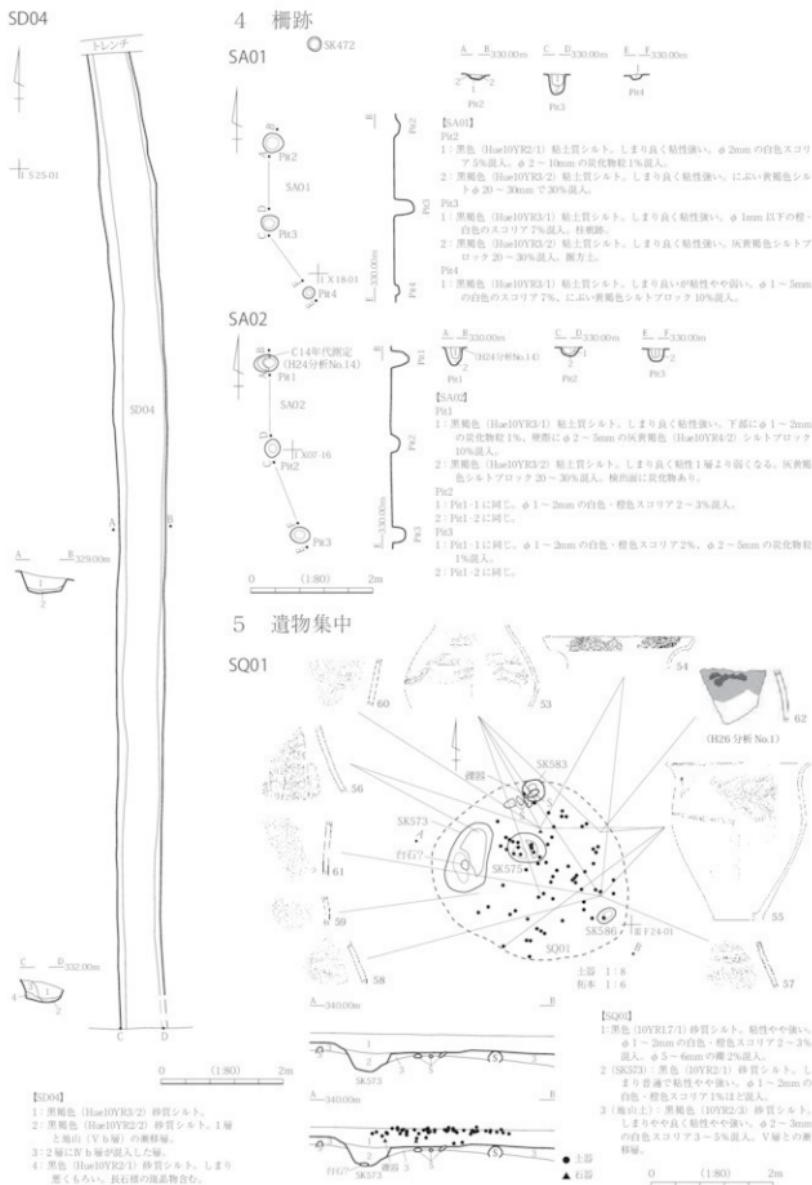


【SD03】
1 黒褐色 (Hae10YR 2/3)
粘土質シルト。しまり
良く粘性強い。φ 5 ~
20mm の砂 10 %、φ 2
~ 3mm の白色砂粒 5 ~
10 %、φ 5 ~ 10mm の
に多い黄褐色シルト 10
% 流入。



SD03 検出状況（西より）

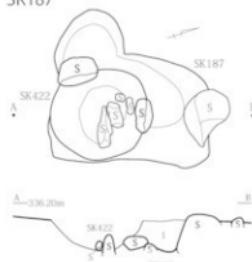
第57図 SD03、05 遺構図



第58図 SD04・SA01・02、SQ01 遺構図

6 土坑

SK187



【SK187】

1: 黒褐色 (Hue10YR17/1) シルト。しまり良く粘性強い。
φ 2mm の黄褐色 (Hue10YR5/6) 粒子少量混入。小
石は混入しない。

SK291



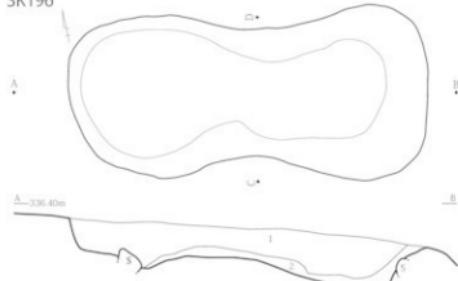
【SK291】

1: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘土質
シルト。しまり良く粘性強い。
φ 2~3mm の白色スコリア
~ 30%混入。
2: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘土質
シルト。しまりやや悪く粘性
弱い。白色スコリアない。
3: 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘土質
シルト。しまり良く粘性強い。
灰黄褐色シルト。ブロック状
に 20%混入。
4: 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘土質
シルト。3 層に比べしまり悪く
粘性弱い。シルト質強くなる。

SK574



SK196



SK293



【SK293】
1: 黒褐色 (Hue10YR3/2)
粘土質シルト。しま
りからり良く粘性強
い。灰黄褐色シルト薄
皮に 20~30%混入。

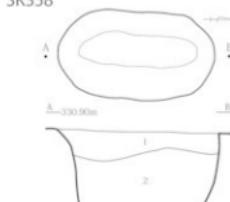
SK285



【SK285】
1: 黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘土質シルト。
しまり良く粘性やや強い。砂質や
強い。φ 2~3mm 以下の白色スコ
リア 10%混入。

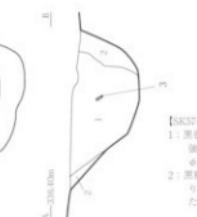
標本 1:6
A B

SK358



【SK358】
1: 黒褐色 (Hue75YR3/1) シルト質砂。
しまり良く非常に高い。黒雲母・白色
粒子 20%混入 (白色粒子少ない)。

2: 黒色 (Hue67YR2/2) 粘土質シルト。
しまり良く高い。黒褐色・白色粒子
20~30%混入。北側底面近くに、φ
50mm の地山巖 7%混入。



【SK358】

1: 黒色 (Hue10YR17/1) シルト。しまりやや良く粘性やや
弱い。φ 3mm の白色粒子。φ 5~8mm の風化塊少量。
φ 15~30mm の複数個混入。
2: 黄褐色 (Hue10YR2/2) シルトと中粒砂の混在層。しま
り悪く粘性弱い。地の起源の細~中粒土が埋没に
て入したもの。



【SK196】

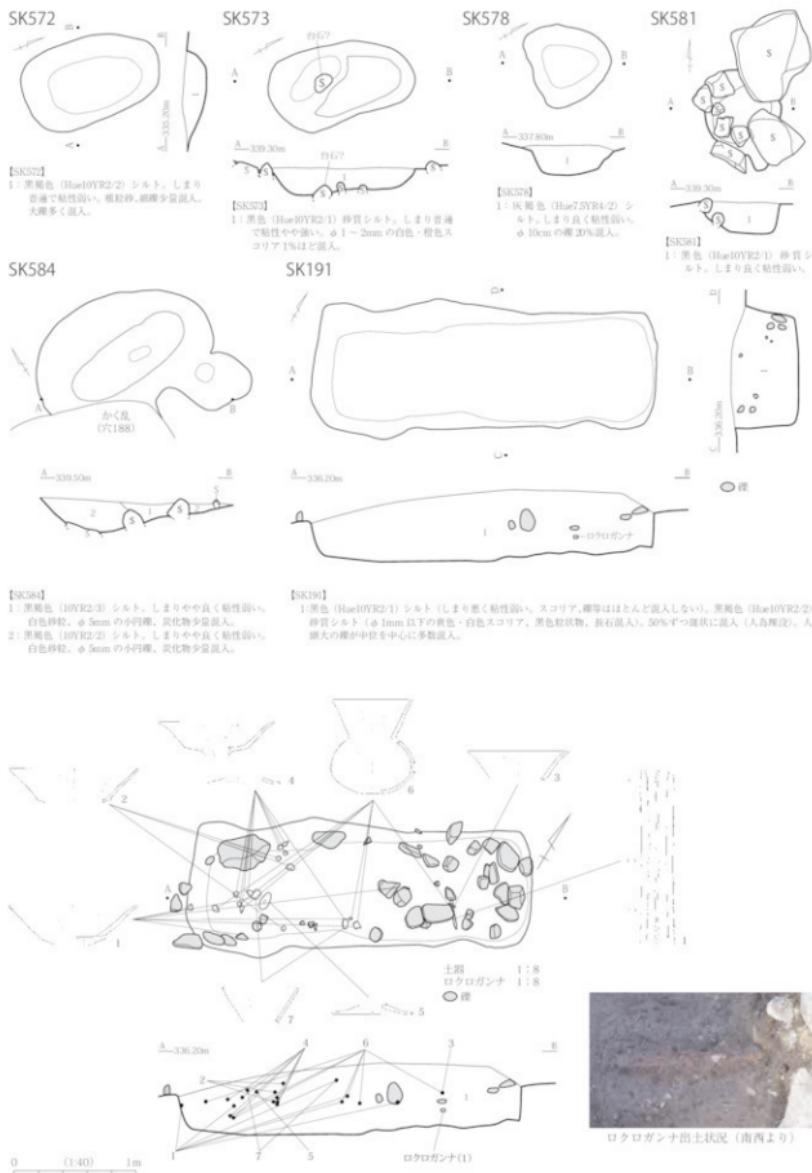
1: 黒色 (Hue10YR17/1) 粘土質シルト。しまり良く
粘性強い。φ 1~3mm の白色・褐色スコリア 7~
25%混入。φ 50mm の複 1%混入。
2: 黄褐色 (Hue10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く
粘性強い。1~3mm の白色・褐色スコリア 10%。
φ 20~30mm の複 30%混入。地山と 1 層の兼移層。

0 (1:40) 1m

第59図 SK 遺構図(1)



第 60 図 SK 遺構図 (2)

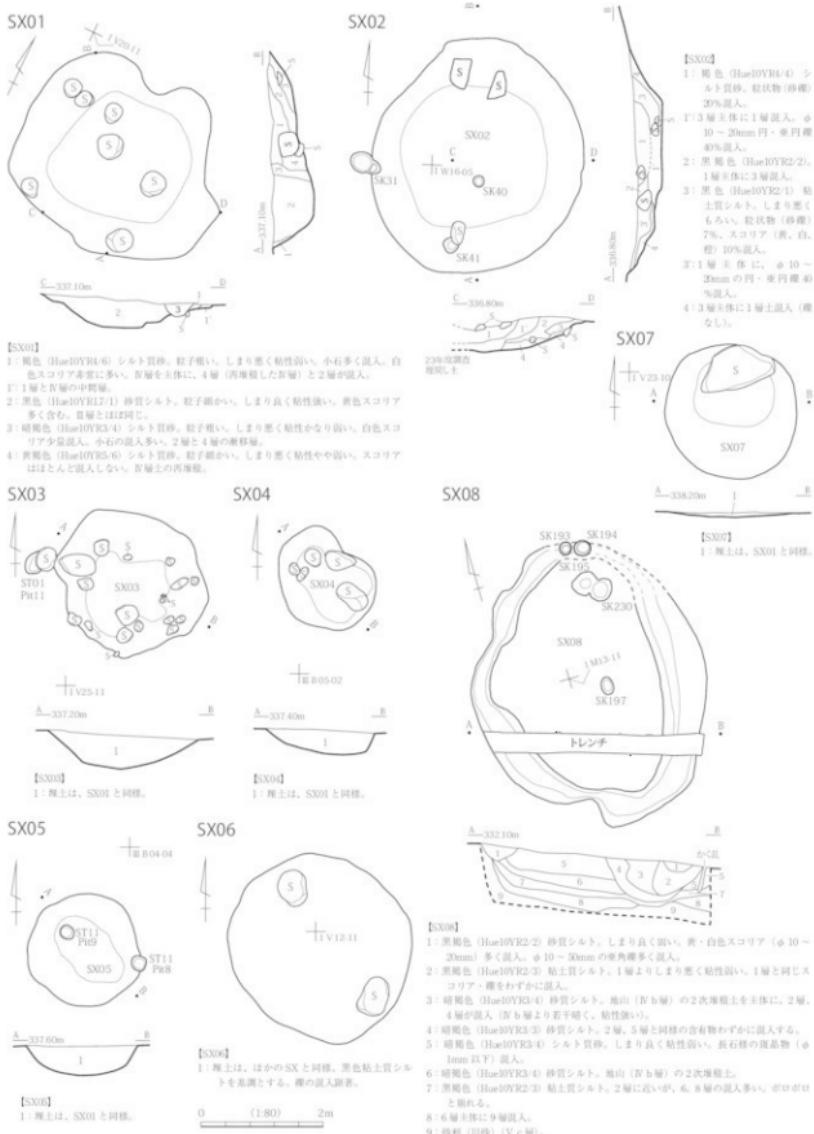


第61図 SK 遺構図(3)



第 62 頁 SK SEO1 - Q4 滑塊圖

8 不明遺構



第63図 SX01～08 遺構図

第6表 穴穴住居跡一覧

遺構名	位置	形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	埋土の 堆積	面積m ²	主軸方位	Pitの埋蔵 長軸×短軸×深さ cm	伊の埋蔵 長軸×短軸×深さ cm	時期	重複関係	出土遺物	備考
S001 第5+45 -46区	I S01+ 02-06-07	円形	430	<360>	25	3層	14.3	N	Pit1:28×26×42 Pit2:86×78×20 Pit3:24×24×45 Pit4:20×(14)×10 Pit5:25×24×12 Pit6:18×16×8 Pit7:17×14×14 Pit8:20×(20)×6 Pit9:24×23×66	Pit2=伊 86×78×20	弥生中期 後半	重複 (SK319古)	弥生土器、 石器、 炭化物、 炭化穀子、 粘土塊	C14②④分析No1, 2)
S002 第13+47区	I N21, I S01	長方形	305	258	29	2層	6.0	N79° E	Pit1:31×30×14 Pit2:20×18×42 Pit3:55×36×10 Pit4:22×22×48	35×33×5	弥生中期 後半	なし	弥生土器、 石器、 炭化物、 炭化穀子	C14③④分析No3, 4)

第7表 挖立柱建物跡一覧

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置		長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
			長軸(m)	短軸(m)					
ST01 第30+48区	I V20+25	不明	5間(5.48)×2間(2.96)		0.8~1.6	1.4~1.7	(16.2)	長方形	N8° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m		出土遺物	備考	
Pit1	39	18	8	橢円形	337.00				
Pit2	39	28	4	圓丸方形	336.86				
Pit4	44	28	6	橢円形	336.70				
Pit5	18	18	8	不整形	336.76				
Pit7	34	32	20	圓丸方形	336.80				
Pit8	48	28	8	不整形	336.92			弥生土器	
Pit9	72	66	12	不整形	336.88				重複(SK01新)
Pit10	24	20	4	橢円形	337.00				
Pit11	(36)	30	10	橢円形	336.90				
Pit12	28	26	4	圓丸方形	337.05				
Pit3	40	16	4	橢円形	336.76				ST01のピットとしない
Pit6	28	26	14	不整形	336.84				ST01のピットとしない
Pit13	26	24	14	不整形	336.83				ST01のピットとしない
Pit14	28	24	8	不整形	336.86				ST01のピットとしない
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置		長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST02 第28+48区	I V24+25	不明	A:3間(4.2)×2間(2.2) B:4間(5.5)×3間(3.3)		A:1.12~2.0 B:0.92~2.0	A:1.0~1.4 B:1.0~1.4	A:9.2 B:18.2	A:長方形 B:長方形	N76° E
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m		出土遺物	備考	
Pit18	32	22	6	橢円形	337.32				
Pit1	24	20	8	圓丸方形	337.34				
Pit2	24	24	6	円形	337.20				
Pit3	28	20	10	不整形	337.00				
Pit4	24	24	—	圓丸方形					
Pit5	28	22	5	不整橢円形	337.04				
Pit6	32	24	8	橢円形	337.10				
Pit7	28	24	4	不整形	337.22				
Pit8	50	32	8	橢円形	337.26				
Pit9	26	24	8	円形	337.26				
Pit10	32	16	—	不整形	337.40				
Pit11	24	20	—	不整形	337.35				
Pit13	32	20	—	橢円形	337.40				
Pit15	30	20	—	橢円形	337.14				
Pit16	30	26	—	不整橢円形	337.16				
Pit17	—	—	—	不明	—				
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置		長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST03 第28+48区	I V18+19+23+ 24	不明	A:3間(5.12)×1間(2.4) B:3間(5.12)×2間(3.9)		A:1.4~2.4 B:1.6~2.4	A:1.32~2.5 B:1.6~2.5	A:12.3 B:20.0	A:長方形 B:長方形	N82° E
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m		出土遺物	備考	
Pit1	29	12	8	橢円形	337.66				
Pit2	28	20	8	橢円形	337.52				
Pit3	29	20	8	圓丸方形	337.52				
Pit4	(32)	30	12	圓丸長方形	337.44				
Pit6	22	20	10	圓丸方形	337.50				
Pit11	22	20	8	圓丸方形	337.62				
Pit16	60	30	10	橢円形	337.50				

Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考
Pit11	24	24	12	円形	337.66		
Pit20	40	28	12	楕円形	337.44		
Pit7	68	48	16	不整形	337.40		
Pit10	44	44	20	円形	337.64		
Pit15	56	44	12	不整形	337.44	弥生土器	
Pit13	60	44	18	圓丸長方形	337.42		ST03のピットとしない
Pit5	36	(24)	10	楕円形	337.52		ST03のピットとしない
Pit8	60	46	16	圓丸長方形	337.48		ST03のピットとしない
Pit9	72	48	28	圓丸長方形	337.44		ST03のピットとしない
Pit12	84	32	12	楕円形	337.68		ST03のピットとしない
Pit18	24	22	8	不整形	337.58		ST03のピットとしない
Pit19	30	22	8	楕円形	337.48		ST03のピットとしない

遺構名	地区(グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST04 第30・49区	I V20・25	不明	3間(5.26)×2間(4.46)	1.1～2.4	2.0～2.4	23.5	長方形	N78° W
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
Pit10	36	20	12	圓丸方形	337.12			
Pit11	28	20	6	楕円形	337.14			
Pit1	32	(28)	12	円形	337.04			
Pit2	24	(16)	8	楕円形	336.96			
Pit3	24	22	12	楕円形	336.80			
Pit4	40	(32)	24	円形	336.56			
Pit5	52	36	20	不整形	336.60		直復(SK33古)	
Pit7(ST01Pit4)	42	26	12	楕円形	336.60		直復(SK32古)	
Pit8	24	24	(6)	圓丸方形	(336.92)			
Pit9(ST01Pit1)	32	16	6	楕円形	337.04			
Pit6(ST01Pit3)	40	16	4	楕円形	336.76		ST04のピットとしない	

遺構名	地区(グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST05 第28・49区	I V14・19	弥生中期 後半?	2間(3.52)×2間(3.28)	1.36～2.3	1.0～2.6	11.5	長方形	N14° W
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
Pit1	28	(20)	12	圓丸長方形	337.24			
Pit2	24	24	12	圓丸方形	337.20			
Pit3	29	18	5	楕円形	337.30			
Pit4	24	18	4	楕円形	337.22			
Pit5	58	48	12	楕円形	337.24			
Pit6	(48)	44	12	楕円形	337.22			
Pit8	38	34	12	円形	337.30			
Pit9	40	30	36	楕円形	337.18	弥生土器		

遺構名	地区(グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST06 第28・49区	I V13・14・18*	不明	3間(5.08)×2間(3.76)	1.5～1.9	1.28～2.4	19.1	長方形	N84° E
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
Pit1	20	14	12	楕円形	337.34			
Pit2	22	20	8	圓丸方形	337.40			
Pit3	29	(16)	6	円形	337.42			
Pit4	22	(20)	8	圓丸方形	337.30			
Pit5	16	10	6	楕円形	337.32			
Pit6	32	28	(10)	不整楕円形	(337.40)			
Pit7	22	18	12	楕円形	337.42			
Pit8	34	30	50	圓丸方形	337.06			
Pit9	22	20	4	圓丸長方形	337.48			
Pit10	28	20	6	楕円形	337.46			
Pit11	24	22	16	円形	337.38			
Pit12	24	22	14	楕円形	337.34			
Pit13	28	28	16	円形	337.32			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST07 第21・50[図]	I RD1・06	弥生中期 後半?	A:1間(2.88)×1間(1.52) B:3間(6.72)×1間(1.52)	A:2.8~2.96 B:1.6~2.8	A:1.8 B:1.6~1.8	A:4.4 B:10.2	A:長方形 B:長方形	N20° W
Pt 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1	96	60	10	不整円形	335.86			
Pt2	32	30	12	隅丸方形	335.86	弥生土器		
Pt3	48	44	20	不整隅丸方形	335.90	弥生土器		
Pt4	52	36	20	梢円形	335.92			
SK177	56	36	8	梢円形	335.90			
SK180	60	56	10	不整形	335.90	弥生土器		
SK175	32	28	6	隅丸比較方形	335.98			
SK179	(26)	22	6	梢円形	335.98			
SK178	34	32	6	隅丸方形	336.04			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST08 第29・51[図]	I V15	不明	3間(3.68)×2間(2.28)	1.0~1.32	0.8~1.48	8.4	長方形	N1° W
Pt 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt14	60	32	36	円形	336.70	弥生土器		
Pt15	28	20	12	梢円形	336.88			
Pt16	48	40	36	円形	336.98	弥生土器		
Pt17	36	32	32	円形	336.60			
Pt18	56	52	30	隅丸方形	336.60			
Pt9	52	46	20	隅丸方形	336.72			
Pt10	44	36	16	梢円形	336.76			
Pt11	36	32	6	梢円形	336.88			
Pt12	40	38	16	梢円形	336.90			
Pt13	48	44	36	円形	336.76			
Pt19	34	32	16	円形	336.85			
Pt4	32	24	24	不整円形	336.60			
Pt23	30	28	8	不整形	336.60			
Pt24	48	32	18	不整円形	336.50			
Pt25	20	12	12	梢円形	336.56			
Pt35	22	(22)	20	円形	336.50			
Pt43	28	24	10	円形	336.55			
Pt39	32	26	16	不整形	336.58			
Pt7	30	26	20	不整円形	336.60			
Pt6	30	(12)	(16)	不整円形	336.70			
Pt5	24	20	6	隅丸方形	336.78			
Pt26	36	34	18	円形	336.60			
Pt1	20	18	6	円形	337.02			
Pt2	32	20	14	梢円形	336.86			
Pt3	14	14	6	円形	336.86			
Pt8	40	28	10	梢円形	336.74	弥生土器		
Pt20	20	20	12	円形	336.92			
Pt21	30	18	6	梢円形	336.86			
Pt22	40	36	8	不整形	336.58			
Pt27	(46)	32	26	梢円形	336.56			
Pt28	64	52	16	梢円形	336.76			
Pt29	60	(48)	12	不整円形	336.88			
Pt30	84	(48)	22	梢円形	336.88			
Pt31	30	(24)	12	不整円形	337.00			
Pt32	44	44	(28)	円形	(336.56)			
Pt34	52	(44)	6	梢円形	336.78			
Pt35	26	24	6	円形	337.04			
Pt36	32	32	22	円形	336.96	弥生土器		
Pt37	16	14	8	円形	336.88	弥生土器		
Pt38	16	14	10	円形	336.86			
Pt40	52	42	16	不整円形	336.48			
Pt41	44	28	10	梢円形	336.32			
Pt42	32	28	12	梢円形	336.58			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST09 第29・50区	I V15	不明	2間(1.6)×2間(1.3)	0.6～0.8	0.5～0.9	2.1	長方形	N77° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt08	26	20	12	楕円形	337.04			
Pt01	29	30	12	円形	339.96			
Pt02	24	18	10	楕円形	339.96			
Pt09	24	18	12	圓丸長方形	336.96			
Pt04	26	20	4	圓丸長方形	337.06			
Pt05	36	26	10	圓丸長方形	337.02			
Pt03	22	16	10	円形	337.00			
Pt06	44	40	(8)	不整形	(337.08)			
Pt07	38	34	12	円形	337.04			
Pt10	116	72	40	圓丸長方形	336.70		ST09のピットとしづく	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST10 第28・50区	I V14	不明	1間(2.64)×1間(1.32)	2.56～2.68	1.28～1.32	3.5	長方形	N3° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt01	20	18	6	不整圓丸方形	337.16			
Pt02	34	26	10	不整圓丸長方形	337.16			
Pt03	56	34	12	楕円形	337.20			
Pt04	26	24	8	不整圓丸方形	337.24			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST11 第32・50区	I V24・III B04	弥生中期 後半?	2間(2.36)×1間(2.8)	1.08～1.32	2.8	6.6	魚形	N69° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt01	28	24	8	楕円形	337.46	弥生土器		
Pt02	18	16	16	円形	337.30			
Pt03	28	24	18	円形	337.24			
Pt08	24	24	16	圓丸方形	337.40			
Pt09	24	22	20	円形	337.32			
Pt10	30	28	(18)	円形	(337.44)			
Pt11	16	16	6	円形	337.48			
Pt14	34	24	16	楕円形	337.28			
Pt15	28	28	32	円形	337.10			
Pt16	26	18	4	不整圓丸長方形	337.52			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST12 第22・52区	I R06・11	不明	2間(4.6)×1間(2.28)	(2.16)～2.4	2.28～2.4	10.5	長方形	N7° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt01(SK181)	32	30	8	不整圓丸方形	336.08			
Pt02(SK182)	22	20	(4)	円形	(336.04)			
Pt03(SK184)	34	28	4	不整形	336.03	弥生土器		
Pt04(SK183)	46	32	12	楕円形	335.98			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST13 第32・52区	III B04・05	弥生中期 後半?	2間(3.72)×1間(2.32)	1.1～2.5	2.2～2.48	8.6	長方形	N63° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt06(ST11Pt7)	32	28	14	圓丸方形	337.30	弥生土器		
Pt11(ST11Pt4)	28	20	12	楕円形	337.28			
Pt21(ST11Pt5)	30	28	(12)	楕円形	337.18			
Pt31(SK142)	30	28	12	不整形	337.02			
Pt41(SK143)	24	24	8	圓丸方形	337.10			
Pt51(ST11Pt6)	28	22	12	圓丸長方形	337.22			
Pt71(ST11Pt12)	22	20	4	円形	337.32			
ST11Pt13	50	32	23	楕円形	337.16		ST13のピットトシズカ	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST14 第32・52図	III B04	不明	2間(3.28)×1間(2.42)	1.48～1.96	2.4～2.42	7.9	長方形	N40° W
Pt11(SK152)	34	28	20	円形	337.52			
Pt21(SK154)	28	24	6	楕円形	337.56			
Pt31(SK148)	40	28	24	圓丸長方形	337.32			
Pt41(SK147)	28	26	4	圓丸方形	337.42			
Pt51(SK189)				円形？				
Pt61(SK149)	28	24	16	楕円形	337.46			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST15 第21・52図	I L20・25, I M16・21	不明	1間(1.60)×1間(4.56)	1.0以上～1.6	4.56	7.3以上	長方形	N8° W
Pt11(SK172)	36	28	4	楕円形	335.86			
Pt21(SK170)	34	26	14	楕円形	335.80			
Pt31(SK174)	28	28	4	圓丸方形	335.90	石器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST16 第12・53図	I M14・19	不明	1間(2.96)×1間(1.56)	2.96	1.56	4.6	長方形	N17° W
Pt1	22	20	15	円形	331.34			
Pt2	24	20	20	円形	331.16			
Pt3	20	20	17	円形	331.22	弥生土器		
Pt4	20	20	5	円形	331.44	弥生土器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST17 第13・53図	I N16・21	弥生中期 後半？	2間(4.1)×1間(3.4)	2.0～2.08	3.4	13.9	長方形	N15° W
Pt1	32	32	14	円形	330.02			
Pt2	32	30	24	円形	329.90	弥生土器		
Pt3	34	32	22	円形	329.93			
Pt4	32	28	30	円形	329.86	弥生土器		
Pt5	32	28	10	円形	330.05	弥生土器		
Pt6	42	38	16	不整圓方形	329.99			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST18 第13・53図	I N16	弥生中期 後半？	1間(2.44)以上～×	1.1～1.16	—	—	—	N3° W
Pt1	40	(24)	8	円形	330.02			
Pt2	42	36	20	円形	329.96	弥生土器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
ST19 第13・53図	I N21・22	弥生中期 後半？	2間(2.24)×1間(2.7)	1.1～1.28	2.4～2.86	6.0	長方形	N3° W
Pt1	20	20	12	円形	330.02			
Pt2	28	24	28	楕円形	329.78	弥生土器 炭化材	C14(124分析No.5)	
Pt3	24	20	16	円形	329.70			
Pt4	(22)	(18)	20	楕円形	329.86			
Pt5	24	20	24	円形	329.80			
Pt6	22	18	24	円形	329.86	炭化物	C14(124分析No.6)	

第3章 猪邑島遺跡の調査

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
ST22 第12・53図	I MI3・14	不明	2間(3.64)×1間(2.0)	1.7~2.0	1.8~2.0	7.3	長方形	N5° W
Pt1	12	12	10	円形	331.48			
Pt2	16	24	8	梢円形	331.36			
Pt3	22	18	20	梢円形	331.20	炭化物	C140124分析No7)	
Pt4	16	14	10	円形	331.56			
Pt6	14	12	2	梢円形	331.50			
Pt5	16	14	8	円形	331.48			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
ST23 第12・54図	I MI9・24	不明	2間(4.76)×1間(1.72)	2.04~2.7	1.56~1.8	8.2	長方形	N1° W
Pt1(SK232)	12	12	4	円形	331.54	炭化物		
Pt2(SK214)	12	12	4	円形	331.50			
Pt3(SK215)	15	14	6	不整円形	331.62			
Pt4(SK245)	12	10	8	不整円形	331.66			
Pt5(SK212)	12	12	4	円形	331.72			
Pt6(SK213)	16	16	8	円形	331.60			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
ST24 第16・54図	I SI6・17	弥生中期 後半?	3間(3.74)×1間(2.6)	1.0~1.4	2.6	9.7	長方形	N90° E
Pt8	20	18	12	円形	330.08			
Pt1	28	24	28	円形	329.86	弥生土器		
Pt2	28	28	48	円形	329.68	弥生土器 削片		
Pt3	26	24	40	円形	329.70	弥生土器		
Pt4	32	32	28	円形	329.80	弥生土器		
Pt5	30	28	30	円形	329.70	弥生土器 削片		
Pt6	28	24	36	円形	329.72	弥生土器		
Pt7	24	22	28	円形	329.82			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
ST25 第16・54図	I SI7	弥生中期 後半?	3間(4.02)×1間(2.64)	1.3~1.4	2.6~2.64	10.6	長方形	N88° E
Pt8	26	24	12	円形	330.08	弥生土器 削片		
Pt1	22	18	16	円形	330.02	弥生土器		
Pt2	24	20	8	円形	330.04	弥生土器		
Pt3	26	24	14	円形	329.96	弥生土器 炭化物	C140124分析No8)	
Pt4	24	24	16	円形	329.88	弥生土器 炭化物	C140124分析No9)	
Pt5	22	22	14	円形	329.92	弥生土器		
Pt6	22	20	12	円形	329.96	弥生土器		
Pt7	20	20	8	円形	330.04	弥生土器		

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
Pit番号	Pit長軸cm	Pit短軸cm	Pit深さcm	Pit平面形	Pit底面標高m	出土遺物	備考	
ST26 第26・55図	III C04	不明	4間(6.64)×1間(2.28)	1.2~1.92	2.28~2.4	15.1	長方形	N1° W
Pt1	40	36	16	梢円形	334.38	弥生土器		
Pt2	38	38	6	円形	334.18			
Pt3	48	40	6	梢円形	334.22			
Pt4	75	64	24	圓丸長方形	334.16	炭化物、縄文土器	C140125分析No3)	
Pt5	56	48	24	圓丸長方形	334.32	弥生土器、縄文土器		
Pt6(SK580)	86	60	32	梢円形	334.28	弥生土器		
Pt7(SK536)	52	48	46	不整圓丸方形	334.56	弥生土器		
Pt8	50	48	36	不整圓丸方形	334.46	弥生土器		
Pt9	52	48	20	不整圓丸方形	334.48	弥生土器		
Pt10	48	36	8	梢円形	334.46			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積m ²	遺構 平面形	長軸方位
ST27 第36・55図	III P25、雷G21、 III L01	不明	3間(5.68)×1間(2.56)	1.26～3.08	2.56	14.5	長方形	N55° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1(SK597)	36	32	18	圓丸方形	338.16			
Pt2(SK599)	34	34	6	円形	338.16			
Pt3(SK577)	44	44	(22)	不整円形	(337.92)			
Pt4(SK596)	40	32	24	椭円形	337.68			
Pt5(SK576)	48	36	18	椭円形	337.80	弥生土器		
Pt6(SK595)	58	42	36	椭円形	337.80	弥生土器		
Pt7(SK600)	32	32	10	圓丸方形	338.10	弥生土器		
Pt8(SK601)	38	32	8	圓丸長方形	338.18			

第8表 周溝跡・溝跡一覧

掲載図 No.	遺構名	位置	形状	長軸m	短軸m	幅cm	深さcm	埋土 堆積 量	長軸 方位	時期	重複関係	出土遺物	備考
第17・56図	SD01	I S23 I X03	円形	<5.84>	5.6	52	33	4層	25.7	N74° W	弥生中期後半	柵文土器、弥生土器、石器、灰陶片	
第17・56図	SD02	I S02-03 I X01	馬蹄形	<5.12>	<4.0>	32	38	5層	17.1	N22° E	弥生中期後半	柵文土器、石器	
第17・57図	SD03	I S17-22	馬蹄形	<6.96>	<6.96>	75	55	5層	38.9	N26° E	弥生中期後半	柵文土器、石器、灰陶片	C14(H24分析No12) 陶器、花鉢(124分析No2, 3)
第13・57図	SD05	I R10- I A-15	馬蹄形	2.08	(0.56)	16	8	1層	—	N6° W	不明	懸穴性居跡の可能性が大きい。 弥生中期後半の可能性	なし

* 長軸、短軸は内径値。<>は推定値 () は現存値

掲載図 No.	遺構名	位置	長さ m	幅 cm	深さ cm	埋土の 堆積	流路の 方向	時期	重複関係	出土遺物	備考
第18・58図	SD04	I S20-25、I X05	15.8	76	34	4層	南北	近世以降	なし	弥生土器 平安時代土器	

第9表 櫛跡一覧

掲載図 No.	遺構名	位置	柱間寸法 北側×南側cm	Pitの規模 長軸×短軸×深さcm	長軸 方位	時期	重複関係	出土遺物	備考
第19・58図	SA01	I X12-17	132×132	Pt2:32×30×6 Pt3:28×26×34 Pt4:20×18×8	N13° W	弥生中期後半	なし	なし	
第19・58図	SA02	I X07	144×152	Pt1:40×28×28 Pt2:28×24×14 Pt3:32×26×20	N9° W	弥生中期後半	なし	炭化物	C14(H24分析No14)

第10表 遺物集中一覧

掲載図 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	面積m ²	時期	重複関係	出土遺物	備考
第35・58図	SQ01	III P18-23	328	288	36	7.3	弥生中期後半	重複(SK573+575+583+586古)	弥生土器、石器	C14(H26分析No1)

第11表 燃土跡一覧

掲載図 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	重複関係	出土遺物	備考
第19・62図	SF01	I X07	84	42	12	平安	なし	弥生土器	
第16・62図	SF02	I S22	39	30	15	平安	なし	なし	
第16・62図	SF03	I S22	144	76	12	平安	なし	平安時代土器、炭化物	C14(H24分析No10、11)
第16・62図	SF04	I S16	68	44	10	平安	なし	なし	

第12表 不明遺構一覧

掲載図 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	重複関係	出土遺物	備考
第30・63図	SX01	I V20	360	324	68	不明			
第30・63図	SX02	I V20- I W11-16	392	344	48	不明	重複 (SK31+SK40+SK41新)	弥生土器	
第30・63図	SX03	I V25	248	224	55	不明			
第32・63図	SX04	I V25	176	132	38	不明			
第32・63図	SX05	III B04	188	184	47	不明	重複(ST11新)		
第27・63図	SX06	I V12	312	296	—	不明			
第31・63図	SX07	I V23	232	218	8	不明			
第12・63図	SX08	I M13	472	388	92	不明	重複 (SK193+SK194+195+230+197新)	平安時代土器	

第13表 土坑一覧

因数No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	底面標高m	出土遺物	備考欄
第3096	SK001 不明	I V25	不整形	圓状	35.0	30.0	14.0	—	336.88	重複(ST01P(9古))	
第2856	SK002 不明	I V25	不整形	ナリ林状	30.0	20.0	6.0	—	337.14		
第3096	SK003 不明	I V24	不整形	圓状	46.0	38.0	17.0	—	337.12		
第2856	SK004 不明	I V13	不明	ナリ林状	42.0以上	36.0以上	10.0	—	337.21	本網に何回に亘る土坑群の延長上にあらゆる滑稽性。	
第2856	SK005 不明	I V20	椭円形	圓状	58.0	30.0	12.0	—	336.90	弥生土器	
第2856	SK006 不明	I V24	楕丸長方形	圓状	42.0	36.0	14.0	—	337.34		
第2856	SK007 不明	I V24	不整椭丸長方形	圓状	74.0	22.0	6.0	—	337.49		
第2856	SK008 不明	I V24	不整椭円形	圓状	28.0	18.0	8.0	—	337.46		
第2856	SK009 不明	I V19	不整椭円形	圓状	50.0	40.0	10.0	—	337.42		
第2856	SK010 不明	I V20	椭円形	ナリ林状	44.0	23.0以上	8.0	—	337.12		
第2856	SK011 不明	I V19	不整形	圓状	38.0	33.0	10.0	—	337.40		
第2856	SK012 不明	I V19	不整形	圓状	14.0	14.0	—	—	—	柱穴狀	
第2856	SK013 不明	I V24	不整形	ナリ林状	50.0	42.0	18.0	—	337.44	穴狀	
第2856	SK014 不明	I V24	不整形	圓状	44.0	28.0	12.0	—	337.43	穴狀	
第2856	SK015 不明	I V18	不整椭円形	ナリ林状	40.0	30.0	11.0	—	337.45	柱穴狀	
第2856	SK016 不明	I V18	椭円形	圓状	26.0	18.0	6.0	—	337.62		
第2718	SK017 不明	I V18	円形	お椀状	24.0	22.0	9.0	—	337.65		
第2718	SK018 不明	I V18	不整椭丸形	不整形	26.0	25.0	11.0	—	337.52		
第2856	SK019 不明	I V20	椭円形	圓状	28.0	19.0	5.0	—	337.22	弥生土器	
第2856	SK020 不明	I V20	円形	圓状	20.0	20.0	8.0	—	337.22	弥生中期後半の可能性	
第2856	SK021 不明	I V20	椭円形	圓状	42.0	24.0	10.0	—	337.92		
第2856	SK022 不明	I V19	椭円形	圓状	20.0	19.0	6.0	—	337.16		
第2856	SK023 不明	I V20	不整形	圓状	28.0	11.0	18.5以上	7.0	337.16	重複(SK24断)(穴16断)	
第2856	SK024 不明	I V20	椭円形	圓状	76.0	36.0	6.0	—	337.12	重複(SK33古)(穴16新古不明)	
第2856	SK025 不明	I V20	不整椭丸形	ナリ林状	18.0	18.0	4.0	—	337.18	弥生土器	
第2856	SK026 不明	I V20	椭円形	圓状	38.0	28.0	7.0	—	337.17	弥生土器	
第2856	SK027 不明	I V20	椭円形	圓状	26.0	23.0	4.0	—	337.08	弥生中期後半の可能性	
第2856	SK028 不明	I V09	楕丸形	圓状	34.0	32.0	12.0	—	337.19		
第2856	SK029 不明	I V20	円形	圓状	24.0	24.0	10.0	—	336.37		
第2856	SK030 不明	I V15	椭円形	圓状	35.0	25.0	8.0	—	337.05		
第3096	SK031 不明	I V20	椭円形	ナリ林状	22.0±1.1	22.0	15.0	—	336.65	重複(SX02古)	
第3096	SK032 不明	I V20	円形	圓状	32.0	30.0	6.0	—	336.70	重複(ST04P(5断))	
第3096	SK033 不明	I V20	不明	ナリ林状	40.0	30.0以上	22.0	—	336.58	重複(ST04P(4断))	
第2856	SK034 不明	I V20	椭円形	不整形	33.0	28.0	12.0	—	337.10		
第2718	SK035 不明	I V16	不明	お椀状	46.0±1.1	16.0±1.1	23.0	—	337.49		
第2718	SK036 不明	I V17	椭円形	圓状?	32.0±1.0	16.0	8.0	—	337.47		
第2718	SK037 不明	I V17	不整椭円形	圓状	30.0	18.0	8.0	—	337.48		
第2718	SK038 不明	I V17	不整形	不整形	95.0?	54.0	10.0	—	337.60	重複(SK39古)	
第2718	SK039 不明	I V17	不整形	不整形	65.0±1.1	53.0	19.0	—	337.51	重複(SK38新)	
第3095	SK040 不明	I W16	円形	ナリ林状	20.0	20.0	10.0	—	336.64	重複(SX02古)	
第3095	SK041 不明	I W16	楕丸形	圓状	30.0	16.0	7.0	—	336.94	重複(SX02古)	
第2906	SK042 不明	I V20	椭円形	圓状	22.0±1.1	28.0	7.0	—	336.75		
第2906	SK043 不明	I V20	椭円形	圓状	30.0	20.0	7.0	—	336.74		
第2906	SK044 不明	I V20	円形	圓状	21.0	21.0	14.0	—	336.78		
第2856	SK045 不明	I V20	不整形	圓状	56.0	30.0	23.0	—	336.95		
第2856	SK046 不明	I V19	不整形	圓状	44.0	34.0	8.0	—	337.33		
第2856	SK047 不明	I V19	不整形	圓状?	42.0	36.0	8.0	—	337.32		
第2856	SK048 不明	I V19	不整形	ナリ林状	52.0	32.0	17.0	—	337.30		
第2856	SK049 不明	I V19	不整椭円形	ナリ林状?	64.0	46.0	20.0	—	337.24		
第2856	SK050 不明	I V19	不整形	ナリ林状?	32.0	24.0	16.0	—	337.26		
第2718	SK051 不明	I V18	椭円形	不整形	28.0	24.0	7.0	—	337.45		
第2856	SK052 不明	I V19	円形	お椀状	23.0	22.0	10.0	—	337.39		
第2856	SK053 不明	I V13	不整形	不整形	30.0	18.0	13.0	—	337.37	重複(ST06P(1新))	
第2856	SK054 不明	I V13	不明	ナリ林状?	44.0±1.1	44.0	12.0	—	337.30		
第2856	SK055 不明	I V19	不整椭円形	不整形	38.0	28.0	14.0	—	337.45		
第2856	SK056 不明	I V19	椭円形	圓状	22.0	14.0	4.0	—	337.54		
第2856	SK057 不明	I V14	楕丸形	圓状	23.0	23.0	6.0	—	337.39		
第2856	SK058 不明	I V14	不整形	ナリ林状	53.0	36.0	14.0	—	337.16		
第2856	SK059 不明	I V14	椭円形	お椀状	26.0	21.0	11.0	—	337.33		
第2856	SK060 不明	I V14	不整椭丸形	お椀状	28.0	20.0	12.0	—	337.38		
第2856	SK061 不明	I V19	不整形	お椀状?	32.0±1.1	16.0	4.0	—	337.30		
第2856	SK062 不明	I V19	椭円形	圓状	36.0	28.0	6.0	—	337.43		
第2856	SK063 不明	I V19	不整椭円形	圓状	42.0	36.0	10.0	—	337.33		
第2906	SK064 不明	I W06	椭円形	ナリ林状	26.0	18.0	11.0	—	336.46	弥生土器	
第2906	SK065 不明	I V10	不整形	不整形	74.0	42.0	18.0	—	336.64	弥生土器	
第2906	SK066 不明	I V10	不整形	不明	34.0	24.0	—	—	—	弥生中期後半の可能性	
第2906	SK067 不明	I V10+	W06-	不整形	63.0	58.0	—	—	—	弥生土器	
第2906	SK068 不明	I V10	不整形	ナリ林状?	60.0	58.0	(30.0)	—	336.78	重複(SK066新古不明)	
第29~60回	SK069 不明	I V10	不整形	ナリ林状	26.0	26.0	7.0	—	336.73	弥生土器、鉄片	
第2856	SK070 不明	I V15	椭円形	圓状	36.0	27.0	8.0	—	337.12		
第2856	SK071 不明	I V15	椭円形	圓状	40.0	26.0	8.0	—	337.22		
第2856	SK072 不明	I M08	椭円形	ナリ林状	32.0	27.0	29.0	—	331.72		
第2906	SK073 不明	I W11	不整形	不明	32.0	—	10.0	—	336.68		
第2856	SK074 不明	I V14	不整形	ナリ林状	36.0	26.0	14.0	—	337.18		
第2856	SK075 不明	I V14	円形	お椀状	20.0	20.0	8.0	—	337.26		
第2856	SK076 不明	I V15	椭円形	圓状	32.0	20.0	5.0	—	337.18		
第2856	SK077 不明	I V14+	椭円形?	お椀状	30.0	20.0±1.1	10.0	—	337.19		
第2856	SK078 不明	I V15	椭円形	ナリ林状	36.0	28.0	9.0	—	337.22		
第2856	SK079 不明	I V14	椭円形	お椀状	28.0	20.0	10.0	—	337.22		
第2856	SK080 不明	I V14	楕丸形	ナリ林状	22.0	22.0	9.0	—	337.28		
第2906	SK081 不明	I V10	不整形	不整形	28.0	24.0	12.0	—	336.62		

遺跡No.	遺槽	時期	グリット	平面形状	断面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	底面標高m	出土遺物	備考欄
第2858	SK082 不明		I V15	円形	すり鉢状	15.0	14.0	5.0	337.04		
第2858	SK082 不明		I V15	円形	お椀状	20.0	18.0	10.0	337.06		
第2858	SK084 不明		I V15	不規格円形	不整形	56.0	56.0	20.0	337.01		
第2858	SK085 不明		I V15	円形?	楕円状	20.0	18.0	4.0	337.03		
第2858	SK086 不明		I V15	円形	楕円状	16.0	14.0	4.0	337.10		
第2858	SK087 不明		I V10	橢円形	楕円状	39.0	23.0	8.0	336.74		
第2858	SK088 不明		I V14	円形	楕円状?	22.0	22.0	5.0	337.32		
第2858	SK089 不明		I V14	橢円形	楕円状	30.0	22.0	6.0	337.34		
第2858	SK090 不明		I V10	不規格円形	不整形	62.0	52.0	26.0	336.74		
第2858	SK091 不明		I V13	不規格丸方型	タブ付	30.0	28.0	13.0	337.34		
第2858	SK092 不明		I V13	円向??	楕円状	26.0	24.0	6.0	337.36		
第2716	SK093 不明		I V13	不規格	不整形	56.0	46.0	12.0	337.08		
第2716	SK094 不明		I V13	不規格円形	楕円状	54.0	52.0	10.0	337.10		
第2716	SK095 不明		I V12	不明	すり鉢状	62.6±1.1	56.0±1.1	12.0	337.06	重複(SK164古)	
第2716	SK096 不明		I V07+	橢円形	タブ付	52.0	44.0	12.0	337.04		
第2858	SK097 不明		I V15	橢円形	すり鉢状	36.0	30.0	9.0	337.20		
第2858	SK098 不明		I V15	不規格円形	楕円状	30.0	26.0	4.0	337.24		
第2858	SK099 不明		I V14+	円形?	不明	26.0	22.0±1.1	36.0	337.00		
第2858	SK100 不明		I V14	調丸形?	すり鉢状	30.0	28.0±1.1	8.0	337.34	本跡には、地山の直徑1m前後の範囲内にあり、縦に削いた時の跡みの可能性がある。	
第2858	SK101 不明		I V09+	調丸形?	すり鉢状?	38.0	38.0	18.0	336.78		
第2858	SK102 不明		I V15	不規形	楕円状	50.0	38.0	9.0	337.11		
第2858	SK103 不明		I V15	橢円形	すり鉢状	74.0	50.0	5.0	337.19		
第2716	SK104 不明		I V07	橢円形	不明	36.0	32.0	12.0	336.95		
第2858	SK105 不明		I V20	不規格円形	楕円状	32.0	28.0	4.0	337.06		
第2858	SK106 不明		I V14	調丸方型	お椀状	48.0	32.0	16.0	337.18		
第2858-6052	SK107 不明		I V19	不規形	不整形	168.0	160.0	42.0	337.06	発生中期後半の可能性	
第2858	SK108 不明		I V10	円筒状	22.0	22.0	14.0	337.01			
第2858	SK109 不明		I V14	円形	お椀状	18.0	18.0	10.0	337.20		
第2858	SK110 不明		I V14	橢円形	楕円状	26.0	20.0	12.0	337.18		
第2858	SK111 不明		I V14	橢円形	すり鉢状	23.0	20.0	6.0	337.18		
第2858	SK112 不明		I V20	橢円形	お椀状	22.0	14.0	6.0	337.18		
第2858	SK113 不明		I V19	橢円形	不整形	42.0	29.0	8.0	337.34		
第2858	SK114 不明		I V19	不規格丸方型	タブ付	32.0	26.0	10.0	337.28		
第2858	SK115 不明		I V20	不規形	お椀状?	21.0	16.0±1.1	8.0	337.02	重複(SK16古)(六45跡)	
第2858	SK116 不明		I V20	円形?	すり鉢状	16.0	14.0±1.1	7.0	337.03	重複(SK15新)	
第2858	SK117 不明		I V15	橢円形	すり鉢状	20.0	14.0	13.0	337.10		
第2858	SK118 不明		I V09	調丸形?	お椀状	18.0	17.0	6.0	337.11		
第2858	SK119 不明		I V14	調丸形?	楕円状	23.0	22.0	6.0	337.18		
第2858	SK120 不明		I W06	不規格円形	お椀状?	18.0	16.0	6.0	336.38		
第2858	SK121 不明		I V15	調丸形?	すり鉢状	23.0	22.0	10.0	337.10		
第2858	SK122 不明		I V14+	不規格丸方型	すり鉢状	36.0	36.0	14.0	337.12		
第2858	SK123 不明		I V15	不規形	すり鉢状	38.0	22.0	10.0	337.16		
第2858	SK124 不明		I V14	橢円形	不整形	36.0	30.0	13.0	337.12		
第2998	SK125 不明		I W06	不規格円形?	不整形	55.0	23.0	18.0	336.46		
第2998	SK126 不明		I W06	橢円形	不整形	38.0	30.0	28.0	336.48		
第2998	SK127 不明		I W06	不規格円形?	すり鉢状	53.0	38.0	17.0	336.55		
第2998	SK128 不明		I V10	円向?	不整形	44.0	44.0	10.0	336.68		
第2998	SK129 不明		I V15	円形	すり鉢状	20.0	18.0	10.0	337.12		
第2998	SK130 不明		I V15	橢円形	楕円状	28.0	22.0	4.0	337.08		
第2998	SK131 不明		I W06	不規格丸方型	不整形	32.0	24.0	25.0	336.44		
第2998	SK132 不明		I W06	不規格丸方型	楕円状	28.0	24.0	6.0	336.64		
第2998	SK133 不明		I W06	不規格丸方型	すり鉢状	23.0	22.0	24.0	336.36		
第2998	SK134 不明		I W06	不規格丸方型	タブ付?	26.0	24.0	10.0	336.38		
第2998	SK135 不明		I W06	不規格丸方型	不整形?	22.0	16.0	10.0	336.46		
第2998	SK136 不明		I V10	不規格円形	すり鉢状	29.0	24.0	8.0	336.84		
第2998	SK137 不明		I V15	橢円形	タブ付?	53.0	46.0	17.0	336.49		
第2858	SK138 不明		I V13+	調丸長形	楕円状	245.0	120.0	30.0	336.98	発生中期後半の可能性	
第2858	SK139 不明		I V14	調丸長形	楕円状	245.0	120.0	30.0	336.98	発生中期後半の可能性	
第32国	SK139 不明		III B05	橢円形	円筒状?	43.0	30.0	27.0	336.94	共生土器	重複(SK140古)
第32国	SK140 不明		III B05	不規格円形?	不明	25.0	21.0	11.0	337.08		共生中期後半の可能性
第32国	SK141 不明		III B05	橢円形	楕円状	46.0	30.0	11.0	337.08		重複(SK139新)
第32国	SK142 不明		III B05	不規格円形?	お椀状	30.0	28.0	13.0	337.01		ST13P93-3+する
第32国	SK143 不明		III B05	調丸方型	お椀状	24.0	24.0	8.0	337.10		ST13P93-4+する
第32国	SK144 不明		III B05	不規格円形?	不整形	28.0	22.0	11.0	337.10		
第32国	SK145 不明		III B05	橢円形	楕円状	30.0	16.0	6.0	337.34		
第32国	SK146 不明		III B04	円形	すり鉢状	24.0	24.0	10.0	337.32		重複(SK151新)
第32国	SK147 不明		III B04	調丸形?	楕円状	28.0	26.0	8.0	337.41		ST14P94-3+する
第32国	SK148 不明		III B04	調丸長形	タブ付?	40.0	28.0	24.0	337.32		ST14P94-3+する
第32国	SK149 不明		III B04	橢円形	円筒状	28.0	24.0	14.0	337.46		ST14P94-6+する
第32国	SK150 不明		III B04	円形	お椀状	24.0	24.0	12.0	337.56		
第32国	SK151 不明		III B04	円形	すり鉢状?	29.0	27.0	20.0	337.22		重複(SK146古)
第32国	SK152 不明		III B04	橢円形	円筒状	34.0	28.0	22.0	337.59		ST14P94-7+する
第32国	SK153 不明		III B04	不規格円形?	不整形	46.0	34.0	30.0	337.49		
第32国	SK154 不明		III B04	橢円形	お椀状?	28.0	24.0	8.0	337.54		ST14P94-3+する
第32国	SK155 不明		III B03	橢円形	楕円状	34.0	27.0	5.0	337.49		
第32国	SK156 不明		III B03	橢円形	お椀状	30.0	26.0	16.0	337.68		
第32国	SK157 不明		III B03	橢円形	不整形	38.0	26.0	10.0	337.02		
第32国	SK158 不明		III B03	橢円形	タブ付?	50.0	44.0	28.0	337.90		
第32国	SK159 不明		III B03	橢円形	楕円状	34.0	27.0	5.0	337.01		
第32国	SK160 不明		III B03	橢円形	円筒状?	44.0	34.0	27.0	337.64		
第32国	SK161 不明		I V23	橢円形	不整形	32.0	25.0	12.0	337.80		
第32国	SK162 不明		I V23	橢円形	不整形	36.0	28.0	24.0	337.68		

因式No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	底面形状	出土遺物	備考欄
第318回 SK163 不明	J V23	円形		タライ状		22.0	20.0	12.0	331.76		
第27回 SK164 不明	J V87-		V88-	不整形		676.02上	28.0	49.0	336.85		自然の落ち込みの可能性が高い 重複(SK095新)
第28回 SK165 不明	J V14	満丸長方形		タライ状		40.0	37.0	12.0	337.16		
第28回 SK166 不明	J V14	楕円形		すり林状		52.0	38.0	12.0	337.08		
第29回 SK167 不明	J V10	不整形圓孔方型		お椀状?		35.0	34.0	12.0	336.80		柱穴状
第29回 SK168 不明	J W06	円形		すり林状?		18.0	16.0	8.0	336.66		柱穴状
第29回 SK169 不明	J W06	円形		タライ状?		50.0	50.0	22.0	336.50		
第21回 SK170 不明	J M16	椭円形		お椀状		36.0	24.0	16.0	335.80		S115P93-する
第21回 SK171 不明	J M21	満丸方型		頭状?		42.0	41.0	8.0	335.94		
第21回 SK172 不明	J M16	満丸方型		頭状		32.0	30.0	6.0	335.86		S115P117-する
第21回 SK173 不明	J R91	椭円形		頭状		28.0	18.0	3.0	335.90		
第21回 SK174 不明	I L25	不整形圓孔方型		頭状		30.0	28.0	6.0	335.90	鐵石	S115P93-する 古墳時代の可能性
第21回 SK175 不明	I R06	満丸長方形		不整形		34.0	30.0	5.0	335.97		S107O76-する
第21+60回 SK176 不明	I R01	不整形圓孔		すり林状		37.0	30.0	10.0	335.78	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第21回 SK177 不明	I R01	椭円形		不整形		52.0	38.0	8.0	335.91		S107O76-する
第21回 SK178 不明	I R06	不整形圓孔		頭状		34.0	34.0	7.0	337.01		S107O76-する
第21回 SK179 不明	I R06	椭円形		不整形		28.0	24.0	7.0	336.09		
第21+60回 SK180 不明	I R05	不整形		不整形		60.0	56.0	12.0	335.90	弥生土器	S107O76-する 弥生中期後半の可能性
第22回 SK181 不明	I R06	不整形		頭状		33.0	30.0	13.0	336.05		
第22回 SK182 不明	I R06	円形		頭状		22.0	22.0	6.0	336.04		柱穴やS112+する
第22回 SK183 不明	I R11	椭円形		すり林状		46.0	32.0	12.0	335.98		柱穴やS112+する
第22回 SK184 不明	I R11	不整形		すり林状		34.0	28.0	4.0	336.03	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第28回 SK185 不明	J V14	長機円形		タライ状		554.02上	74.0	30.0	337.00		
第28回 SK186 不明	J V24	不整形		不整形		98.0	50.0	33.0	337.08		重複(S116古)
第22+59回 SK187 不明	I R16	不整形		タライ状		134.0	125.0	24.0	335.78	圓文土器	圓文中期前半の可能性
第29回 SK188 不明	J W11	円形		頭状?		44.0	44.0	10.0	336.70		
第32回 SK189 不明	J H04	円形?		—		—	—	—	—		S114P93-する
第12回 SK190 不明	I M13	円形		円筒状		24.0	23.0	22.0	331.78		
第22+61回 SK191 不明	I R11+I R12	満丸長方形		タライ状		290.0	100.0	56.0	335.55		H23+24調査古墳時代中期の可能性
第12回 SK192 不明	J M13	円形		お椀状		20.0	19.0	10.0	331.84		
第12回 SK193 不明	J M13	円形		お椀状		22.0	20.0	9.0	331.59		重複(SN08古)
第12回 SK194 不明	J M13	不整形圓孔		頭状		28.0	26.0	8.0	331.59		重複(SN08古)
第12回 SK195 不明	J M13	満丸方型?		すり林状?		40.0	32.0	11.0	331.54		重複(SK20, SN08古)
第29+59回 SK196 不明	J W06+	不整形		不整形		300.0	143.0	58.0	335.70	圓文土器	圓文後期前半の可能性
	J W11+										
	J W12+										
第25回 SK197 不明	J M13	椭円形		お椀状		30.0	29.0	14.0	331.64		重複(SN08古)
第25回 SK198 不明	J M14	円形		頭状		20.0	20.0	35.0	331.29		
第25回 SK199 不明	J M13	椭円形		円筒状		18.0	24.0	18.0	331.34	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第25回 SK200 不明	J M14	不整形圓孔		すり林状		36.0	24.0	13.0	331.36	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第25回 SK201 不明	J M14	椭円形		頭状		30.0	22.0	4.0	331.44		
第25回 SK202 不明	J M13	不整形圓孔		すり林状		40.0	36.0	26.0	331.68		
第25回 SK203 不明	J M18	不整形圓孔		円筒状?		21.0	12.0	20.0	330.68		
第25回 SK209 不明	J M23	不整形圓孔		すり林状		19.0	14.0	8.0	331.82		
第12+62回 SK205 不明	J M24	椭円形		頭状		62.0	48.0	14.0	331.64		平安時代後半(C140424分析No.15) 器、限文化
第12回 SK209 不明	J M20	不整形		不整形		24.0	18.0	15.0	332.40		平安時代(C140424分析No.15)
第12回 SK207 不明	J M19	不整形圓孔		お椀状		16.0	16.0	8.0	332.45		
第12回 SK208 不明	J M14	不整形圓孔		タライ状		18.0	16.0	8.0	331.38		
第12回 SK209 不明	J M18	椭円形		お椀状		16.0	12.0	9.0	331.45		
第12回 SK210 不明	J M14	不整形圓孔		すり林状		14.0	14.0	6.0	331.49		
第12回 SK211 不明	J M19	椭円形		頭状		20.0	16.0	7.0	331.47		
第12回 SK212 不明	J M24	円形		お椀状		12.0	12.0	6.0	331.52		S723P93-する
第12回 SK213 不明	J M24	円形		頭状		16.0	16.0	4.0	331.73		S723P93-する
第12回 SK214 不明	J M19	円形		頭状		12.0	12.0	5.0	332.49		S723P93-する
第12回 SK215 不明	J M24	不整形圓孔		円筒状		14.0	14.0	6.0	331.60		S723P93-する
第12回 SK216 不明	J M19	不整形圓孔方型		頭状		16.0	15.0	6.0	332.46		
第13回 SK217 不明	J N16	円形		お椀状		18.0	16.0	10.0	330.08		
第13回 SK218 不明	J N16	不整形圓孔		頭状		32.0	30.0	3.0	330.12		
第13回 SK219 不明	J N16	円形		お椀状		16.0	16.0	11.0	330.08		
第13回 SK220 不明	J N16	不整形圓孔		すり林状		32.0	28.0	19.0	329.95		
第13回 SK221 不明	J N16	円形		頭状		16.0	15.0	3.0	330.10		
第13回 SK222 不明	J N16	不整形圓孔		すり林状		24.0	22.0	15.0	330.04		
第13回 SK223 不明	J N16	不整形圓孔		円筒状		18.0	16.0	14.0	330.04		
第13回 SK224 不明	J N16	椭円形		頭状		16.0	14.0	2.0	330.14		
第13回 SK225 不明	J N22	椭円形		頭状		24.0	20.0	4.0	330.06		
第13回 SK226 不明	J N22	円形?		お椀状		22.0	21.0	8.0	330.00		
第13回 SK227 不明	J N22	満丸方型		頭状		30.0	30.0	6.0	330.04		
第13回 SK228 不明	J N03	椭円形		頭状		16.0	13.0	4.0	329.43		重複(SK01古)
第13回 SK229 不明	J N16	椭円形		頭状		24.0	20.0	13.0	330.03		
第13回 SK230 不明	J M13	椭円形?		不整形		30.0	30.0	4.0	330.58		重複(SK195古)
第13回 SK231 不明	J N16	椭円形		円筒状		19.0	18.0	24.0	329.97		重複(SK01古不明)
第13回 SK232 不明	J M19	円形		タライ状		12.0	12.0	4.0	331.54		化物質
第13回 SK233 不明	J N16	不整形圓孔		円筒状		20.0	18.0	18.0	329.92		弥生中期後半
第13回 SK234 不明	J N16	不整形圓孔		円筒状		20.0	17.0	24.0	329.89	土器	

区分No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸cm	短軸cm	深さcm	出土遺物	備考欄
第16区 SK235 不明	I N16	楕円形	円筒状	21.0	18.0	20.0	329.86	縄文土器	縄文前期前半の可能性	
第16区 SK236 不明	I N16	不整円形	円筒状	18.0	17.0	20.0	329.86	縄文土器	縄文前期前半の可能性	
第16-17区 SK237 不明	I X02	円形	楕状	50.0	46.0	12.0	330.40	弥生土器、 鉛物	C140124分析No.16	
第16-17区 SK238 不明	I S22	不整円形	不整形	32.0	31.0	17.0	330.27	弥生土器	平安時代以降の可能性	
第16-17区 SK239 不明	I N02	円形	お椀状	22.0	22.0	10.0	330.30	平安土器	平安時代の可能性	
第16-17区 SK240 不明	I X02	円形	お椀状	18.0	22.0	13.0	330.20	縄文土器、 弥生土器	平安時代以降の可能性	
第16-17 -62区 SK241 不明	I X02	不整楕丸長方形	楕状	(190.0)	68.0	16.0	330.19	縄文土器、 弥生土器	平安時代の可能性	
第19区 SK242 不明	I X02	楕円形	お椀状	23.0	20.0	7.0	330.60		平安時代以降の可能性	
第19区 SK243 不明	I X02	楕円形	タライ状	28.0	20.0	14.0	330.55		平安時代以降の可能性	
第19区 SK244 不明	I X02	楕円形	お椀状	27.0	20.0	17.0	330.31		平安時代以降の可能性	
第19区 SK245 不明	I X02	楕円形	お椀状	24.0	20.0	16.0	330.73		S12年8月15日	
第19区 SK246 不明	I M24	円形	お椀状	13.0	12.0	4.0	331.76			
第19区 SK247 不明	I M14	不整椭圓形	お椀状	21.0	18.0	11.0	331.49			
第19区 SK248 不明	I M14	円形	お椀状	20.0	18.0	7.0	331.41			
第16-17区 SK249 不明	I S22	楕円形	お椀状	28.0	24.0	12.0	329.86	削片	重複(SD03新古不明) 弥生中期後半の可能性 往復・花粉(164分析No.1)	
第19区 SK250 不明	I N21	不整形	すり林檎状	20.0	16.0	8.0	330.00			
第19区 SK251 不明	I N06	不整円形	円筒状	31.0	25.0	28.0	330.74	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第20区 SK252 不明	I X16	円形	お椀状	18.0	16.0	10.0	331.06			
第20区 SK253 不明	I X16	不整楕丸長方形	円筒状	20.0	19.0	20.0	331.08	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第20区 SK254 不明	I X16	円形	円筒状	16.0	16.0	16.0	331.14			
第20区 SK255 不明	I X16	円形	お椀状	14.0	14.0	6.0	331.20			
第20区 SK256 不明	I X16	不整楕丸長方形	円筒状	32.0	15.0	35.0	331.01	縄文土器、 弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第19区 SK257 不明	I X16	楕円形	円筒状	20.0	16.0	26.0	331.00	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第19区 SK258 不明	I X16	円形	円筒状	14.0	12.0	8.0	331.20			
第19区 SK259 不明	I X16	楕円形	すり林檎状	27.0	21.0	13.0	331.12			
第19区 SK260 不明	I X11	円形	すり林檎状	20.0	20.0	13.0	331.20	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第19区 SK261 不明	I X11	円形	お椀状	14.0	14.0	12.0	331.20			
第19区 SK262 不明	I X06*	楕円形	円筒状	22.0	16.0	28.0	331.10			
第19区 SK263 不明	I X06	不整椭圓形	お椀状	17.0	12.0	8.0	331.30			
第19区 SK264 不明	I X06	円形	お椀状	18.0	18.0	6.0	331.30			
第19区 SK265 不明	I X06	円形	不整形	16.0	15.0	6.0	331.27			
第19区 SK266 不明	I X06	円形	円筒状	8.0	8.0	10.0	331.22			
第19区 SK267 不明	I X06	椭圓形	円筒状	20.0	16.0	17.0	331.16			
第19区 SK268 不明	I X06	円形	お椀状	16.0	14.0	10.0	331.26			
第19区 SK269 不明	I X06	円形	お椀状	20.0	18.0	12.0	331.22	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第19区 SK270 不明	I X06	不整円形	すり林檎状	19.0	18.0	9.0	331.25			
第19区 SK271 不明	I X06	円形	不整形	20.0	18.0	10.0	331.28			
第19区 SK272 不明	I X17	円形	お椀状	16.0	15.0	5.0	330.87			
第19区 SK273 不明	I X16*	楕円形	タライ状	65.0	57.0	37.0	330.73			
第19区 SK274 不明	I X11	円形	円筒状	12.0	12.0	10.0	330.98			
第19区 SK275 不明	I X11	不整椭圓形	お椀状	16.0	14.0	8.0	330.95			
第19区 SK276 不明	I X11	椭圓形	タライ状	24.0	18.0	14.0	330.90			
第19区 SK277 不明	I X11	円形	すり林檎状	18.0	18.0	16.0	331.18			
第19区 SK278 不明	I X11	円形	お椀状	16.0	16.0	7.0	331.27			
第19区 SK279 不明	I X11	円形	円筒状	18.0	17.0	15.0	331.05			
第19区 SK280 不明	I X06*	椭圓形	すり林檎状	22.0	14.0	13.0	331.03			
第19区 SK281 不明	I X11	円形	お椀状	13.0	12.0	8.0	330.82			
第19区 SK282 不明	I X17	不整椭圓形長方形	お椀状	20.0	17.0	12.0	330.87			
第19区 SK283 不明	I X17	椭圓形	お椀状	21.0	16.0	6.0	330.06			
第19区 SK284 不明	I X17	椭圓形	すり林檎状	16.0	14.0	330.0	329.99			
第19-59区 SK285 不明	I X17	円形	深さのあるタライ状	34.0	32.0	25.0	329.78	縄文土器	縄文前期前半の可能性	
第19区 SK286 不明	I X12	円形	円筒状	23.0	22.0	17.0	329.96			
第19区 SK287 不明	I X12	円形	不整形	19.0	18.0	7.0	330.09			
第19区 SK288 不明	I X12	椭圓形	円筒状	24.0	22.0	36.0	330.07			
第19-60区 SK289 不明	I X07	不整椭圓形	円筒状	34.0	29.0	23.0	330.11	弥生土器、 縄文	弥生中期後半の可能性	
第19区 SK290 不明	I X07	椭圓形	お椀状	19.0	17.0	10.0	330.21			
第19-59区 SK291 不明	I X12	椭圓形	深さのあるタライ状	100.0	58.0	55.0	331.03	化物	C140124分析No.17	
第16区 SK292 不明	I X06	椭圓形	円筒状	25.0	22.0	40.0	330.66			
第19-59区 SK293 不明	I X12	不整椭圓形	楕状	52.0	45.0	16.0	329.67	縄文土器	縄文前期前半の可能性	
第16区 SK294 不明	I X01	円形	円筒状	20.0	18.0	20.0	330.88	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第16区 SK295 不明	I X07	円形	すり林檎状	30.0	30.0	16.0	329.80			
第16区 SK296 不明	I X01	円形	円筒状	18.0	16.0	20.0	330.76	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第16区 SK297 不明	I X08	円形	お椀状	21.0	20.0	8.0	329.42			
第16区 SK298 不明	I X08	円形	楕状	20.0	18.0	5.0	329.47			
第20区 SK299 不明	I X17	円形	円筒状	12.0	10.0	34.0	330.22			
第19区 SK300 不明	I X17	円形	タライ状	26.0	26.0	22.0	329.61			
第16区 SK301 不明	I X01	椭圓形	不整形	18.0	15.0	6.0	330.90			
第16区 SK302 不明	I S16	不整椭圓形	不整形	23.0	18.0	10.0	330.44		平安時代以降の可能性	
第16区 SK303 不明	I S16	椭圓形	円筒状	15.0	13.0	12.0	330.44		平安時代以降の可能性	
第15-60区 SK304 不明	I S16	不整円形	円筒状	23.0	22.0	30.0	330.86		平安時代以降の可能性	
第17-60区 SK305 不明	I X02*	円形	楕状	78.0	76.0	11.0	329.44		重複(SD02新古不明)	
第17区 SK306 不明	I X03	椭圓形	楕状	82.0	30.0±3.1	28.0	329.33		弥生中期後半の可能性	
第16-17区 SK307 不明	I X02	円形	円筒状	24.0	24.0	17.0	329.63			
第17区 SK308 不明	I S18	椭圓形	円筒状	16.0	14.0	52.0	328.94			

区分No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土品	備考欄
第17区 SK309 不明	I S10	縦円形	ナリ林状	22.0	20.0	6.0	7.9~18			
第17区 SK310 不明	I S2	不整円形	不整形	22.0	21.0	18.0	22.0~29			
第17区 SK311 不明	I S18	円筒	不整形	25.0	23.0	16.0	32.9~36	炭化物		
第17区 SK312 不明	I S18	円筒	タライ状	23.0	22.0	10.0	32.9~44			
第18区 SK313 不明	I S24	不整円形	円筒状	20.0	18.0	22.0	32.8~84			
第17-60区 SK314 不明	I N02+	不整形	盤状	188.0	40.0	6.0	329.80	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14区 SK315 不明	I R04	円筒	円筒状	23.0	22.0	20.0	332.00	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14区 SK316 不明	I R04	椎円形	お椀状	24.0	20.0	13.0	332.08		平安時代以降の可能性	
第14区 SK317 不明	I R04	不整形	不整形	67.0	55.0	33.0	331.98	弥生土器	平安時代以降の可能性	
								縄文土器、 弥生土器、 平安時代土器		
第14-62区 SK318 不明	I R04	椎円形	タライ状	116.0	94.0	28.0	331.80		平安時代の可能性	
第15区 SK319 不明	I S02	円筒	ナリ林状	34.0	30.0	16.0	329.96	弥生土器	重複(SH01新)	
第15区 SK320 不明	I S02	椎円形	円筒状	28.0	20.0	18.0	329.82		弥生中期後半の可能性	
第15区 SK321 不明	I S02	不整形	ナリ林状	36.0	31.0	32.0	329.78	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK322 不明	I N22+	不整圓形	盤状	72.0	39.0	18.0	330.00			
第13区 SK323 不明	I N22	椎円形	ナリ林状	34.0	30.0	20.0	329.98			
第13区 SK324 不明	I N22	円筒	不整形	30.0	30.0	18.0	329.84			
第13区 SK325 不明	I N22	椎円形	不整形	50.0	42.0	27.0	329.88	縄文土器、 弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK326 不明	I N21+	不整円形	円筒状	37.0	35.0	28.0	329.90			
第13区 SK327 不明	I N21	不整円形	円筒状	22.0	20.0	19.0	330.02			
第13区 SK328 不明	I N21	円筒	円筒状	32.0	30.0	18.0	330.10			
第13区 SK329 不明	I N21	不整円形	不整形	30.0	28.0	31.0	329.93			
第13区 SK330 不明	I N21	円筒	円筒状	30.0	28.0	39.0	329.83	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK331 不明	I N21	圓丸方彌	タライ状	24.0	24.0	12.0	330.15			
第13区 SK332 不明	I N21	円筒	円筒状	18.0	18.0	30.0	330.05			
第13区 SK333 不明	I N21	円筒	円筒状	23.0	23.0	28.0	330.12			
第13区 SK334 不明	I N21	円筒	タライ状	40.0	36.0	17.0	330.25		弥生中期後半の可能性	
第13区 SK335 不明	I N21	円筒	お椀状	26.0	25.0	10.0	330.46		弥生中期後半の可能性	
第13区 SK336 不明	I N21	不整円形	ナリ林状	32.0	28.0	20.0	330.38			
第13区 SK337 不明	I S01	円筒	円筒状	20.0	20.0	16.0	330.29			
第13区 SK338 不明	I S01	円筒	円筒状	19.0	19.0	14.0	330.26			
第13区 SK339 不明	I N21+	椎円形	タライ状	27.0	24.0	12.0	330.06			
第13区 SK340 不明	I N22	円筒	円筒状	21.0	21.0	15.0	330.05			
第13区 SK341 不明	I S01+ I S02	椎円形	ナリ林状	24.0	20.0	15.0	330.04		重複(SK446新旧不明)	
第13区 SK342 不明	I S01	円筒	お椀状	20.0	20.0	11.0	330.07			
第13区 SK343 不明	I S01	円筒	円筒状	22.0	20.0	33.0	329.87			
第13区 SK344 不明	I S01	円筒	円筒状	22.0	20.0	28.0	329.90	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK345 不明	I S01	円筒	円筒状	25.0	24.0	24.0	329.94	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK346 不明	I S01+ I S02	円筒	円筒状	28.0	26.0	35.0	329.82			
第13-60区 SK347 不明	I S02	椎円形	タライ状	35.0	28.0	16.0	330.00	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK348 不明	I S02	不整形	円筒状	60.0	38.0	30.0	329.84	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK349 不明	I S02	不整形	円筒状	38.0	(35)	50.0	329.65		重複(SK446新古不明)	
第13区 SK350 不明	I S11	円筒	円筒状	20.0	20.0	18.0	330.40			
第13区 SK351 不明	I S11	椎円形	タライ状	34.0	26.0	15.0	330.52	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第13区 SK352 不明	I S16	円筒	不整形	29.0	28.0	18.0	330.54		平安時代 土器	
第13-16区 SK353 不明	I S16	椎円形	タライ状	23.0	16.0	12.0	330.66		平安時代の可能性	
第16区 SK354 不明	I S16	不整円形	タライ状	25.0	27.0	19.0	330.73			
第13区 SK355 不明	I S02	円筒	ナリ林状	32.0	30.0	18.0	329.96			
第13区 SK356 不明	I S02	椎円形	タライ状	32.0	26.0	14.0	329.90			
第13区 SK357 不明	I S01	椎円形	タライ状	28.0	23.0	12.0	330.10			
第13-59区 SK358 不明	I S06	椎円形	深さのあるタライ状	148.0	76.0	67.0	330.09		落穴、縄文時代の可能性	
第15-16区 SK359 不明	I S16	円筒	円筒状	26.0	24.0	38.0	330.08	弥生土器	平安時代の可能性	
第16-60区 SK360 不明	I S21	円筒	円筒状	20.0	20.0	23.0	331.09	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第16-62区 SK361 平安	I S16	不整円形	タライ状	91.0	41.0	32.0	330.86	弥生土器、 鍬頭片、鉄	C140-24分析No.18	
第16-17区 SK362 不明	I S22	円筒	タライ状	23.0	23.0	11.0	330.01		重複(SK03新古不明)	
第29区 SK363 不明	I W11	円筒	盤状	26.0	26.0	9.0	336.07			
第29区 SK364 不明	I W11	不整円形	ナリ林状	38.0	30.0	13.0	336.11			
第15区 SK365 不明	I S08	圓丸方彌	盤状	30.0	29.0	6.0	330.48			
第15区 SK366 不明	I S08	圓丸方彌	盤状	30.0	28.0	10.0	331.92			
第15区 SK367 不明	I L10	不整圓形	盤状	33.0	26.0	12.0	330.30			
第14区 SK368 不明	I R15	円筒	円筒状	24.0	22.0	15.0	331.78	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14区 SK369 不明	I R15	圓丸方彌	タライ状	23.0	22.0	18.0	331.85			
第14区 SK370 不明	I R14	椎円形	ナリ林状	29.0	25.0	18.0	332.04			
第14区 SK371 不明	I R14	不整椭円形	円筒状	28.0	24.0	32.0	331.88			
第14区 SK372 不明	I R14	不整圓形	円筒状	25.0	23.0	32.0	331.60			
第14-60区 SK373 不明	I R15	不整円形	円筒状	33.0	30.0	45.0	331.56	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14区 SK374 不明	I R15	椎円形	お椀状	46.0	21.0	10.0	331.84	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14区 SK375 不明	I R10	椎円形	お椀状	26.0	22.0	10.0	331.82			
第14区 SK376 不明	I R10	椎円形	深さのあるタライ状	28.0	23.0	24.0	331.66			

区分No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸(cm)	短軸(cm)	底面(cm)	底面積(cm²)	出土遺物	備考欄
第14回	SK377 不明	I R09+ I R14	不整形	不整形	28.0	18.0	29.0	331.76			
第14回	SK378 不明	I R14	不整形	不整形	56.0	56.0	39.0	331.66			
第14回	SK379 不明	I R09	円形	不整形	25.0	24.0	17.0	331.86			
第14回	SK380 不明	I R10	椭円形	円筒状	38.0	19.0	12.0	331.68			
第14回	SK381 不明	I R09	椭円形	不整形	23.0	14.0	9.0	331.75	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14回	SK382 不明	I R09	椭円形	ザリ林状	41.0	36.0	22.0	331.64			
第14回	SK383 不明	I R09	円形	円筒状	18.0	18.0	36.0	331.54			
第14回	SK384 不明	I R09	椭円形	お椀状	22.0	14.0	10.0	331.92			
第14回	SK385 不明	I R09	円形	タライ状	22.0	20.0	10.0	331.92			
第14回	SK386 不明	I R09	椭円形	盤状	55.0	21.0	4.0	331.95	平安時代 土器	平安時代の可能性	
第14回	SK387 不明	I R10	椭円形	円筒状	70.0	26.0	15.0	331.64			
第14回	SK388 不明	I R10	椭円形	タライ状	122.0	35.0	25.0	331.45			
第14回	SK389 不明	I R04	溝なし盤	円筒状	25.0	25.0	35.0	331.51			
第14回	SK390 不明	I R04	溝なし盤	円筒状	36.0	31.0	34.0	331.52			
第14回	SK391 不明	I R04	溝なし盤	円筒状	17.0	16.0	8.0	331.80			
第14回	SK392 不明	I R04	溝なし盤	円筒状	51.0	10.0	4.0	331.80			
第14回	SK393 不明	I R04	溝なし盤	円筒状	32.0	26.0	12.0	331.52			
第14回	SK394 不明	I R05	椭円形	タライ状	80.0	35.0	24.0	331.49			
第14回	SK395 不明	I R05	椭円形	タライ状	80.0	31.0	31.0	331.44	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14回	SK396 不明	I R05	椭円形	タライ状	66.0	39.0	23.0	331.41	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14回	SK397 不明	I M05	不整形	圓柱状	73.0	56.0	3.0	331.59	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第14回	SK398 不明	I M25	不整形圓形	タライ状	60.0	22.0	18.0	331.46			
第14回	SK399 不明	I R05	椭円形	圓柱状	36.0	32.0	4.0	331.58			
第14回	SK400 不明	I R04	円形	タライ状	24.0	24.0	16.0	331.46			
第14回	SK401 不明	I R04	不整形圓形	不整形	25.0	24.0	24.0	331.54			
第14回	SK402 不明	I M24	円形	タライ状	31.0	30.0	16.0	331.56			
第14回	SK403 不明	I M25	不整形圓形	圓柱状	36.0	18.0	7.0	331.58			
第14回	SK404 不明	I M25	椭円形	タライ状	37.0	17.0	10.0	331.54			
第15~16回	SK405 不明	I S16	椭円形	タライ状	22.0	16.0	7.0	330.22			
第15回	SK406 不明	I S12	円形	ザリ林状	25.0	24.0	20.0	329.88			
第15回	SK407 不明	I S12	円形	円筒状	24.0	23.0	22.0	329.86	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第15回	SK408 不明	I S12	円形	円筒状	26.0	24.0	26.0	329.86			
第15回	SK409 不明	I S12	円形	円筒状	24.0	24.0	32.0	329.78			
第15回	SK410 不明	I S12	円形	タライ状	34.0	30.0	10.0	330.09			
第15回	SK411 不明	I S12	円形	圓柱状	36.0	15.0	11.0	330.74			
第15回	SK412 不明	I S12	椭円形	タライ状	40.0	35.0	22.0	329.96			
第15回	SK413 不明	I S12	椭円形	タライ状	45.0	33.0	11.0	330.93			
第14回	SK414 不明	I R14	円形	タライ状	34.0	32.0	14.0	332.31			
第30回	SK415 不明	I W16	不整形	お椀状	31.0	25.0	12.0	326.28			
第15回	SK416 不明	I S12	椭円形	円筒状	28.0	26.0	18.0	329.92			
第15回	SK417 不明	I S12	圓丸形	タライ状	38.0	36.0	13.0	329.99			
第30回	SK418 不明	I W16	不整形圓丸形	お椀状	26.0	26.0	11.0	336.26			
第22回	SK419 不明	I R12+ I R17	不整形圓形	お椀状	42.0	32.0	27.0	335.72	弥生土器、 C14(II)24分野Na.19) 炭化物	弥生中期後半の可能性	
第22回	SK420 不明	I R17	不整形圓形	不整形	43.0	39.0	18.0	335.82			
第22回	SK421 不明	I R17	円形	円筒状	24.0	22.0	41.0	335.55	u.FI.、鋏片	弥生中期後半の可能性 重複(SK187古)	
第22回	SK422 不明	I R16	不整形圓形	お椀状	78.0	77.0	26.0	335.78			
第22~60回	SK423 不明	I R17	椭円形	タライ状	72.0	65.0	20.0	335.80	FEQ、 re.FI.、鋏片	弥生中期後半の可能性	
第22回	SK424 不明	I R17	不整形圓形	圓筒状	38.0	24.0	40.0	335.60			
第15回	SK425 不明	I S12	椭円形	不整形	45.0	32.0	20.0	329.95			
第14回	SK426 不明	I R09+ I R10	円形	円筒状	22.0	21.0	24.0	331.77	弥生土器	重複(SD05古)	
第16回	SK427 不明	I S17	円形	圓柱状	24.0	27.0	17.0	329.85			
第15~16回	SK428 不明	I S17	円形	円筒状	21.0	20.0	20.0	329.88			
第16回	SK429 不明	I S17	円形	圓柱状	28.0	28.0	12.0	329.96			
第15~16回	SK430 不明	I S17	円形	お椀状	33.0	32.0	16.0	329.90			
第15~16回	SK431 不明	I S17	円形	お椀状	21.0	20.0	12.0	329.92			
第15~16回	SK432 不明	I S17	椭円形	圓柱状	26.0	19.0	8.0	330.04			
第15~16回	SK433 不明	I S17	円形	不整形	18.0	17.0	34.0	329.76			
第15~16回	SK434 不明	I S17	円形	円筒状	25.0	24.0	26.0	329.82			
第15~16回	SK435 不明	I S17	円形	円筒状	24.0	23.0	19.0	329.86			
第15~16回	SK436 不明	I S17	円形	円筒状	24.0	24.0	23.0	329.84			
第15回	SK437 不明	I S17	椭円形	お椀状	20.0	16.0	9.0	329.98			
第15回	SK438 不明	I S12	椭円形	円筒状	32.0	26.0	25.0	329.92			
第15回	SK439 不明	I S12+ I S17	椭円形	圓筒状	30.0	26.0	25.0	329.83			
第15回	SK440 不明	I S12	円形	お椀状	24.0	22.0	17.0	329.88			
第15回	SK441 不明	I S12	円形	お椀状	28.0	27.0	14.0	329.92	縄文土器、 弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第15回	SK442 不明	I S12	円形	圓柱状	23.0	27.0	28.0	329.78			
第15回	SK443 不明	I S12	円形	圓柱状	30.0	17.0	15.0	329.94			
第15回	SK444 不明	I S12	円形	お椀状	27.0	24.0	24.0	329.91			
第15回	SK445 不明	I S12	椭円形	タライ状	34.0	29.0	21.0	329.95			
第15回	SK446 不明	I S01	不整形	お椀状	17.0	15.0	13.0	329.83			
第15回	SK447 不明	I N22	円形	お椀状	16.0	16.0	14.0	329.73			
第15回	SK448 不明	I S01	不整形圓形	タライ状	28.0	24.0	10.0	330.99			
第15回	SK449 不明	I S01	椭円形	タライ状	30.0	23.0	17.0	329.83			
第15回	SK450 不明	I S12	円形	圓柱状	30.0	17.0	15.0	329.90			
第15回	SK451 不明	I S01	椭円形	タライ状	17.0	14.0	10.0	329.98			
第15回	SK452 不明	I S11	不整形圓形	お椀状	40.0	37.0	12.0	330.04			
第16~17回	SK453 不明	I S17	円形	お椀状	20.0	20.0	7.0	329.67	重複(SD03古、SK54新古不明)		

試験No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸cm	短軸cm	(深さ)cm	底面形状(cm)	出土遺物	備考欄	
第29回	SK454 不明	I W06・W11	隅円形	お椀状		38.0	28.0	14.0	336.38			
第17回	SK455 不明	I S02	円形	お椀状		29.0	29.0	14.0	299.68		重複(SD03新古不明)	
第21回	SK456 不明	I R02	円形	お椀状		34.0	32.0	20.0	335.26			
第21回	SK457 不明	I R02	不整形	不整形		58.0	56.0	18.0	335.37			
第21回	SK458 不明	I R01	不整形	不整形		50.0	32.0	18.0	335.79			
第22回	SK459 不明	I R07	不整形	お椀状		38.0	26.0	18.0	335.72	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第22回	SK460 不明	I R07	不整形	すり鉢状		42.0	30.0	20.0	335.60			
第22回	SK461 不明	I R12	隅円形	お椀状		38.0	32.0	17.0	335.65			
第22回	SK462 不明	I R12	隅円形	タライ状		38.0	30.0	15.0	335.86			
第29回	SK463 不明	I W06・W11	隅円形	すり鉢状		32.0	20.0	8.0	336.42			
第22回	SK464 不明	I R12	不整形	すり鉢状		34.0	34.0	21.0	335.25	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第22回/60回	SK465 不明	I R12	隅円形	すり鉢状		41.0	32.0	22.0	335.56	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第22回	SK466 不明	I R12	隅円形	不整形		46.0	25.0	23.0	335.57	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第22回	SK467 不明	I R07・R02	隅円形	お椀状		24.0	21.0	12.0	335.87			
第22回	SK468 不明	I R12	円形	お椀状		28.0	28.0	15.0	335.35			
第20回	SK469 不明	I X22	隅丸長方形	不整形		92.0	70.0	21.0	330.66			
第20回	SK470 不明	I X22	隅丸長方形	タライ状		24.0	23.0	11.0	330.55			
第20回	SK471 不明	I R02	円形	お椀状		18.0	17.0	10.0	330.36			
第19回	SK472 不明	I X12・X13	圓形	皿状		24.0	22.0	4.0	332.58		SA01P1→SK472	
第20回	SK473 不明	I X17	円形	すり鉢状		21.0	21.0	14.0	330.54			
第20回	SK474 不明	I X17	円形	すり鉢状		24.0	24.0	22.0	330.08	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第20回	SK475 不明	I X17	不整圓美方形	お椀状		22.0	20.0	12.0	330.12	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第20回	SK476 不明	I X17	不整形	お椀状		18.0	16.0	9.0	330.10			
第29回	SK477 不明	I W11	不整形	不整形		50.0	41.0	6.0	336.57		重複(ST08P140前)	
第29回	SK478 不明	I W07	不整形	不整形		29.0	28.0	10.0	335.94			
第23回	SK479 不明	I W02	不整形	不整形		(40.0)	30.0	13.0	14.0	335.86	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第23回	SK480 不明	I W02	不整圓美方形	不整形		68.0	48.0	21.0	335.77			
第23回	SK481 不明	I W07	円形	お椀状		30.0	28.0	14.0	335.80			
第23回	SK482 不明	I W02	不整圓美方形	お椀状		73.0	44.0	22.0	335.68			
第23回	SK483 不明	I W07	不整圓美方形	不整形		35.0	30.0	20.0	335.80			
第23回	SK484 不明	I W02	不整圓美方形	不整形		80.0	62.0	23.0	335.83	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第29回	SK485 不明	I W02	不整圓美方形	不整形		48.0	32.0	24.0	335.88			
第22回	SK486 不明	I R02	不整圓美方形	圓筒状		44.0	36.0	23.0	335.68			
第22回	SK487 不明	I R02	不整圓美方形	圓筒状		39.0	35.0	19.0	335.64			
第23回	SK488 不明	I R02	不整圓美方形	圓筒状		37.0	35.0	18.0	335.87			
第23回	SK489 不明	I R02	不整圓美方形	圓筒状		32.0	42.0	6.0	334.62			
第23回	SK490 不明	I C06	不整圓美方形	圓筒状		32.0	25.0	12.0	336.14			
第23回	SK491 不明	I C06	不整圓美方形	圓筒状		28.0	22.0	12.0	336.12			
第23回	SK492 不明	I C07	不整圓美方形	圓筒状		42.0	38.0	30.0	335.68	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第23回	SK493 不明	I C07	不整圓美方形	不整形		60.0	40.0	25.0	335.75			
第25回	SK495 不明	III C07	隅丸長方形	不整形		48.0	44.0	34.0	335.75	弥生土器、化粧土器	弥生中期後半の可能性	
第25回	SK496 不明	III C07	隅丸長方形	不整形		51.0	23.0	23.0	335.74	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第25回	SK497 不明	III C07	不整圓美方形	円筒状		30.0	29.0	24.0	335.74	削片		
第25回	SK498 不明	III C07	隅丸長方形	円筒状		34.0	28.0	32.0	335.70			
第25回	SK499 不明	III C07	不整圓美方形	不整形		52.0	40.0	32.0	335.72			
第25回	SK500 不明	III C07	不整圓美方形	円筒状		32.0	32.0	18.0	335.78			
第23回	SK501 不明	I W03・W08	不整圓丸長方形	不整形		45.0	40.0	16.0	334.96	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第23回	SK502 不明	I W02	隅丸長方形	円筒状		22.0	22.0	13.0	335.29			
第23回	SK503 不明	I W03	隅円形	タライ状		44.0	37.0	18.0	334.98 剥片			
第23回	SK504 不明	I C06	不整圓美方形	不整形		19.0	16.0	8.0	335.12			
第23回	SK505 不明	I W08	不整圓美方形	お椀状		36.0	34.0	13.0	335.01			
第23回	SK506 不明	I W08	不整圓美方形	圓筒状		22.0	22.0	5.0	335.06			
第23回	SK507 不明	I W08	不整圓美方形	タライ状		47.0	38.0	17.0	334.56	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第23回	SK508 不明	I W03	不整形	不整形		46.0	42.0	17.0	335.02	弥生土器	弥生中期後半の可能性	
第23回	SK509 不明	I W08・W13	不整圓美方形	すり鉢状		55.0	44.0	29.0	334.46			
第23回	SK510 不明	I W13・W14	不整圓美方形	皿状		21.0	18.0	7.0	334.48			
第23回	SK511 不明	I W13	隅円形	円筒状		30.0	27.0	16.0	334.72			
第13回	SK512 不明	I N21	円形	円筒状		26.0	25.0	20.0	329.96			
第13回	SK513 不明	I N21	不整形	円筒状		25.0	18.0	30.0	329.80			
第16-17回	SK514 不明	I S17	円形	すり鉢状		26.0	26.0	30.0	329.66 化粧土器	重複(SK453新古不明)、平安時代の可能性。C140E4分析No.13		
第25回	SK515 不明	III C06	隅円形	不整形		30.0	25.0	9.0	336.25			
第25回	SK516 不明	III C07	隅円形	すり鉢状		37.0	26.0	18.0	336.08			
第25回	SK517 不明	III C07	不整形	皿状		38.0	28.0	7.0	336.07			
第25回	SK518 不明	III C07	不整形	すり鉢状		42.0	33.0	14.0	335.98			
第25回	SK519 不明	III C02	不整形	お椀状		36.0	29.0	12.0	335.95			
第25回	SK520 不明	III C03	不整圓美方形	すり鉢状		42.0	32.0	15.0	335.00			
第25回	SK521 不明	III C03	不整圓美方形	すり鉢状		49.0	43.0	20.0	335.65			
第25回	SK522 不明	III C02	不整圓美方形	タライ状		36.0	29.0	12.0	335.77			
第25回	SK523 不明	III C02	不整圓美方形	タライ状		48.0	40.0	20.0	335.55			
第25回	SK524 不明	III C07	不整圓美方形	タライ状		28.0	28.0	14.0	335.71			
第25回	SK525 不明	III C07	不整圓美方形	圓筒状		37.0	31.0	31.0	335.53			
第26回	SK526 不明	III C03	円形	不整形		32.0	30.0	21.0	334.93 弥生土器	弥生中期後半の可能性		
第26回	SK527 不明	III C03	不整圓美方形	タライ状		45.0	41.0	20.0	335.05 弥生土器	重複(SK329新古不明)		
第25-60回	SK528 不明	III C03	不整圓美方形	円筒状		36.0	32.0	36.0	334.92 弥生土器	弥生中期後半の可能性		
第25-60回	SK529 不明	III C03	不整圓美方形	タライ状		44.0	42.0	20.0	335.07 弥生土器	重複(SK328新古不明)		
第25-60回	SK530 不明	III C03	円形	円筒状		32.0	32.0	26.0	334.99 弥生土器	弥生中期後半の可能性		

第3節 遺 物

出土遺物については、遺構外出土の遺物が多くを占める。そこで、遺物の主体である土器について、時代・時期ごとにグリッド別分布図を作成し、出土状況の傾向を捉えた。さらに、それぞれの時代ごとに項目を設け、出土遺物の特徴を材質別に説明する（註1）。なお、遺物1点1点の詳細については第7章のあとに掲載した「遺物観察表」を参照されたい。

1 縄文時代

(1) 土器（第65図1～第67図106、PL12～14）

出土土器のすべてが破片資料ではあるが、草創期の爪形文土器から後期前半の堀之内式土器まで、途中間隔の空く時期もあるが、少量ずつそれぞれの時期の土器が出土している。また、形式は深鉢形土器（以下「深鉢」という。）がすべてを占めると考えられる。

その出土土器の時期は、以下のようである。

草創期：爪形文系土器

早期前半：撫糸文系土器、押型文系土器

前期前半：羽状縄文系土器

前期後半：諸磯式土器

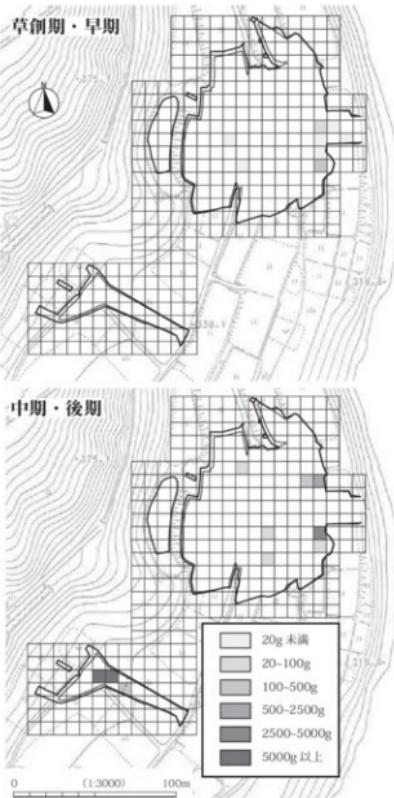
中期前半：五領ヶ台式土器、阿玉台式土器

中期後半：加曾利E式土器

後期前半：称名寺式土器、三十稻場式土器、

堀之内式土器

土器分布図を3時期にまとめて表示した（第64図）。それぞれの時期ごとに遺物の出土量には差があるが、どの時期も、千曲川に近い下位段丘から



第64図 縄文時代グリッド別土器分布図（遺構出土土器除く）

の出土が多い傾向は共通する。また、南区からも前期以降の土器が出土する。

つぎに、それぞれの時期の土器について概観する。

①草創期の土器（第65図9・10、PL12）

爪形文系土器深鉢胴部破片2点が、西区中央の東区境界近くで検出された。薄手で焼成も良く、9は人爪により右から左へ横位に連続刺突し、10は細い籠状工具により左から右へ押引き施文している。双方とも、「斜位横列多段構成」の土器である。

②早期前半の土器（第65図11～23、PL12）

撚糸文系土器は2点出土し1点を図示（11）、深鉢口縁部付近に外面継位・内面横位施文の表裏撚糸文が施される。早期初めの古い段階の撚糸文系土器と考えられる。Lr横縄文の12・13は同一個体で、それと時期を同じくする資料の可能性がある。

押型文系土器は、楕円文16点、山形文2点、楕円文+山形文6点の計24点が出土。密接施文の楕円文（16・18）、山形文+楕円文（21～23）は、それぞれ同一個体の可能性がある。山形文が先行するとも考えられるが、資料はすべて押型文系土器様式中段階の細久保式に位置づくであろう。なお、19にはやや粗大な楕円押型文がみられ、後続する高山寺式の様相が現れている可能性がある。繊維が混入した土器は4点（内1点は非掲載遺物）で、押型文系土器の6分の1の割合となる。

③前期前半の土器（第65図1・2・24～29、PL12）

羽状縄文を施し、繊維が混入した土器群を分類した。9点のうち8点を図示した。矢羽状（1・29）、菱形状（2）を呈する文様を含む。25～27は同一個体で、25～28は「縄の閉端の環」の文様（ループ文）をもつ。また、1は羽状縄文の文様の変換点で原体を引きずった痕跡がみえる。塚田式・仲道式（花積下層式並行）の範疇に入る段階の土器群であろう。

④前期後半の土器（第65図3・30～42、第66図43～65・76、PL12・13）

羽状縄文ないしは単節縄文を施し、繊維が混入しない土器群を分類した。口縁部に半截竹管による格子目文を施した土器（3）、前末葉の半截竹管による沈線文を施した土器（65）を含む。16個体を図示したが、ほかに15点の同時期とも考えられる単節縄文の土器がある。33・34・36～42・43～47・49～51・52～58・60・61・62～64はそれぞれ同一個体の可能性が高く、そのうち36～47は羽状縄文で、特に36～42は施文方向を変えて菱形のモチーフを描出する。そのほか、口縁部破片の32は縱の羽状縄文、48は横の羽状縄文で、それ以外の破片には単節の縄文が施される（LR多い）。76はその底部破片である。65以外の個体は諸磯b式に並行する土器群と考えられ、そのなかでも、3は新潟県地方で命名された刈羽式の格子目文土器で、平行沈線のみで文様が構成される（寺崎1991、2011）。さらに、半截竹管で胴部に横位区画・斜行沈線文を施した65は、諸磯c式の所産であろう。

⑤中期前半の土器（第65図4、第66図66～70、PL12・13）

66は半截竹管による文様構成をもつ深鉢の波状口縁部分であり、初頭の五領ヶ台式に位置づけられる。南区中央から出土した67～70は指頭圧痕文がある同一個体で、阿玉台式初頭の所産であろう。また、SK187埋土出土の4は、LR縄文に半截竹管の懸垂文が施された小形深鉢の胴部破片であり、当該期の資料である可能性がある。

⑥中期後半の土器（第66図71・72、PL13）

71は深鉢胴部を縦位に沈線区画し縦の縄巻縄文を充填した土器で、加曾利E3式の時期の所産であろう。72は内面赤ウルシ・外表面黒ウルシ塗りの鉢形土器の小破片であるが、胎土等の状況から縄文中期として資料提示する。

⑦後期前半の土器（第65図5～8、第66図73～75、第67図77～106、PL12～14）

縄文土器の中で後期前半の土器が59点と最も多く出土しており、初頭の称名寺式（6・7）は遺構内、三十稻場式（77～83）は東区南側下位段丘上からほとんどが出土。堀之内式は1式の時期に比定され、遺構内および東区中央下位段丘上、特に南北区北西側からの出土が目立つ。73・74・85～87・90・91・95～97は、それぞれ同一個体の可能性が高い。

称名寺式は3点で、2点は波状の口縁部破片（6・89）、1点は胴部破片（7）であり、「J」字状モチーフの断片が残る。称名寺式前半期の所産であろう。

三十稻場式は、8点中4点を図示した。77は貼付による横走隆帯文を持つ頭部～胴部破片、79～82は同一個体で、79・80は胴部上半、81・82は胴部下半である。胴部下半の83も含め、棒状工具による連続刺突文を施した個体は、三十稻場式古段階に位置づけられる。

堀之内式土器は、1式でも前半期に入り、「J」字状（燕手文）および円形のモチーフをもつ90～98・101は、波状口縁の深鉢となる。沈線による大柄のモチーフ（5・73～75・84～88）、継の条線文（8・98・99）、籠状工具による細い円弧状の沈線文および刻みをもつ胴部破片（100）、無文の深鉢口縁部（102）、底部（103～106）も当該期の資料と考えられる。

（2）石器（第68～71図、PL14～16）（註2）

石器は、形式的に草創期に所属すると思われる有茎尖頭器、早期の特殊磨石、前期の石匙など、出土土器の時期に相応する特徴的な石器が出土した。そのほか、石鎚、石鎌未成品などの剝片石器、礫器、敲石、磨石などの礫石器がみつかっている。大半が縄文時代の石器と判断したが、遺構の所属時期を考えると、弥生時代に属する可能性が高いと考えるべきかもしれない（註3）。

以下、石器を器種別に概観するが、個別の計測値等の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に示し、そのほかの非掲載石器、剝片観察表は添付DVDに収録した。

①有茎尖頭器（第68図1、PL14・15）

南北区東端のグリッドから1点出土。珪質頁岩製で先端側半分を中心に丁寧な交互押圧剥離がみられる。先端・基部とも欠損。出土している爪形文系土器の時期に伴うものであろう。

②石鎚（第68図2、第71図26～28、PL14～16）

打製石鎚が4点出土。石材は黒曜石1点（2）、流紋岩1点（26）、無斑晶質安山岩2点（27・28）の3種類である。すべて有茎石鎚で、縄文時代の石器の可能性は高いが、出土遺構はSB01と遺構外（SK191）で弥生時代中期後半以降の時期である。

③石鎌未成品（第68図3・4、第71図29、PL14～16、14・16-(1091)）

6点出土。2点はSB01、4点は東区遺構外からみつかり、石材は鉄石英1点のほか、無斑晶質安山岩および安山岩である。長さが幅より長い未成品と幅が長さを上回る未成品が同数ある。

④石匙（第68図5、PL14・15）

南北区中央の縄文時代遺物包含層から1点出土。安山岩製で、縄文時代前期の石器の可能性がある。使用最終段階のものか、幅が3.3cmと小さい。

⑤微細な剥離痕がある剝片（遺物観察表ではuFlと表示）（第68図6、第71図30、PL14～16）

20点確認、SB01から15点出土している。石材は、無斑晶質安山岩および安山岩が14点、チャート3点、珪質頁岩1点、輝綠岩1点、砂岩1点である。図示したものは2点で、南北区中央出土の縦長剝片の6は向側縁および先端の一部に剥離痕がある。SB01出土の30も縦長で尖った先端部に微細な剥離痕がある。

⑥二次加工がある剝片（遺物観察表ではre.F1と表示）(PL15-(1045))

12点確認、SB01をはじめ東区からほとんどが出土。石材は、無斑晶質安山岩および安山岩が9点、頁岩2点、鉄石英1点である。写真を掲載した(1045)は、表裏面に剝離痕が観察され不整な半月形を呈する。

⑦石核（第68図7・8、第69図9・10、PL15）

9点のうち6点が東区から出土。石材は、安山岩および無斑晶質安山岩4点、チャート2点、石英1点、鉄石英1点、不明1点である。7・9は同質の安山岩で、7は様々な角度から素材を剥がし、9は横長の素材を残している。10も横長の安山岩の素材。異なる方向からの打点がある。チャートの8は小形の石器の素材であろう。

⑧打製石斧（第69図11、PL15）

東区南端より1点出土。頁岩製で、基部が欠損し、表面左側刃部先端およびその裏面が縦位に摩耗している。使用痕の可能性あり。

⑨磨製石斧（第69図13、PL15）

東区北側より安山岩製の1点が出土。敲打により成形し研磨しているが、風化が著しい。基部が欠損し、表面刃部先端が剝離し右側が縦位に摩耗している。使用痕の可能性あり。

⑩礫器（第69図15、PL14・16）

2点出土。東区中央出土の15は硬砂岩製で、梢円形礫の一側縁が剝離され刃部を作りだしている。幅9.5cm、長さ8cmと、手持ちに丁度よいサイズである。

⑪凹石（第70図18、PL14・16、14・16-(1021)）

3点出土。凝灰岩製の18、輝石安山岩製の(1021)は、表裏面に敲打によるわずかな凹部が形成される。

⑫鐵石（第70図20、PL14・16）

13点出土。20は硬砂岩製で重量は229g。平坦な片面側にアバタ状の敲打痕がみられる。

⑬磨石（第70図22・23、PL14・16）

6点出土。22・23ともに輝石安山岩製で、表裏面より両側面を主に使用している。22の両側面は特に摩耗が顕著で、丸い縁辺が削れて平らになっている。部分的に被熱し赤化する。23は一側面の摩耗度が高く、本来の石の形状が変形する。表面にはアバタ状の敲打痕もみられるが、その形状は2本の筋状を呈する。

⑭特殊磨石（第70図24、PL14・16）

東区南端より1点出土。硬砂岩製。礫の長軸方向の1側面を、形状が変形するほど平らに使用していることから、特殊磨石と考えられる。

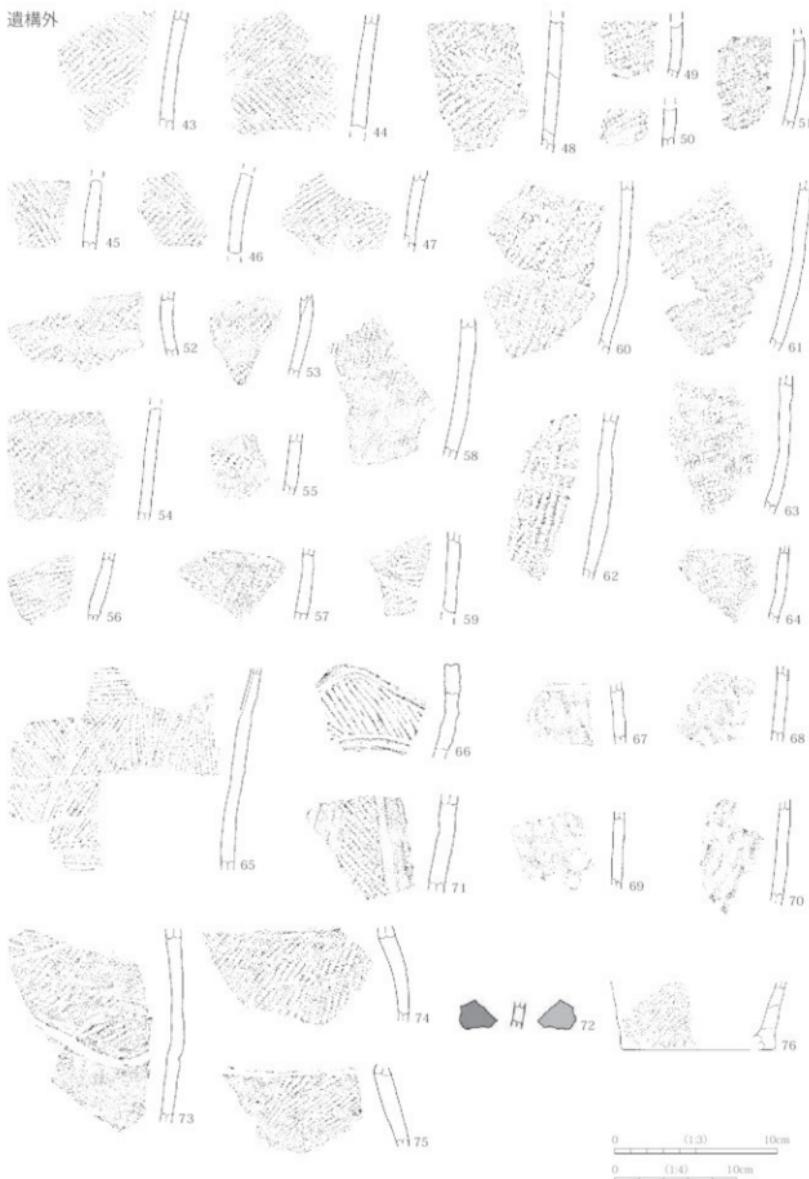
⑮白石（第70図25、PL16、PL16-(1026)・(1027)）

11点出土（石皿と思われる2点含む）。25は輝石安山岩製で重量4.8kg。扁平な川原石を用い、主に片面を使用する。使用面は全体的に摩耗している。(1026)・(1027)は安山岩製で、63kg・23.1kgとさらに大形である。



第65図 繩文時代SK、遺構外出土土器

遺構外

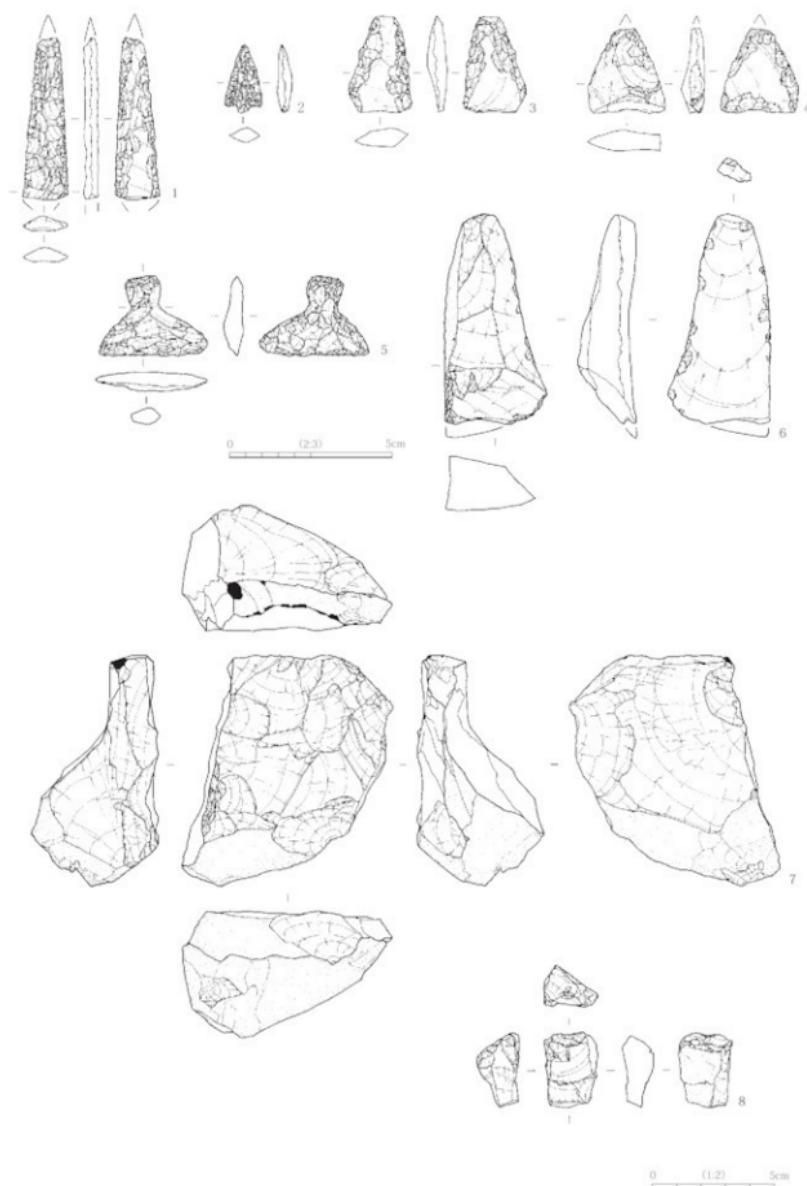


第66図 繩文時代遺構外出土土器(1)

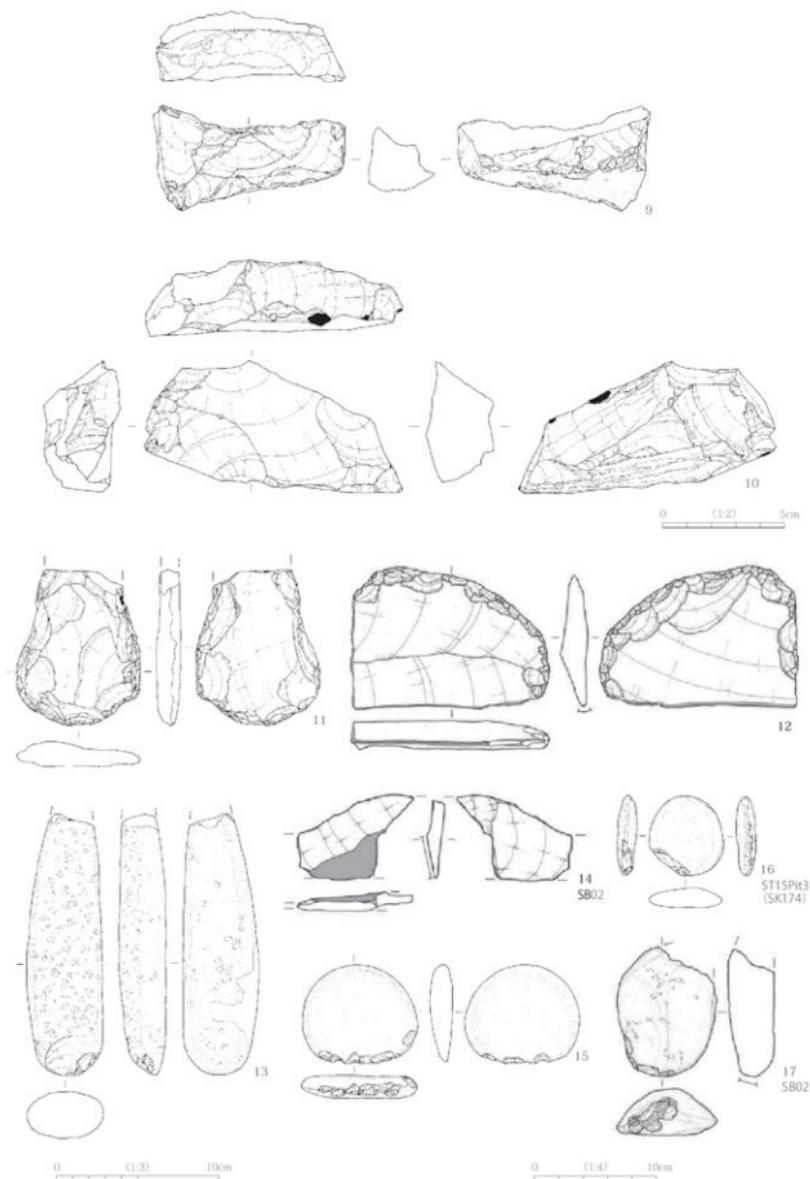
遺構外



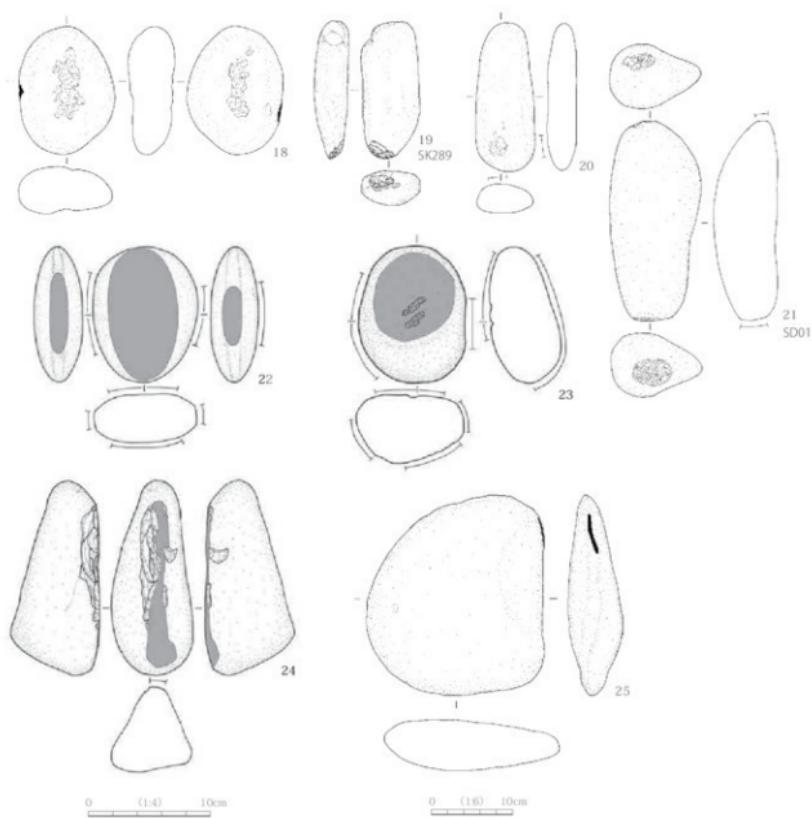
第67図 繩文時代遺構外出土土器(2)



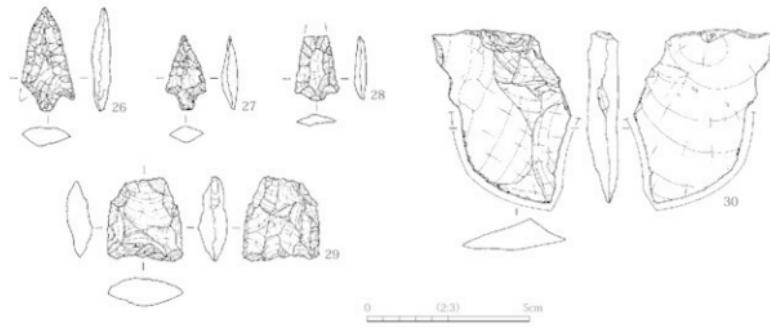
第68図 繩文時代石器



第69図 繩文時代、弥生時代石器(1)



第70図 繩文時代、弥生時代石器(2)



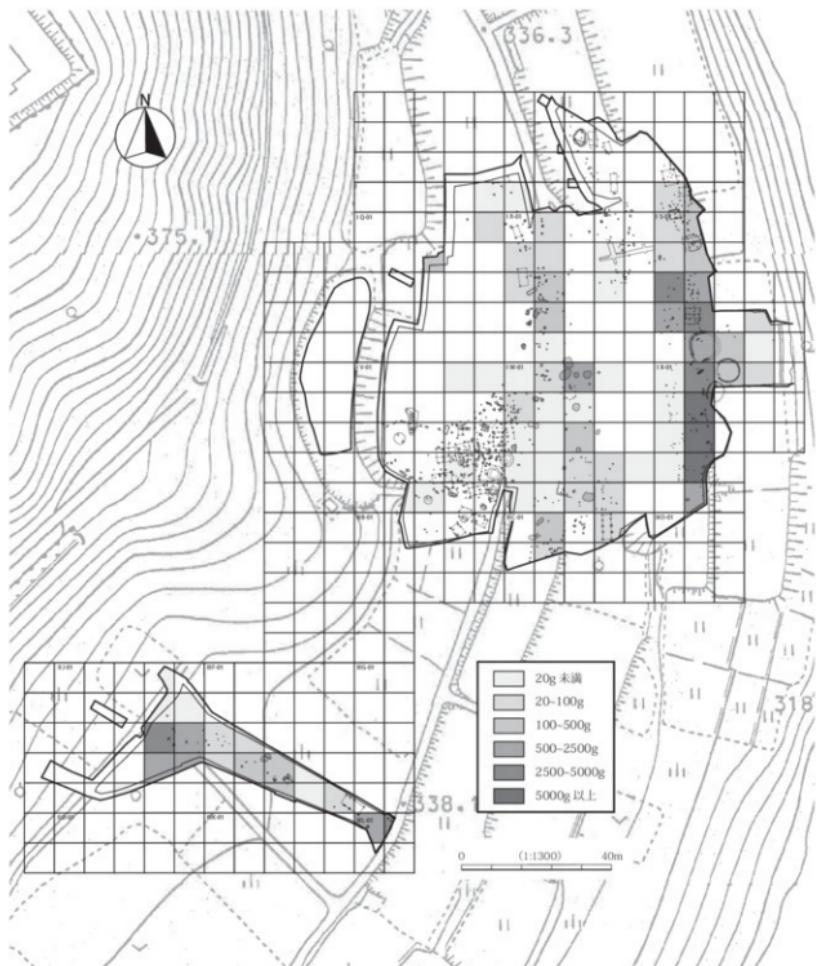
第71図 中野市試掘資料(SB01出土石器)

2 弥生時代

(1) 土器 (81 ~ 92図, PL17 ~ 26)

①概要

出土した弥生時代の土器は、すべて中期後半の栗林式土器である。第2節でも報告したように遺構出土土器は少量であり、遺構外出土土器が大半を占める。時期的には、栗林式土器成立期（栗林1式）（註4）の範疇に入ると考えられる。破片資料がほとんどであり、全体がわかる資料は少量である。土器分布図（第72図）をみると、ほかの時代と同じように千曲川に近い下位段丘上からの出土が多く、遺構の分布と一致



第72図 弥生時代グリッド別土器分布図（遺構出土土器除く）

する状況もある。また、近年の水田造成による削平で、面的に空白となっている箇所もある。さらに、南区にも遺構の所在とは別に2か所の遺物集中が存在する。また、東区上位段丘上で、第83図71の壺形土器の破片が1か所からまとまって出土し、単独土器（第29図）として記録した。

土器図版は、基本的に調査時に認定した遺構ごとに提示した（第81・82・92図）。そのなかで新しい時期の遺構に混入したと考えられる土器については「遺構外」（第82～91図）として報告した。

掲載土器の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に記載した。本文および遺物観察表の記載は、以下の器種分類と文様の呼称を用いた。

② 器種分類と文様

（ア）器種分類

栗林式土器の器種は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器が基本構成となり、本遺跡では瓶形土器、蓋形土器がそれに加わる（以下、本文中では「形土器」を省略して呼称する）。器種分類ができた栗林式土器は3469点、うち壺2257点、甕1115点、鉢88点（片口鉢6点含む）、瓶7点、蓋2点の内訳となり、壺の比率が高い（註5）。また、器種の部位の呼称については長野市松原遺跡の報告（長野県埋蔵文化財センター2000）に用いられた弥生土器の記述に従った。さらに、鉢については、口縁部形態および文様構造の違いにより、A～Cに細分した（註6）。

（イ）文様と器面調整の分類

文様の呼称と施文方法については、松原遺跡の弥生土器分類に準拠した（第73図）。栗林式土器に表現される文様は沈線文、櫛描文、繩文などによって構成される。

a 沈線文：施文原体は ϕ 3～5mmほどの1本の棒状工具で、横方向に1本ずつ描くことを基本とする。 ϕ 1mmほどの棒状工具が使用されることもあり、施文された形・モチーフ、施文原体の差異によって細分される（註7）。琵琶島遺跡では、コの字重ね文ではなく、懸垂文（本稿の遺物観察表では「垂下文a」と表現）がSQ01（第82図56）をはじめ数点みられるのみである。

b 櫛描文：施文原体は細い棒状のヒゴを束ねたものが想定され、徳永哲秀が「廉状工具」と命名した（徳永1995）。廉状工具は ϕ 1～2mmの棒が横位に編み込まれて結束したもので、櫛描文はその端部を器面にあて移動させることによって文様を描く（註8）。松原遺跡では定義されていないが、本遺跡には甕胴部に施文された格子目文の一群がある（第88図197～199、第90図249～252）。

c 繩文：本遺跡では、約7:1の割合で「LR横縄文」が「RL横縄文」の数を上回る（註9）。壺胴部に1点のみ、RLR横縄文が確認された（第84図89）。オオバコの穂の回転によると考えられる擬縄文が施文された破片も1点のみ出土している（第90図237）。

d 「刻み」（刺突文）（註10）：範状・板状の木口面または植物等を、器面に対して直交する形ないしはや斜位にして、直線的に連続して刻む（押し付ける）文様。棒状工具を斜位にあて押し引きする「押引列点文」とは異なる。本遺跡では、甕の口唇部、甕・壺の頭部・胴部、鉢の口唇部・胴部文様に用いられる。「刻み」は施文具の違いによって6類に分類した（註11）。

1類：範状工具による刻み

2類：ハンノキ属雄花序の冬芽による刻み

3類：軸に紐を右回転で巻きつけた工具による刻み

4類：軸に紐を左回転で巻きつけた工具による刻み

5類：板状工具（先端を平らに加工した木口）による刻み

6類：廉状工具による刻み

赤彩については摩耗等によって剥がれ器面の一部に残存している例が多く、実測図では面的な赤彩が想

定される場合には、赤彩の剥がれた部分も推定して網掛けで表示した。

文様の施用順序等の詳細について観察できたものは、「遺物観察表」に記載した。

器面調整にともなう痕跡は、ナデ、ヨコナデ、ハケ、ミガキ、ヨコミガキ、ケズリ、オサエ、ユビオサエがある。松原遺跡の記述では、オサエ、ユビオサエは、壺口縁端部文様帯として分類されているが、本報告書では「器形の補正行為から器面の微調整、施文のための基礎作業」（長野県埋蔵文化財センター 2000：11）として捉え、器面調整に含めて考えた。なお「オサエ」については、今回、壺、壺等の内面調整の際、ナデ調整の一環として指等で器面の内側を押す行為も同じ表現をしている。基本的に、前述の松原遺跡の記述（前出：11・12）に準拠するが、ミガキについては細分をせず、図示するとともに詳細が観察できるものについては遺物観察表に程度を記載した。さらに、それぞれの調整について方向がわかるものはできるかぎり表記した。

③ 時期区分

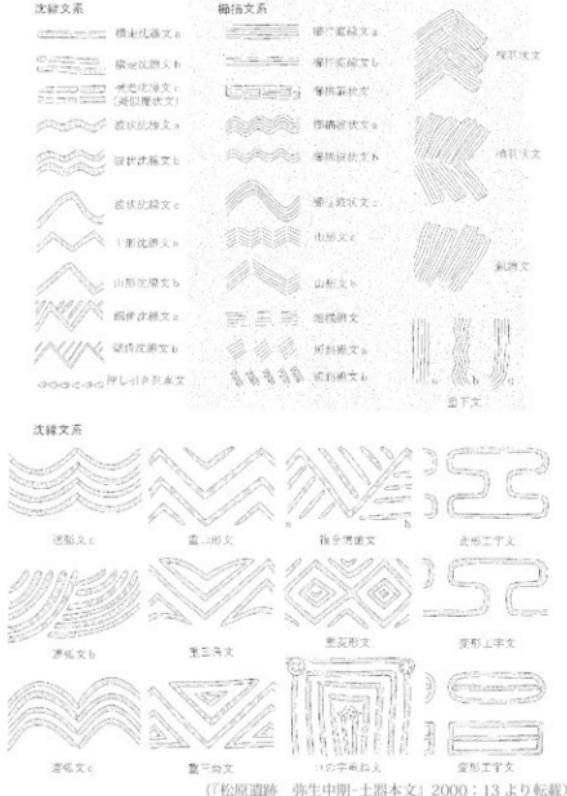
本報告書で記述する栗林式土器の時期区分に関しては、石川日出志（石川 2002）の見解に準拠し、型式の呼称、装飾帯（文様帯）

¹² の呼称については石川の区分(註12)を用いた。

④ 遺構出土土器（第 81・82・92 図、PL17・18・26）

SB01(第81・92図、PL17・26) 県埋文センターが発掘し図化した資料は、ほとんどがSB南西地区からの出土で、櫛描直線文a・短斜線文の構成による2+4の装飾帯を持つ壺(1)、壺底部(2)、太めの櫛描横羽状文の壺(3~5)がある。

さらに、第92図に示した平成22年中野市試掘調査分に主要な遺物がある。櫛描直線文a・LR横縄文・連弧文aの構成による2+4の装飾帯を持つ壺(311)、各種櫛描文(313・326は櫛描横羽状文、314・329は櫛描綱羽状文に刻み1類、315は櫛描直線文aに櫛描垂下文aと刻み1類、327は櫛描横羽状文の下部に押引列点文を施したもの)をもつ壺である。



第73図 栗林式土器文様呼称法

そのほか、319は一对の縦長豆粒状貼付文をもつ壺口縁部で、内外面が赤彩されており鉢Aである可能性もある。320・325は口唇部にLR横繩文がある壺、321は横走沈線文aに押引列点文をもつ壺、322はやや波状を呈する櫛描直線文aをもつ壺であり、323は横走沈線文aにLR横繩文の壺、324は連弧文aの壺、328は刻み1類が施文された壺である。312・317は無文の壺底部、316は甕底部、318は瓶底部である。

SB02 (第81図、PL17)

Pit3埋土を中心に出土した、太い沈線による重山形文の壺(6)、太い櫛描横羽状文に刻み1類を施文した壺の大形破片(7)、内外面赤彩の口径約25.8cmを測る大形の片口鉢(8)である。そのほか、口唇部にLR横繩文がある壺(9)、頸部に刻み1類がある壺(10)、3条の太い横走沈線文aが施文された壺(11)、櫛描直線文aの壺(12・13)、櫛描横羽状文の壺(14・16~18)が出土している。8の口縁部破片1片の内側には、横方向の磨痕が残り、磨痕をもつ土器片(第93図330~332、PL27)等と同様に、土器片再利用の痕跡の可能性が高い。15は壺胴部破片で、刻み4類が施文される。また、16・17は同一個体である。無文の甕底部(19)も出土している。

ST01 (第81図、PL17)

Pit7埋土出土の壺胴部小破片(20)。胴上部からの櫛描横羽状文に加え、胴部最大径には刻み1類がめぐる。内面は丁寧にミガキ調整し、外面は明確にヨコハケを残す。

ST08 (第81図、PL17)

西側のPit36出土の21は、横走沈線文の区画に押引列点文2行と櫛描直線文aを充填する壺胴部破片。Pit16出土の壺口縁部破片22は、大きく外反し口唇部に三角形の小突起を貼付しLR横繩文を施す。

ST24 (第81図、PL17)

23は、Pit4の検出面より出土の2+4装飾帶で、横走沈線文aの区画内に櫛描直線文aとLR横繩文が施文された壺胴部破片。24は、Pit5出土で、横走沈線文a、押引列点文に刻み6類が施文された壺頭部小片である。Pit6出土の25は胴部の横走沈線文a区画に櫛描直線文a、その下部に押引列点文が施文された壺小片、26は口唇部にLR横繩文、胴部に櫛描横羽状文が施文された甕小片である。Pit1出土の27は、櫛描横羽状文が施文された甕胴部小片となる。

ST25 (第81図、PL17)

Pit7出土の28は、重三角文に押引列点文とLR横繩文を充填した壺胴部破片。29・30は、Pit4・2出土の壺底部破片であり、29にはLR横繩文が施文されている。

ST26 (第81図、PL17)

Pit7埋土出土の31は、太い櫛描横羽状文が施文された甕胴部破片である。内面が磨かれ、外面には炭化物が付着している。

SD01 (第81図、PL17)

32・33は同一個体で、埋土1層より出土した、口唇部にRL横繩文、胴部に櫛描波状文aを施した甕小片。34は櫛描横羽状文の甕胴部小片、35は内外面が赤彩された細分は不明な鉢底部小片である。

SD02 (第81図、PL17)

周溝南側3層出土の36は、横走沈線文aの上下にLR横繩文と押引列点文を施した壺胴部破片。同じく周溝南側埋土出土の37は、横走沈線文aの下部にLR横繩文を充填した壺胴部小片である。さらに、38は土層断面spCD1層出土の箆状工具による刻みを持つ櫛描横羽状文の甕胴部破片である。

SD03 (第81図、PL17)

埋土2層出土の39は、横走沈線文aにLR横繩文と押引列点文が施文された壺胴部破片、同じく40は連弧文aにLR横繩文を充填した壺胴部破片である。双方とも表面がミガキ調整される。北側・南側周溝

埋土1層出土の壺胴部破片、北側のものは櫛描波状文a(41)、南側のものは櫛描縱羽状文(42)の文様を持つ。43は西側周溝1層出土の、LR横縄文に直線的な連弧文aを7条施した鉢Aの口縁～体部破片。同一個体と思われる破片が、同じグリッドの上層の遺物包含層から出土し、並べて図示した。壺の口縁部との見方もあり、新潟方面から搬入された土器の可能性が考えられる。

SK176 (第82図、PL17)

44は検出面出土、横走沈線文a(2条)にLR横縄文(2種)と押引列点文を施した壺胴部小片。

SK180 (第82図、PL17)

45は埋土出土、横走沈線文aの区画に櫛描沈線文aと押引列点文(2行)を充填した壺胴部破片。

SK347 (第82図、PL17)

46は埋土中央上層出土、内外面がミガキ調整された無文の片口鉢と考えられる口縁部～体部破片。

SK360 (第82図、PL17)

47は埋土出土、LR横縄文に刻み4類、その下部に変形工字文を施した壺小破片。

SK373 (第82図、PL17)

51は埋土上層出土、内外面がミガキ調整された壺胴部下半～底部破片。

SK396 (第82図、PL17)

48は埋土出土、横走沈線文a(3条)に重山形文と押引列点文、短斜線文b(2行)の壺胴部破片。

SK423 (第82図、PL18)

52は外面が丁寧にヨコミガキされた無文の壺であり、胴部下半のみが残存する。内面にヨコハケを残し、外面には赤彩がわずかに残る。

SK465 (第82図、PL17)

49は埋土出土、横走沈線文a(3条)の間にLR横縄文(3段)と短横線文を充填した壺胴部破片。

SK529 (第82図、PL17)

50は埋土出土、口唇部に刻み3類、胴部上位に櫛描垂下文a(4列)と櫛描直線文aが施された壺口縁部～胴部破片。

SQ01 (第82図、PL18)

複合鋸歯文を受け口の口縁部に帯状に施した壺(54)、無文帯がある横走沈線文aに連弧文aが付く壺胴部破片(53)、そのほか垂下文aに棒状工具による連続刺突文(56)、櫛描直線文aに短斜線文b(57)、重三角文を櫛描直線文a等で充填する(58)壺胴部破片を図示した。壺は、口唇部にLR横縄文を施し胴部上半に櫛描横羽状文、胴部最大径部分に刻み3類を持つ個体(55)、櫛描横羽状文(59・60)、櫛描縱羽状文(61・62)の破片がある。62は、胴部上半に多量の炭化物が付着しており、炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析を行なった。

⑤ 遺構外出土土器 (第82～91、PL18～25) (註14)

壺(第82図63～66、第83図67～78、第84図79～90、第85図91～94・96～133、第86図134～169、第87図170～184、PL18～22)

1619点出土。使用されている施文具が確認できたものは、沈線文系と櫛描文系を比べると、沈線文系が多数を占める。

以下、胴部にみられる文様を中心に主要モチーフによる分類を行ない、壺の様相を示す。なお、無頭壺、長頸壺と呼ばれる小形土器についても併せて記述する。

壺には、範状および棒状工具による沈線文で主要モチーフを描く土器と、簾状工具を用いて櫛描文を描く土器がある(第75図)。沈線文で変形工字文を描く例として63・67・68・118～121・123～125・127～

129・133・136・179があり、同じく沈線文で連弧文を描く例としては71・81・126・130・131・137・150・154～156・164・165・177がある。重三角文のモチーフをもつ例として130・131・134・172～176、重山形文のモチーフをもつ例として122・167・178がある。重菱形文のモチーフをもつ例は87のみである。

2+4の装飾帶に施文された、沈線による重疊区画で構成する文様帶モチーフを特徴とする土器をみると、均一性のある区画のものが73～75・89～92、幅広の均等区画となったものが79・84・88・135・139～145・170～172・180・181、無文帶の貫入はあるが有文部とほぼ同じ幅の横帶が多いものが80・112である。さらに、無文部（帯）を広くもつ例として、76・78がある。

特徴的な文様として、頸部の貼付凸帶に刻みを施す例として63・64・74・110・115・116があり、縄文のみを施す例は65・66・71である。また、頸部の押出凸帶に刻みを施す例として73・111・117がある。さらに、凸帶がなく刻みのみが施される70・96・98がある。99は、押引列点文のみが頭部に施文されている。複合鋸歯文を受口の広口壺の口縁部に帯状に施文された例として90がある。

さらに、頸部から延びる縱位区画（懸垂舌状文）が付加されるものとして138・162・170・182がある。そのほか、小破片で全体の文様構成が不明なものに、頸部に波状沈線文aをもつが下部文様は不明な86、櫛描文による波状の半円文が施文された151、口縁部に貼付突起をもち縄文のみが施文される108、横走沈線文に縱位の短い沈線刻みが施される132がある。また、148は横走沈線文に櫛描波状文a、152・153は押引列点文、158は刻み1類、166は短横線文が施文される。櫛描波状文cをモチーフとしてもつものに138・146・147・149がある。184は、縱位貼付文がみられる以外は不明である。

口縁部が無文で下部の文様が不明なものとして69・94、横走沈線文のみがみられ全体の様相が不明なものは97・157・159・160・161・163・168・169である。

無文の土器として72・77・85・103・106・183があり、183の外面には初圧痕が付く。

文様の判断できない底部破片が、82・83・100～102・104・105である。105は底部に初圧痕がみられる。以上の土器のなかで、133・140・151は文様、胎土が異なり北陸地方などの他地域から搬入された土器の可能性がある。

壺のなかには、無頸壺（113・114）もみられ、113は口縁部に蓋受けの無文帶があり、その下部にLR横縄文を施した凸帶を配する。114は小形で緻密なLR横縄文を胴部に施し、口縁部に薄い竪状工具による沈線と刻みをもつ凸帶がある。また、長頸壺と仮称した土器（93・107）も出土し、93は口縁部に4単位の縱長貼付凸帶に振幅の小さい連弧文aが施文される。107はLR横縄文と櫛描沈線文aが施文される。

壺（第88図185～199、第89図200～234、第90図235～272、PL22～25）

718点出土。胴部文様をみると、櫛描横羽状文260点、櫛描縱羽状文46点で、櫛描横羽状文が6倍以上の数となる。また、櫛描波状文28点、櫛描格子目文7点であった。

以下、胴部上半にみられる文様の主要モチーフによる分類を行ない、壺の様相の概要を示す。

竪状工具による櫛描横羽状文をもつ例は186・191～195・209～212・215～219・222～227・231～233・235～248・259であり、櫛描縱羽状文は185・196・255～258・260・263～265である。前述したが、237はオオバコの穂の回転によると考えられる擬縄文が施文された例である。さらに、245・246は文様構成がやや異なり、265は緻密な施文具・胎土等の違いから、北陸地方などから搬入された土器の可能性もある。

また、櫛描波状文を主要モチーフとして施文する土器は187・200・202・203・213・262・268～272であり、202が垂下文bとの組み合わせ、270～272が単独の波状文となる以外は、すべて垂下文aとの組み合わせとなる。さらに、櫛描直線文と垂下文aの組み合わせ文様をもつ土器は253・266・267である。

櫛描格子目文が施文された土器は197～199・249～252であり、197～199は胴部最大径部に刻み1類をもつ。縄文を主文様とする例として190・214・234がある。254は無文となる。

土器のなかには、器面に段をもつ例があり、193は口縁部直下、185・219・222・268は胴部中位に段をつくる。そのうち、185・219・222は胴部の段にさらに刻みを加えている。また、口唇部への繩文・刻みの施文、ユビオサエ（指頭押捺）は、ほとんどの土器で観察される。さらに、220・221・228～230は、胴部の刻みだけが確認された。228～230は、同一個体である。

201は受口の壺で、内外面丁寧にミガキ調整・赤彩され、特殊壺として報告した。

188・189・204～208は、無文の底部破片となる。

鉢（第85図95、第91図273～275・282～310、PL20・25）

70点出土。鉢A 10点、鉢B 5点、鉢C 13点の器種細分の内訳となる（なお、総数は非掲載資料も含む）。縦長豆粒状貼付文をもつ95は、図版上では壺の分類に含まれているが、口径等を考慮し鉢Aに変更した。以下、胴部上半にみられる文様の主要モチーフによる分類を行ない、鉢の細別に様相の概要を示す。

鉢A（275・288～293・295）は、LR横繩文が口唇～口縁部に施文された例として、288～290・293がある。291は、LR横繩文に複合鋸歯文を施している。292は、連弧文を主文様とし、内面上半の一部に赤色顔料付着。295は、口縁部に3条の横走沈線文aがめぐり穿孔がある。そのほか、無文の小形鉢275がある。

鉢B（296・307・308）は、内外面を丁寧にヨコミガキし赤彩を施した一群である。296は、外面からの2孔の穿孔あり。

鉢C（273・274・282～286・294・297～306・310）は、重山形文を主文様とした一群として273・同一個体である299～304がある。274は、4～5単位の変形工字文が施され、282・285・297・298・310は連弧文が主文様となった土器である。297と298は同一個体とした。また、283・284は、横走沈線文による区画に竪状工具の刻みを充填した文様をもつ例である。さらに、口縁部に穿孔がある286、折返し口縁をもつ294・305、細い竪状工具の刻みをもつ306がある。

そのほか、横走・縦走の沈線文を施した287、底部のみの破片309がある。

片口鉢

4点出土。遺構出土の2点以外は、図示できる遺物はない。

甑（第91図278～281、PL25）

6点出土。278～281は東区から出土し、SB01出土の318以外は遺構外遺物である。すべて焼成前穿孔で、279を除いて両面からの穿孔である。

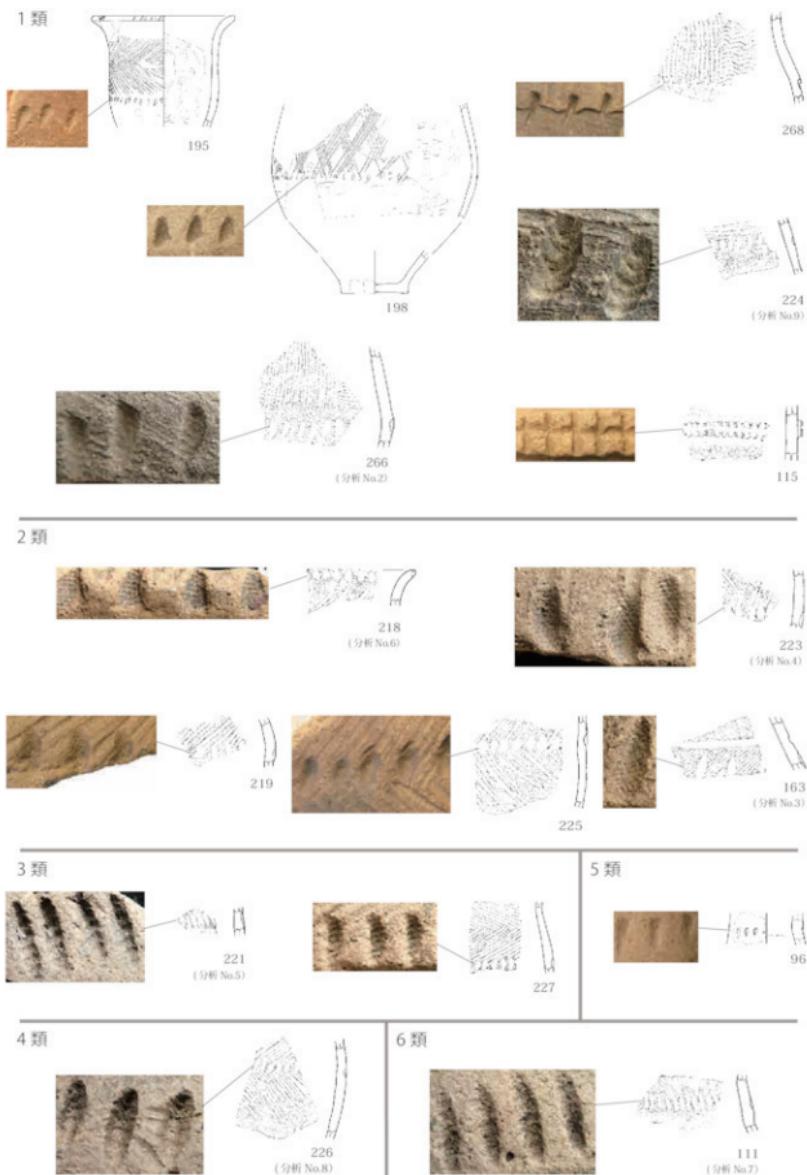
蓋（第91図276・277、PL25）

2点出土。放射状の沈線区画に押引列点文を充填した装飾的な276、つまみを持ち無文の277の2種がある。西区、東区からそれぞれ1点ずつ出土している。双方とも身部縁際近くに、1ないしは2孔の穿孔がみられ無頸壺に対応するためのものであろう。

⑥「刻み」文様の特徴（第74・75図）

栗林1式土器に特徴的にみられる「刻み」文様について、図化した全資料の詳細な観察を行なった。以下、各類の代表例を取上げ具体的に説明する。第74図の土器番号は、遺物図版の掲載図番号と同一である。併せて、業務委託の分析番号も記した。さらに、本文に取り上げなかった主な資料については、写真をDVDに収録した。

1類：竪状工具による文様。195は壺胴部に先端円形の工具を右から左方向に施文。198は壺胴部に先端の細い工具を右から左方向に施文。266は壺胴部にハケ調整に使用した工具と同一の工具を右から左方向へ施文。板状工具にも類似する（分析No.2）。268は壺胴部に先端が細く鋭い工具を右から左方向へ施文。224は壺胴部に先端が細い工具を下から上へ押引したものを左から右方向へ施文（分析No.9）。115は壺頭部に横走沈線文を引き、その上に左から右方向へ施文。



第74図 栗林1式土器にみられる「刻み」文様の種類

2類：ハンノキ属雄花序の冬芽による文様。218は壺口縁部に右から左方向に施文（分析No.6）。223は壺胴部に左から右方向へ施文（分析No.4）。219・225は壺胴部に右から左方向へ施文。163は壺頭部に右から左方向へ施文（分析No.3）。

3類：軸に紐を右回転で巻きつけた工具による文様。221は壺胴部に左から右方向へ施文（分析No.5）。227は壺胴部に右から左方向へ施文（分析No.1）。

4類：軸に紐を左回転で巻きつけた工具による文様。226は壺胴部に左から右方向へ施文（分析No.8）。

5類：板状工具（先端を平らに加工した木口）による文様。96は壺頭部に右から左方向へ施文。箆状工具に類似するが、より直線的な文様となる。

6類：箆状工具による文様。111は壺頭部に右から左方向へ施文（分析No.7）。分析では、軸に紐を右回転で巻きつけた工具による文様とされたが、肉眼で再確認した結果、丸紐状の膨らみではなく箆状の痕跡が観察されたことから箆状工具による文様に再分類した。

「刻み」文様は、いままでの弥生土器研究において、一様に「箆状工具による刺突文」等として報告されることが多かった。本報告での観察によって、その文様も数種に細分される可能性が指摘できた。そのうち、従来から箆状工具とは異なる施文具による文様として考えられ、「平織の圧痕」（榎原1988）、「網状の圧痕」（鶴田2012）として報告されていた文様が、本報告で2類に分類した「ハンノキ属雄花序の冬芽」という遺跡周辺に繁茂していたと考えられる植物（註15）の圧痕である可能性が高いことが判明した。ハンノキ属には様々な樹種があり、また同種でも成長段階で圧痕の形、大きさが変わってくることから、どの種の花序を使用したのかを特定することは難しい（註16）。

本遺跡では、栗林2式以降に散見されるオオバコが施文されたと考えられる文様は1点のみ（第90図237）であり、ハンノキ属を用いたと思われる文様5点に比べると少数となる。この出土頻度の差は、栗林式土器のなかでも時期によって施文に使用する植物の選択がなされていた可能性を示唆しているのかもしれない（註17）。しかし、わずかな出土量であり、今後の同種資料の増加に期待するところが大きい。

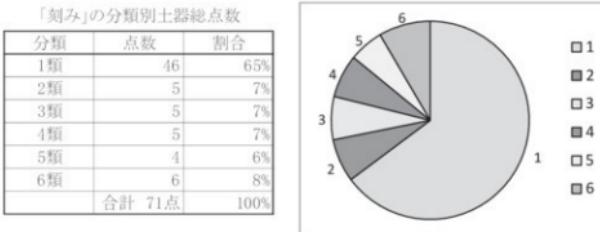
第75図は、統計的に「刻み」文様についてまとめたデータである。やはり、従来の弥生土器研究のとおり「箆状工具」を施文具とする文様が最も多い。今回、「刻み」文様として細分を行なってみたが、3・4類に分類した「軸に紐を巻き付けた工具」による文様等、今後再考していく必要性があると考える。

（2）土製品（第81・92・93図、PL17・26・27）

弥生時代中期後半の土製品には、土器片を再利用した製品と不明な製品がある。今回、土器片を再利用した土製品のなかに、土製円板とともに、「磨痕をもつ土器片」4点を抽出した。

①「磨痕をもつ土器片」（第81図8・第93図330～332、PL17・27）

栗林式の壺胴部および片口鉢口縁部破片の一側面に磨痕が残る資料である。330・331は本来の壺胴部



第75図 「刻み」文様の種類集計

破片の上下からすると左側面に横方向の磨痕が残り、332は上部に横方向の磨痕が残る。前者2点は壺の内面、後者は外面に磨痕が顕著に残存する。331・332は反対面にも磨痕がみられる。さらに、332については壺胴部破片の上部に磨痕があることから、擬口縁の可能性もある。もう1つの8は、ほかの資料と異なり、片口鉢口縁部の内面に横方向の磨痕がみられ、左・右・下の破片と接合し大破片となる。

管見の限り、同時期に類似する出土例はないが、他時期の類似する例として、長野市篠ノ井遺跡群の弥生時代後期箱清水式期の「土器片製半円板」がある（西山1997）。箱清水式土器の土器片を使用し、半円板形に整形される。断面に擦痕を残し、直線部分が弧状になる場合もある。大きさ的には本遺跡例より大きなものもあり、452点と出土点数が多い。さらに、ほとんどの資料が土器本來の上下に合わせて直線部分を作り出している。また、篠ノ井遺跡群と同時期で堅穴住居跡からまとめて出土した例として、大町市僧馬遺跡45号住居址がある（荒井1981）。

本資料4点は、指で摘まむのに適當な大きさであること、横方向の磨痕が残存すること、磨痕面がやや湾曲して土器の器面の湾曲に合うという共通の特徴が確認できる。破片を工具として仮定した場合、土器の器面を粗く磨き、平滑にする等の調整に使われた可能性を想定することができる（写真）。本資料例は、他遺跡に類似がなく比較検討ができなかった。今後、各地で土器片の詳細な観察が進み、資料が増加することを期待したい。

②土製円板（第93図333～335、第92図337・338、PL26・27）

土製円板として確認した遺物は、中野市試掘資料分も合わせて5点である。333のみが、壺胴部破片を隅丸方形に整形し、中央に両面から穿孔する。紡錘車としての用途が想定される。そのほかの4点（334・335・337・338）は、壺胴部破片の再利用品である。周辺に磨痕があり、不整円形を呈する。335は333に形状が類似し、上下部が平坦となる。

③不明土製品（第93図336、PL27）

土器の口縁部に類似するが、中央が隆起し眼鏡状の楕円形貼付が左右対称的に2か所に付く。人面を表現した可能性もある。



仮称「土器器面調整具（330）」使用方法想定写真

（3）石器、石製品、ガラス製品（第69・70・93図、PL14～16・27）

石器類は、大型蛤刃石斧などの磨製石器のほか、スリキリ具、刃器、敲石などの加工工具類が出土したが、出土量は少ない。図版については縄文時代の項にまとめて掲載したが、縄文時代の石器として記述した資料のなかにも、当該期の資料が含まれる可能性が高い。なお、出土遺構が明確なものについては、遺構名を実測図の右下に記した。そのほか、弥生時代の遺物包含層より、碧玉製の管玉、コバルトブルーのガラス小玉の玉類も出土しており、あわせて記述する。

以下、弥生時代に属すると考えられる石器、石製品、ガラス製品について、器種ごとに概観する。個別の計測値等の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に示し、そのほかの非掲載石器、剥片観察表は添付DVDに掲載した。

①大型蛤刃石斧（PL15～(1054)・(1084)）

2点とも、東区の表面採集資料である。(1054)は刃部破片で、刃は極めて鋭利である。(1084)は基部に敲打痕が残り刃部の一部が欠損する完形品であり、敲石としての使用の可能性もある。2点とも輝緑岩製の小形品である。なお、(1084)の実測図はDVDに収録した。

②刃器（第69図14、PL16、PL16-(1069)・(1112)）

5点出土。すべて輝石安山岩製。14はSB02より出土した、扁平な大形礫表面の破片。表面はツルツルに摩耗しており、原形は砥石または台石であったと考えられる。破損した破片を刃器として再利用したものと思われる。刃部は極めて鋭利で、わずかに摩耗したようにみえる。(1069)は板状の剥片素材を利用したもので、刃部とみられる部分を一部に残し破損している。刃部使用痕は顕微鏡観察ではないが、わずかに摩耗している。被熱し変色する。(1112)は(1069)と同様な刃器の小破片。

③スリキリ具（第69図12、PL16）

2点が、東区上位段丘南端の弥生時代の遺構検出面より出土。12は横長剥片を素材とし、刃部と反対側を丁寧な刃つぶし加工で弧状に仕上げている。断面V字状の刃部は、やや内湾するほど摩耗したスリキリ痕を明瞭に残す。ほぼ完形品。なお、刃部のみ残存する片岩製の(1067)は、実測図をDVDに収録した。

④敲石（第69図16・17、第70図19・21、PL14・16）

13点出土。ST15Pit3出土の16は砂岩製の扁平で円形の川原石を素材とし、縁辺部を使用している。重量は90gと軽量だが、加撃による破損がみられる。17はSB02出土、こぶし大の川原石（註18）を利用し、端部を加撃し使用している。19は石英閃緑岩製（註19）で、重量は241gを量る。長軸の先端部側部に加撃による剝離痕がみられる。SD01出土の21は、輝石安山岩製で重量は856g。長軸の両端部に加撃痕がある。ことに下方の端部は加撃に加え摩耗の痕跡がみられる。

⑤管玉（第93図1、PL27）

東区中央下位段丘のⅢa層から、1点出土。緑色凝灰岩製（註20）で、長さ19.5mm、幅6.7mm、両面穿孔で ϕ 2~3mmを測る。

⑥ガラス小玉（第93図2、PL27）

東区南側下位段丘のⅢa層から1点出土。コバルトブルーで長さ5.8mm、幅4.5mm、穿孔 ϕ 1~2mmを測る。筒形をしており、その中央部分に切り込み状の溝がある。2つに分割し、ビーズ玉状の製品2個に仕上げる予定のものなのか、詳細は不明。

3 古墳時代

（1）土器（第94図1~7、第95図8~12、PL27・28）

壺、高杯、壺形壺などがありつつあるが、その大部分は古墳時代中期SK191の出土であり、すべて接合部で切り離された（破碎された）状態の破片であった。

①壺（第95図10・11、PL28）

すべてが遺構外からの出土である。10は南区東端出土の折返し口縁の壺で、口縁部破片のみが出土している。折返し部はやや雑な作りであるが、内面は良好にナデ、部分的にミガキ整形される。11は東区下位段丘南側出土の微小な破片。口縁部の破片とみられ、形状から瓢形の壺口縁部破片を推定した。内面は良好にナデ整形され、外面は一本沈線がめぐりミガキ整形される。弥生時代終末から古墳時代前期初頭頃の所産であろう。

②壺形壺（第94図6・7、PL27）

2点ともSK191から出土している。6は口縁部が直口し、胴部は球胴状であるが、下半部がやや屈曲をみせる。外面はハケ調整の後、丁寧にミガキ調整される。7は6と同形の口縁部破片、頭部の接合部で切り離されたものと考えられる。

③甕（第95図12、PL28）

12は東区下位段丘中央付近出土の甕で、同一個体と考えられる破片17点がある。接合できる大形破片を復元実測した。口縁は緩やかに外反し、胴部は球胴状となる。内外面とも細かなハケ状工具で調整される。

④高坏（第94図1～5、第95図8・9、PL27・28）

第95図8・9の2点は、いずれも東区下段丘中央付近で出土し、弥生時代終末から古墳時代前期初頭に位置づけられるか。8は内外面とも赤彩され、丁寧にミガキ調整されている。口縁部はラッパ状に開き、口唇端部はやや外削ぎ状に作られている。脚の大半は欠失し、円形の穿孔が2か所（3か所の可能性もあり）に確認される。9は口唇端部外面を横方向に強くナデ成形し、薄く積み上げ状に仕上げられている。鉢の口縁部破片の可能性もあるか。

第94図1～5は、SK191から出土した古墳時代中期初頭の高坏。4点の坏部破片と2点の裾部破片がある。特筆すべきは土坑内上層からの出土で、すべて坏部・裾部と筒部との接合部付近から切り離され（破碎され）、筒部のみが抜けている。4の上下や2と5がそれぞれ同一個体の可能性が高い。いずれも内外面ともに良好にミガキ調整される。

（2）鉄製品（第94図1、PL28）

SK191から、「ロクロガンナ」（註21）と考えられる鉄製品が、1点出土している。全長285mmを測る完存品とみられる。錆化が激しく、先端部の残存状況はレントゲン撮影でもやや不鮮明である（第94図）。肉眼観察の限り、先端部はやや丸みのある四角形状、刃部は横断面が凸レンズ状をした両刃で、14mmを測る。基部の横断面は扁平な四角形状を呈する。SK191は形状から、古墳時代中期の墓坑と捉えており、この「ロクロガンナ」は坑底面近くから出土したことから、副葬品と考えたい。

弥生時代中期後半の鳥取県青谷上寺地遺跡、古墳時代前期（4世紀）の京都府長岡京市长法寺南原古墳等から、類似する遺物が出土し、呼称的には「棒状品」「特殊な棒状鉄器」として報告されている（村上ほか2003：217-342）。当該時期の資料としては、県内初出である。



第76図 古墳時代グリッド別土器分布図（遺構出土土器除く）

4 平安時代

① 土器 (第96図、PL29)

土坑、焼土跡の遺構が集中する東区の下位段丘中央に遺物も集中する。特に、SF02～04、鉄滓が出土したSK361が所在する周辺に多く出土した。

② 坯 (第96図1・6～10・14、PL29)

1は「ウ」冠状の墨書、14は「」状の墨書のある土師器坏片で、1はSK205から出土している。7は灯明痕と底部糸切りの失敗痕跡を残す例で、浅く小ぶりである。10世紀末～11世紀の平安時代後期の所産であろうか。

③ 黒色土器A (註22) (第96図5・11～13、PL29)

11は坏で、5及び12は内面に放射状の暗文がある塊である。13のミガキは明確ではない。いずれもSF03周辺から出土している。9世紀代の年代を推定する。

④ 盤 (第96図2、PL29)

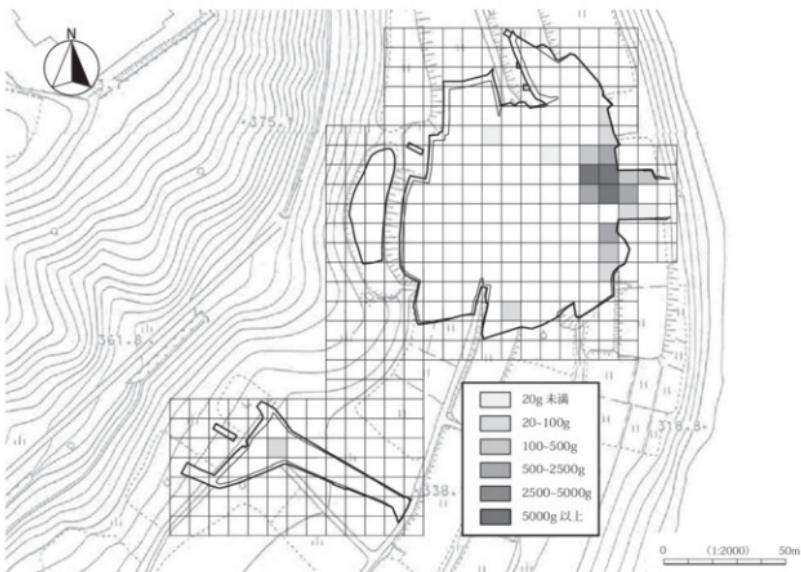
坏よりも口径が大きく深い器形であることから盤（鉢）とした。10世紀代に位置づけられるか。

⑤ 齋 (第96図3・4・15・16・18・19、PL29)

4はタクミ目を残す胴部破片であり、3は口縁部の破片。ともにSK318から出土している。10世紀代と考えられる。また遺構外から出土した4点は、その器形から11世紀代に入る可能性が高い。

⑥ 刃釜 (第96図17・20～22、PL29)

17は回転ナデ調整で、ハケ目が強く残る口縁部破片、同一個体と考えられる胴部～底部破片3点(20～22)が出土している。11世紀代の可能性が高いか。



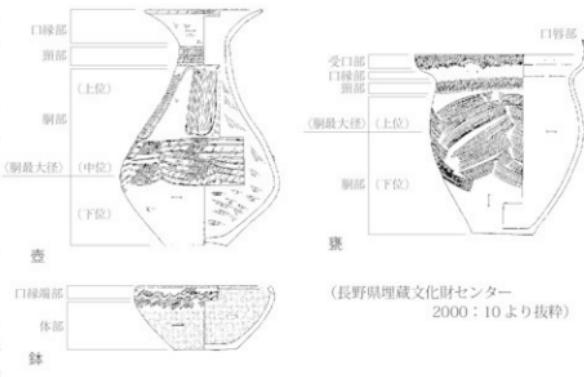
(2) 鉄滓（金床石小片を含む）(PL29-1~8)

遺物の大半が、SK361から出土した。さらに篩による水洗選別で、少量ではあるが粒状滓を含む鍛冶滓、砂鉄を抽出した。子どもの拳大ほどの椀形滓2点(PL29-1・2)以外は小片である。粘土が付着した鍛冶滓片5点(PL29-3~6・8)、鍛冶滓が付着した金床石小片1点(7)も出土した。すべての遺物が、鍛冶に関連する一括廃棄遺物である可能性が高い。

註

- 1) 土器について、複数の破片が接合した資料で器形復元が困難なものは、すべての拓本を示さず、その土器の特徴を示す破片を選び、1~数片のみを土器図版で提示したものもある。
- 2) 写真図版(PL14~16)中の()付きで表記した数字は石器の管理番号を示し、遺物図版に実測図を掲載していないものであることを示す。なお、()がない数字は遺物図版の掲載番号を示す。
- 3) 弥生時代以降の遺構および遺物包含層には、縄文土器が混入しており当該期の石器も多く混在している可能性がある。すべての石器について明確に時期を区分することはできないが、形態的に縄文時代の石器が多くを占める可能性があることから、石器図版は縄文時代の項にまとめて掲載することとした。また、石器の概要記載については基本的に縄文時代の項で行なうが、遺構出土遺物や弥生時代でのみ類例がみられる器種は、弥生時代の項で記述した。なお、敲石については、弥生時代の遺構からの出土遺物は弥生時代の項で記述したが、出土数は縄文時代と弥生時代の総数となっている。
- 4) 栗林式土器の変遷過程等を理解するために、文様帶概念(山内1964)を弥生土器に応用した分類基準(石川2002)を基本として、時期区分をした。
- 5) 数量の単位として「点」を使用したが、すべての破片について接合関係、同一個体である確認ができたわけではなく、あくまでも概数であり目安とする値である。

- 6) 栗林式土器について、器種の部位の呼称(第78図)、鉢形土器の細分(第79図)については、次回のとおり、松原遺跡の報告(長野県埋蔵文化財センター2000)に従う。



第78図 器種の部位呼称法

- は施文原体が細く山形が強調されない)、押引列点文、連弧文a、b、c(bは波紋状の文様が横方向に重なる、cはa文様が上下に反転した形)、重山形文、重三角文(三角形の底辺が内消するものと直線的な2種がある)、複合鋸歯文、重菱形文、コの字重ね文、変形工字文(工字状を呈し閉口・開口するもの、(隅丸)長方形、楕円形のモチーフなどバラエティに富む)などがある。
- 7) 松原遺跡の沈線文系には、横走沈線文a・b・c(bは2本セットで描かれ、cは連続した途切れ部をもつ)、波状沈線文a・b・c(bは2本セットで描かれ、cは波状の振幅が大きい)、山形沈線文a・b(bは山形の振幅が大きい)、鋸歯沈線文a・b(bは山形の振幅が大きい)。

は施文原体が細く山形が強調されない)、押引列点文、連弧文a、b、c(bは波紋状の文様が横方向に重なる、cはa文様が上下に反転した形)、重山形文、重三角文(三角形の底辺が内消するものと直線的な2種がある)、複合鋸歯文、重菱形文、コの字重ね文、変形工字文(工字状を呈し閉口・開口するもの、(隅丸)長方形、楕円形のモチーフなどバラエティに富む)などがある。

- 8) 松原遺跡の櫛描文系には、櫛描直線文a・b(bはヒゴが3本前後と少数のもの)、櫛描廉状文、櫛描波状文a・b・c(bはヒゴが3本前後と少数のもの、cは波状の振幅が大きい)、山形文a・b(bは山形の振幅が大きい)、短横線文、短斜線文a・b(bは刺突状に施文)、縱羽状文、橫羽状文、斜線文、垂下文a・b・c(aは直線文、bは波状文、cは先端が弧状となる)、などがある。

9) 本稿では、LR の単節縄文を横位方向に施文した文様を「LR 横縄文」、縱位方向に施文した文様を「LR 縦縄文」と呼ぶ。なお、LR、RL、RLR 等の縄文に関する熱い呼称は、山内清男の縄文土器の研究成果による（山内 1979）。千曲川上流の南大原遺跡では、栗林 2 式新段階が主体だが、やはり LR 横縄文が大半を占めると報告されている（鶴田 2016）。

10) 本稿では、土器器面の境界（区切り）部分に連続して印をつける意味合いを重視して、「刻み」という用語を用いた。棒状工具により、単独および区画文様内に充填する目的で突いた文様については、従来の「刺突文」を用いたが、点数は数点のみだった。

11) (株) バレオ・ラボの「レプリカ法による土器の施

文具痕の推定」で、想定された施文具（現生標本含む）を粘土板に押し当てる施文の再現実験・比較検討を行なった分析結果での分類基準に準拠し、加筆した。

12) 山内清男の文様帶概念（山内 1964）を応用し、た松原遺跡出土土器の分析（上田 1995、長野県埋蔵文化財センター 2000）、石川日出志の論考（石川 2002）に基づく。装飾帶の呼称については右図（第 80 図）のとおりである。

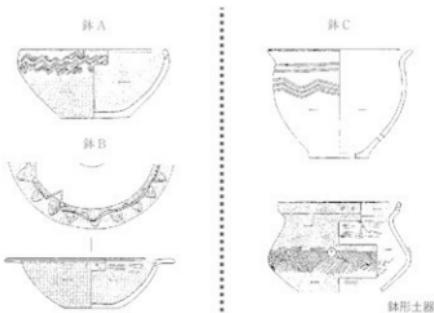
13) 0～5 のアラビア数字は、第 80 図の装飾帶を示し、文様がある装飾帶を [] 内に表示した。[2+4] は、2～4 装飾帶の連続した文様（横帯が重疊）、[3] は懸垂舌状文を主とする単位文様、[0] は無文を表現する（石川 2002: 55.56）。

14) 第 86 図 145 については、写真撮影後に同一個体であることが判明したため、写真図版には掲載していない。

15) 第 6 章科学分析に掲載した、平成 25（2013）年の（株）古環境研究所による花粉分析で、Ⅱ層（弥生～古代？）よりハンノキ属の花粉が検出されている。

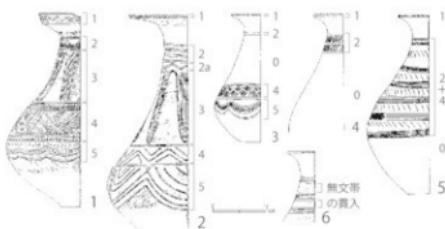
16) （馬場 2009）によると、ハンノキ属には、ヒメヤシヤブシ、ハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ、カラハハンノキ等がある。さらに、類似する花序を持つ植物に、カバノキ属のシラカンバ、ミズメ、ハシバミ属のハシバミ、アサダ等もある。また、東北大学植物園鈴木三男先生から「ハンノキ、カバノキ、ハシバミの『雌花被』」ということは絶対になく、雄花被がいずれも候補になる。ハシバミは毛がいっぱい生えているので狂痕には向かない。ということで、カバノキ属かハンノキ属の雄花序、果穂という事になる。』（2015.12.20）という指導を受けた。

17) 管見によると、ハンノキ属雄花序の冬芽を施文した文様は、本遺跡以外で千曲川下流域の飯山市小泉遺跡（飯山市教育委員会 1995: 156）、中野市栗林遺跡（檀原 1988: 24-42）、南大原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2016 報告書刊行予定）、長野市南曾峯遺跡（鶴田 2012: 110-125）、千曲川中流域の長野市塙崎遺跡群（現在発掘調査中）で抽出できた。それに対してオオバコ文は、千曲川下流域の中野市南大原遺跡、七瀬遺跡（後期）（長野県埋蔵文化財センター 1994: 489）、中流域の長野市松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2000: 111-150）、上流域の佐久市北西の久保遺跡（小山 1987: 99）、森平遺跡（水澤 2014: 171-175）、西近津道路群（後期）（長野県埋蔵文化財センター 2015: 341.357）、中・南信地域の岡谷市橋原遺跡（後期）（岡谷市教育委員会 1981: 138）、箕輪町箕輪遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2005: 217）と広範囲でみつかっている。さらに、



（長野県埋蔵文化財センター 2000: 15 より抜粋）

第 79 図 鉢形土器の細分



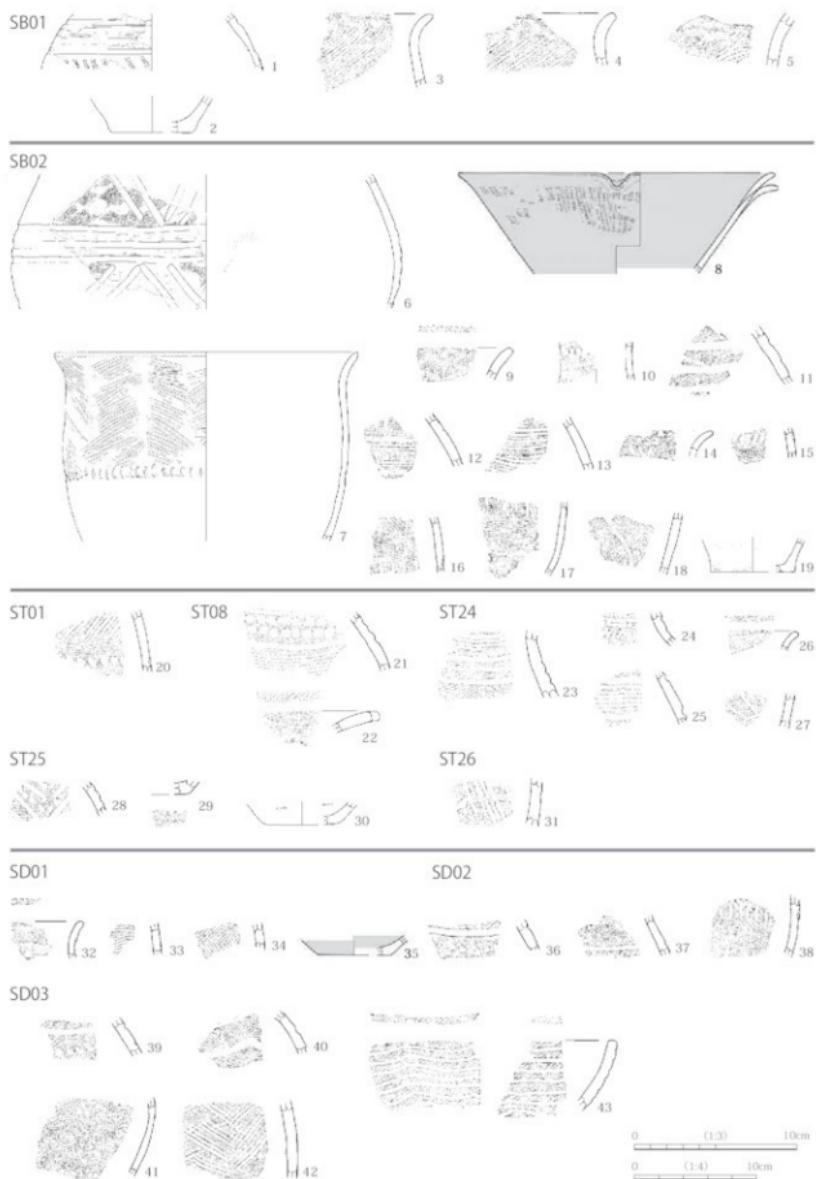
（石川 2002: 56 より抜粋）

第 80 図 装飾帶の呼称と構成

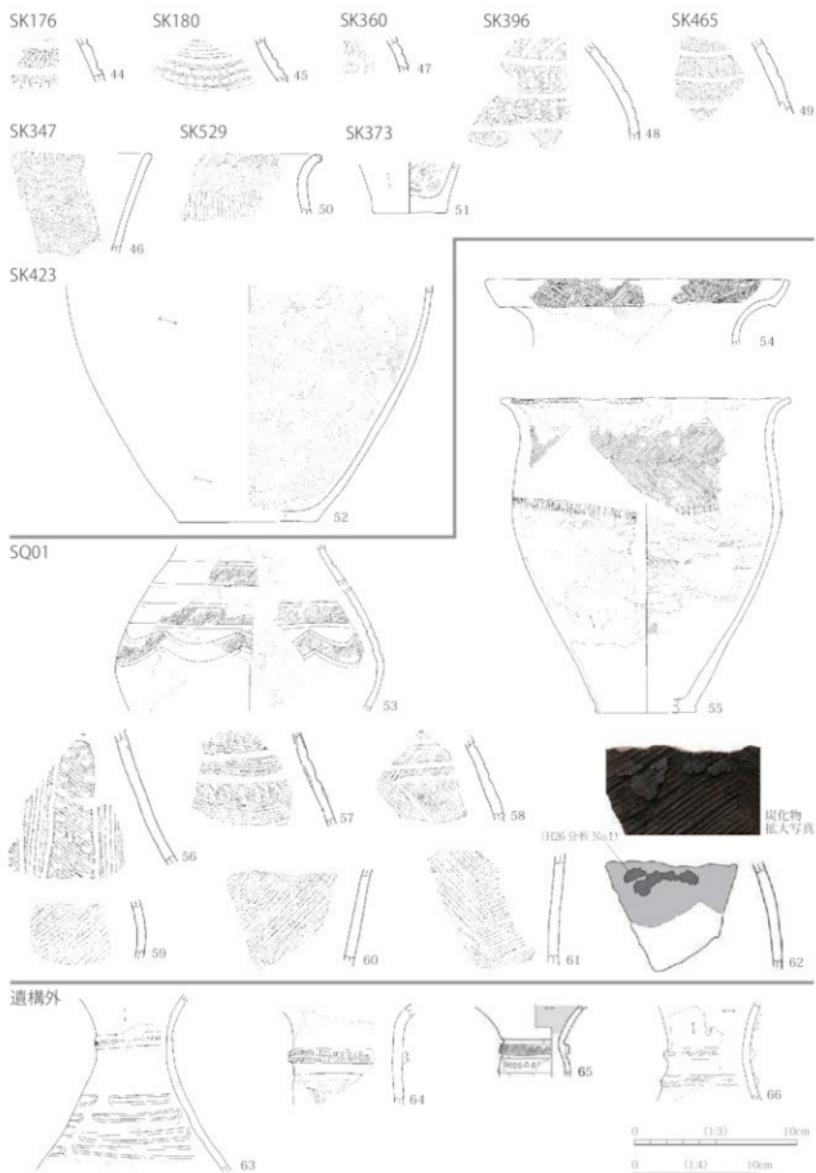
- 県外での出土例も千葉県をはじめとして、関東地方一円にみられる（大沼 2008：1013）。
- 18) 「山ノ内町方面起源の石英閃緑岩と考えられる。」(2015.1.16 明治大学中村由克客員教授指導)
 - 19) 「犀川上流北アルプス方面起源と考えられる。」(2015.1.16 同上)
 - 20) 「旧丸子町鳥羽山内村層起源と考えられる。」(2015.1.16 同上)
 - 21) 「先端の形が小さく、柄（身）のつくりからも『ロクロガンナ』の可能性が高い。柄（身）の部分の厚みは薄いが、人力で回すロクロなのでこのぐらいでも良い。木の柄を装着した可能性もある。おそらく使用最終段階の状態であろう。古墳時代中期には確実にロクロは存在するが、工具の出土例はほとんどない。大変珍しい、良い資料である。」(2014.3.23 工樂善通先生指導)
 - 22) ロクロの回転力を利用した土器器の内面をヘラミガキし、黒色処理したものを「黒色土器A」とする（長野県埋蔵文化財センター 1989：115）。

引用・参考文献

- 荒井和比古 1981 「45号住居址」『長野県大町市借馬道路緊急発掘調査報告書 借馬道路II』: 25-28
- 飯山市教育委員会 1995 「小泉弥生時代遺跡」飯山市埋蔵文化財調査報告書第42集: 156
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100: 54-80
- 上田典男 1996 「栗林式土器研究の一視点—松原遺跡の整理作業から—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4: 37-44
- 大沼忠春 2008 「特殊な施文具—魚骨文とオオバコ文—」『絶覧縄文土器』小林達雄編、アム・プロモーション: 1011-1014
- 岡谷市教育委員会 1981 「橋原遺跡」郷土の文化財 12: 138
- 桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3: 19-34
- 小山岳夫 1987 「北西の久保」佐久埋蔵文化財調査センター調査報告第8集: 99
- 樋原長則 1988 「遺物」『栗林Ⅳ 浜津ヶ池』中野市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書: 24-42
- 鶴田典昭 2012 「弥生時代」「南曾峯遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 93: 110-125
- 鶴田典昭 2016 「南大原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 寺島孝典・飯島哲也ほか 1993 「松原遺跡III」長野市の文化財第58集
- 寺崎裕助 1991 「縄文時代前期後半の格子目文土器について」『新潟県考古学談話会会報』8: 35-47
- 寺崎裕助 2011 「越後の縄文前期後半期土器研究の展望—刈羽式を中心に—」『第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題』: 45-73
- 徳永哲秀 1995 「箱清水式土器の施文具および施文法について」『長野県考古学会誌』75: 43-49
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 「遺物」「吉田川西遺跡 本文編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3: 114-119
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「栗林遺跡 七瀬遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19: 489
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「松原遺跡 弥生・縄文3 弥生中期・土器本文」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36: 111-150
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 「箕輪遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71: 217
- 長野県埋蔵文化財センター 2015 「西近津遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104: 341, 357
- 西山克己 1997 「土器片製品」「篠ノ井遺跡群 成果と課題編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22: 83-85
- 馬場多久男 2009 「花実でわかる樹木」信濃毎日新聞社: 117-126
- 水澤教子 2014 「小結」「森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107: 171-175
- 村上恭通・山村芳貴 2003 「農耕具」「考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品」小学館: 265-271
- 山内清男 1964 「文様帶系統論」「日本原始美術1」講談社: 157-158
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」先史考古学会

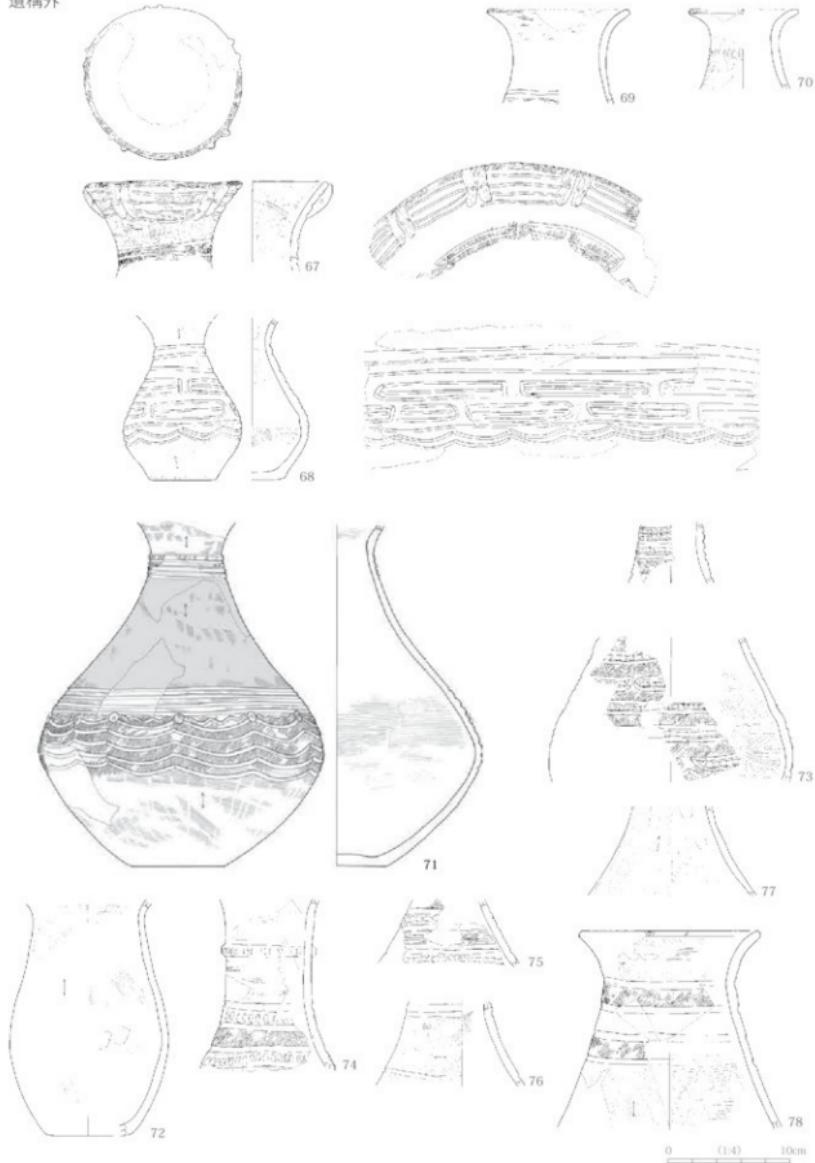


第81図 弥生時代SB、ST、SD出土土器



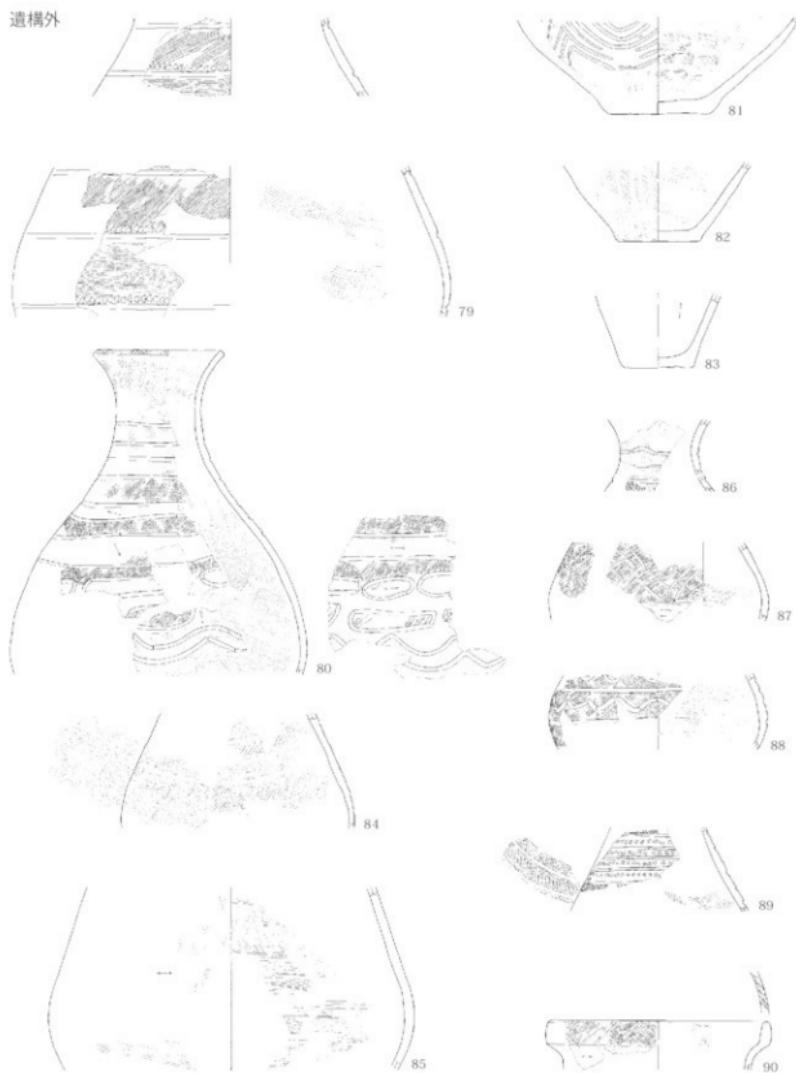
第82図 弥生時代SK、SQ、遺構外出土土器

遺構外



第83図 弥生時代遺構外出土土器(1)

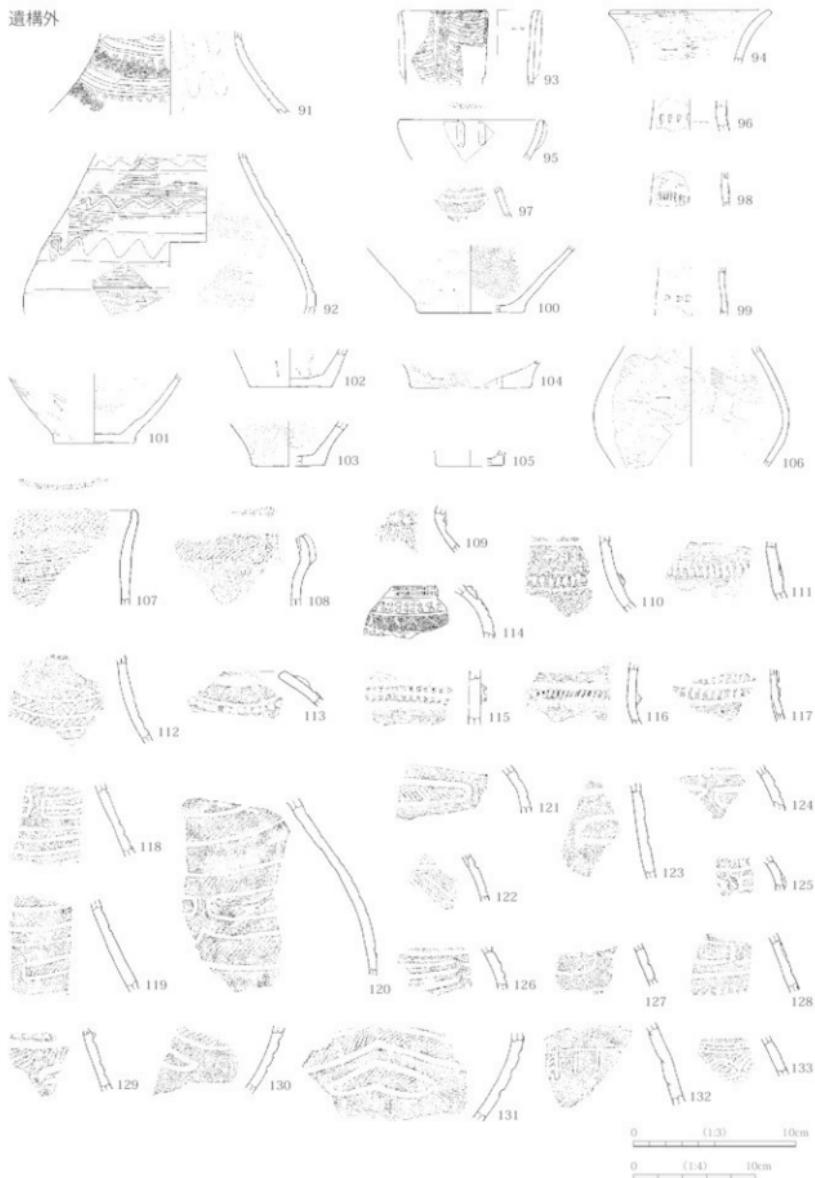
遺構外



0 (1:4) 10cm

第84図 弥生時代遺構外出土土器(2)

遺構外



第85図 弥生時代遺構外出土土器(3)

遺構外



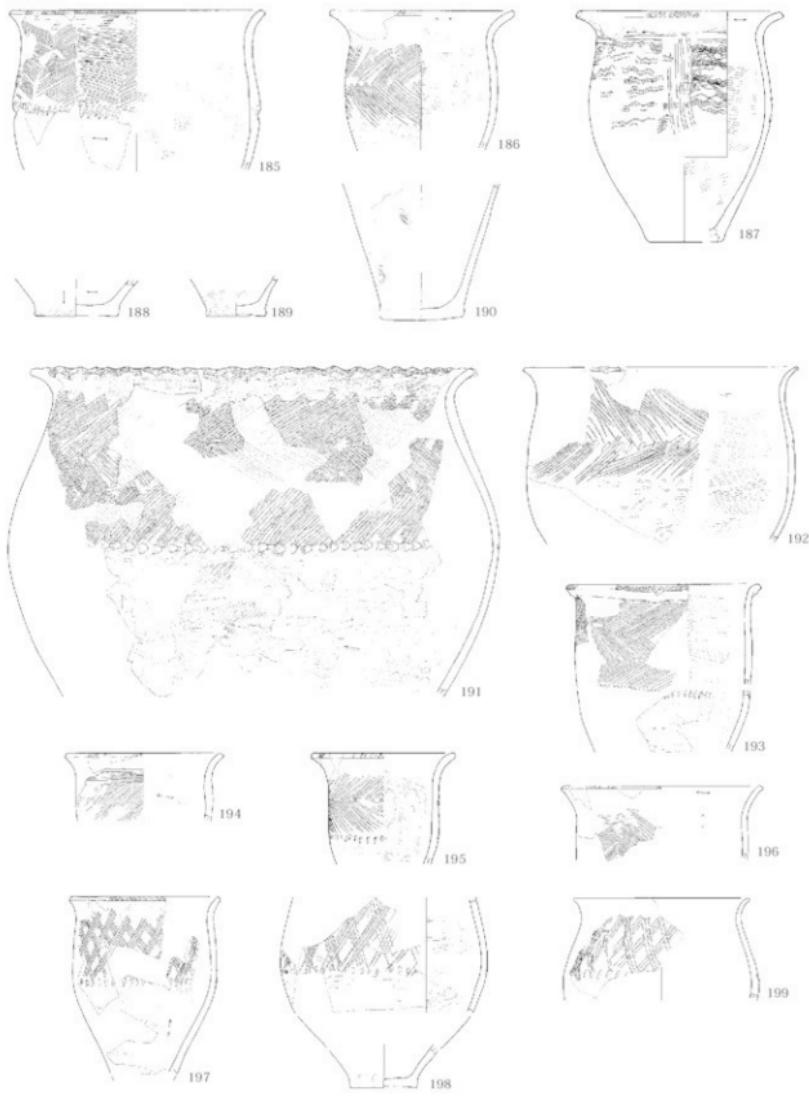
第86図 弥生時代遺構外出土土器(4)

遺構外



第87図 弥生時代遺構外出土土器(5)

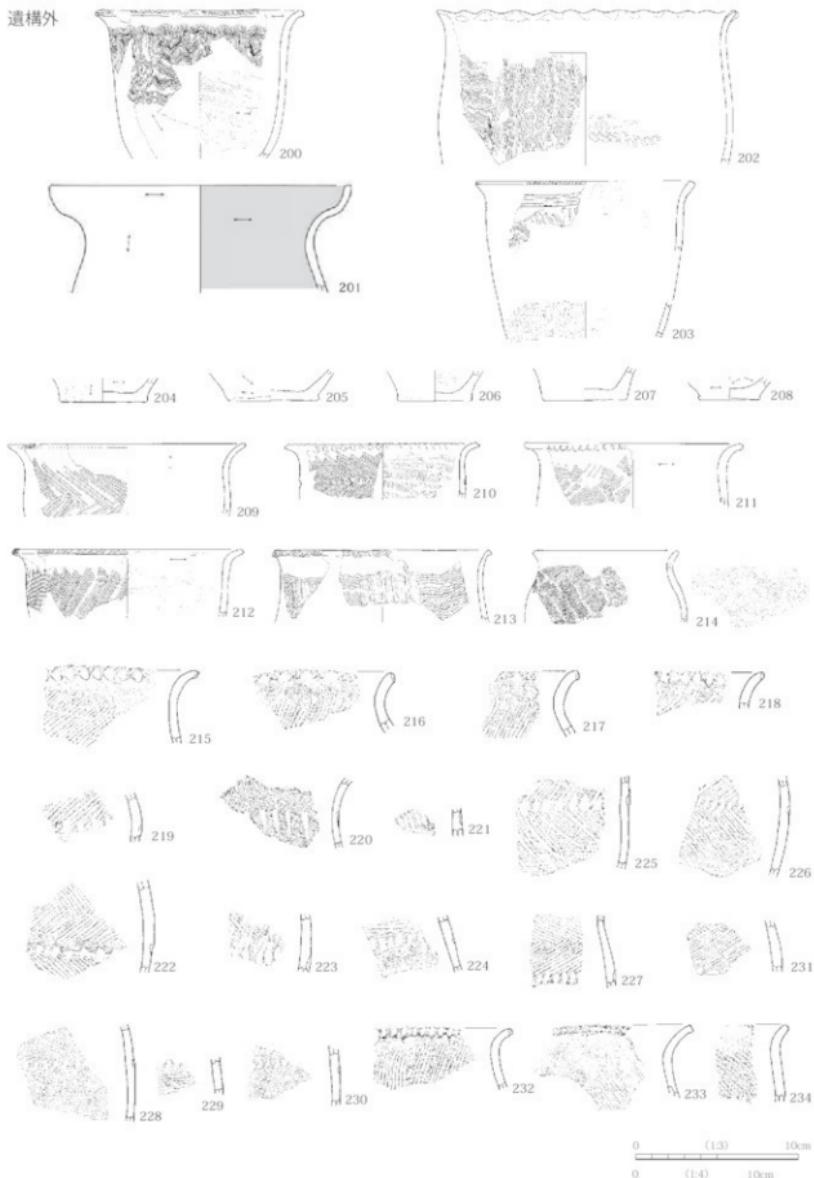
遺構外



第88図 弥生時代遺構外出土土器(6)

0 (1:4) 10cm

遺構外



第89図 弥生時代遺構外出土土器(7)

遺構外



第90図 弥生時代遺構外出土土器(8)

遺構外



第91図 弥生時代遺構外出土土器(9)

SB01

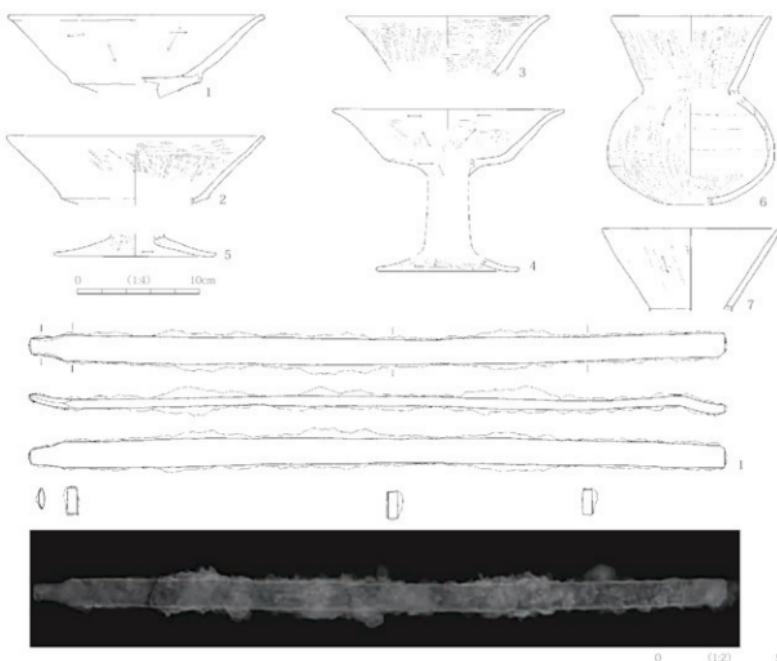


第92図 中野市試掘資料 (SB01 出土土器、土製品)

土製品

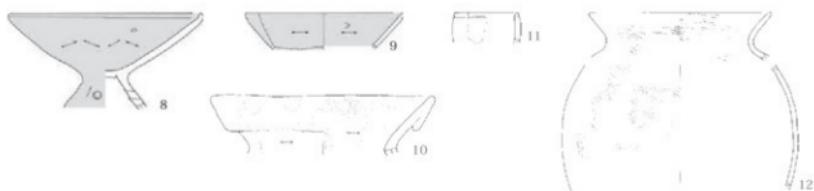


第93図 弥生時代土製品、石製品、ガラス製品

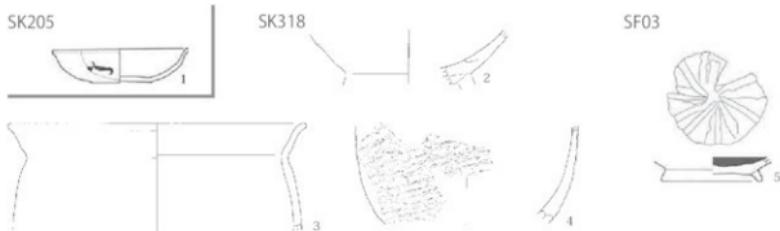


第94図 古墳時代SK191出土土器、鉄製品

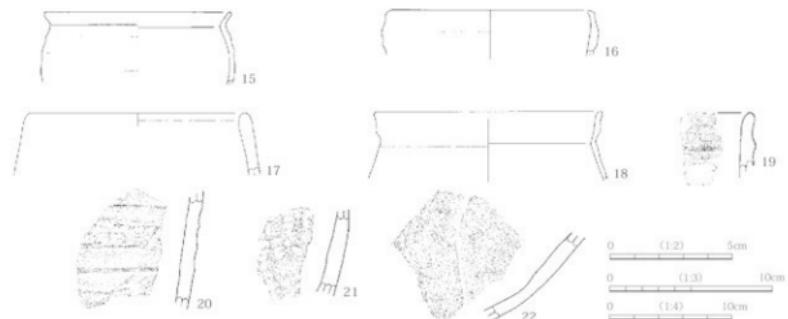
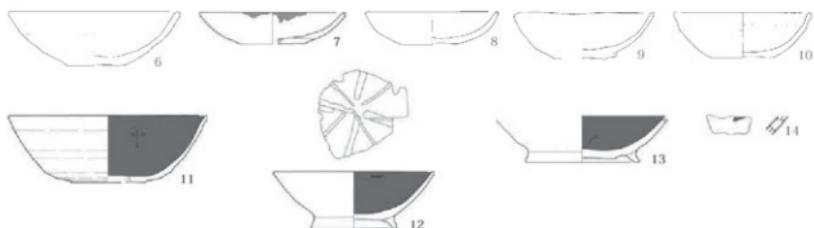
遺構外



第95図 古墳時代遺構外出土土器



遺構外



第96図 平安時代SK、SF、遺構外出土土器

第4章 壁田城跡の調査

第1節 遺跡の範囲と沿革・概要

1 遺跡の範囲

壁田城跡は、千曲川右岸の長丘丘陵北部に立地する。「武田信玄朱印状」(『諸家古案集』)により、川中島合戦時、武田軍の最前線として重要な拠点であったと推定されている。遺跡範囲は、『長野県中野市遺跡詳細分布図(改訂版)』(以下「分布図(改訂版)」という。(中野市教育委員会 2014))によると、城の主郭が位置する中央部分(本丸)と、北側、南側に飛び地で広がる範囲とからなる(第97図)。今回の調査区は、主郭から南へ約650m離れた長丘丘陵頂部および東側斜面部～山裾部・低地部(南側の飛び地)にあたる。

2 城跡の沿革・概要

当地を「へきだ」と呼称したのは、元徳元年(1329)の「諏訪上社五月会・花会・御射山頭役結番」(『守矢家文書』)に「部木田(へきだ)」と記載されたのが史料上の初見であるという。一方、長丘丘陵の最高所に古代朝廷による信越国境の蝦夷対策に関わる烽火台が設置されたという伝承から、金井汲次は、烽火台に関わる「官給田の火置田から壁田に転訛したという説」を紹介している(金井 1981)。

壁田城については、永禄9年(1561)の「武田信玄朱印状」によると、武田信玄が国人山田飛騨守らに対して宛行っていることから、この頃までに「高梨時代の城を武田方が拡張・修復した」(湯本 1981)という見方や、永禄11年(1568)の信玄による長沼城再建に伴って整備したという考えがある(酒井 2013)。一方、現地に残る歓状堅堀群を天文・永禄期の越後城郭の特色と捉え、上杉方によって築城されたという意見もあり(伊藤 1987)、築城もしくは修復、廃城に関わる定説はない。

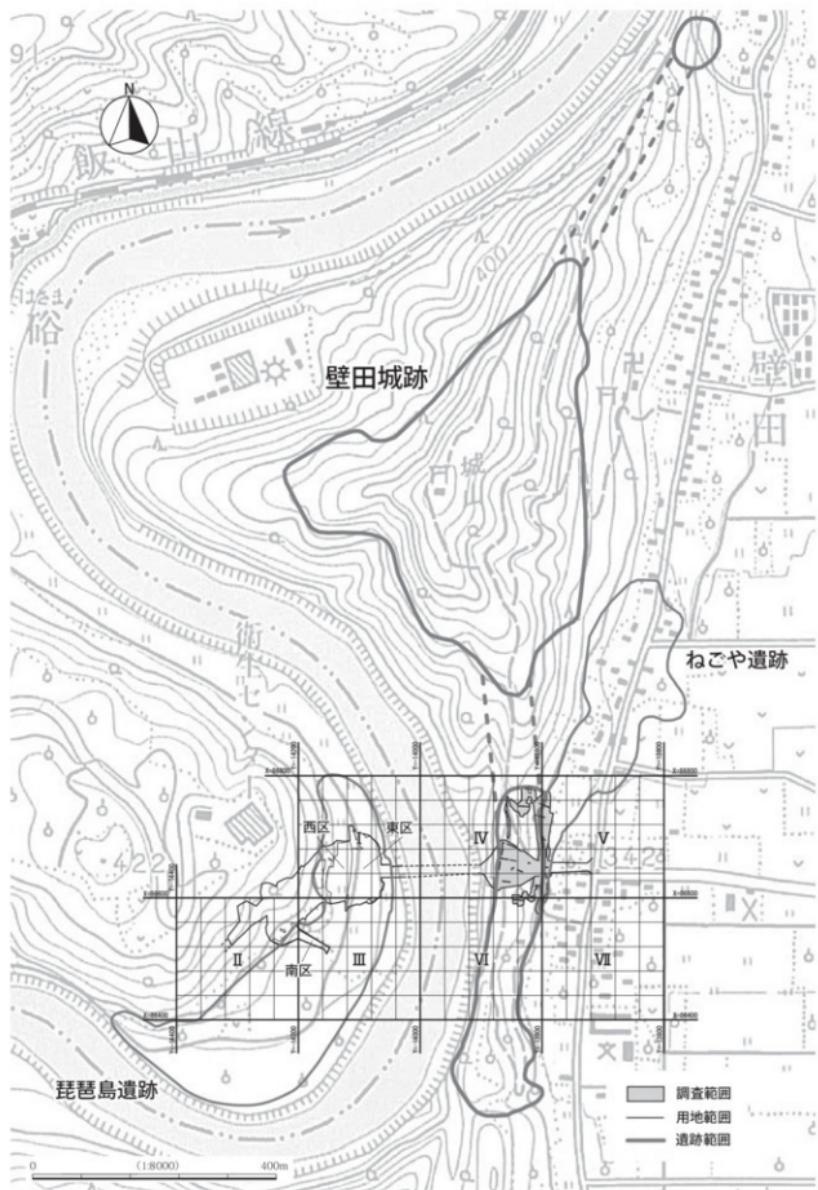
壁田城は、中野層状地と千曲川によって削られた急崖に挟まれた長丘丘陵上にあり、最高所に楕円形の主郭を築いている。北・南・西方の尾根は、堀切や土塁で区切った平坦部を造り出し、主郭と最低所の平坦部との比高は150mあるという。主郭の東側に3本、北側平坦面の東側にも7本の堅堀があり、また、南東の籠池辺にも小規模な平坦面が認められる。こうした遺構の特徴から、伊藤氏は前述のとおり上杉方の築城とみるが、放射状堅堀群との類似性から武田方の築城とする見方もある(馬場 1996)。いずれにせよ、遺構に対する所見は今後の詳細な調査と分析が必要である。

なお、南東麓には「郭清水(くるわしみず)」や「根小屋(ねごや)」の地名が残り、大甕や焼米、古銭等が出土しているという。「根小屋」は居館のあった所と推定され、市教委が2006年に登録した「ねごや遺跡」(中野市教育委員会 2006)に含まれる場所である。

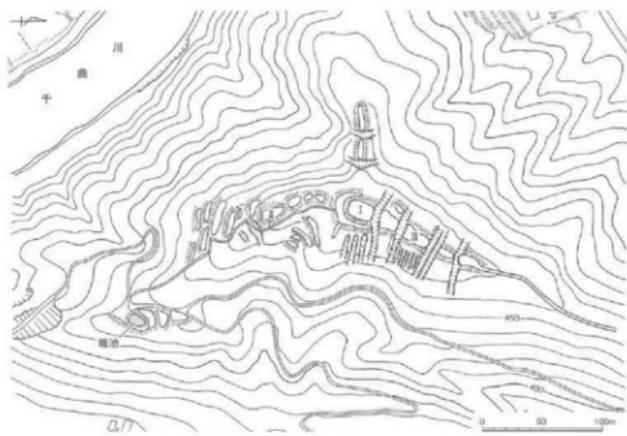
第2節 調査の方法と調査成果

1 調査の方法

確認調査は、はじめに千曲川に向かって断崖を形成する西側丘陵頂部から東側山裾部(低地部を含む)を踏査し、地表面観察を行なった。その結果、平場(平坦面)等の地形を考慮して決定した19本のトレ



第97図 遺跡範囲と調査範囲



第98図 壁田城跡概要図(酒井2013:33より転載)

ンチを入れて、遺構・遺物確認、土層観察を実施した(第99図)。次年度に予定される本格調査の遺構等内容理解のため、調査可能な斜面・平坦面にトレントを入れた。一部、正確な遺構確認のためトレントを面的に抜けた箇所もある(T11、T18、a地点)。

2 調査の成果

壁田城跡の調査成果は、大きく4か所に分けて説明できる。長丘丘陵の丘陵頂部(北側尾根部を含む)、斜面部、山裾部、低地部である。調査区全体の土層を大別すると、I層群：表土層(耕作土層、盛土層)、II層群：自然崩落土層(掘削土の堆積層を含む)、III層群・IV層群：地山層となる。また、トレント(T)、テストピット(P)は、共通する地形ごとに区分した6地区にまとめた(第100図)。

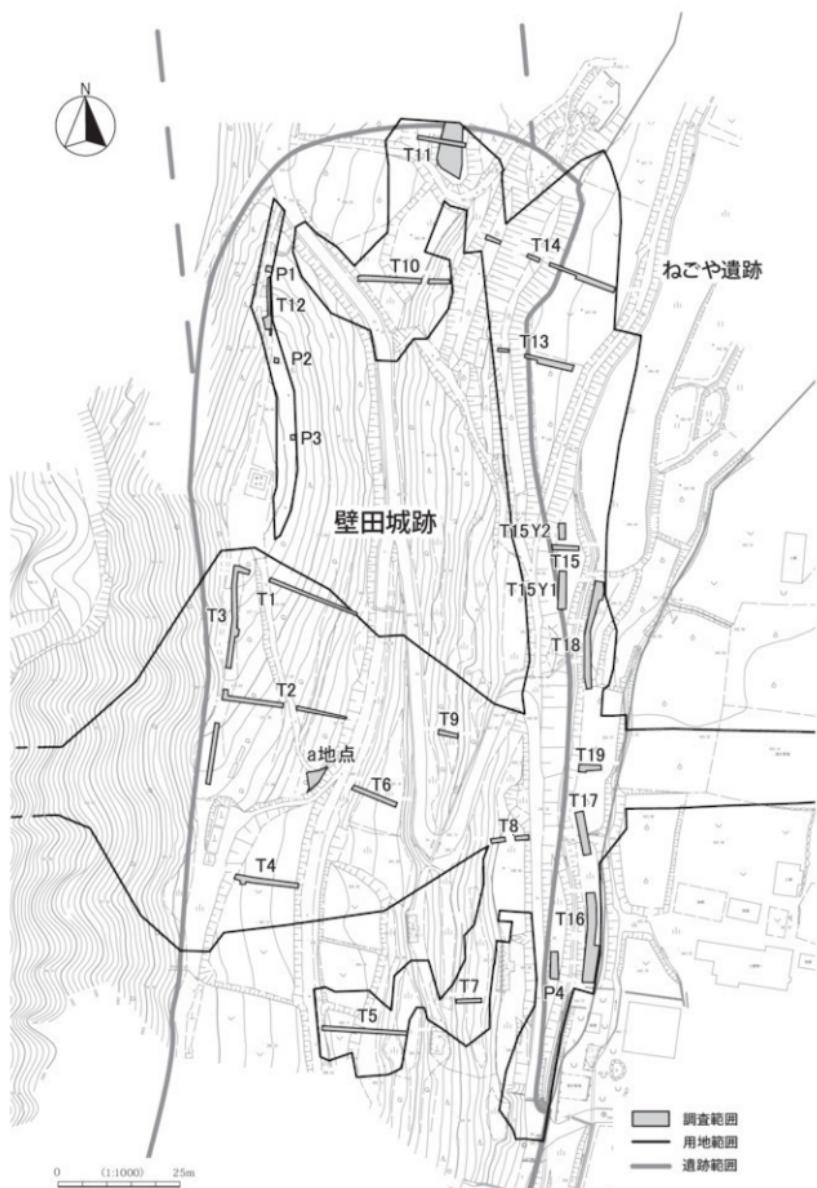
(1) 丘陵頂部・北側尾根部(T3、P1～3、T12)(第101図、PL30)

丘陵頂部をほぼ南北に走るT3では、固いIII層群の上にI層群が堆積する。同様に、北側尾根部に設定されたP1～3は、II層群を挟む部分もあるが、基本的に水性堆積の固いIII層群とI層群のみで構成される(ピット(P)の土層は共通することから、P2断面のみを掲載)。さらに、P1～3が設定された北側尾根部のT12からは、自然疊の集積も確認されている。丘陵頂部から北側尾根部にかけては、人工的な掘削等の痕跡は認められず、中世城郭に関わる施設もない。

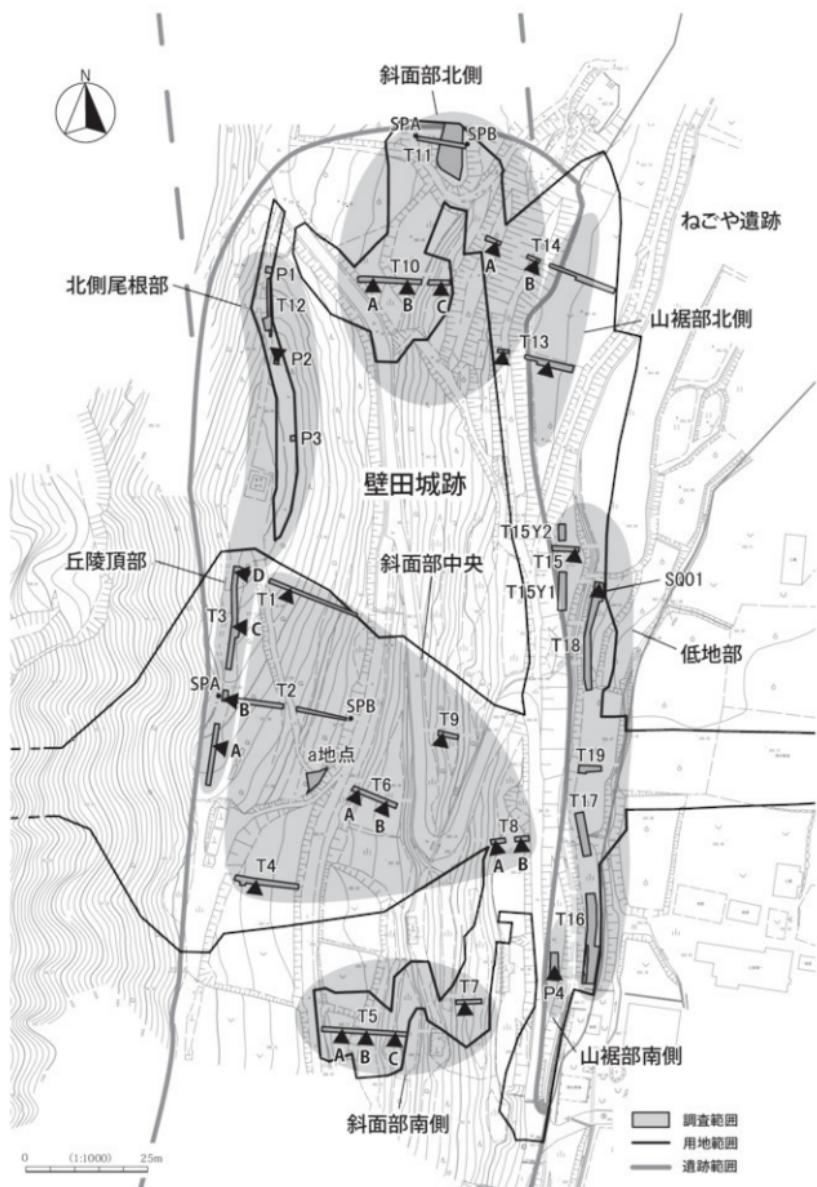
(2) 斜面部中央(T1・2・4・6・8・9、a地点)(第101～103図、PL30・31)

丘陵頂部から丘陵東側斜面部にかけて設定されたT1は、III層群を掘削した面に堆積したII層群を平らにして、幅2m前後の平坦面を6～7段造り出している。出土遺物はなく平坦面造成の時期は明確ではないが、現在の斜面の利用状況を考えると、おそらく近・現代に桑畠等の造成が行なわれた痕跡であろう。

T2は、斜面上部で5段の平坦面、下部に広い平坦面を持つ。上部では、II層群を削り平坦面を造り出している。下部では、最上位に1段の狭い平坦面を残すものの、下位は当初の平坦面を再度掘削し平坦面を抜けている可能性がある。出土遺物はなく平坦面造成の時期は明確ではないが、現地形の階段状の平坦面は果樹等の畑に利用されている場所が残存するため、畑地とするための造成であると考えられる。なお、現地形造成が中世までさかのばる痕跡は土層観察では認められない。近・現代以降の畑地造成と考えると、丘陵頂部に中世城郭に関わる施設が確認できなかったことと整合する。斜面中央では、中世城郭に関わる



第99図 壁田城跡全体図



第100図 壁田城跡トレンチ、ピット区分図

施設は認められない。

T4は、II層（II層群）（西端はIII層群）を掘削した面にI層群が堆積する。遺構・遺物はなく、風倒木痕が1か所確認されたのみである。造成の時期は不明であるが、T1～T3の状況から判断して、近・現代以降の掘削と推定する。なお、T2とのほぼ中間ある調査区a地点も同様の状況を示す（図省略）。

T6の土層観察から、IIIa・b層（III層群）ないしはII層（II層群）が削平され幅約8mの平坦面を形成し、上層にはI層群が堆積していることが確認された。削平（造成）の時期は不明であるが、南側のT5上段と一連の平坦面であり、遺物・遺構は認められることから、近・現代以降の畑地造成のための平坦面と考える。

T8の箇所は、現在樹齢10年前後の雑木林となる。明確な掘削面は認められないが、Ic層（I層群）上部にはId層（I層群）に似る黒色土が混じる部分が認められ、斜面上方のIc・Id層を削り斜面下方に盛土し平坦面を造成したと考えられる。ただし、Ic層の上下で明確な分層はできない。出土遺物はなく、他地点の平坦面造成の状況から、近・現代以降に造成された平坦面と判断した。

T9のII層（II層群）とIII層（III層群）との層界は明確で、II層がIII層の傾斜面に堆積した後、掘削されて平坦面が形成されたと考えられる。遺物もなく、I層群にしまりがないことから、近・現代以降の平坦面と判断した。

（3）斜面部南側（T5・7）（第104図、PL31）

T5の上段・中段は、Ic1層（I層群）からビニールが出土していることから、近・現代以降の造成（畑地）である可能性が高い。下段の造成土Ic3層（I層群）もIc1層（I層群）と一連の盛土と観察されることから、近・現代以降の掘削面（平坦面）と考えられる。上段の平坦面は、斜面部中央T6の平坦面につながる一連のものであろう。出土遺物はない。

T7の平坦面は、造成が2回行われている。西端で上方約1.7mの斜面があり、他地点の平坦面の段差に比べ高低差が大きい。Ia層（I層群）とIb層（I層群）は、土色およびIb層の落ち込みから異なる時期の盛土と判断した。時期は不明だが、他地区的状況から判断して、1回目の造成も近・現代以降と推定した。

（4）斜面部北側（T10・11・13上段・14上段・14中段）（第104～106図、PL31）

T10は、もともと緩斜面であったところを造成し、3段の平坦面を造り畑地としたものと推定される。上・中段はIII層群上に、下段の平坦面はIIIb層（III層群）を掘削した面にIa・Ib層（I層群）が堆積している。Ia・Ib層は類似し、しまりが悪く、城郭に関わる造成面とは想定できない。近・現代以降の畑地のための平坦面造成と推定される。

T11の平坦面は、上段がII層（II層群）を掘削し、下段がIII層群を掘削して造られている。上面にはI層群が堆積する。下段の平坦面はIa層（I層群）の厚さが10cm以下の箇所もあり、斜面地形平坦面での土壤の堆積厚を考慮すると削平後数百年を経過したとは考えられない。上・下段の平坦面は、地権者からの聞き取りにより、現代の果樹等の栽培のために畑地造成が行なわれた際の平坦面であることが判明した。さらに、平坦面の性格の確実な把握のため、下段部分の平坦面を面的に調査したが、出土遺物もなく、中世山城に関わる施設は確認されなかった。

T13上段は、岩石化したIV層（IV層群）上にII層群とI層群が堆積して、幅2mほどの平坦面を形成している。現在もリンゴ等の果樹栽培が行なわれており、近・現代に畑地造成された平坦面であろう。

T14上段・中段は、砂層が岩石化したIV層群を掘削して、幅約2mの平坦面を造り出している。堆積土はI層群がほとんどを占め、現在もプラム等の果樹が栽培されていること、他地区的状況も考え合わせると、近・現代以降の造成と判断する。出土遺物はなく、中世城郭に関わる施設等は確認されない。

(5) 山裾部 (T13 下段・14 下段、P4) (第 107 図、PL31)

土層を見ると、I 層群は斜面部と共通するが II 層群は異なる。P4 は近接する斜面中央 T8 とは共通する部分をもつ。北側の T13 下段 I d 層 (I 層群) より、平安時代の須恵器および土師器片が出土し、下層の II 層群からは縄文時代早期押型文土器の口縁部破片が 1 片出土した。南側の P4 は、黒褐色土の II a 層 (II 層群) 中に平安時代の土師器甕の口縁部破片が含まれていた。なお、T14 下段は T13 下段とはほぼ同様の状況を示す (図省略)。

(6) 低地部 (T15・15Y1・15Y2・16・17・18・19) (第 107 図、PL32・33)

調査区東縁は平坦な低地部となり、斜面部とは様相が異なる。上層的には山裾部に類似する部分もあるが、トレンチごとに様相が異なる。南側の山裾部との境界付近 (T16) には、溝状の落ち込み (SD01) があり、弥生時代後期の赤彩高坏破片が出土した。北側の T18 の北端部分には、平安時代の土師器、須恵器の破片が 13 片出土し、遺物集中 SQ01 として確認した。遺物包含層は、黒色土の III a ② 層であり、同層の状態から水田の可能性が考えられプランツ・オパール分析を行なった。イネの植物珪酸体 (機動細胞由来の化石) は、安定した水田耕作の可能性がある試料 1 g 当り 5,000 個以上までは達せず (1,700 個 / g)、明確な結果は得られなかった。ただ、古代の遺物分布の広がりは北側方向に続くと推定された。なお、土層およびトレンチの詳細な状況については第 5 章を参照のこと。

第3節 小 結

次年度に予定されていた堀田城跡の発掘調査方法を見極める目的で、また堀田城跡の遺跡の広がりを確認するためにトレンチ調査 (一部面的調査) を行なったが、中世および近世の山城に関わる遺構・遺物は検出されなかつた。当初、中世山城の平場・段差と考えた平坦面は、近・現代 (明治以降) に桑や果樹を栽培するため造成された畑地の平坦面であることが確認された。

堀田城跡の遺跡範囲は、主郭のある場所 (本丸) から飛び地状に北側と南側に延びており、今回の調査で南側の一部分を調査したが、中世城郭に関わる施設は確認されなかつた。調査結果から、堀田城跡において、本丸南側の飛び地でみられる平坦地には中世城郭に関する施設は存在しない可能性が高くなつた。堀田城の城域は、本丸のある中心部から北側に限られることがわかつてきつた。

一方、山裾部・低地部からは、他時期の遺構・遺物が出土し、堀田城跡とは別の遺跡となることが県教委と市教委との間で協議、確認された。山裾部と低地部の一部は、堀田城跡東南麓にある「ねごや遺跡」に編入されることとなつた。ねごや遺跡の調査内容は、次章の第 5 章で紹介する。

引用・参考文献

- 伊藤正一 1987 「堀田城」『国説中世城郭辞典 第二巻』新人物往来社 : 139
- 金井汲次 1981 「古代の中野」『中野市誌 歴史編 (前編)』: 195,196
- 酒井健次 2013 「堀田城」「長野の山城ベスト 50 を歩く」サンライズ出版 : 30-33
- 中野市教育委員会 2006 「長野県中野市遺跡詳細分布図」
- 中野市教育委員会 2014 「長野県中野市遺跡詳細分布図 (改訂版)」
- 長野県埋蔵文化財センター 2015 「長野県埋蔵文化財センター年報」31
- 馬場廣幸 1996 「堀田城」「定本・北信濃の城」郷土出版社 : 70,71
- 湯本軍一編 1980 「堀田城」「日本城郭大系 第 8 卷 長野・山梨」新人物往来社 : 66,67
- 湯本軍一 1981 「中世の中野」「中野市誌 歴史編 (前編)」: 334-336

(1) 丘陵頂部、北側尾根部 (T3、P1～3、T12)

—380.000m

T3 西壁

【T1】

I 解剖：表土層。

I a：明暗色土。

I b：暗褐色土 (Hue10YR3-4)。しまり悪く粘性高い。礫を含む。

II 解剖：自然崩落土層 (崩平での堆積層を含む)。

III b：褐色土 (Hue10YR4-6)。自然崩落土層 (Ⅲa層の崩落土)。しまり

Ⅲc：水成層の崩落層。

Ⅲa：褐色土 (Hue10YR4-4)。しまり良く粘性高い。かなり固い層。

Ⅲb：Ⅲa層とⅢc層は異なる層の可能性あり。

Ⅲc：明暗色土 (Hue7.5YR5-6)。しまり良く粘性高い。かなり固い層。

Ⅲd：褐色土 (Hue10YR4-6)。灰白色土中にプロック状に含む。しまり良

く（粘性高い）。

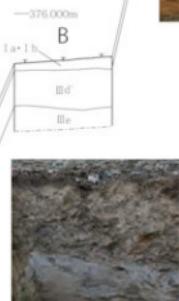
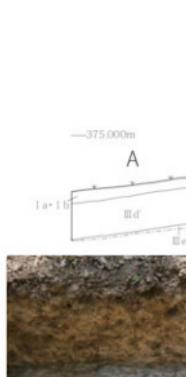
Ⅲe：灰白色土 (Hue10YR5-4)。しまり良く粘性高い。Ⅲc層の灰

白色粘土が混入。

Ⅲf：灰白色土にかい黄褐色 (Hue10YR2/1～7/2) 粘土。（軽くとカチカ

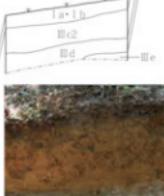
チになり、濡れると滑る）。

※Ⅲe層の下に灰白色 (Hue10YR8/2) シルト層がある。



—378.000m

C



P2 南壁

—379.50m



【T2】

I 解剖：表土層。

1：かい黄褐色土 (Hue10YR4-3)。表土。根で軟らかくなっている。

Ⅱ解剖：水成層の地山層。

2：暗灰褐色細粒土 (Hue25Y5-2)。カチカチに固くしまる。軽くと

灰白色 (Hue25Y7-1) になる。

3：暗灰褐色細粒土 (Hue25Y5-2)。カチカチに固くしまる。2層よ

り跡跡が大きくなるのがみられる。

4：黄灰褐色質土 (Hue25Y5-1)。軽くと灰白色 (Hue25Y7-1) になる。

※1層は2層が根により固くならず崩壊土と混じってできる層 (T1の1層群) に対応。2～4層は水成層の地山 (T1、Ⅱ層群) に対応。人为的削平は確認できない。

T12 自然礫の集積



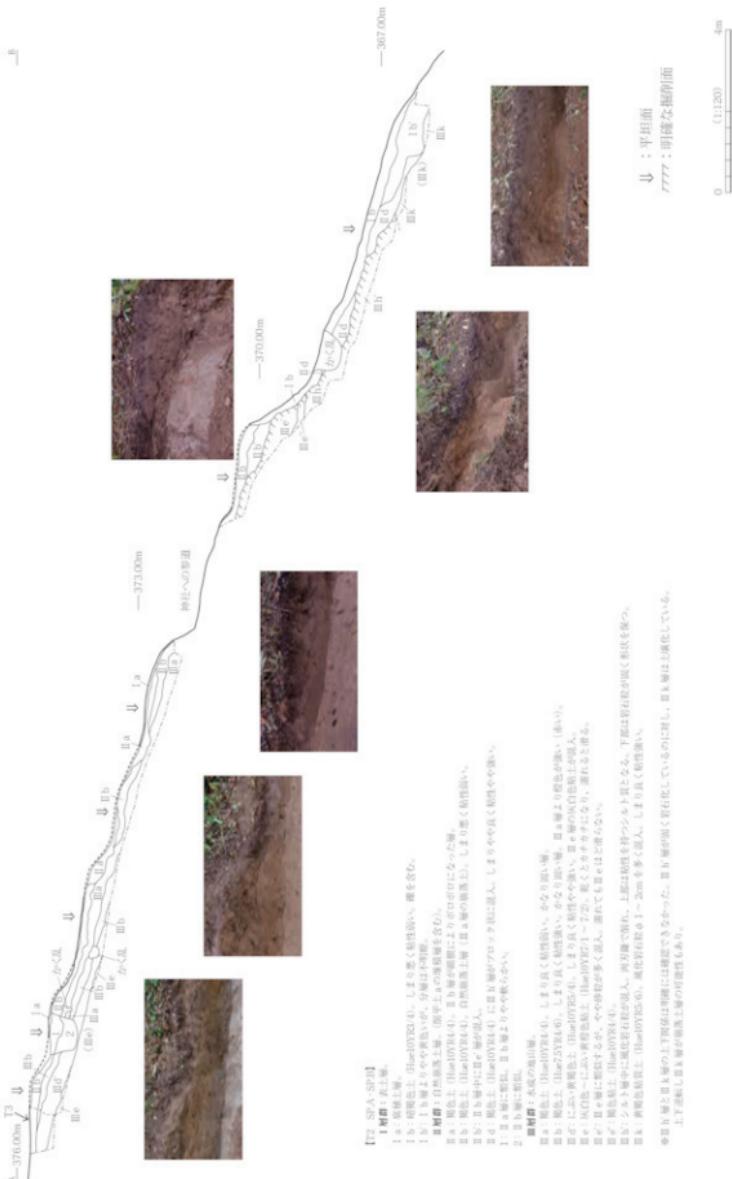
(2) 斜面部中央 (T1)

T1 北壁



第101図 丘陵頂部、北側尾根部、斜面部中央 1 土層図

(2) 斜面部中央 (T2)
T2 批壁

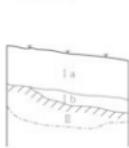


第 102 図 斜面部中央 2 土層図

(2) 斜面部中央 (T4・6・8・9)

T4 北壁

— 368.00m



T4

I 層群：表土層。I a：灰褐色土 (Hue10YR4/3)。耕作土。しまり悪い。
I b：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。盛土。表土。II層の植生ブロックや石を入れる。**II 層群**：自然崩落土層（削平土の堆積層を含む）。II 層色土 (Hue10YR4/4)。灰白色粘土ブロック、礫を多く混入。
自然崩落土層。

※各土層頭分名は T1 ~ T3 とは対応しない。

T6 北壁

— 364.00m



T6

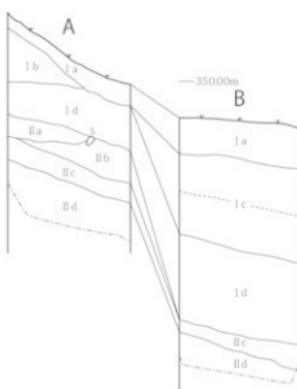
I 層群：表土層。I a : I d と同層の亂土層。
I b : 暗褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。
I d : 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。旧表土。**II 層群**：自然崩落土層（削平土の堆積層を含む）。II 層色土 (Hue10YR3/4)。しまり良く下部はかなり
しまり悪い。上半部は自然崩落土層（地山層）。
φ 5cm の礫を少許含む。**III 層群**：水成の地山層。III a : にくい黄褐色土 (Hue10YR5/4)。しまり良くカチカ
チ音がある。粘性強く粘土質である。III b : にくい黄褐色土 (Hue10YR5/4)。しまり良くカチカ
チ音なし。粘性弱く粘土質である。サンクタ
ック（乾燥によるひび割れ）が認められる。

— 362.00m



T8 北壁

— 351.00m



T8

I 層群：表土層。

I a : 黑褐土 (Hue10YR3/3)。表土（耕作土）。しまり悪く粘性弱い。

I b : 暗褐色土。黄褐色粘土。礫などが混じった盛土。コンクリート道路を走った跡の盛土。

I c : 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。しまり悪く粘性弱い。I a 層との境界は難移動的。I c 層中段（土壌部）が旧表土（「造営時の土」）。

I d : 黑色土 (Hue10YR1/2)。しまり悪く粘性弱い。I a 層との境界は明瞭。I c , I d 層を合わせたのが、山頂部のはうのトレンチ上で表土とし層に對する。

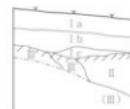
II 層群：自然崩落土層（削平土の堆積層を含む）。II a : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。しまり良い粘性弱い。
II b : 黑褐色土 (Hue10YR3/4)。しまり悪く粘性弱い。Ⅲ層が
φ 10mm 程度のブロック状で多く混入。

II c : 黑褐色土 (Hue10YR3/5)。しまり悪く粘性弱い。

III 層群：自然崩落土層（削平土の堆積層を含む）。III a : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり良く粘性弱い。下部（Ⅲ層の堆積部）に φ 1cm 前後 (cm 以下) の豊富な少
量混入。III b : 暗褐色土 (Hue10YR2/3)。しまり良い粘性弱い。φ 1cm 前後の岩石粒
を多く混入。φ 5 ~ 10cm の礫を少々混入。III c : にくい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。しまり良い粘性弱い。φ 1cm 前後の
岩石粒を混入。II d 層と I d , II b 層との遷移部。III d : 黑褐色土 (Hue10YR5/6)。しまり良く粘性弱い。φ 1cm 以下の岩石粒
を混入。礫を少許混入。

T9 北壁

— 356.50m



T9

I 層群：表土層。

I a : 黑褐土 (Hue10YR3/4)。しまり悪く粘性弱い。

I b : 黑褐色土 (Hue10YR3/4)。しまり悪く粘性弱い。Ⅲ層が
φ 10mm 程度のブロック状で多く混入。

I c : 黑褐色土 (Hue10YR3/5)。しまり悪く粘性弱い。

II 層群：自然崩落土層（削平土の堆積層を含む）。II a : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり良く粘性弱い。下部（Ⅲ層の堆積部）に φ 1cm 前後 (cm 以下) の豊富な少
量混入。**III 層群**：水成の地山層。III a : にくい黄褐色土 (Hue10YR5/3)。φ 1 ~ 5mm の岩石
粒を多く混入。サクナカに面白い層（西刀峰で領れた程度）。
φ 50cm の単塊體を混入。III b : 豊量と层にだが、削平の堆積んだか、根によりかく乱され
て層が少許混入している。

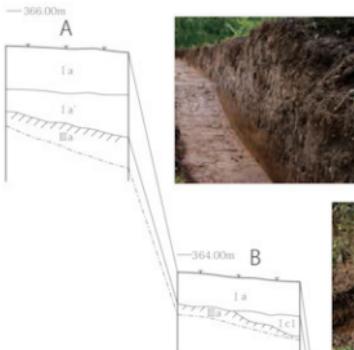
????? : 明確な削削面

0 (140) 1m

第 103 図 斜面部中央 3 土層図

(3) 斜面部南側 (T5・7)

T5 北壁



T7 北壁



【T5】

I 層群: 表土層。
I a: 砂褐色土 (Hue10YR3/3), 耕作土, しまり悪く粘性弱い。
I a': 砂褐色土 (Hue10YR3/3), I a 層よりやや暗く, しまり良い。

I c1: 砂褐色土 (I 層群) と褐色土 (II 層群) の混土層。一時間の露土層。

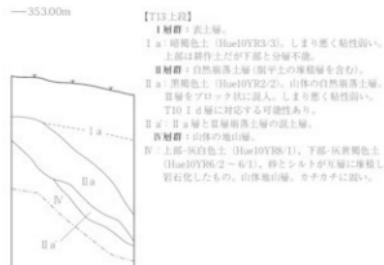
I c3: 砂褐色土 (Hue10YR3/3), しまり悪く粘性弱い。II b 層をブロック状に混入。

II 層群: 未成の地山層。
III a: 砂褐色土 (Hue10YR3/4), しまり良く粘性強い, 黏土質で, 硬化しない。

III b: 黑褐色土 (Hue10YR4/4), しまり良く粘性強い, 黑白色土をブロック状に混入し, 硬化しない。

(4) 斜面部北側 (T13 上段)

T13 上段北壁



↑↑↑↑: 明確な掘削面

0 (140) 1m

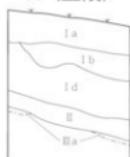
第104図 斜面部南側・北側 1 土層図

(4) 斜面部北側 (T10・14 上段・14 中段)

T10 北壁

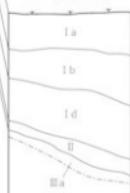
—368.00m

A (上段)



—366.00m

B (中段)



—363.00m

C (下段)



T14 上段北壁

—359.00m

A



【T14 上段】

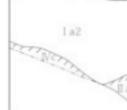
- I 層群：表土層。
I a2：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。
I b1：I a2 と I a1 層の隙土層。
I b2：I a2 層と I a1 層の隙土層。
Na1 層の多くは泥炭。
- II 層群：山体の堆積層。
Na1：黄褐色土 (Hue10YR5/4) (少
なく)。青褐色土層 (Hue7.5YR4/6)。
Na2：褐色砂層 (Hue7.5YR4/6)。
固くしまる砂層。



T14 中段北壁

—352.00m

B



【T14 中段】

- I 層群：表土層。
I a2：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。
しまり悪く粘性弱い。
- II 層群：自然崩落土層 (削平土)
の堆積層を含む。
II a：褐色土 (Hue10YR4/4)。し
まり良く粘性やや弱い、白色
粒状を混入。

III 層群：山体の堆積層。
II c：灰青褐色土 (Hue10YR5/2)。
砂が岩石化してカチカチにな
った層。両刃鎌で削れる。



【T10】

- I 層群：表土層。
I a：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。耕作土層。しまり悪く粘性弱い。
I b：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。I a 層よりややしまり良い。
I a 層を混入する。浅青褐色の風化岩粉土を混入。I a 層
よりやや明るいが、I a 層と明確に区分できないところも
ある。

I d：黒褐色土 (Hue10YR2/2)。凹面土層。しまりやや悪く粘
性弱い。

II 層群：自然崩落土層 (削平土の堆積層を含む)。

- III 層群：暗褐色土 (Hue10YR3/3)。しまりやや悪く粘性弱い。I a
層よりやや明るく。且々層が約 1~2cm のブロック状に混
入し、φ 1~2cm の塊を混入。Ⅲ層の堆積層。

IV 層群：山成の川層。

- Ⅲa：褐色土 (Hue10YR4/4)。かなり固くしまった層 (カチカ
チにしてる) で、粘性弱い。φ 1cm~大半 (10~15cm)
の塊を混入。

Ⅲb：褐色土 (Hue10YR4/6)。かなり固くしまった層 (カチカ
チにしてる) で、粘性やや強い。φ 1cm~大半 (20cm)
の塊を混入。小さな塊は風化して両刃鎌で削れる。灰白色
~浅青褐色の粘土ブリックを混入。

* Ⅲ 層群とⅣ 層群は T1 ~ T3 の細分層名とは対応しない。

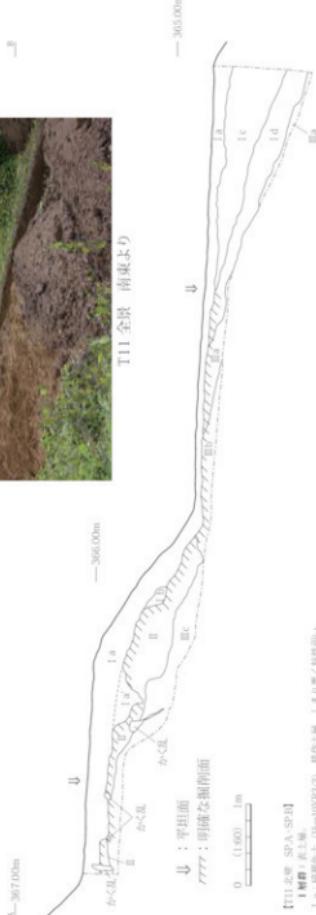
第 105 図 斜面部北側 2 土層図

(4) 斜面部北側 (T11)

T11 北壁



T11 全景 前東より



下段平坦面の面的調査状況

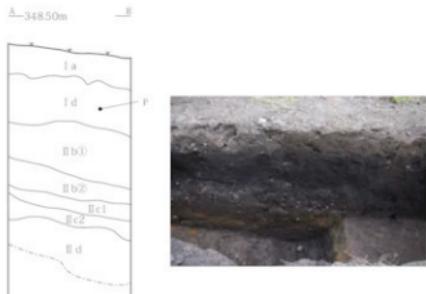


南西より

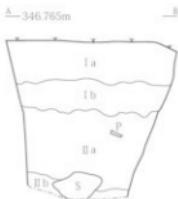
第106図 斜面部北側 3 土層図

(5) 山裾部 (T13・P4)

T13 下段北壁

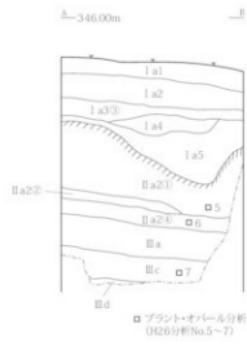


P4 北壁

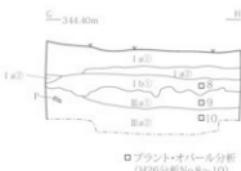


(6) 低地部 (T15・18)

T15 下段北壁



T18 北壁



P : 土器

?????: 明確な掘削面

0 (140) 1m

第107図 山裾部、低地部土層図

第5章 ねごや遺跡の調査

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と概要

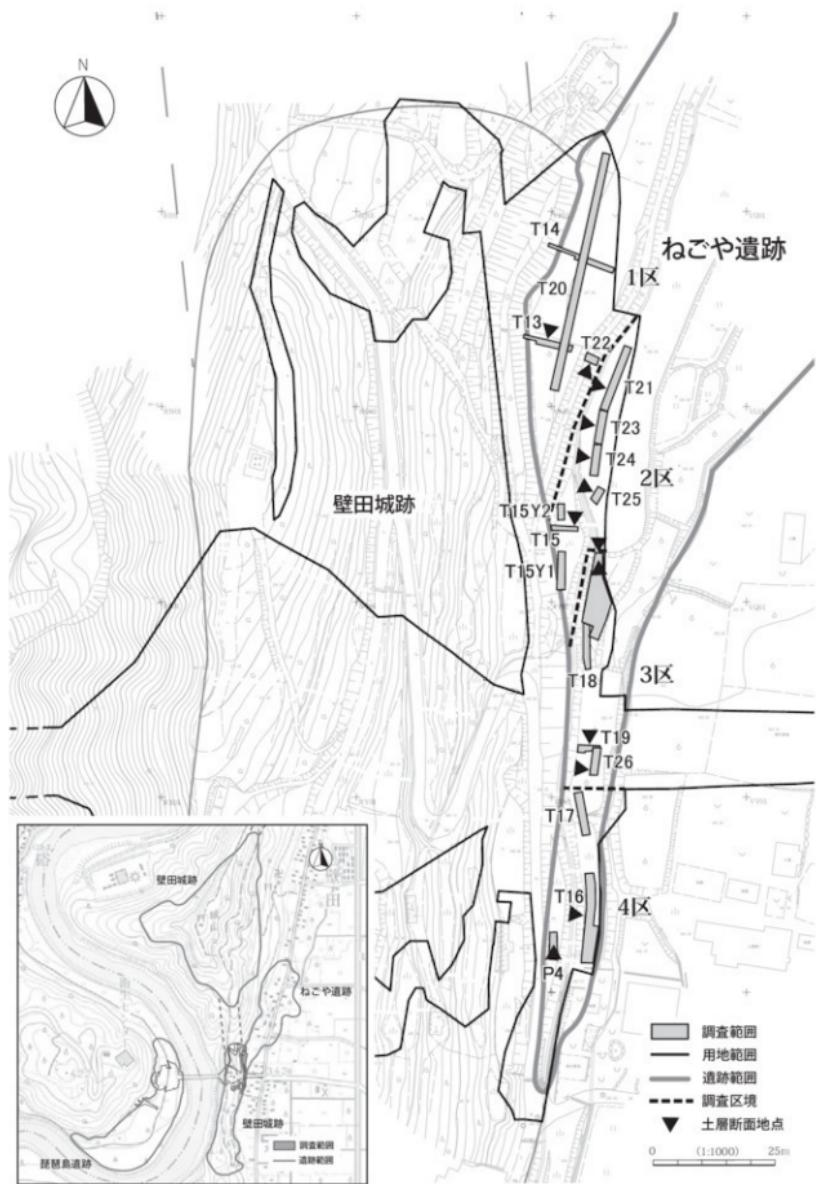
平成 26・27 年度の 2 か年にわたり発掘調査を実施した。平成 26 年度の調査では、壁田城跡として確認調査を実施し、山裾部と低地部から縄文時代、弥生時代、平安時代の土器が出土した。県教委と市教委との協議により、山裾部と低地部をねごや遺跡とし、従来のねごや遺跡の範囲を拡張することとなった（第 108 図）。調査地点は、ねごや遺跡の南端部にあたり、新田と呼ばれている地区である。近世以降に分村された地区であるとの地元住民の方から御教示いただいた。平成 27 年度は対象範囲を 1～4 区に分けて調査を実施した（第 108 図）。その結果、平安時代の土坑 2 基と遺物集中 1 か所を検出した。

調査はまず、トレンチで遺構・遺物の確認調査を行ない、遺構・遺物が確認された箇所を面的に広げるこことした。なお、トレンチ番号は、平成 26 年度の壁田城跡からの通し番号とした。T13～19、P4 が平成 26 年度、T20～26 が平成 27 年度に調査したトレンチである。T15 は人力で掘り下げ、他は重機により掘削して遺構・遺物の有無を確認した。

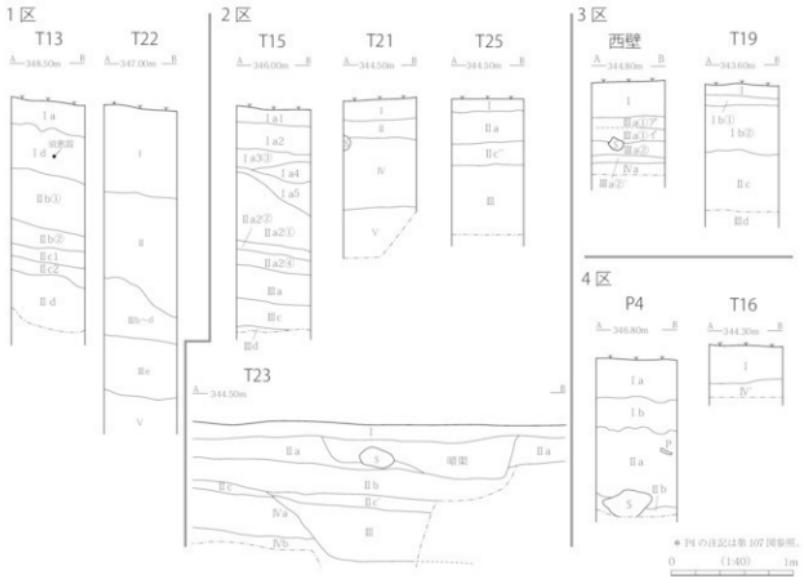
1 区は山裾の平坦部で、T13 の調査で縄文時代早期押型文土器 1 点と土師器破片が出土した。遺構の存在が予想されたため、平成 27 年度に T13 に直交する T20 の調査を行ない、土師器破片 2 点と内耳鍋と思われる小破片 1 点が出土したが、遺構は確認されなかった。平坦部に堅穴住居跡や、掘立柱建物跡などの遺構はない判断し、1 区の調査を終了した。

2 区は低地部で、T21・23～25 の 5 回に分けてトレンチ調査を行なった。表土から須恵器蓋の小破片が 1 点出土したのみで、遺構は確認できなかつたため、調査を終了した。なお、現在は平坦であるが、地山は北側が高く、南に向かって低くなる。多量の自然木を含んだ粘土質の土で埋め立てられており、木材がほとんど腐植していないことから、2 区の低地部は近代以降に埋め立てられたと判断した。平成 26 年度調査の T15 では、摩耗した土師器破片が出土した。

3 区は山裾部から低地部にかかる地区で、T18 の北端部から須恵器と土師器の破片がまとまって出土したため、この箇所の約 65m について面的調査を実施した。土坑 2 基（SK01・02）と遺物集中が 1 か所（SQ01）を調査したほか、自然流路 1 条（SD02）、暗渠と思われる溝 5 条（SD03～07）を確認した。SD03～07 からの出土遺物は、SD03 から土師器甕 3 点、近世の磁器 1 点、SD06 から須恵器壺 1 点で、詳細な時期は不明である。調査区が地元住民の口伝のとおり近世以降に開かれた水田であるならば、それに関わる暗渠であると判断できる。いずれの溝跡も表土である I 層が埋土であることから時期的に整合する。3 区の地山は、南東側が段差をもって低くなつており、T18 の南端部と T19 では自然流路である砂礫層が堆積しており、かつては丘陵際に河川が流れていたことが確認できる。4 区では丘陵際に流路跡が確認できないことから、河川は蛇行していたことが想定される。蛇行した河川が 3 区で丘陵に接し、東に流路を変え丘陵から離れる様子が想定できる。砂礫層から奈良・平安時代の須恵器が 1 点出土している。なお、T18 の北壁の土壤をサンプルし、プランツ・オパール分析を行なった。平安時代の遺物が出土したⅢ層からイネの植物珪酸体は検出されたが、安定した水田耕作を示すほどの数ではなく、水田が存在することを実証



第108図 ねごや遺跡全体図



【T13】

I : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。しまりなく粘性高い。耕作土。

I d : 黒色土 (Hue10YR2/2)。しまり悪く粘性低い。

II b (1) : 黑色土 (Hue10YR2/1)。I d 層より黒く、φ 1 ~ 5cm の礫を少量含む。II b (2) 層との境は不明瞭。

II b (2) : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。畠山の崩れた岩粒。φ 5cm 前後の砂円礫を含む。しまり良い粘性高い。I d 層に比べ II b (2) 層の方がやや高い。

II c : 細粒黑色土 (Hue20YR3/2)。しまり良く粘性高い。やや修質。φ 5cm 以下の砂円礫と岩粒が少額含む。

II d : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり良く粘性高い。やや修質。φ 5cm 以下の砂円礫と岩粒を少量含む。II e 層はやや赤味と灰色をおびた水成層の山側の邊部か。

III : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。しまり良く粘性高い。東側の下部の方が粘性強く粘土質。

【T22】

I : 黄褐色土 - 喀那色土 (Hue10YR3/3 ~ 3/2)。直立。

II : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。しまり悪く粘性高い。黄褐色鉄鉱を多く含む。φ 5 ~ 10cm の大いの礫を少額含む。

III : 黑褐色土 (Hue10YR17/1)、T13 のⅡb 層 (Ⅲ ~ Ⅳ 層) に対応。

IV : 黑褐色土 (Hue10YR3/3 ~ 3/2)。黄褐色シルトブロックφ 5cm 大の礫を含む。しまり良い。下部が粘性高い。Ⅳ 層の IV 層と同様。

V : 黃灰褐色土 (Hue25YR4/4)。水成層。Ⅳ 層の IV 層に対比される可能性あり。

【T15】

I a1 : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。

I a2 : 黑色土 (Hue10YR4/4)。にぶく黄褐色粘土等をプロック状に混じる。

I a3 : 黑褐色土 (Hue10YR3/3)。しまり良く粘性高い。

I a4 : I a5 層と I a6 層の上層。

I a5 : 黑褐色粘土 (Hue10YR6/2)。黄褐色土と混じてなる。

I a6 : 黑褐色土 - 黑色土 (Hue10YR2/2 ~ 2/1)。しまり悪く。

II : 黑褐色土 - 黑褐色土 (Hue10YR2/2 ~ 2/3)。しまり良く粘性高い。φ 5 ~ 10cm 大の礫を多く含む。

III a (1) : 黑色土 (Hue10YR2/1)。Ⅲ a (1) 層と相似。Ⅲ a (2) 層との層界は不明瞭。

III a (2) : 黑褐色土 - φ 3 ~ 10cm 程の内層が多い。黄褐色と黄褐色の粘土が混じて中に礫が多量に含まれる構成。

III b : 黑褐色土 (Hue10YR2/1)。

III d : 喀那色粘土 (Hue10YR2/1)。鐵錆斑の発達を含む。

IV : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。直立。

V : 黑褐色土 (Hue10YR4/4)。水成層。

VI : 黑褐色土 (Hue10YR2/1)。下層は青灰色粘土 (φ 1cm) を含む。

VII : 黑褐色土 (Hue10YR2/1)。耕作土。

【T21】

I : 黄褐色土 (Hue10YR4/2)。直立。

II : 黑褐色土 (Hue10YR3/1)。しまり悪く粘性高い。粘細かい。微塑性土。

III : 黄灰褐色粘土層 (Hue25YR4/1)。砂 ~ 2cm 大の礫を含む粘土層。所々大きな塊。Ⅲ層より白っぽい。黄褐色シルト - 黑色粘土をプロック状に多量に含む土層で落石土か。

IV : 黑褐色土 (Hue10YR2/2)。円錐 (φ 3cm 大) を少量含む。灰褐色土 - 黄褐色土粘土 (φ 1cm) を少量含む (上部のみ)。下層は青灰色粘土 (φ 1cm) を含む。水成層。

第109図 ねごや遺跡層断面図

- 181 -

できなかった。

4区はT16の西壁に平行して溝跡（SD01）を1条検出した。T16の東側現地形が段をなして下がつておおり、用地境の東側は、水成層が堆積する低地となっていることが想定される（第108図）。

2 基本土層（第108・109図）

1～4区の土層は異なっており、地区ごとに基本層序を定め、調査を行なった。ただし、全地区の層位を対応させるために、便宜的に以下のI層～V層に区分した。詳細は第108・109図参照。

I層：耕作土。表土。

II層：中世から近代の堆積層。2区では水成堆積層。

III層：縄文時代～平安時代の堆積層。2・3区では水成堆積層。

IV層：縄文時代より古い堆積層。無遺物層。2～4区では水成堆積層。

V層：丘陵部、山裾部の地山。または、低地部の粘土、シルト層の下の疊層。



調査対象区遠景（南東より）

第2節 遺構と遺物

1 遺構（第110・111図、PL32・33）

溝1条（SD01）、土坑2基（SK01・02）、遺物集中1か所（SQ01）が検出された。このほか、自然流路1条（SD02）と暗渠と思われる溝5条を確認した（SD03～SD07）。

SD01（第111図、PL32）

4区山裾部（T16）で、等高線に平行して確認された長さ8m、幅30～80cm、深さ1～21cmの溝跡で、V層上面で検出した。南側は調査区外に伸びており、北側は徐々に浅くなり途切れるが、さらに北側に伸びていたものと想定する。埋土から弥生時代後期の壺の口縁（第112図管理番号17）が2片出土した。2片は接合したが、小破片で器形復元はできない。遺構の時期は不明である。

SD02（第110図）

SQ01の調査終了後、3区北端部のIV層上面で検出した。等高線に直交する方向に延び、幅130～160cm、深さ3～14cm程度で、丘陵側が狭く、低地側が広い不整形な形状であることから自然流路と判断した。出土遺物はなく、自然木が出土した。基本土層Ⅲa層が埋土となる。

SD03～SD07（第110図）

3区のⅢ層上面で確認した。SD03の埋土は暗褐色土（I層）で、陶磁器が2点出土している。他の溝跡も類似した埋土であることから近世以降の溝跡であると判断した。SD04は扁平な楕円碟を溝の両側縁に配している。他の溝跡には特別な構造物はない。

SQ01（第111図、PL33）

3区のⅢa層中で検出した遺物集中である。土師器と須恵器の破片325点（総重量約3.1kg）が出土した（第112図1～5、7～9）。点数が多いが、1～2cm角程度の小破片も100点前後含まれている。12m×3mの範囲に遺物が分布し、密度が高いところが2か所にみられるため、北側をSQ01a、南側をSQ01 bとし

た。SQ01aは須恵器壺・壺、土師器壺、甕、小形甕などとともに、弥生後期土器の小破片が1点出土した。SQ01bは土師器甕が主体で、地形が落ちこむ斜面にそって高低差をもって出土した。SQ01aとSQ01bの間での接合関係は確認できなかった。

遺物はⅢ a ①層上面からⅢ b ②層下部にかけて出土した。比較的残存率の高い黒色土器A 壺（第112図1）がⅢ a ②層下部で出土しており、本来、遺物はⅢ b ②層に包含されていたものが巻き上げられて、高低差をもって出土したと想定できる。1点の弥生時代後期の土器片を除き、そのほかはいずれも平安時代前半の9世紀代のものと考えられ、SQ01a と SQ01b は同時期のものと判断した。

Ⅲ a ②層は枯土層で下面是部分的に耕作痕のような乱れが確認されている（第110図断面写真）。イネ属のプラント・オパールが検出されているが検出量が少なく、水田であることを立証するには至らなかったが、調査区の東側の低地部に平安時代の水田跡が存在する可能性がある。プラント・オパールの分析結果の詳細は添付DVDに分析報告書を収録したので参照されたい。

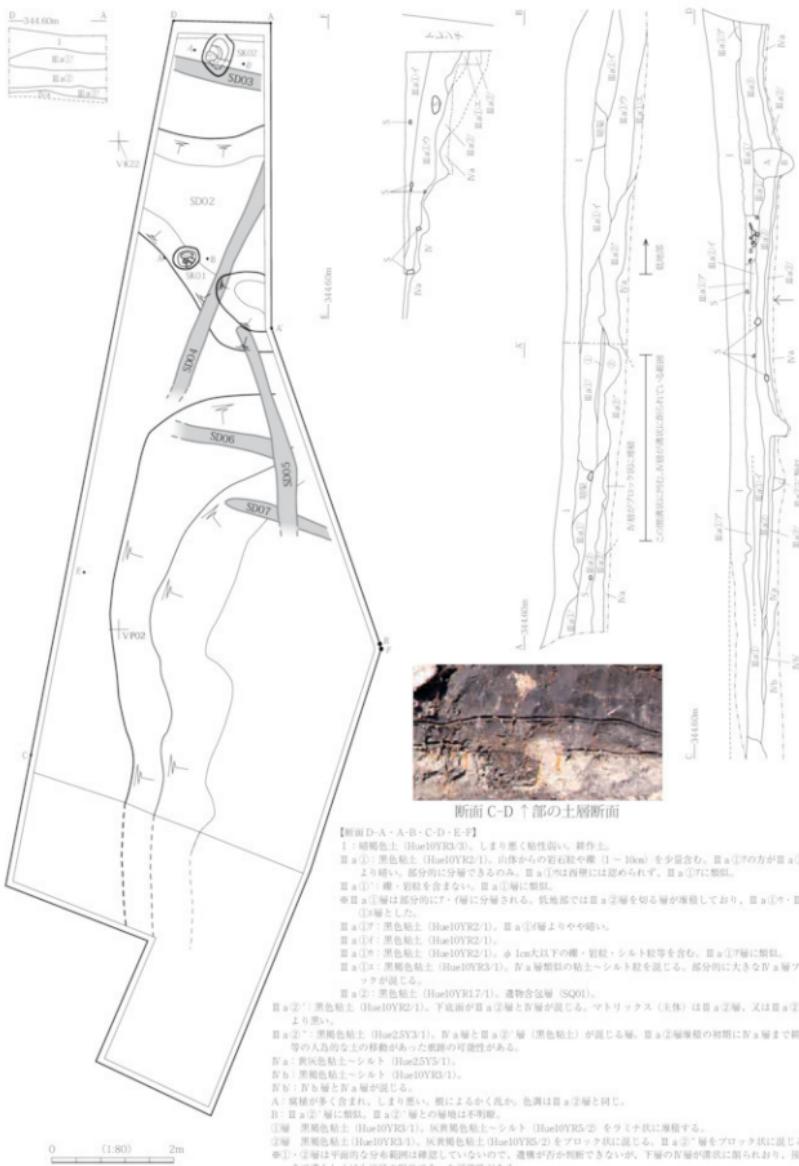
SK01・02（第111図）

3区のIV層上面で検出した。SK01は40cm×50cm、深さ40cmの円形の土坑である。底面に拳大の礫が4点出土しており、柱穴の可能性がある。SK02は70cm×50cm、深さ40cmの楕円形の土坑である。土器は出土しなかったが、埋土中に10cm大の礫が1点あった。SK01とSK02は一連の掘立柱建物跡の可能性もあるが、SK02の南側に土坑は確認されず、調査区内の土坑のみでは掘立柱建物跡であるかどうか判断できなかった。

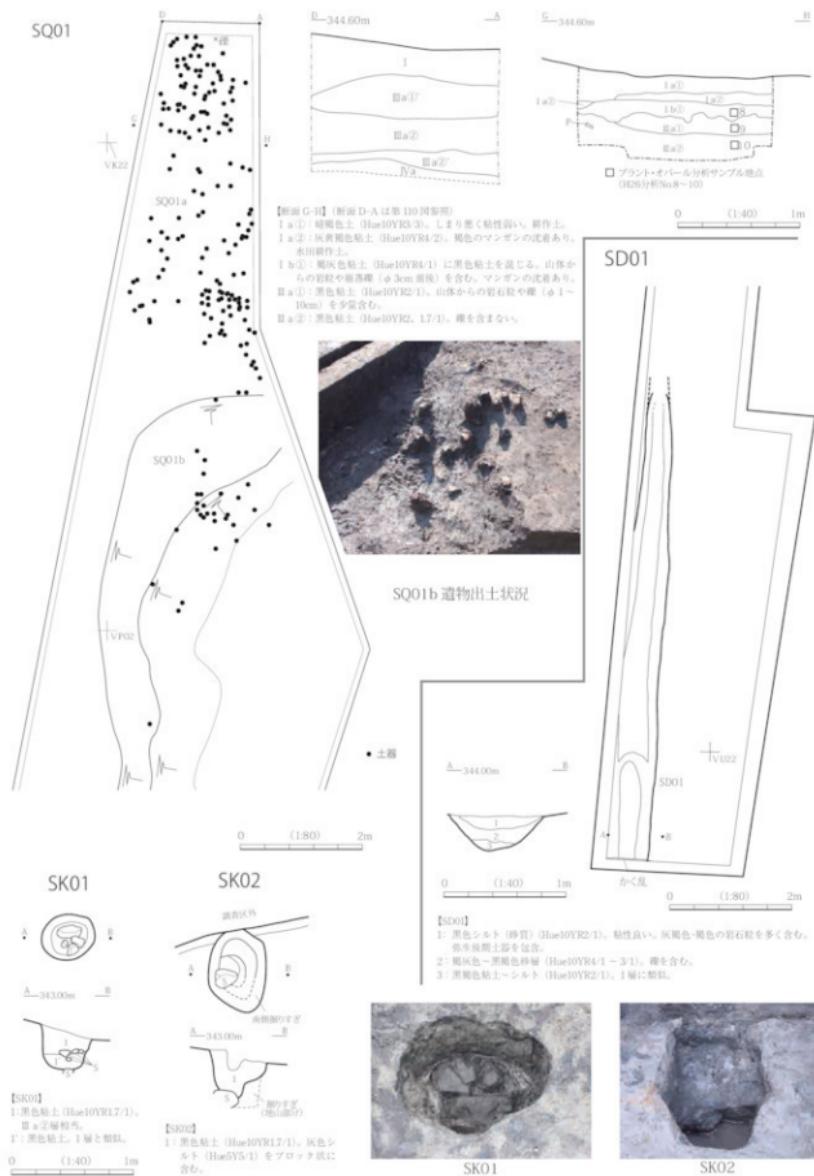
SK01からSQ01と同類の土師器甕の破片1点が出土した。SQ01の下層で確認された遺構で、埋土はいずれもⅢ a ②層に類似する。SQ01と同時期もしくは近い時期と判断した。



3区完掘状況（南より）



第110図 3区遺構配置図



第 111 図 遺構図

2 遺物 (第112図、第14表)

各トレンチの出土遺物は第14表に示した。

1は黒色土器Aの坏で、底部は回転糸切り。完形に近い状態で出土した。2は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。3は須恵器坏蓋のツマミ部～身部破片で、天井部回転ヘラケズリが見られる。4は土師器小形甕口縁である。口縁内面端部に肥大部がある。内外面とも回転ヨコナデ。5・6は土師器甕口縁である。7は須恵器甕底部である。外面にタタキ目があり、内面にハケ調整が認められ、須恵器坏蓋の破片が付着する。8・10・11は外面タタキ目の須恵器甕である。10・11は内面に當て具痕が認められる。9はタタキ目とケズリが認められる土師器甕の胴部破片である。12は縄文時代早期の密接施文の楕円押型文の深鉢である。

6は1区T20、10は4区P4、12は1区T13で出土し、その他は3区SQ01の遺物である。

第14表 トレンチ出土土器数

地区名	トレンチ名	出土土器
1区	T13	4点 (土師器・須恵器)
	T14	なし
	T20	5点 (黒色土器A・内耳土器)
	T22	なし
2区	T15	1点 (縦縫)
	T15Y1	1点 (土師器)
	T15Y2	1点 (土師器)
	T21	1点 (須恵器)
	T23	3点 (弥生土器・土師器)
3区	T24	なし
	T25	なし
	T18	23点 (須恵器・土師器・黒色土器A)
4区	T19	1点 (須恵器)
	T26	なし
	P4	2点 (土師器・須恵器)
4区	T16	3点 (弥生土器・土師器・須恵器)
	T17	なし



第112図 出土遺物

第3節 小 結

遺跡の中心は遺跡範囲変更前の範囲、すなわち現在の集落の部分であると想定される。「ねごや」は、山城に関わる地名として東日本の各地に残されている。『国史大辞典』(吉川弘文館)によると、「戦国時代に山城の麓に置かれた城兵の居住区域ないし集落をいう。」とある。隣接する塙田城跡に関わる遺跡であることは想像に難くない。

今回の調査はねごや遺跡の南端部で、発掘では中世の遺物は内耳銅と思われる小破片が3点出土したのみで、「ねごや」の地名から想定される中世の遺構は確認されなかった。遺物は少ないが、その大半は平安時代前半期のもので、3区のシルト・粘土層などの水成層から出土している。プラント・オバール分析では水田土壤の存在は確認できなかったが、調査区の東側には低地が広がっており、平安時代の水田跡が存在する可能性がある。

今回の発掘調査の成果から、ねごや遺跡には平安時代の集落跡が残されている可能性を考慮する必要がある。

また、縄文時代早期押型文土器片が出土した。中野市内では押型文土器がまとめて出土する遺跡は、今のところ確認されていない。1点ではあるが貴重な資料である。

引用・参考文献

- 国史大辞典編集委員会 1990『国史大辞典 11』吉川弘文館
中野市教育委員会 2014『長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）』



3区調査風景（南より）

第6章 科学分析

第1節 科学分析の概要

琵琶島遺跡では、C14年代測定、珪藻・花粉分析、炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析、レブリカ法による土器の施文具圧痕の推定を業務委託で実施した。

また、ねごや遺跡では低地部の水田の存否または可能性を探ることを目的としたプラント・オパール分析を行なった。

本章では主に試料採取地点No.を用いて記述している。第15表に併記された委託業者が分析報告書で用いている試料名（分析番号）は、該当する遺構図・遺物図・遺構観察表・遺物観察表に示した。分析報告の詳細は、添付DVDに記録した。なお、鉄製品の応急的保存処理業務委託についても添付DVDに報告書を収録した。

第2節 C14年代測定

1 試料採取地点（第113図、第15表）

遺構内26点、遺構外8点の計34点の試料を対象とした。

堅穴住居跡SB01の試料採取地点No.（以下同じ）(1)は炉跡の東側、Pit5北東側の床面よりやや上から採取した炭化材、(2)は炉跡内の小Pit2-2埋土内のものである。本跡は市教委の確認調査によって掘削
第15表 科学分析試料採取地点一覧

分析内容		C14年代測定															
分析年度		124年度															
分析機関		㈱加速度分析研究所															
試料 採取地点	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
SB01 c	SB01 Pit2-2	SB02 Pit4	SB02 Pit4	ST19 Pit2	ST19 Pit8	ST22 Pit3	ST25 Pit3	ST25 Pit4	ST93 炭化物 2-1	ST93 炭化物 3-1	SK03 d 人口付 戸	SK03 Pit3	SK02 Pit3	SK285 Pit1	SK237 Pit1	SK291	
分析試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17

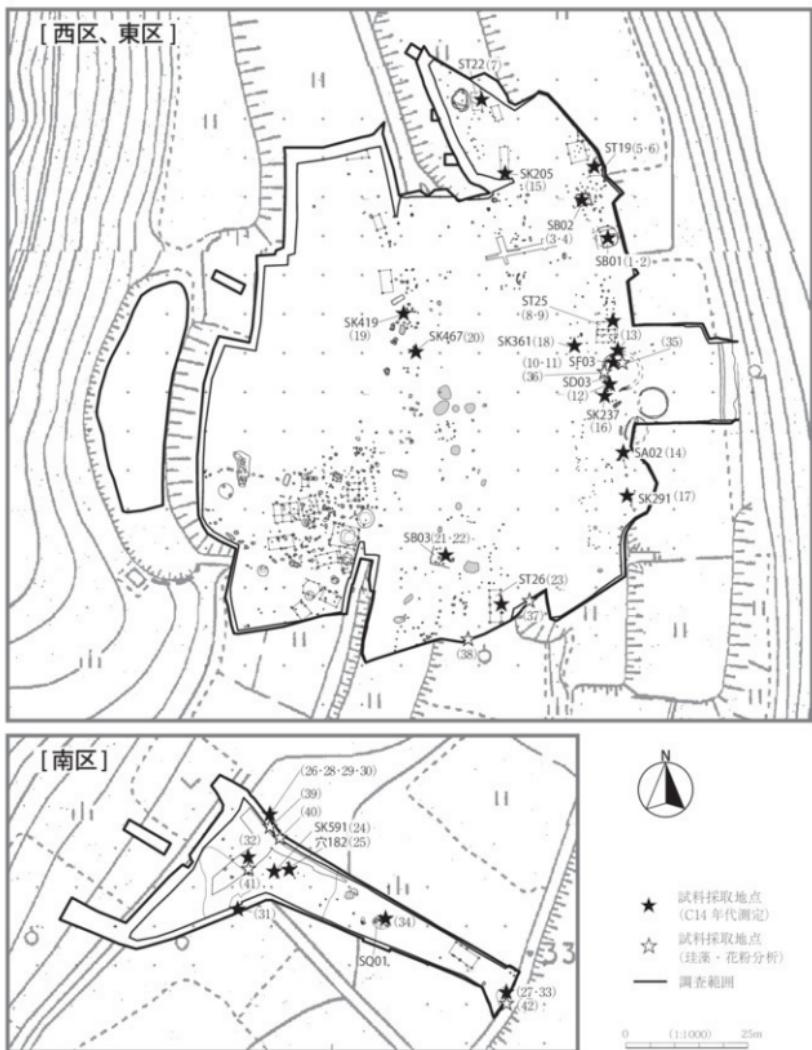
分析内容		C14年代測定															
分析年度		124年度								125年度							
分析機関		㈱加速度分析研究所															
試料 採取地点	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)
SK261	SK419	SK467	SK03 (中)	SK03 (中)	ST26 Pit4	SK091	穴182 レンチ	北壁 レンチ	北壁 土器集中	北壁	北壁	北壁 瓦状地 形	北壁 瓦状地 形	SK01 Pit18- 16b			
分析試料No.	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	1

分析内容		珪藻・花粉分析														
分析年度		124年度														
分析機関		㈱古環境研究所														
試料 採取地点	(35)	(36)	(37)	(38)	(39)	(40)	(41)	(42)	北東 雨蓋 トレンチ (中)	東壁 トレンチ (中)	北壁 雨蓋 トレンチ (中)	北壁 雨蓋 トレンチ (中)	北壁 雨蓋 トレンチ (中)			
SK03 Pit1 (中)	SK03	SKC 区 南壁	SKC 区 南壁	北壁2	北壁4	東壁 トレンチ (中)	北壁 雨蓋 トレンチ (中)	北壁 雨蓋 トレンチ (中)								
分析試料No.	1	2, 3	1, 2, 3	4	5~15	16	17~23	24~28								

(※分析後、SK03Pit1ISK249, SK30ISK514として報告、SK03は近世以前の層込分に変更。

分析内容		プラント・オパール分析		
分析年度		126年度		
分析機関		ノジマ・ハーヴィング		
試料 採取地点	(43)	(44)	(45)	
T14	T15	T16		

* プラント・オパール分析はねごや遺跡分。



第113図 琵琶島遺跡 科学分析試料採取地点

されており、埋土が完全に残存していたのは北壁際と Pit8 付近の僅かな部分であった。一方、炉跡は南側が掘削されていたもの的小 Pit2-2 にまでは及んでいなかった。したがって、(1) は本跡に伴うとは言い難いが、(2) は本跡に伴うと考えられる。

豎穴住居跡 SB02 の (3) は炉跡の周辺に広がる炭化物の集中箇所から採取し、(4) は棟持柱の穴と想定



第114図 ねごや遺跡 プラント・オバール分析試料採取地点

したPit4の埋土中部から出土したものである。Pit4内の炭化物は、本跡廃絶以降に混在したものであろう。

掘立柱建物跡ST19の(5)はPit2の埋土下部から、(6)は柱痕跡埋土の上部から採取した。(5)が柱痕跡下部の掘方埋土にあつたならば本跡に伴う可能性は高くなるが、柱痕跡の埋土か掘方かは不明である。また、(6)はPit6柱痕跡上部のため本跡廃絶後に流れ込んだ炭化物と考えられる。

掘立柱建物跡ST22の(7)は、Pit3埋土1層から採取している。埋土2層が溜まった後、堆積した1層とともに流れ込んだ炭化物であろう。

掘立柱建物跡ST25の(8)・(9)はいずれも柱穴埋土中から採取しているが、本跡はすべての柱穴で柱痕跡と掘方の分層は困難だった。それは柱の除却に伴い柱穴内の土が動かされたことに起因すると考えられる。よって、(8)、(9)は本跡廃絶以降に混在したものであろう。

掘立柱建物跡ST26の(23)はPit4の底面近くにあった礎板状の平石上部の埋土中から採取した。埋土内を柱痕跡と掘方で分層することはできなかったため、ST25の試料と同じ理由で、本跡廃絶以降に混在した可能性がある。

周溝跡SD03の(12)は周溝埋土2層から採取した。周溝の埋土は周辺土壤が流入して自然堆積したとみられる堆積状況を示している。2層と1・3層との間に明らかな層理面や土質の違いを認めることはできなかった。したがって、本試料は周溝掘削後から埋没までの間に流入したと考えられる。

柵跡SA02の(14)はPit1の2層上面から採取した。2層は柱穴の掘方埋土であるが、上面がそれに含まれるか否かは微妙である。

遺物集中SQ01の(34)は同遺構から出土した壺胴部破片の表面付着炭化物から採集した。壺部に櫛描縦羽状文が施されている等から栗林1式に比定できる。同遺構では土器が1層上部にまとまるが遺棄され

第16表 C14年代測定結果一覧

試料採取 地点No.	分析年度	試料名 採取箇所	試料形態	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値 Liber Age(pP)	歴年較正年代(cal) a	相対比	測定の時期	測定番号
(1)	H24	1 (ARJ No.39) SH01 pt.2 地土	炭化材	2210 ± 30	1a 234caBC - 280caBC 235caBC - 242caBC 236caBC - 250caBC 2a 308caBC - 199caBC	0.993 0.291 0.090 0.399 0.954	共生中期	IAAA-122112
(2)	H24	2 (ARJ No.31) SH01 pt.2 地土上面	炭化材	2290 ± 30	1a 398caBC - 364caBC 402caBC - 356caBC 287caBC - 233caBC	0.682 0.731 0.223	共生中期	IAAA-122113
(3)	H24	2 (ARJ No.41) SH02 地土	炭化材	2250 ± 30	1a 387caBC - 357caBC 308caBC - 254caBC 393caBC - 359caBC 2a 306caBC - 299caBC	0.208 0.384 0.363 0.591	共生中期	IAAA-122114
(4)	H24	4 (ARJ No.70) SH02 pt.4 中層	炭化物	2250 ± 30	1a 383caBC - 356caBC 286caBC - 254caBC 2a 391caBC - 348caBC 315caBC - 298caBC	0.251 0.431 0.318 0.636	共生中期	IAAA-122115
(5)	H24	5 (ARJ No.1) ST19 pt.2 下部	炭化材	2230 ± 30	1a 374caBC - 352caBC 296caBC - 229caBC 221caBC - 211caBC 2a 386caBC - 342caBC 325caBC - 294caBC	0.135 0.481 0.066 0.225 0.729	共生中期	IAAA-122116
(6)	H24	6 (ARJ No.25) ST19 pt.6 中央上面(往復縫)	炭化物	2180 ± 30	1a 354caBC - 291caBC 231caBC - 197caBC 2a 361caBC - 272caBC 283caBC - 173caBC 2565caBC - 2533caBC	0.473 0.209 0.366 0.372 0.310	共生中期	IAAA-122117
(7)	H24	7 (ARJ No.7) ST22 pt.3 地土1層	炭化物	3090 ± 30	1a 353caBC - 295caBC 2495caBC - 2479caBC 2a 357caBC - 243caBC	0.354	共生中期	IAAA-122118
(8)	H24	8 (ARJ No.26) ST25 pt.3 地土	炭化物	2180 ± 30	1a 353caBC - 294caBC 230caBC - 219caBC 213caBC - 192caBC 2a 361caBC - 271caBC 264caBC - 168caBC	0.471 0.063 0.148 0.546 0.408	共生中期	IAAA-122119
(9)	H24	9 (ARJ No.29) ST25 pt.4 地土	炭化物	2210 ± 30	1a 356caBC - 344caBC 234caBC - 280caBC 258caBC - 243caBC 236caBC - 205caBC 2a 367caBC - 296caBC	0.692 0.293 0.085 0.212 0.354	共生中期	IAAA-122120
(10)	H24	10 (ARJ No.38) SH03 炭化物2-I	炭化物	1170 ± 30	1a 382caAD - 799caAD 810caAD - 848caAD 835caAD - 995caAD 926caAD - 996caAD 2a 776caAD - 900caAD 918caAD - 962caAD	0.046 0.259 0.328 0.059 0.267 0.167	平安	IAAA-122121
(11)	H24	11 (ARJ No.21) SH03 炭化物3-I	炭化材	1150 ± 30	1a 384caAD - 795caAD 809caAD - 811caAD 982caAD - 900caAD 918caAD - 962caAD 2a 779caAD - 793caAD 802caAD - 905caAD 912caAD - 970caAD	0.015 0.069 0.294 0.294 0.050 0.555 0.349	平安	IAAA-122122
(12)	H24	12 (ARJ No.32) SD03 d(人跡付近) 地土2層	炭化物	2250 ± 30	1a 385caBC - 356caBC 296caBC - 254caBC 292caBC - 349caBC 312caBC - 286caBC	0.363 0.419 0.329 0.625	共生中期	IAAA-122123
(13)	H24	13 (ARJ No.54) SD03 pt.3 地土底部 (分析後SK04として報告)	炭化物	1170 ± 30	1a 782caAD - 790caAD 810caAD - 892caAD 776caAD - 906caAD 918caAD - 951caAD	0.055 0.627 0.854 0.100	平安	IAAA-122124
(14)	H24	14 (ARJ No.27) SA02 pt.1 2層	炭化物	4540 ± 30	1a 330caBC - 332caBC 321caBC - 317caBC 169caBC - 161caBC 2a 320caBC - 328caBC 323caBC - 326caBC 327caBC - 326caBC 329caBC - 319caBC	0.193 0.257 0.252 0.250 0.039 0.028 0.028 0.638	共生中期	IAAA-122125
(15)	H24	15 (ARJ No.9) SK265 地土	炭化物	2150 ± 30	1a 349caBC - 315caBC 398caBC - 165caBC 127caBC - 124caBC 2a 355caBC - 299caBC 232caBC - 191caBC	0.240 0.429 0.013 0.326 0.628	平安	IAAA-122126
(16)	H24	16 (ARJ No.30) SK237 地土上層 北側	炭化物	1170 ± 30	1a 782caAD - 790caAD 810caAD - 892caAD 776caAD - 906caAD 918caAD - 951caAD	0.055 0.627 0.854 0.100	平安	IAAA-122127
(17)	H24	17 (ARJ No.15) SK291 2層中層	炭化物	5220 ± 30	1a 404caBC - 4011caBC 4005caBC - 3982caBC 4229caBC - 4213caBC 4153caBC - 3963caBC	0.394 0.288 0.009 0.022 0.924	調査	IAAA-122128

試料採取地点No.	分析年度	試料名 採取場所	試料形態	$\alpha^{23} \text{C}$ 補正あり L_{box} $\text{Age}(\text{yrBP})$	歴年較正年代(cal)	相対比	遺構の時期	測定番号
(18)	H24	18 (ARJ No.67) SK61 2層	炭化物	1140 ± 30	1# 985calAD - 903calAD	0.165	平安	IAAA-122129
					916calAD - 968calAD	0.517		
					786calAD - 860calAD	0.460		
(19)	H24	19 (ARJ No.72) SK619 稲土上部	炭化物	2250 ± 30	1# 386calBC - 356calBC	0.276	弥生中期	IAAA-122130
					286calBC - 234calBC	0.406		
					2# 393calBC - 340calBC	0.345		
(20)	H24	20 (ARJ No.73) SK607 稲土上面	炭化物	2300 ± 30	1# 401calBC - 374calBC	0.682	弥生中期	IAAA-122131
					406calBC - 357calBC	0.853		
					2# 284calBC - 256calBC	0.681		
					2# 246calBC - 235calBC	0.609		
(21)	H25	1 (ARJ No.2) SK603 ベルト下 稲土	炭化材	140 ± 30	1# 1679calAD - 1697calAD*	0.999	近世	IAAA-131172
					1726calAD - 1765calAD*	0.292		
					1804calAD - 1824calAD*	0.375		
					1806calAD - 1877calAD*	0.179		
					1917calAD - 1940calAD*	0.128		
(22)	H25	2 (ARJ No.3) SK603 間下	炭化材	140 ± 30	1# 1696calAD - 1799calAD*	0.160	近世	IAAA-131173
					1717calAD - 1781calAD*	0.283		
					1797calAD - 1890calAD*	0.348		
					1919calAD - 1945calAD*	0.163		
(23)	H25	3 (ARJ No.4) ST26 p64 稲土	炭化材	3730 ± 30	1# 168calAD - 1698calAD*	0.096	近世	IAAA-131174
					1724calAD - 1783calAD*	0.179		
					1803calAD - 1878calAD*	0.073		
					1917calAD - 1938calAD*	0.122		
(24)	H25	4 (ARJ No.7) SK591 稲土上面	炭化材	3730 ± 30	1# 1671calAD - 1770calAD*	0.415	近世	IAAA-131175
					1789calAD - 1891calAD*	0.382		
					1909calAD - 1933calAD*	0.198		
					1997calAD - 2000calAD*	0.050		
(25)	H25	5 (ARJ No.9) 穴182 稲土	炭化物	3630 ± 30	1# 2147calBC - 2178calBC	0.148	弥生中期	IAAA-131176
					2089calBC - 2041calBC	0.328		
					2202calBC - 2111calBC	0.533		
(26)	H25	6 (ARJ No.17) 北壁-レンガ 壁-1層	炭化材	9140 ± 30	1# 2198calBC - 2166calBC	0.262	弥生中期	IAAA-131177
					2086calBC - 2050calBC	0.263		
					2# 2206calBC - 2034calBC	0.954		
(27)	H25	7 (ARJ No.18) 壁62 土器集中埋土	炭化材	2210 ± 30	1# 2625calBC - 1948calBC	0.682	縄文	IAAA-131178
					2119calBC - 2096calBC	0.044		
					2040calBC - 1900calBC	0.910		
(28)	H25	8 (ARJ No.20) 北壁-レンガ 壁上部	炭化材	3960 ± 30	1# 357calBC - 344calBC	0.087	縄文	IAAA-131179
					325calBC - 282calBC	0.294		
					251calBC - 244calBC	0.076		
(29)	H25	9 (ARJ No.19) 北壁-レンガ 壁-1層上面	炭化物	260 ± 30	2# 286calBC - 2213calBC	0.524	近世	IAAA-131180
					357calAD - 344calAD*	0.087		
					1# 1764calAD - 1801calAD**	0.126		
(30)	H25	10 (ARJ No.24) 北壁-レンガ 壁-1層	炭化材	9240 ± 30	1# 1635calAD - 1684calAD*	0.246	縄文	IAAA-131181
					1725calAD - 1806calAD**	0.519		
					1931calAD - ... **	0.198		
(31)	H25	11 (ARJ No.26) 東壁-レンガ 壁C層上面	炭化物	3880 ± 30	1# 8545calBC - 8504calBC	0.206	縄文	IAAA-131182
					8493calBC - 8421calBC	0.336		
					8480calBC - 8394calBC	0.038		
(32)	H25	12 (ARJ No.29) 北壁-南西トレーシング(II)C-10-1 壁	炭化物	9180 ± 30	1# 8373calBC - 8351calBC	0.101	縄文	IAAA-131183
					2# 8466calBC - 8325calBC	0.954		
					1# 2454calBC - 2419calBC	0.290		
(33)	H25	13 (ARJ No.128) 東壁-壁	Modern	Modern	1# 2407calBC - 2376calBC	0.186	弥生中期	IAAA-131184
					2353calBC - 2299calBC	0.297		
					2# 2466calBC - 2266calBC	0.954		
(34)	H26	1 (ARJ No.402) SK01 稲土-ⅡF18-10b	土器外面材 着色化物	2190 ± 20	1# 354calBC - 291calBC	0.472	弥生中期	IAAA-141385
					2323calBC - 2024calBC	0.210		
					2# 361calBC - 192calBC	0.954		

*Warning! Date may extend out of range / Warning! Date probably out of range

たが廃棄したものか、後者の場合の回数について判断は難しい。

土坑（SK）の試料はすべて埋土から採取しており、いずれも土坑に直接伴うものではない。

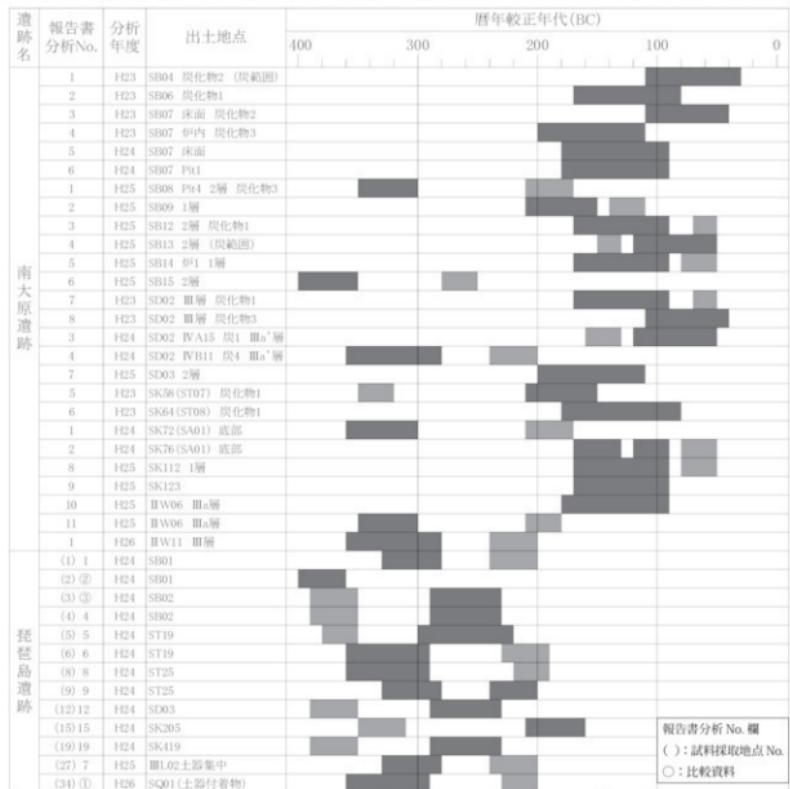
焼土跡SF03の（10）・（11）は明確な掘込みがない焼土ブロックの集積から出土した、長さ40cm前後、幅10cm前後の炭化材から採取した2点である。

その他遺構外の試料の採取地点は第113図を参照されたい。

2 分析結果と所見（第16表）

栗林1式の壺表面付着炭化物から年代測定を行なった（34）の1δ暦年較正年代は354calBC-291calBC(47.2%)、232calBC-202calBC(21.0%)という値を得た。また、堅穴住居跡に伴う可能性が高い（2）は398calBC-364calBC(68.2%)、（3）が285calBC-234calBC(38.4%)、387calBC-357calBC(29.8%)で、2軒の堅穴住居跡からは栗林1式土器が出土している。

この結果と栗林2式土器を中心とする南大原遺跡におけるC14年代測定値とを比較すると、およそ紀元前200年で明確に分かれる（第115図）。したがって、石川編年（石川2002）における栗林1式土器の



（長野県埋蔵文化財センター2016：第6章より転載、一部改変）

第115図 琵琶島・南大原遺跡の弥生時代中期後半の暦年較正年代

年代は、曆年較正年代で概ね 400calBC ~ 200calBC にあたる（註1）。第 115 図は、1 標準偏差 ($1\delta = 68.2\%$) の値をグラフで示した。濃い部分がより確率の高い年代値で、薄い部分が確率の低い年代値である。確率が 10%未満のものは表示していない。

なお、焼土跡 SF03 は検出状況から見て、斜面上部にあった遺構が削平され焼土及び炭化材が再堆積した可能性があるため、(10)、(11) の示す年代が焼土ブロックおよび出土土器を示すかどうかは慎重にならざるを得ない。

また、これ以外の遺構採取試料 (5) ~ (9) および (12) ~ (20) は、遺構の埋没過程で流入した炭化物である。遺構の年代を試料が示す年代以前と考えたいが、遺跡内に滞留していた炭化物が流れ込んだ可能性もあるため、これらの埋土試料をもって遺構年代を判断するわけにはいかない。

今回の年代測定は、弥生時代中期後半と平安時代の遺構・遺物の年代を知るために行なったが、試料に選定した炭化材・物の出土状態に対する配慮や記録を欠いていたため、目的の多くを達することができなかった。今後の調査における反省点としたい。

第3節 炭素・窒素安定同位体分析

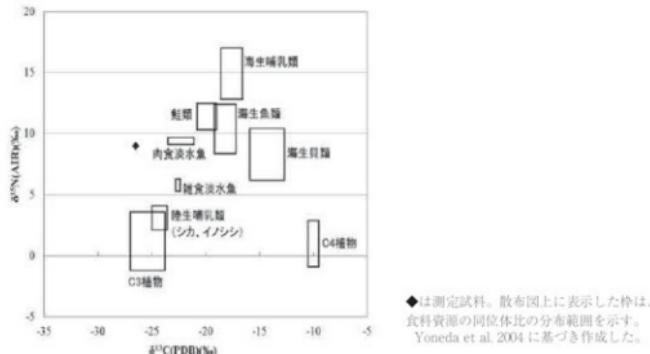
遺物集中 SQ01 から出土した壺胴部破片の表面に付着した炭化物 1 点 (34) を対象にした。その結果は第 17 表および第 116 図のとおりで、「炭素・窒素安定同位体比と C/N 比に基づく検討により、試料が複数の食物の混合物であることが示唆された」との報告を受けた。

1 点の試料で食に関する生活環境の復元を行なうことは、危険かつ困難であることを改めて理解することができた。

第 17 表 炭素・窒素安定同位体比および含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
1 (ABJ No.402)	-26.5	9.01	65.4	1.46	44.9	52.4

* 第 17 表に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、SI サイエンス株式会社の協力を得て行った。



第 116 図 炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)

第4節 珪藻・花粉分析、プラント・オパール分析

1 試料採取地点と分析結果（第113・114図、第15・18表）

珪藻・花粉分析は、琵琶島遺跡の遺構内2か所3点、遺構外6か所28点の計31点の試料を対象とした。プラント・オパール分析はねごや遺跡（堀田城跡として調査）の3トレンチの土層断面採取土壤10点の試料を対象とした。

琵琶島遺跡の周溝跡 SD03 の周溝内側にある Pit1 (35) 埋土、西側周溝 (36) の埋土2・3層では珪藻化石は検出されず、東区土層断面 (37) III層、南区土層断面 (39) II層、(42) I'・II層で陸生珪藻が検出された。SD03 は珪藻化石の産状による湛水状況（堆積環境）の推定を行なうことはできないが、化石が堆積後の続成作用によって完全に分解消失するような陸域における好気的環境下にあったと考えられ、常に湛水しているような状態ではなかったと推定された。東区 (37) III層では、陸生珪藻に流水不定性種等が伴い河川ないし沼沢に接する湿った環境が示唆されるとの報告を受けた。南区西側で縄文時代以前に形成されたと考えられる沢状地形 (40)・(41) からは、珪藻がほとんど検出されず、淘汰により珪藻が堆積されなかつた環境が推定されている。

花粉分析については、(35) からは花粉化石が1個体も検出されず、(36) から木本花粉のコナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科が1～5個認められる程度であった。東区 (37)・(38) III層では乾燥を好むヨモギ属が中心で、タンボボ亜科、キク亜科、イネ科の草本花粉が検出された。南区の (39) II層では草本花粉のイネ科、タンボボ亜科、イラクサ科の草本花粉とともに、スギ、マツ属複雑管束亜属の多くの花粉を検出した。(42) III a・b 層ではヨモギ属、タンボボ亜科、イネ科の花粉と虫媒花植物のトチノキの花粉が検出された。

わずかに検出された花粉化石から、縄文時代以前および縄文～弥生時代は、概ね珪藻の生育しにくい乾燥した草原の環境であり、乾燥を好むヨモギ属の草木が主要に分布する環境であった。弥生～古代もヨモギ属を主にイネ科などの草木が主要に分布し、やや乾燥から湿った環境であったとする。近現代では、水田が分布し、スギやマツ属複雑管束亜属の造林ないし二次林が分布していた可能性が指摘された。

ねごや遺跡のプラント・オパール分析で、栽培植物のイネ属が、山裾部のI層試料である T14 I a2' 層 (43)、低地部の T18 I b ①層 (45) と、低地部のIII層試料である T18 III a ①層・III a ②層 (45) より検出された。含有量はIII a ②層（分析No.10）で最も高く、単細胞珪酸体が試料1gあたり（以下同じ）1,600個/g、機動細胞珪酸体が1,700個/gであり、このほかの試料は300～500個/gと含量が低いとされる。また、T14 (43) および T18 (45) の試料では、栽培種を含むコムギ連の短細胞珪酸体や珪化組織片が産出したと報告された。

2 所見

珪藻分析の結果から、SD03 は開放していなかったか、大気にさらされて乾燥した環境下にあったものと考える。また、東区 (37) III層は上位段丘上であり河川ないしは沼沢に接する湿った環境は想像にくく、検討を要する。沢状地形 (40)・(41) については、水が流れていたわけではなく、乾燥した谷状の地形であったとする推定は妥当である。

花粉分析の結果から、琵琶島遺跡およびその周辺は、縄文時代以前から、ヨモギ属の草木が主要に分布し、弥生時代から古代にかけては、それにイネ科などの草木が加わる、概ね乾燥した草原の環境であったことがわかった。当時のひとびとは、林などに視界をさえぎられることなく、堅穴住居や掘立柱建物を遠くから見渡すことのできる状況にあったことが想像される。

ねごや遺跡のプラント・オパール分析の結果から、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行なわれた可能性が高いと判断されている

(杉山 2000)。これらの基準を参考にすると、今回のイネ属の含量は極めて低く、稲作が行なわれていた可能性を支持することは難しい。しかし、調査区の東側には低地が広がっており、平安時代の水田跡が存在する可能性もある。

第18表 プラント・オバール（植物珪酸体）含量

分類群	T14				T15			T18			
	I a2層 (II a層)	II b1層	II b2層	II a1層	II a2 (I層)	II a2 (4層)	II c層	I b (I層)	II a (1層)	III a (2層)	
	1	2	4	3	5	6	7	8	9	10	
イネ科葉部切細胞珪酸体											
イネ属	400	-	-	-	-	-	-	500	400	1,600	
クマザサ属	200	200	200	-	<100	<100	100	300	500	200	
タケ酢酸	900	300	500	900	<100	200	100	800	600	100	
ヨシ属	400	7,000	7,300	16,700	200	1,500	18,100	1,000	1,700	800	
ススキ属	200	1,100	200	900	-	<100	100	400	-	<100	
コムギ属	200	300	-	-	-	-	-	<100	-	<100	
イネコツナギ酢酸	200	-	-	-	-	-	-	<100	<100	100	
不明	1,900	5,300	3,700	2,800	300	1,200	4,800	4,200	1,400	800	
イネ科葉身切細胞珪酸体											
イネ属	300	-	-	-	-	-	-	400	500	1,700	
クマザサ属	300	<100	200	100	<100	200	-	300	400	300	
タケ酢酸	500	300	600	1,100	200	500	100	700	300	300	
ヨシ属	100	6,200	6,300	13,100	300	1,200	10,700	500	1,400	1,300	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-	
不明	1,000	5,400	4,000	4,000	500	2,000	4,200	1,600	2,200	1,900	
合計											
イネ科葉部切細胞珪酸体	4,400	14,200	11,800	21,400	600	3,000	23,300	7,400	4,600	3,700	
イネ科葉身切細胞珪酸体	2,200	12,000	11,100	18,200	1,000	3,900	15,000	3,500	4,600	5,500	
植物珪酸体含量	6,600	26,200	22,900	39,600	1,600	6,900	38,300	10,900	9,200	9,200	
珪化組織片											
イネ属珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	**
イネ属切細胞型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	**
ススキ属切細胞型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
コムギ属切細胞型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*
その他 珪藻殻片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*

<100>: 100個/g未満

珪化組織片の産状 -: 未検出 *: 検出 **: 多い

第5節 レプリカ法による土器の施文具圧痕の推定

1 分析試料と分析結果 (第117~120図、第19表)

琵琶島遺跡9点、比較参考資料の中野市南大原遺跡2点、佐久市森平遺跡1点の3遺跡計12点の栗林式土器を対象とした。レプリカ法により写し取ったシリコン樹脂の文様を、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察し、土器施文原本の推定を行なった。

観察の結果、琵琶島遺跡の土器9点は、ハンノキ属雄花序の冬芽4点、樹種不明の木材、不明(軸に紐を右左回転で巻きつけた工具、先端を楕円形に加工した工具)5点、と報告された。不明とされ軸に紐を巻いた工具と推定された4点のうち、3点は丸紐で右巻き、1点は帯状の紐とみられ左巻きであると推定された。また、それぞれ同じ施文具を繰り返し使用した可能性が指摘された。紐および紐が巻きつけられた軸の素材については、植物組織などの痕跡が残存していなかったため、不明である。

南大原遺跡、森平遺跡の試料は、3点ともオオバコ花序(1点は萼片)と報告された。

2 所見

分析結果が不明であった試料については、原理的には推定された工具も想定できるが、今後類例を探しながら、施文具を想定した実験をすることによって再度検討を加えていくことが必要である。また、ハンノキ属雄花序の冬芽とされた試料からは、いままで不明であった施文痕跡のなかに植物の花序を用いた施

第19表 琵琶島遺跡ほか出土土器施文部の圧痕レプリカ

分析No.	管理番号	遺跡名	遺構	出土位置・層位	土器型式	時期	器種	圧痕位置	推定した施文具
1	167	琵琶島	I X02	I X02黒上層	栗林式	弥生時代中期後半	甕	胴部外面	不明（軸に縫を右回転で巻きつけた工具）
2	231		I XI2	I XI2黒上層			甕	胴部外面	樹種不明の木材（先端をへら状に加工した工具）
3	256		I XI7	I XI7黒上層			甕	胴部外面	ハンノキ属雄花序の冬芽
4	267		II J14	II J14 IIIa層-2			甕	胴部外面	ハンノキ属雄花序の冬芽
5	268		II J14	II J14 IIIa層-2			甕	胴部外面	不明（軸に縫を右回転で巻きつけた工具）
6	269		II J14	II J14 IIIa層-2			甕	口縁部	ハンノキ属雄花序の冬芽
7	273		II J14	II J14 IIIa層-2			甕	胴部外面	不明（軸に縫を右回転で巻きつけた工具）
8	287		II J20	II J20 IIIa層			甕	胴部外面	不明（軸に縫を左回転で巻きつけた工具）
9	312		III L02	III L02Z			甕	胴部外面	不明（先端を楕円形に加工したヘラ状の工具）
10	AMH1560	南大原	SB04	II V21			甕	頭部	オオバコ花序（萼片）
11	AMH495		SB04	P12			甕	口唇部	オオバコ花序
12	DMR409	森平	SB07	SB07, 08他			甕	口縁部・頭部	オオバコ花序

文原本が存在することについて、ほぼ見通しがついた。今後、現生標本の比較資料をより多く集める必要があるようである。今後の課題である。

オオバコ文については、長野市松原遺跡の調査で「擬似縄文」と報告され（長野県埋蔵文化財センター2000）、森平遺跡の報告において、オオバコを回転施文した文様と想定した（長野県埋蔵文化財センター2014）。南大原遺跡でも、肉眼観察で類似した文様が認められていた。顕微鏡観察の結果、後者2遺跡例は、オオバコ花序を原体として回転施文した文様と推定された。南大原・森平遺跡の分析結果は、そのことを実証する大きな裏付けとなった。

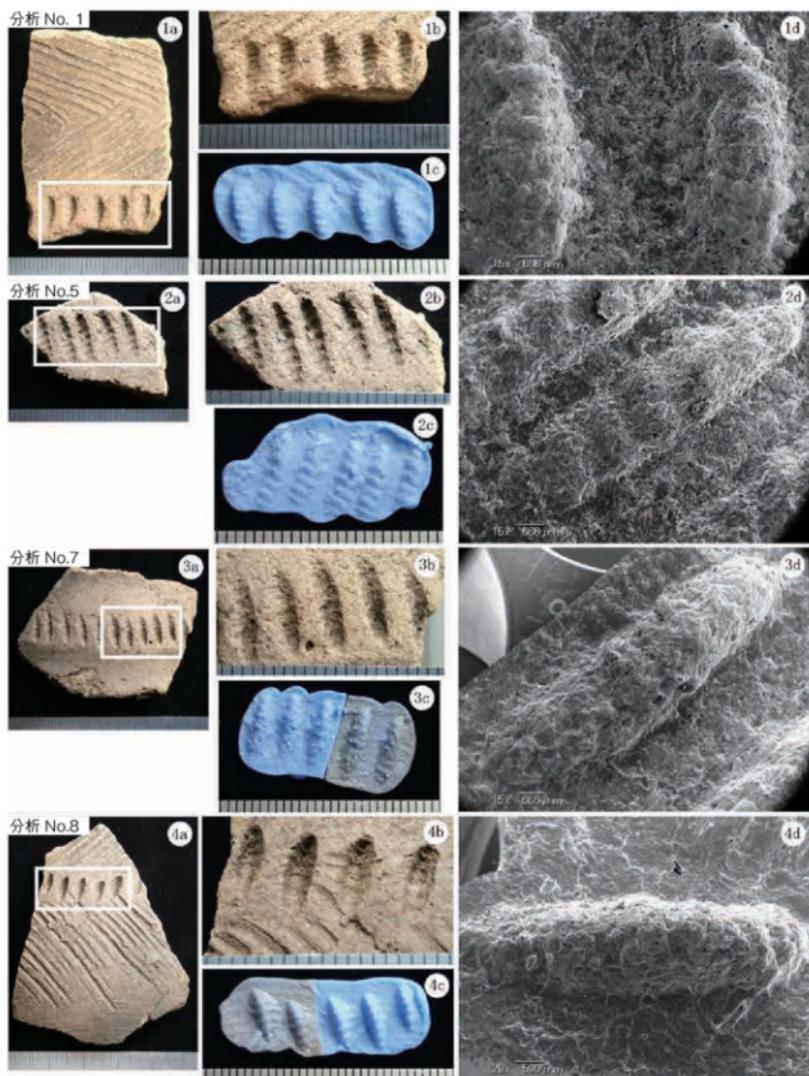
「これまで施文具についてレプリカ法で検討した類例が少なく、現生および遺物での比較対照標本が少なかったため、現段階では施文具を詳細に同定するには至らなかった。」と報告書にもあるように、レプリカ法による土器施文部観察によって土器の施文具を判定していくことは、研究の途に就いたばかりである。

註

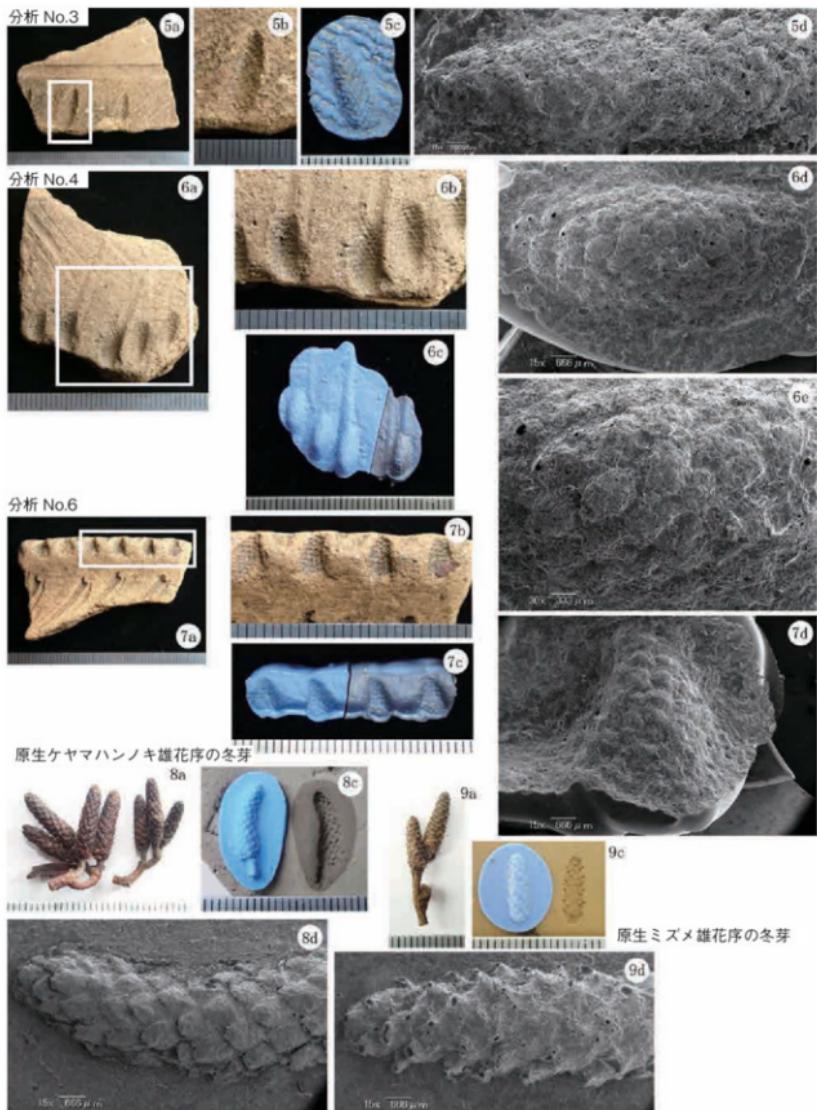
- 1) 国立歴史民俗博物館が想定する弥生時代の時期区分にあてはめると中期前半となる（藤尾慎一郎 2003, 2015）。

引用・参考文献

- 赤澤 威、米田 穣、吉田邦夫 1993 「北村縄文人骨の同位体性質分析」『北村遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 14: 445-468
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100: 54-80
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」「考古学と自然科学3 考古学と植物学」辻誠一郎（編著）、同成社：189-213
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 長野県埋蔵文化財センター 2013 「中野市千田遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 98
- 長野県埋蔵文化財センター 2014 「森平遺跡 寄塚遺跡 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107
- 長野県埋蔵文化財センター 2016 「南大原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」「新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」西本豊 宏編、雄山閣: 55-82
- 藤尾慎一郎 2003 「弥生時代の開始年代」「歴史を探るサイエンス」: 12-16
- 藤尾慎一郎 2015 「弥生時代の歴史」講談社
- 吉田邦夫 2006 「煮灰を出して出来た炭化物の同位体分析」『新潟県立歴史博物館研究紀要』7: 51-58



第117図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真（1）

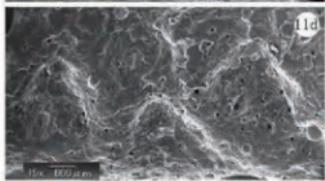
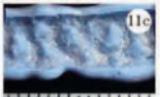


第118図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真（2）

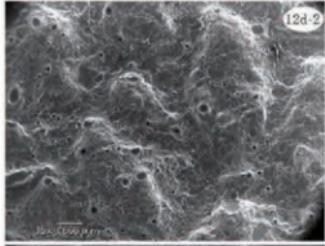
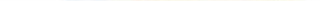
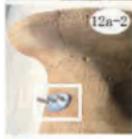
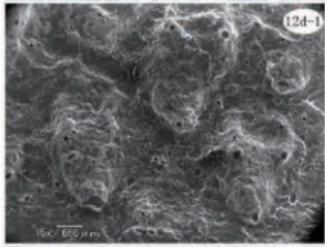
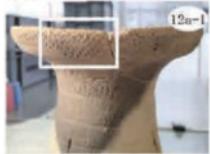
分析 No.10



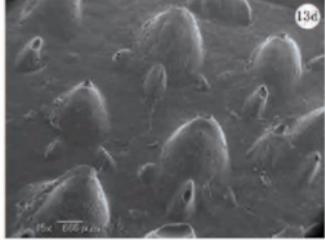
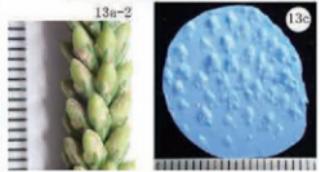
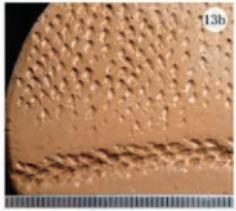
分析 No.11



分析 No.12



原生オオバコ



第119図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真（3）

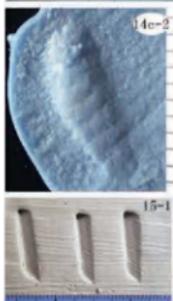
分析 No.2



14a



14b



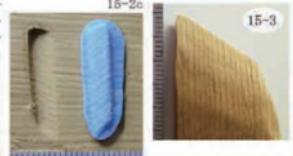
14c-2



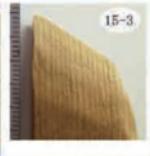
14c-1



15-1



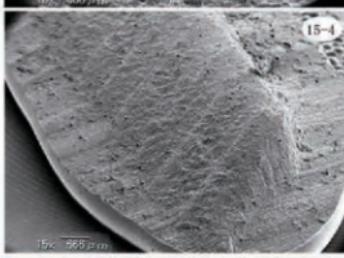
15-2



15-3

16-1
15x

14d

15-4
15x

分析 No.9



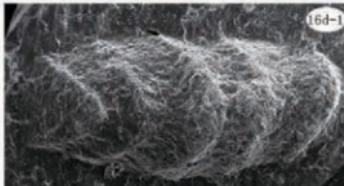
16a



16b



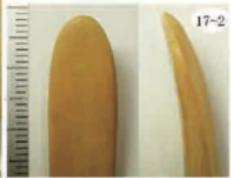
16c

16d-1
15x

16d-1

16d-2
15x

17-1c



17-2

17-3d
15x

第120図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真（4）

第7章 総括

第1節 毛呂島遺跡調査成果のまとめ

1 毛呂島遺跡調査成果の概要

毛呂島遺跡は、「笠倉」の地名を冠されて、千曲川上流に隣接する有孔石劍が出土した「笠倉遺跡」とともに紹介されることが多かった（八幡 1933、桐原 1968）。その内容は毛呂島遺跡全体の南側にあたる滝脇地籍に関するもののみであった。昭和 24 年の調査では、弥生時代後期の住居跡をはじめとして、中期後半の栗林式土器がまとまってみつかっている（桐原 1968）。平成 22 年の市教委の試掘調査および今回の発掘調査は、これまでの報告・調査とは異なり遺跡全体の北側で行なわれた。

市教委の試掘調査分の資料は、今回の発掘調査で検出した遺構・遺物と併せて報告するが、それ以前の調査資料については追跡できず、資料の所在は不明である。以下、調査成果の概要を紹介する。

縄文時代では、草創期の爪形文系土器～後期前半の堀之内 1 式の土器が出土し、早期～後期前半各時期の土器が出土する土坑も調査した。ただ、それらの土坑が所属する時期については明確にはできなかった。さらに、時期は不明だが形状から落し穴が想定される土坑を 2 基調査し、1 基には逆茂木を刺した痕跡を検出した。石器は、有茎尖頭器、特殊磨石、石匙など、出土土器の時期に相応する特徴的な石器が出土した一方、石鏸、石錐未成品などの削片石器、礫器、敲石、磨石などの礫石器は、弥生時代に属する可能性があるものも含まれており、明確な時期区分はできない。

弥生時代では、竪穴住居跡が 2 軒みつかり、掘立柱建物跡は全時代を通して 25 棟みつかっているが、弥生時代の可能性が高いと考えられるものは、ST05・07・11・13・17～19・24・25 の 9 棟である。そのほか、周溝跡 3 基、柵跡 2 列、遺物集中 1 か所、弥生時代の可能性のある土坑 89 基などを発見した。遺物は、弥生時代中期後半栗林 1 式土器のほか単純型式で遺跡が構成され、遺構外出土資料ではあるが栗林式土器成立期から前半期の土器の様相が明らかとなった。そのなかに、壺を中心とした土器の「刻み」文様として、植物の花序を使って施した文様を指摘することができた。また、再利用土器片の土製品も抽出した。石器類は、磨製石斧、大型蛤刃石斧などのほか、スリキリ具、刃器、台石などの工具類が出土したが、出土量は少ない。

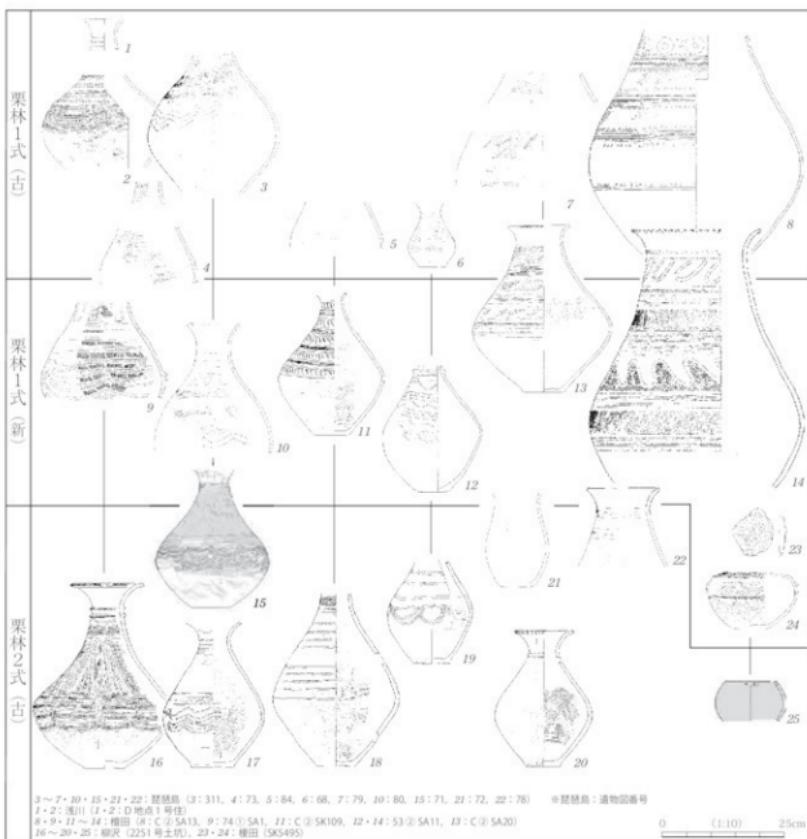
古墳時代には、中期初めの木棺墓で、ロクロガンナが副葬され、上部には高坏と堆形壺のみを破砕して供獻した痕跡がみられた。ロクロガンナの出土は県内初出と考える。また、平安時代以降では、土坑が上層の第 1 檜出面を中心に検出され、墨書き土器、鉄滓を廃棄した事例も抽出した。

次項以下では、弥生時代中期後半栗林期を中心に、調査成果を提示する。

2 栗林 1 式土器について（第 121～123 図）

毛呂島遺跡の今回の調査地点は、遺構・遺物において栗林 1 式期の単純遺跡としても過言ではないほどまとまりがある。本遺跡出土資料を報告するにあたり、周辺遺跡での既出資料もまじえ栗林 1 式土器について再整理しておきたい。

栗林 1 式（既出型式案：石川日出志の 1 式（石川 2001）、寺島孝典の栗林古段階（古相・新相）（寺島 1999）、並澤浩の栗林 1 式古段階（並澤 1996））



第121図 栗林式土器における壺の変遷（無頸壺・蓋含む）

当該期にあたる時間幅のなかに新旧2時期が存在することは、千野浩（註1）、寺島（寺島 1999）の提案がある。1999年に調査された長野市檀田遺跡の堅穴住居跡の重複関係から、その区分に妥当性のあることは、おおよそ首肯されることとなった（長野市埋蔵文化財センター 2004）。その報告書では、遺構の所属時期を弥生時代中期後半としながらも、寺島編年の「栗林古段階に集落の盛期があり、栗林式の初現期には集落の形成」と総括し（前出：114-115）、鶴澤は柳沢遺跡の発掘調査報告書のなかで、檀田遺跡を栗林I式古段階、栗林I式新段階～II式古段階の集落跡と分析する（鶴澤 2012: 231）。

現段階での檀田遺跡および長野盆地の他遺跡の調査資料をもとに、琵琶島遺跡の出土土器を検討すると、栗林1式土器を古い段階（古段階）と新しい段階（新段階）に2区分することが可能であると考えられる。栗林式土器の変遷に関して、従来の研究でも「文様の簡素化」が重視されてきたが（寺島 1999）、今回の栗林1式土器の変遷過程のなかでも、壺の[2+4]装飾帶のなかに空白帯をもつようになったり、壺・甕について作りおよび文様の施文がやや雑になるという点を捉えることができた。縄文土器文様の変化で



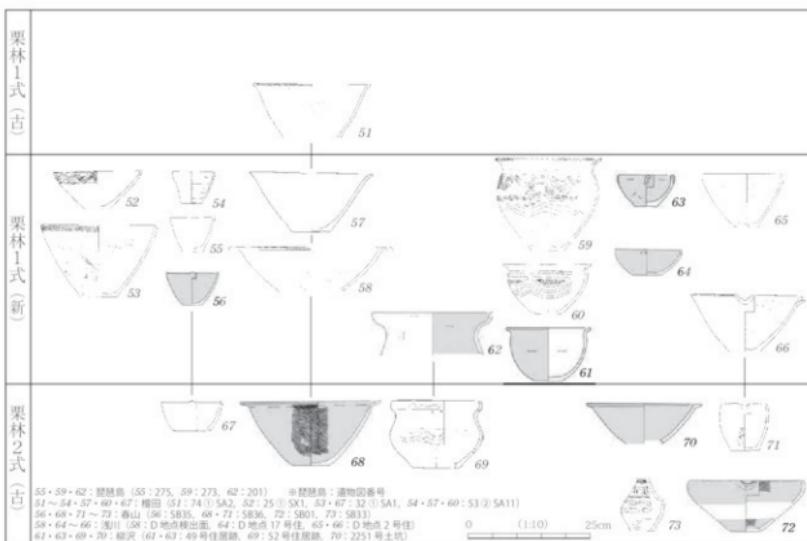
第122図 栗林式土器における壺の変遷

いうところの「手ぬきの方向性」と同様の変化の方向性（小林1994）と捉えて、栗林式土器の変遷を考えることも有効であろう。

栗林1式古段階

壺は、前段階に発達した球胴状（たまねぎ状）の形態で狭口（細頭）、口縁の丈は短く、開きは小さい。やや頸部の細長いタイプ（第121図I・2）が残る。檀田遺跡C②SA13出土土器を該期と考えると、新たに大形で広口（太頭）タイプ（第121図8）の萌芽がある。

狭口タイプをみると、前段階まで胴部上半を中心に発達した文様帯は（註2）、横走沈線文aによる重畳区画の密接施文を基本とする。頸部は胴部と一体化し（[2+4]装飾帶）、その区分は未発達だが、刻み4類（第83図70）や貼付凸帯（第82図65・66）は、口縁部と胴部を区分するアクセントとなり、栗林式の特徴的な手法として継続される。口縁部は無文で、口唇（[1]装飾帶）への繩文施文を基本とする。[2+4]装飾帶は加飾性の多寡により、その高いものと低いものの2者がある。本遺跡出土例（第121図4）や浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス（以下「浅川」という。）D地点1号住出土土器（第121図2）が前者の好例である。装飾性の低い方は、便宜的に単純な重畳区画の構成をとるものあげるが、繩文の充填（5）、横走沈線文aや変形工字文モチーフ（6）、山形沈線文aの施文（第84図88）、櫛描直線文a・斜線文など（7）を文様要素とする。横走沈線による重畳区画に繩文を充填し、連弧文aを加えて[2+4]装飾帶を完成



第123図 栗林式土器における鉢の変遷（瓶・片口鉢・高杯・注口土器含む）

させる(3)は、その中間的な様相を示す。

広口タイプの壺は通常、横走蛇線文aのモチーフを多用する。櫛描直線文aと短斜線文bを交互に配置するタイプ(第81図1)は、浅川D地点17号住出土例として知られ、檀田C②SK109にも類似例(第121図II)がある。栗林1式を2段階に分ける寺島は、それを古段階新相として位置づける。檀田遺跡53②SA3と53②SA11や74①SA1と74①SA2のような遺構の重複関係から、また柳沢遺跡49号住居跡や長野市浅川端遺跡4号住居址のように伴出遺物の変遷的位置から新相案は肯定されるものと考えたい。

壺は、胴部上半は直立気味、口縁は外反するが頭部の括れは未発達である(第122図26～32)。文様帯は胴部上半に集約され、櫛描で斜線文を施す例として、浅川D地点1号住出土例(26)と檀田遺跡52②SA3出土例(27)がある。本遺跡からは、櫛描横羽状文(28)・(第88図195)、あるいは櫛描波状文a(29・30)、櫛描直線文a(31)を施す例が出土している。また、櫛描格子目文(32)もこの段階の最終末から始まるかもしれない。横羽状文は刻み1類により胴部下半部を区分(27・28・31・32)、あるいは胴部文様帯そのものを上下に分ける効果がみえる(第89図210・222)。櫛描波状文aは櫛描垂下文aで横位方向を縦位に分割する(29・30)。口縁屈曲部は無文部を残すが、強いヨコナデをともなう例(28)や櫛描直線文a・波状文aで胴部文様帯を意識的に描出する例(30)・(第88図194)も登場する。口唇部は平坦なもの(第89図203)を基本に、波状のもの(第89図202)がわずかにみられ、端部は繩文施文のほか、ユビオサエを施す。

鉢は、器種として組成すると考えられるが出土例は少ない。口縁部が鉢形に開くタイプが檀田遺跡74①SA2(第123図51)にある。

栗林1式新段階

壺は、球胴状の形態を継承するが、最大径はより小さくなり、胴部の張りが弱く、その位置は胴下半に下がる。狭口に加え大形で広口のタイプ(第121図13・14)が増加する。

狹口タイプの [2 + 4] 装飾帯は、重疊区画の密接施文の中に空白帯が現われ、それまで胴部最大径より上半部に集中していた文様は下半部へと広がりをみせる (10)。文様は縄文、櫛描直線文、山形沈線文、連弧文がある。檀田遺跡 53 ② SA11 出土例 (12) は、[2 + 4] 装飾帯に貼付凸帯、横走沈線文 a、一条の連弧文が施される。加飾性の高い装飾壺は、本遺跡例で胴部上半に間延びした空白帯を形成し、そのなかを籠描き沈線で区画し、櫛描垂下文 a と縁のみに押引列点文を施した懸垂舌状文 (第 87 図 170) が出現する。また、檀田遺跡 74 ① SA1 出土例 (9) があり、櫛描垂下文 a を充填した懸垂舌状文に押引列点文を充填した変形工字文がみられる。以後、懸垂舌状文は栗林式を代表する装飾壺の主文様モチーフとして用いられていく。

広口タイプには、檀田遺跡 C ② SA20 出土例 (13)、53 ② SA11 出土例 (14) にみるように、重疊区画の密接施文が継承される。また類例は多くないが、無頭壺と蓋がある。双方とも、文様は貼付凸帯、連弧文や変形工字文、縄文や押引列点文による充填等の装飾例に限られる。無頭壺は、長野市榎田遺跡 SK5495 (24) や檀田遺跡 C ② SA20 に、蓋は榎田遺跡 SK5495 (23) や浅川 D 地点検出面に出土例がみられ、本遺跡にも類似例 (第 91 図 276) がある。

壺は、概ね古段階の形態を継承するものの、頭部の括れが強くなる (第 122 図 33 ~ 40)。胴部上半の文様には、櫛描横羽状文 (第 88 図 192)、櫛描波状文 a (36)、櫛描直線文 a (35・37・38)、櫛描格子目文 (39 ~ 41) のバラエティーがある。胴部文様帶を上下に分けた刻み手法は、羽状文のなかに多く用いられる。羽状文以外では垂下文 a と櫛描直線文 a の組合せが檀田遺跡例 (35・38) にある。羽状文は施文効果として横羽状文 (33・34) が依然主体だが、微量ながら綾羽状文 (第 81 図 7、第 92 図 314) の出現がある。口縁が L 字形に屈曲する受け口状口縁は栗林 2 式の特徴と考えたいが、栗林遺跡第 1 号住居址 (42) に出土例がある。本遺跡 SQ01 出土例 (第 82 図 54) についても作出した壺と同様、栗林 1 式新段階に位置づけるべきか。栗林 2 式期に登場が想定される受け口状口縁の壺よりも、ひとつ早い段階に壺の口縁に採用されたことになる。

鉢は、器種として確実に組成するようになり、3 種ほどの形式が存在する。口縁部が直口で鉢形に開くもの (第 123 図 52 ~ 56) と口縁部は直口だがやや内湾する椀形 (63・64) を併せて鉢 A、口縁がほぼ直角に屈曲外反するもの (57・58)・(第 91 図 296) を鉢 B、口縁部が屈曲外反するもの (59 ~ 61) を鉢 C とした。本遺跡出土例 (62) (註 3) を該期の所属とすると、受け口状口縁をもつタイプも出現していることになる。

鉢 A の直口で鉢形に開くタイプには、そば猪口形を呈する小形例 (54 ~ 56) が含まれる。口縁部に縄文帯を設けるもの (52・53)・(第 91 図 290)、それに鋸歯状のモチーフを描くもの (52)・(第 91 図 291)、そして無文がある。鉢 A の椀形のタイプは例外なく赤彩され、口縁部に豆粒状貼付文がみられる例 (63)・(第 85 図 95) や 2 孔一对一の穿孔のある例がある。浅川 D 地点 17 号住出土例 (64) に代表されるが、本稿では 17 号住出土土器を檀田遺跡 E ① SA1 出土例と同様に本段階に位置づけ、屈曲外反するタイプの登場とともに栗林 1 式新段階の器種とする。鉢 B は、本段階に至って出現する新形式であり、口縁の強い折り返しに特徴がある。赤彩を基本とするが、そのない例もあり、浅川 D 地点検出面例や栗林遺跡第 3 号住居址例では、口縁部に縄文と鋸歯沈線文 a を描く。このタイプは、以後、栗林式の特徴的な鉢として継承され、その形状は高坏の坏部と同形異種となる。鉢 C は、形状変異と大きさに大小がある。本遺跡出土資料に、重山形文と連弧文 a で飾る大形の例 (59)、連弧文 a に縄文や押引列点文を充填する装飾性の高い小形の例 (第 91 図 282) がある。さらに小形の例として、檀田 53 ② SA11 出土例 (60)、柳沢 49 号住跡出土例 (61) がある。

片口鉢は、鉢形の口縁部に注ぎ口を設ける形態で、本段階に登場する。浅川 D 地点 2 号住出土例 (第 123 図 66) は口唇に縄文が施され、鉢と同形異種。また、本遺跡 SB02 出土例 (第 81 図 8) では内外面に

赤彩が施される。

甌も該期で登場する。浅川D地点2号住(第123図65)にある。

栗林2式(既出型式案:石川の栗林2式、寺島の栗林中段階、筆澤の栗林I式新段階・II式古段階)

当該型式の最大の特徴は、壺胴部文様帯にみる無文部[0]の形成にあり、石川をはじめ寺島、筆澤とともに、新旧2時期に区分することは共通の理解となっている。石川は柳沢遺跡の発掘調査報告書中で、同遺跡の出土土器は「2式古段階が多数を占める」(石川2012:184)と分析している。栗林1式を中心とする琵琶島遺跡出土資料と柳沢遺跡出土資料を比較検討することで、栗林2式古段階を整理できる。

栗林2式古段階

壺では球胴状の形態が消失し、口縁の開きが強くなる。胴部下半へと広がりをみせた文様帶は、胴部最大径より下位にまでおよび([5]装飾帶)、胴部上半と下半の文様帶を分ける幅広の空白帶[0]が形成される。以後、栗林2式の特徴的な構図として継承される。本遺跡出土土器(第121図15)、柳沢遺跡2251号土坑例(17)や46号住居跡例が該当する。胴下半の[5]装飾帶には、従前からの範描沈線による文様に、繩文や櫛描直線文aの充填手法はみられるが、範描沈線による文様のみの例(19)が微増する。加飾性の低い重畠区画にも無文の多段化(18)が起こり、その顕著な例は柳沢遺跡2251号土坑例(20)のように胴部全体を無文化する。懸垂舌状文をメルクマールとする装飾壺(16)は、前段階にも増して加飾性が強まる。長野市平柴平遺跡5号土坑例は懸垂文の施される文様帶幅が狭く、若干古い様相を示すが、壺への受け口状口縁の出現(寺島1999:68)をもって該期と考えるべきか。大形で広口のタイプは減少し、胴部文様帶の消失化(22)がみられる。寸胴でやや筒形に近いタイプ(21)は、前段階には登場し継承される。無頸壺および蓋は依然稀少で、施文は前段階に比べ簡素化される。柳沢遺跡2251号土坑出土例(25)から判断すると、無文で全面赤彩される例の出現がある。

壺は、胴の張りが進み、頸部の屈曲が目立つようになる。受口状口縁の本器種への採用頻度は増し、口縁の屈曲は強く直立状で(第122図49)、大容量の壺(50)が現れる。文様帶は刻み文様の消失とともに開放され、胴部下半へと広がりをみせ、櫛描による羽状文(43・44)、波状文(45・46)、直線文(47)、格子目文(48)などが前段階から継承される。

鉢は3種の形態を継承。鉢A(第123図67)は、1式から継続してみられる。鉢B(68)は赤彩が中心となり、坏部のみでは高坏との判別が難しい。鉢Cには、赤彩が中心であるが無彩例もあり、柳沢遺跡52号住居跡出土例(69)では、頸部に2孔一対の穿孔を施し文様は範描沈線のみで描かれる。

片口鉢は、長野市春山B遺跡で木製の漆塗り資料も出土し、SB36出土例(71)は、鉢形というよりビーカーのような形態をとる。また、内外面赤彩されたSB01出土例(第123図72)は、古い文様を残すものの、新段階に入る可能性が高い。

高坏は、当該段階から明確に登場する。完全な資料はなく、柳沢遺跡2251号土坑例(第123図70)が本器種と考えられ、坏部内外面に赤彩が施される。

甌の出土例は稀少であるが、口縁部が直口で鉢形に開く形態で底部に一穴をもつ。柳沢遺跡46号住居跡に底部破片例がある。

注口土器が新たに登場する。文様構成が装飾壺や他の壺と同一である点に特徴がある(第123図73)。

以上のように、琵琶島遺跡の栗林式土器は、概ね栗林1式の範疇に含めることができる。第121図15・22は、2式の初めに入る可能性がある。

編年表では他遺跡の資料のなかに琵琶島遺跡の資料を位置づけることで、段階を確認した。堅穴住居跡の資料(SB01・02)をみてみると、SB01は古段階の資料が多く、SB02は新段階の要素が多く認められた。C14年代測定でも、SB01がSB02より50~100年古い値が算出されている。また、遺構外出土遺物につ

いても、古段階、新段階に分けたが、東区、南区で出土した土器には時期の偏り、違いはみられなかった。今回の調査範囲では、地点的な段階差はないと考えられる。ただ残念なのは、破片資料が多く、土器の全体像がわからないものが多い点である。今後、同時期の資料が出土した際に、比較資料として本遺跡資料を取り上げてもらえる機会に恵まれればと願う。

3 栗林1式期の集落（第124、PL2）

第3章割付図①～⑤をみると、遺構が検出された範囲は、上位段丘では南区西端の標高340mあたりが西限となり、東区南端ST26の標高335mあたりが東限となる。山側（西側）に向かってやや傾斜がみられ、ほぼ平坦となるのは標高338mあたりから東側であろう。下位段丘では、東区北端SX08の標高332mあたりから、東区中央SD03が検出された面の標高330mあたりとなるであろう。上位段丘と下位段丘では最大10mの比高があるが、最小では3mほどである。上位と下位の段丘は、人が行き来できないほどの高低差ではなかったと予想できる。

千曲川に近い下位段丘上は、堅穴住居跡が円形と小形で長方形のものが1軒ずつ南北に並び、その北側で3棟、南側で2棟の掘立柱建物跡がみつかり、南側の柵跡も2列で対になっている。南側の掘立柱建物跡と柵跡の間には、周溝跡が3基みつかり、北陸地方との系譜を検討する1要素が加えられた。下位段丘上は集落内の一つの構成単位として、千曲川に沿って南北方向に同種類の遺構が2ないし3基ずつ（掘立柱建物跡は重複する）配置されていたと考えられる（第124図）。

一方、山側の上位段丘では、土坑以外は17棟の掘立柱建物跡で、長軸をほぼ南北か、それに直行する東西方向にして建てられている。弥生時代のものがすべてではないが、堅穴住居跡は存在せず、掘立柱建物跡と土坑のみの構成となる。

遺構の構成をみると、掘立柱建物跡中心の上位段丘と一定の規則性が認められる下位段丘とでは別の構成単位となる。琵琶島遺跡は、上位段丘、下位段丘2つの異なる構成単位の遺構群が結合した形の集落となる可能性が高い。

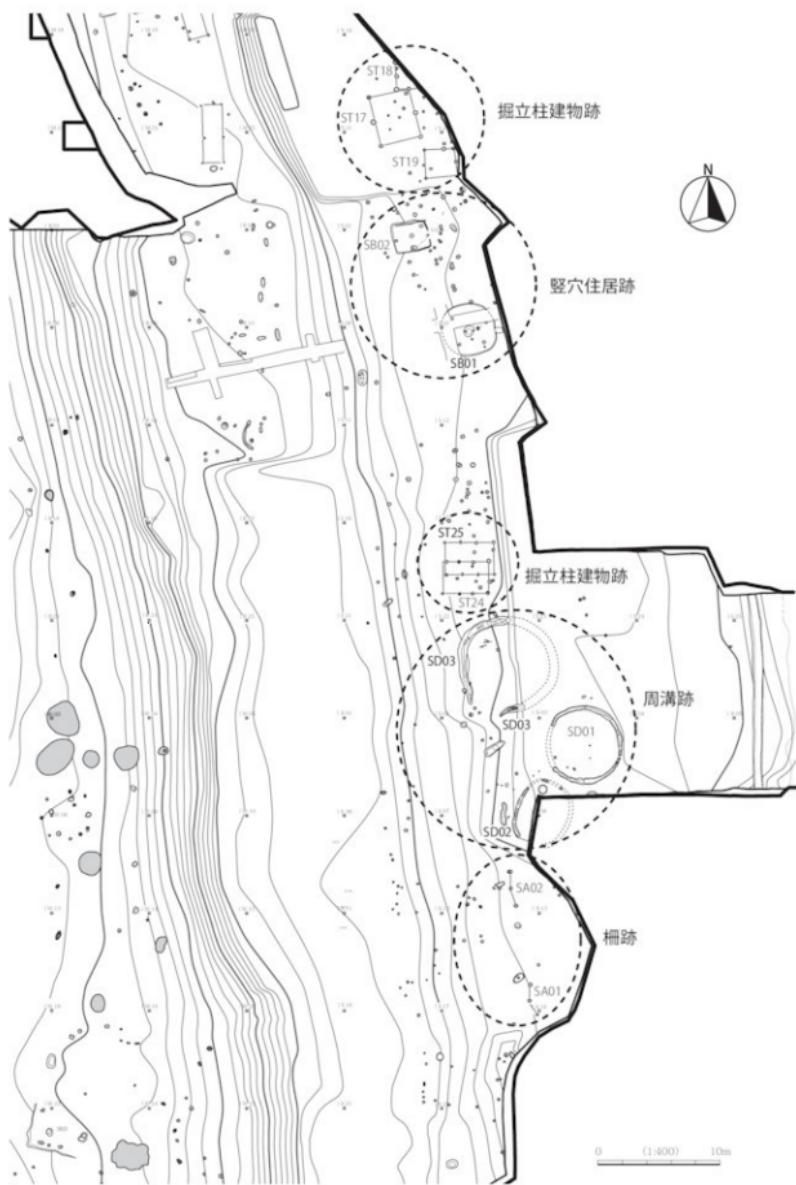
4 長野盆地北部・飯山盆地における栗林式期の遺跡（第7・125図）

ここでは、琵琶島遺跡に関わる長野盆地北部から飯山盆地にかけての弥生時代中期後半（栗林式期）の遺跡について概観し、調査成果理解の一助とする。

長野盆地北部から飯山盆地にかけては、弥生時代中期～後期の集落跡が多数確認されている（註4）。千曲川の自然堤防上やその支流が形成する扇状地、盆地縁辺部の丘陵地帯に広く遺跡が分布している。これらの遺跡は、立地、存続期間、規模においていくつかのまとまりを示しており、遺跡群として捉えられている（第125図）（笹澤2009・2012）（註5）。

琵琶島遺跡の周辺で、栗林式に先行する時期の弥生時代遺跡は、中野市川久保遺跡（替佐遺跡群）で前期～中期前半の条痕文土器1片が出土した以外は（長野県埋蔵文化財センター2013）、確認されていない。中期後半（栗林式期）になると遺跡数は大きく増加し、千曲川下流域から主な集落遺跡を上流に向かってあげてみると、飯山市上野遺跡、小泉遺跡、北原遺跡（旭町遺跡群）、中野市柳沢遺跡、川久保遺跡、七瀬遺跡、南大原遺跡、栗林遺跡、安源寺遺跡、西条・岩船遺跡群などの集落跡があげられる（註6）。なお、本遺跡で円形・馬蹄形の周溝をもつことから周溝跡とした遺構は、栗林遺跡では平地建物跡として報告されている。

礫床木棺墓は、長野県を中心とした中部高地に特徴的な墓である。本遺跡から千曲川下流3kmの柳沢遺跡では、礫床木棺墓群のなかに県内最大級の礫床木棺墓（1号礫床木棺墓）が発見された（長野県埋蔵文



第124図 下位段丘上の遺構配置

化財センター 2012)。当該地域においては、小泉遺跡、上野遺跡、栗林遺跡、南大原遺跡などでも、疊床木棺墓・木棺墓群が確認されている。

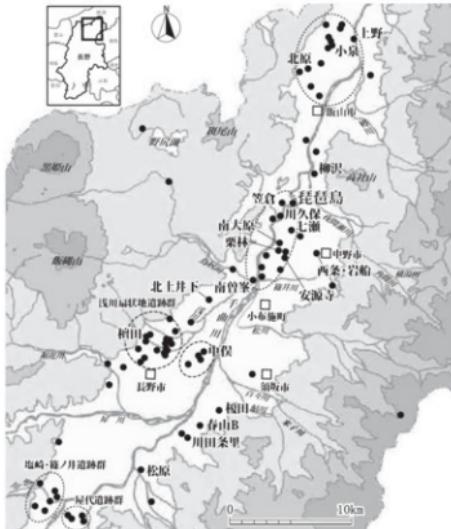
七瀬遺跡、柳沢遺跡、川久保遺跡で、弥生中期後半～後期の水田跡の存在が確認され、そのうち本遺跡から千曲川上流 15km の川久保遺跡では、中期後半の水田の存在と、千曲川に面した微高地の縁辺部に焼土坑とともに完形の栗林 2 式新段階の土器が並べられた土器集中が確認された。稲作に関する祭祀行為とも考えられるが、性格は明確ではない(長野県埋蔵文化財センター 2013)。

さらに、遺物面では、南大原遺跡で鉄斧が出土し(註7)、小泉遺跡に流水文が刻まれた板状の炭化木製品がみつかっている。また、石戈、有孔石剣などの特殊な石製品が本遺跡南側に隣接する笠倉遺跡で出土している(石川 2012)。

長野盆地北部・飯山盆地に所在する栗林式期集落遺跡の動態について、笹澤浩は「飯山盆地の上野と小泉などの遺跡群との集団関係は拠点集落と周辺地域の遺跡との関係であり、栗林遺跡とその周辺にも認めることができる。」(笹澤 2012:236)と述べ、その周辺地域の遺跡は、安源寺遺跡、川久保遺跡、南大原遺跡、笠倉遺跡などの短期居住型遺跡であるとした。栗林遺跡は、栗林 2 式新段階に大規模な拠点集落になり、周辺遺跡も同時期に成立する。一方で、栗林 1 式の遺跡である長野市南曾峯遺跡は短期居住型遺跡であり、栗林 1 式古段階に出現し栗林 2 式古段階でなくなる(註8)。その関係から、笹澤は「栗林 1 式古段階に出現した小規模集団が、この領域内で移住と集住の結果が栗林 II 式期の拠点集落化した栗林遺跡と新たに出現した周辺遺跡との集団関係であろうし、移住と定住は領域を越える場合もあり得た。」(笹澤:前出)とした。

本遺跡は、この地域の集落遺跡のなかでは、小泉遺跡と時期的に重なり、掘立柱建物跡が堅穴住居跡に比べて多い点も共通するが、遺構数が少なく規模はかなり小さい。栗林遺跡では平地建物跡が出土しているが、本遺跡出土の周溝跡とは少し性格が異なりそうである。また、千曲川上流・下流でみつかっている疊床木棺墓、水田跡は、本遺跡からは検出されていない。さらに、遺物に関しては、金属製品・特殊な木製品・石製品の出土はない。出土土器は、千曲川上流の南曾峯遺跡と共に通する部分が多い。

以上の特徴から、本遺跡は栗林 1 式から 2 式古段階の時期に限定して営まれた短期居住型小型遺跡である。掘立柱建物跡の数が堅穴住居跡に比べて卓越しているため、千曲川上流・下流に存在する集落遺跡を行き来し、物資の保管に特化した機能をもたらした集落であった可能性を感じる。そのなかで、周溝跡はその機能に関わる空間であったのかもしれない(浜崎 2014)。笹澤説から考えてみると、琵琶島にいた人びとは栗林 2 式新段階以降、栗林遺跡やその周辺の遺跡へ移動・定住したことになる(第 125 図)(註9)。笹澤説は魅力的な仮説であり、栗林 1 式の集落が短期居住型に限られ



第 125 図 琵琶島遺跡周辺の弥生時代中期後半の遺跡

る事実も見えてきた。今後、各遺跡の詳細な時期区分等の検討を続けるなかで少しでも笹澤説に近づければ、栗林社会がもう少し鮮明に見えてくるのではないだろうか。

第2節 今後の課題

琵琶島遺跡をとり巻く弥生時代中期後半栗林式期の遺跡を概観し、今回の調査成果をもう一度見直すなかで、浮かび上がってきた課題を提示し、報告書の記述を終わりたい。

(1) 栗林式土器の変遷と栗林文化の動態について

琵琶島遺跡出土の栗林式土器は、一部栗林2式古段階にはいる可能性はあるが、ほとんどが栗林1式の範疇に納まる。遺構外出土土器が大半を占め、破片資料も多いが、前節2項で器種ごと類型ごとに内容を確認し、変遷をたどった。長野盆地の他遺跡出土資料との比較を行ない、栗林1式土器の内容を確認、從来から言っていた古段階と新段階の枠組みを設定し、位置づけをした。また、C14年代測定の結果によつて栗林2式との境界も見えてきた。今後、さらに1式の内容を精査するとともに、2式以降の土器の内容を確認し、長野盆地に所在する栗林式土器および栗林式期の遺跡を見直す必要がある。そのうえで、栗林文化・社会の動きが提示できればと考える。

(2) 捣立柱建物跡が堅穴住居跡を圧倒する集落の意味

琵琶島遺跡では、堅穴住居跡2軒に対して、時期が不明な遺構もあるが、撗立柱建物跡の検出数が圧倒している。下位段丘では4倍、上位段丘に限っては堅穴住居跡が検出されていない。長野盆地北部・飯山盆地の栗林式期の遺跡をみると、堅穴住居跡に撗立柱建物跡をともなう遺跡は中野市栗林遺跡、南大原遺跡、飯山市小泉遺跡、上野遺跡などがある。このなかで、小泉遺跡のみ撗立柱建物跡が堅穴住居跡・平地建物跡を圧倒する棟数でみつかっている。小泉遺跡は、本遺跡と同じ栗林1式を中心とする遺跡である。一方、他遺跡はそれより新しい栗林2式を中心とする遺跡である。撗立柱建物跡の機能に関しても明確にできていない今、この構成の差異を時期差とみるべきなのか、遺跡の性格の違いとして捉えるべきなのかは、さらに追究していく必要がある。

(3) 長野県内にみられる「周溝跡」の性格についての解明

弥生時代（栗林式期）にみられる円形・馬蹄形の周溝をもつ遺構について、本文のなかでは「周溝跡」として報告した。「平地建物跡」として調査は行なったが、建物跡としての条件が調わず周溝跡に留めた。その結果、性格不明の遺構となり、「周溝をもつ遺構」という実態だけが残った。今後、円形周溝墓、堅穴住居跡等の遺構との比較、今まで平地建物跡として報告されている事例の再検討を行なうことによって、当該遺構の位置づけ、さらには性格づけを行なう必要がある。

(4) 栗林式土器における植物利用の施文具についての集成

栗林式土器の「刻み」文様としたなかに、ハンノキ属、オオバコなどの植物の花序を施文具として使用した資料を数点抽出した。今まで、松原遺跡等で「擬似縄文」として報告されてはきたが（長野県理藏文化財センター 2000）、明確な提示はなかった。さらに、オオバコの現生標本によって施文実験を行ない施文具の推定をした事例はあった（水澤 2014）。今回、レブリカを用いた走査型電子顕微鏡観察と想定施文具の施文実験による比較検討作業により、具体的な施文具を推定することができた。これらの施文具について、千曲川流域をはじめとした栗林式土器および周辺土器型式についても使用状況を調査し、共時的・通時的分布を把握することが必要である。栗林式土器の変化と施文具の変化に因果関係が捉えられれば、当時の弥生人の志向（植物利用等）の変化が理解できるだけでなく、周辺地域との交流状況にもたどり着

くヒントが隠されているかもしれない。

註

- 1) 「1990年の第2回弥生土器を語る会の席上での発表」と、石川の文献（石川 2002）にある。
- 2) 例えば、長野市塙崎遺跡群松節地點16・21号木棺墓出土の、胴部上半を沈線と縄文で装飾する細頸（狹口）の壺などの例があげられる（矢口 1986）。
- 3) 第3章では、器形の点から「特殊壺」と分類したが、用途としての分類は鉢または壺にすべきかもしれない。
- 4) 各遺跡の概要は、第2章第6・7図、第5表を参照。
- 5) (並澤 2012)によると、栗林期の集落遺跡は2類型に大別でき、土器型式で1ないし2型式にわたる短期居住型遺跡（A型）が大型遺跡（A1型）と小型遺跡（A2型）にまとめられ、栗林期全期間にわたる長期居住型遺跡（B型）が広域にわたる一定地域内で移動により居住域を変え結果として大規模集落の形態をとる長期居住移動型（B1型）と一定地域内に多数の居住域を集中させている長期居住定住型（B2型）にまとめられるという。
- 6) 猪苗島遺跡の北にある遺跡では、柳沢遺跡で3km、北原遺跡で11km、小泉遺跡で13.5km、上野遺跡で14.5kmの距離にある。猪苗島遺跡の南にある遺跡では、川久保遺跡で15km、南大原遺跡で35km、栗林遺跡で4km、南曾峯遺跡で7km、長野盆地中・南部の中俣遺跡で15km、浅川扇状地遺跡群で17km、桜田遺跡で18km、春山B遺跡で20km、川田条里遺跡で21km、松原遺跡で25kmの距離にある。
- 7) 南大原遺跡は、2011～2013年度に県埋文センターが発掘調査を実施し、栗林2式新段階を中心とした集落路の調査成果をまとめた報告書が、2016年3月刊行予定である。鉄斧の出土とともに、堅穴住居跡床面で複数の火床の検出、鍛冶関連石製工具の可能性がある台石・敲石・砥石の出土から、長野県内では初めて弥生時代の鍛冶関連遺構の可能性を指摘した（長野県埋蔵文化財センター 2016）。
- 8) (並澤 2016: 236)では、「I式古段階に出現し新段階で姿を消す。」としている。
- 9) 第125図に示した栗林遺跡を中心にすえて仮に定めた領域は、半径約4kmを測る。この領域を越えて、千曲川をさらに遡った長野盆地中部の中俣遺跡、逆に千曲川を下った飯山盆地の上野遺跡等への移住・定住はあったのだろうか。

引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1995「小泉弥生時代遺跡」飯山市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」「長野県考古学会誌」99・100: 54-80
- 石川日出志 2012「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」「中野市柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100: 182-191
- 桐原健 1968「下水内郡豊田村笠置の弥生式遺跡」「高井」6: 11-14
- 小林達雄 1994「撲糸文系土器の変遷における「手ぬきの方向性」」「縄文土器の研究」小学館: 252
- 並澤浩 1996「栗林式土器」「日本土器事典」雄山閣: 504
- 並澤浩 2009「中野市柳沢遺跡出土青銅器の意義と今後の展望」「長野県考古学会誌」127: 3-22
- 並澤浩 2012「長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡」「中野市柳沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100: 228-240
- 寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」「99シンポジウム長野県の弥生土器編年発表要旨」長野県考古学会弥生部会: 67-75
- 寺島孝典 2001「成立期の栗林式土器」「長野県考古学会誌」93・94: 5-16
- 寺島孝典 2013「栗林式土器の成立と展開—栗林式土器編年との再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで—」「一般社団法人日本考古学協会 2013年度長野大会 研究発表資料集 文化的十字路 信州」: 285-290
- 農野町誌刊行委員会 2001「弥生時代」「農野町誌 豊野町の資料（一）」: 188-211
- 中野市教育委員会 2006「長野県中野市遺跡詳細分布図」
- 中野市教育委員会 2014「長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）」
- 長野県史刊行会 1981「長野県史 考古資料編 遺跡地名表」
- 長野県埋蔵文化財センター 1994「栗林遺跡・七瀬遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19
- 長野県埋蔵文化財センター 1999「春山遺跡・春山B遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 45

- 長野県埋蔵文化財センター 2000『松原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
長野県埋蔵文化財センター 2012『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
長野県埋蔵文化財センター 2013『中野市川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99
長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
長野市教育委員会 1986『浅川扇状地遺跡群—半礼バイパスB・C・D地点—』
長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター 1988『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』
長野市埋蔵文化財センター 2004『浅川扇状地遺跡群 植田遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 105 集
馬場伸一郎 2008「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『國立歴史民俗博物館研究報告』145：101-174
浜崎悟司 2014「弥生時代後期の『刷溝状遺構』—穂の屋外積みについて～』『石川県埋蔵文化財情報』32：27-38
水澤教子 2014「擬似縄文が施された土器」「森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107：171,172,175
矢口忠良（編）1986『塩崎遺跡群Ⅳ』長野市の埋蔵文化財第 18 集
八幡一郎 1933「有孔石劍の新資料」『考古学雑誌』23-1：19

遺物觀察表

1 土器觀察表

- 琵琶島遺跡 繩文時代土器觀察表
琵琶島遺跡 弥生時代土器觀察表
琵琶島遺跡 古墳時代土器觀察表
琵琶島遺跡 平安時代土器觀察表
ねごや遺跡 弥生・平安時代土器觀察表

2 石器觀察表

- 琵琶島遺跡 繩文・弥生時代石器觀察表

3 土製品觀察表

- 琵琶島遺跡 弥生時代土製品觀察表

4 石製品、ガラス製品觀察表

- 琵琶島遺跡 弥生時代石製品、ガラス製品觀察表

5 金屬製品觀察表

- 琵琶島遺跡 古墳時代鐵製品觀察表
琵琶島遺跡 平安時代鐵滓觀察表

1 土器觀察表

卷之三十一

琵琶島遺跡 弥生時代土器觀察表

編號	時間	地點	屬性	主要內容	起因	目的	結果	口語詞	語義	外在色調	內在語彙	行為	實物	行為文
8060230 (T34)	202	窗外	1. X12.黑.牆	黑	黑	黑	黑	口語詞~黑.牆	黑.牆	中性	—	9.4	—	黑色.牆
8060231 (T34)	203	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060232 (T34)	204	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060233 (T34)	176	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060234 (T34)	184	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060235 (T34)	201	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060236 (T34)	205	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060237 (T34)	217	窗外	1. X12.黑.牆.2	黑	口語詞~黑.牆.2	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆.2
8060238 (T34)	178	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060239 (T34)	218	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060240 (T34)	37	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060241 (T34)	390	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060242 (T34)	271	窗外	1. X12.黑.牆.2	黑	口語詞~黑.牆.2	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆.2
8060243 (T34)	401	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060244 (T34)	1.1	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060245 (T34)	207	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060246 (T34)	208	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060247 (T34)	246	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060248 (T34)	1.2	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060249 (T34)	177	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060250 (T34)	1.3	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060251 (T34)	247	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060252 (T34)	248	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060253 (T34)	249	窗外	1. X12.黑.牆	黑	口語詞~黑.牆	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆
8060254 (T34)	4.1	窗外	1. X12.黑.牆.2	黑	口語詞~黑.牆.2	黑	—	—	—	—	—	—	—	黑色.牆.2

- 235 -

古墳時代土器調査表

平安時代土器觀察表
琵琶島遺跡

●口語、歌謡、童話、諺語等の<言文実況演説、<注釈演説

ねごや遺跡 繫生・平安時代土器観察表

組類区分	管理番号	注文内容	器種	断片	時間	口径 cm	底径 cm	重積 kg	保存 率	地成	外表面質・文様	内面質・文様	断土	備考
第11281	1	No.143, SG01a	黑色+20A# 口縁部~底部 平安		14.4	4.2	7.0	170.499	70	良好	二段目 塗色 (Blue SYR 6.0)	外壁: 黒地にナナフジ・墨 (Blue SYR 17.1)	黒色 (Blue SYR 17.1)	内面黒色+光る 青苔斑痕
第11282	2	No.13, No.6	黒色器底 平安	口縁部~底部 平安	<12.4>	4.0	<4.0>	37.0	30	良好	瓦白地 (Blue SYR 7.1)	外壁: 黒地にナナフジ (Blue SYR 1)	白色 (Blue SYR 1)	内面黒色+光る 青苔斑痕
第11283	3	No.27, No.29	黒色器底 平安	口縁部~底部 平安	13.0	—	6.3	34	20	良好	瓦白地 (Blue SYR 8.2)	外壁: 黒地にナナフジ マ接合部分に擦れ跡 2ヶ所	瓦白地 (Blue SYR 15.2)	内面黒色+光る 青苔斑痕
第11284	9	No.129 +4912 +小笠窯	口縁部~底部 平安	口縁部~底部 平安	<10.6>	0.3	—	7.0	10	不良	口縁部: 黒地にナナフジ (Blue SYR 13.2)	口縁部: 黒地にナナフジ (Blue SYR 13.2)	黒色 (Blue SYR 13.2)	内面黒色 青苔斑痕
第11285	5	No.133 +4912 +SG01a	口縁部~底部 平安	口縁部~底部 平安	<25.0>	0.8	—	16.8	10	良好	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黒地にナナフジ (Blue SYR 8.6)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黒地にナナフジ (Blue SYR 8.6)	瓦白地 (Blue SYR 8.6)	内面黒色+光る 青苔斑痕
第11286	14	No.129	口縁部~底部 平安	口縁部~底部 平安	<26.8>	0.7	—	58.1	10	良好	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 8.6)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 8.6)	瓦白地 (Blue SYR 8.6)	内面黒色 青苔斑痕
第11287	11	No.173	黒色器底 黄灰	平安	—	—	—	23.0	—	良好	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	瓦白地 (Blue SYR 1)	内面黒色 青苔斑痕
第11288	13	No.123	黒色器底 黄灰	平安	—	—	—	31.17	—	良好	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	瓦白地 (Blue SYR 1)	内面黒色 青苔斑痕
第11289	10	No.2 +4912	黒色器底 黄灰	平安	—	—	25.35	—	良好	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 2)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 2)	瓦白地 (Blue SYR 2)	内面黒色 青苔斑痕	
第11290	16	No.11	黒色器底 黄灰	平安	—	—	54.35	—	良好	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 2)	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 2)	瓦白地 (Blue SYR 2)	内面黒色 青苔斑痕	
第11291	15	No.11	黒色器底 黄灰	平安	—	—	45.34	—	良好	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	口縁部: 黑地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	瓦白地 (Blue SYR 1)	内面黒色 青苔斑痕	
第11292	18	No.12	黄灰	端文切削断面	—	—	18.9	—	不良	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	白色 (Blue SYR 1)	内面黒色 青苔斑痕	
第11293	17	TG0111箱 +茶	口縁部	外生時代後期	—	—	37.79	—	良好	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	口縁部: 黒地にナナフジ 2ヶ所 底部: 黑地にナナフジ (Blue SYR 1)	白色 (Blue SYR 1)	内面黒色 青苔斑痕	

*口縁・底底面質
<→測定値 (1)保存量

2 石器観察表 斐邑鳥遺跡 繩文・弥生時代石器調査報告表

発掘調査番号	柱標PL	番号	留置	出土地点	注記	器種	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	備考
第6801	内14・15	1073	遺物外	III.02 No.6	未記	有大頭器	珪質岩	(49.0)	13.6	4.3	(3.0)
第6802	内14・15	1083	遺物外	III.02 No.7	4'x7'	石器	田代石	39.8	11.2	4.4	0.8 古墳時代の遺物に混入。
第6803	内14・15	1032	遺物外	I.X12 梱出面	1.III.12 梱	石器	安山岩	29.5	19.2	6.3	3.2
第6804	内14・15	1033	遺物外	若狭	東 Z.	石器	安山岩	(26.2)	23.8	7.1	4.2
第6805	内14・15	1076	遺物外	III.F10B.5	未記	石器	安山岩	25.5	33.0	5.5	3.7
P115		1045	遺物外	I.X02 カブシツ	1.III.2 2'x7'	石器	安山岩	36.7	27.4	7.7	9.0
第6806	内14・15	1032	遺物外	III.18・19 III層	未記	石器	安山岩	(64.7)	32.0	15.8	(30.8)
P115		1038	遺物外	斜手ノツバ下南端	西 南タマ面端	石核	安山岩	107.0	81.0	52.0	340.2
第6807	P115	1036	遺物外	III.02 黒色土上南端	1.III.2 黑色土上端	石核	安山岩	30.0	21.5	16.0	10.8
第6808	P115	1036	遺物外	I.X12 黑色土上南端	1.III.17 黑色土上端	石核	安山岩	78.0	43.5	27.4	79.6
第6809	P115	1037	遺物外	III.02 黑色土上南端	未記	石核	安山岩	(109.0)	50.0	29.0	
第6810	P115	1039	遺物外	楕円出面	1.III.17 C	打製石手	安山岩	(96.0)	73.0	15.5	(128.0)
第6811	P115	1040	遺物外	I.W.17C.5	圓錐鉗土	石核	安山岩	142.5	116.0	23.0	53.4
第6812	P116	1068	遺物外	斜手ノツバ下南端	西 南タマ	石核	安山岩	(119.0)	47.0	29.0	(40.0) 石材に近いの変形。
第6813	P115	1053	遺物外	北側上段 表土	東 北上 大	削製石器	安山岩	(99.0)	46.0	8.5	(18.3)
P115	1054	遺物外	若狭	東 北上段 表土	東 北上 大	削製石器	安山岩	(148.0)	61.0	40.0	(69.2)
第6814	P116	1062	S002	S2	III.02 黒色土上	月器	安山岩	(99.0)	63.0	11.5	66.8
P116	1069	遺物外	地出面	III.02 黒色土上	月器	安山岩	112.5	(66.0)	22.0	237.1	
第6815	P114・16	1075	遺物外	III.17 B ~ III層	月器	安山岩	90.0	93.0	19.0	214.6	
第6816	P110	ST1SPR3	SK174 壁	III.17 壁	月器	安山岩	66.0	60.0	16.0	90.3	
第6817	P114・16	1008	S002	S1	III.02 S1	石核	安山岩	(166.0)	80.5	38.0	(397.0)
第70818	P114・16	1030	遺物外	I.X02 S 5	III.02 S 5	石核	安山岩	105.0	79.0	38.0	350.2
P114・16	1021	遺物外	I.W~III層	III.02 C Z	月器	安山岩	96.0	83.0	28.0	240.6	
第70819	P114・16	1011	S039	S41	III.02 S1	石核	安山岩	113.0	49.0	27.0	240.6
P116	1013	遺物外	I.X17 黑色土上	I.III.17 黑	石核	安山岩	120.0	49.0	24.5	229.0	
第70820	P114・16	1012	S001	S3	III.02 S3	石核	安山岩	164.0	73.5	53.0	656.4
第70821	P114・16	1003	遺物外	I.S23 S4	III.02 S4	石核	安山岩	112.0	86.5	30.0	500.1
第70822	P114・16	1004	遺物外	I.X02 S7	III.02 S7	石核	安山岩	112.0	85.5	60.5	816.5
第70823	P114・16	1007	遺物外	I.W.C18	III.02 C Z	特殊骨管	安山岩	154.0	66.0	72.5	850.7
第70824	P116	1025	遺物外	I.W.C18	III.02 S3	台石	安山岩	251.0	218.0	66.0	480.0
P116	1026	遺物外	I.X02 S6	III.02 S6	台石	安山岩	252.0	200.0	90.0	630.0	
P116	1027	遺物外	I.S07 B層	I.S07 B層	台石	安山岩	406.0	105.0	119.0	2310.0	
第71826	P114・16	1069	S001	B15	石核	安山岩	32.0	(16.1)	5.5	(2.2)	
第71827	P114・16	1067	S001	B15	石核	安山岩	22.0	12.1	4.7	1.0	
第71828	P114・16	1088	S001	B15	石核	安山岩	(19.1)	12.8	3.4	0.8	
第71829	P114・16	1060	S001	B15	石核	安山岩	25.4	22.8	8.3	5.5	
P116	1112	S001	B15	石核	安山岩	27.0	29.2	8.9	6.9		
第71830	P114・16	1092	S001	B15	月器	安山岩	87.5	34.4	16.5	417.5	
P116	1112	S001	B15	月器	安山岩	51.2	33.7	8.2	16.5		

* 長さ・幅・厚さの()内の数値は保存量

3 製品遺跡 弥生時代上製品觀察表

相軸圖 番号	地點 名	管理 番号	報告 番号	出土層位 名	層厚 cm	幅 cm	長さ cm	外面部 形	内面部 形	材質	重量 g	鉛 量	備考
第9-129347 17-26	川原 内	SR01 SR010101010	2010BYCM 0000000000000000	土製円板 外生中期後半	2.7	3.0	0.6	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue305.4)	ナメラ リ	6.0	赤褐色磁片外利用
第9-129320 17-26	川原 内	SR01 SR01010102	2010BYCM 0000000000000000	土製円板 外生中期後半	2.3	3.7	0.6	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue305.4)	ナメラ リ	7.0	赤褐色磁片外利用
第9-129320 17-27	土器場 内	PL27	1085	土製円板 外生中期後半	5	3.2	0.8	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue305.4)	ナメラ リ	12.9	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用
第9-129331 17-27	土器場 内	PL27	202	土製円板 外生中期後半	4.7	4.0	0.7	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue304.20)	ナメラ リ	9.3	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用
第9-129323 17-27	土器場 内	PL27	205	土製円板 外生中期後半	3.1	5.2	0.6	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue305.0)	ナメラ リ	12.3	赤褐色磁片外利用
第9-129333 17-27	土器場 内	PL27	79	土製円板 外生中期後半	3.3	3.7	0.6	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue303.1)	ナメラ リ	10.0	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用 (Hue305.0)
第9-129333 17-27	土器場 内	PL27	144	土製円板 外生中期後半	3.6	3.2	0.7	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue305.20)	ナメラ リ	8.9	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用
第9-129326 17-27	土器場 内	PL27	133	土製円板 外生中期後半	3.7	3.4	0.7	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue306.8)	ナメラ リ	9.0	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用
第9-129326 17-27	土器場 内	PL27	258	土製円板 外生中期後半	0.30	1.1	0.9	良好	二点一直縦 切欠き	明治褐色 (Hue302.20)	ナメラ リ	7.4	横長次根X(鉛)、 赤褐色磁片外利用

4 石製品、ガラス製品觀察表

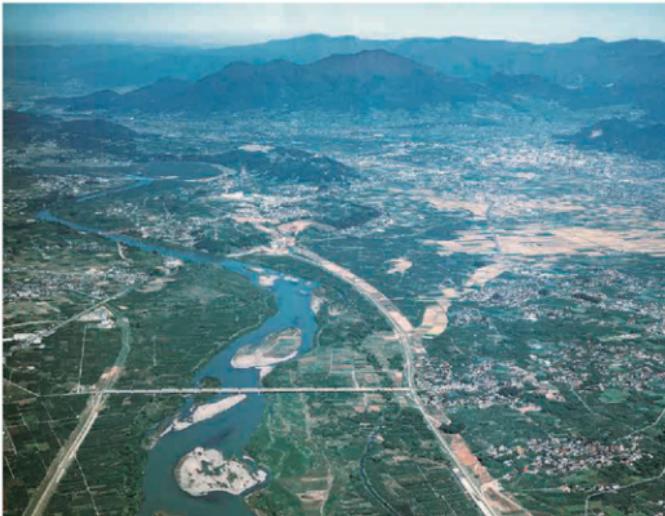
琵琶島遺跡 常安時代石製品、ガラス製品觀察表

相軸圖 番号	地點 名	管理 番号	報告 番号	出土土地 点	器種	材質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
第9-3121	琵琶島 瀬戸内海	PL27	1085	1層	管玉	碧玉(緑色透明)	19.5	6.7	1.5	1,000	φ2~3mm、田丸子町羽山14付近、上海市吹上灘Eの周辺
第9-3122	琵琶島 瀬戸内海	PL27	2001	1層下部	ガラス小玉	ガラス	5.8	4.5	0.2	180	φ1~2mm

5 金属製品觀察表

相軸圖 番号	地點 名	管理 番号	報告 番号	出土層位 名	器種	材質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	
PL29	琵琶 島	3002	SK361	1層	鍔	銅 鉄	8.5	8.3	6.3	21.1	施錠装置台帳番号59	
PL29	2	3003	SK361	1層	M.01	鍔治溝(横溝)	鉄	8.1	5.0	3.2	12.8	施錠装置台帳番号60
PL29	3	3004	SK361	1層	M.03	鍔治溝(横溝)	鉄	3.5	3.5	3.0	18.7	施錠装置台帳番号61
PL29	4	3005	SK361	1層	M.04	鍔治溝	鉄	2.5	2.5	2.3	5.0	施錠装置台帳番号62
PL29	5	3006	SK361	1層	M.05	鍔治溝	鉄	3.2	3.5	2.9	25.9	施錠装置台帳番号63
PL29	6	3007	SK361	1層	M.07	鍔治溝	鉄	2.6	3.1	2.1	13.8	施錠装置台帳番号64
PL29	7	3008	SK361	北半分-1F	M.08	鍔治溝	石	3.1	2.4	0.9	4.3	施錠装置台帳番号65
PL29	8	3009	SK361	1層	M.09	鍔治溝	鉄	3.0	3.8	1.5	12.2	施錠装置台帳番号66

写真図版



南方上空より高社山を望む（平成4年撮影）



琵琶島遺跡から高社山を望む



琵琶島遺跡の入口



上位段丘の掘立柱建物跡群



下位段丘に並ぶ遺構群（竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝跡、権跡）



基本層序（東区中央・シ地点南壁）



基本層序（南区北側・シ地点北壁）



SB01 検出状況



SB01



SB01 か



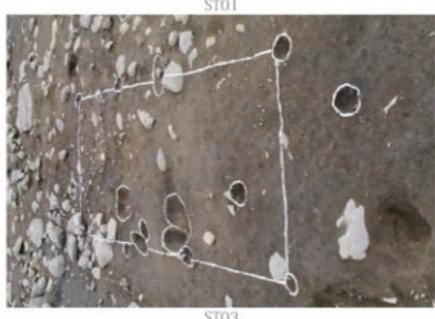
SB02 遺物出土状況

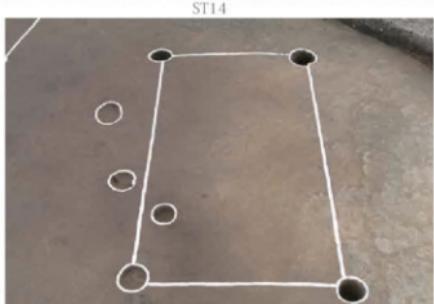


SB02



SB02 掘方







上空からの ST17 ~ 19



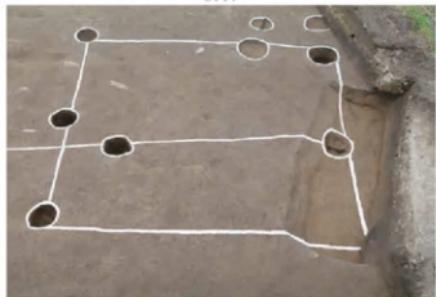
ST17 Pit1 断面



ST17



ST18



ST19



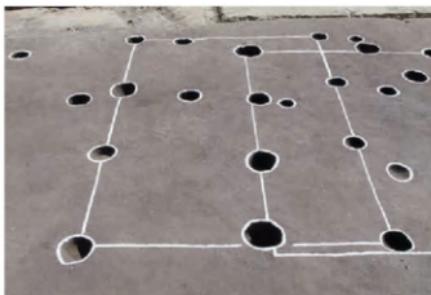
ST22



ST23



ST24





SD01 線断面



SD01



SD02 検出状況



SD02



SD03 検出状況



SD03 先端部断面



SD03



SD04



SD05



SAO1 検出状況



SA01



SAO2 検出状況



SA02



SQ01



SK285 遺物出土状況



SK291



SK291 逆茂木痕跡



SK358



SK289 断面



SK314



SK423 遺物出土状況



SK191 遺物出土状況

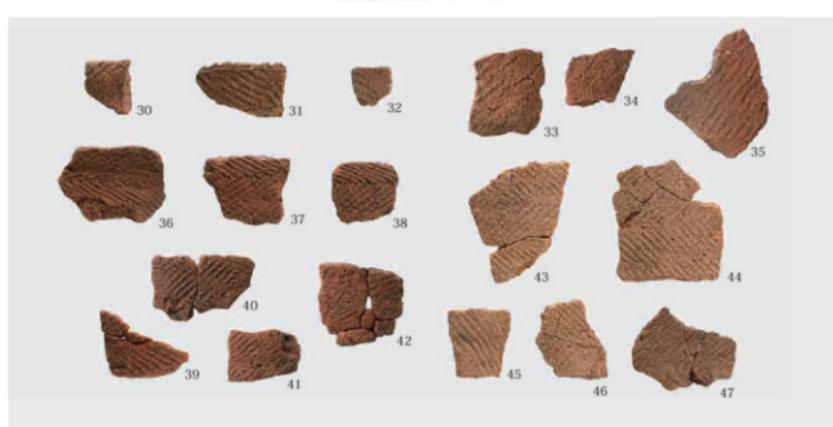


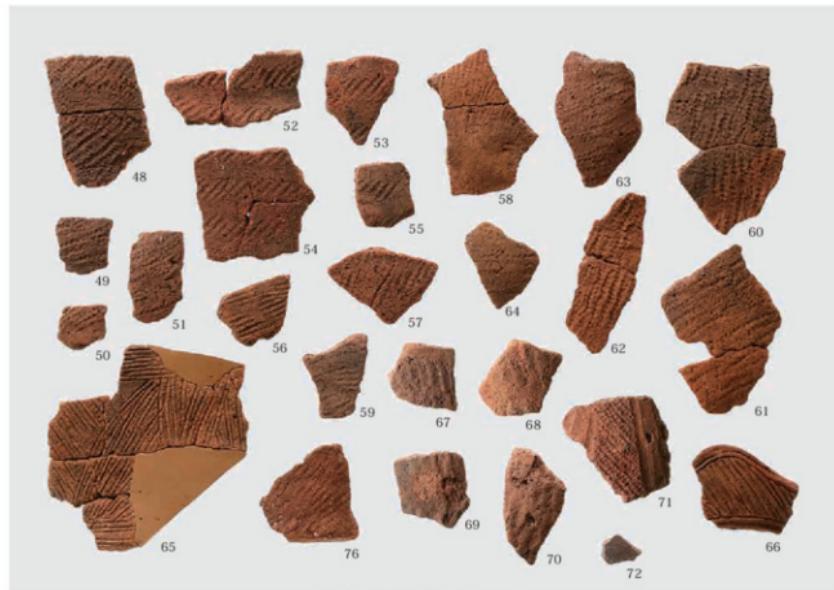
SK191 ロクロガソナ出土状況（断面）



SK191











有茎尖頭器、石鑿、石鑿未成品、石匙、剝片石器 (S ½ 2/3)



石核 (S ½ 1/2)



打製石斧、磨製石斧、大型船刃石斧 (S ½ 1/3)



スリキリ具、刃器、碟器、凹石、敲石、磨石、特殊磨石 (S ≈ 1/4)



台石 (S ≈ 1/6)

中野市試掘資料 (SB01 出土石器) (S ≈ 2/3)



SB01 出土土器 (S ≈ 1/3)



SB02 出土土器 (S ≈ 1/4 • 1/3)



ST 出土土器 (S ≈ 1/3)



SD 出土土器 (S ≈ 1/3)



SK 出土土器 (S ≈ 1/3)



SK423、SQ01 出土土器 (S ≈ 1/4)



SQ01 出土土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土圓形土器 (S ≈ 1/4)



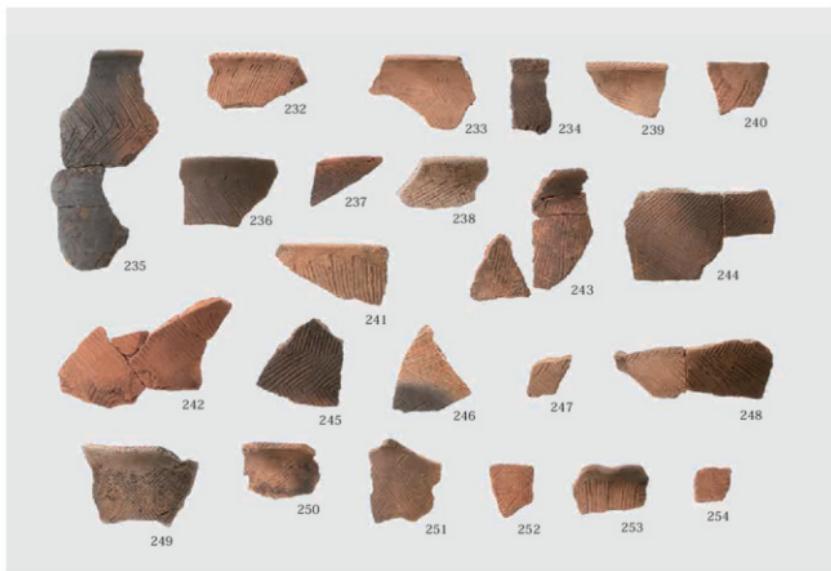
遺構外出土土器底部 (S ≈ 1/3)



遺構外出土甕形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土甕形土器（刻み文様）(S ≈ 1/3)



遺構外出土甕形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土圓形土器 (S ≈ 1/3)



遺構外出土鉢形土器、蓋形土器、瓶形土器 (S ≈ 1/4)



遺構外出土鉢形土器 (S ≈ 1/3)



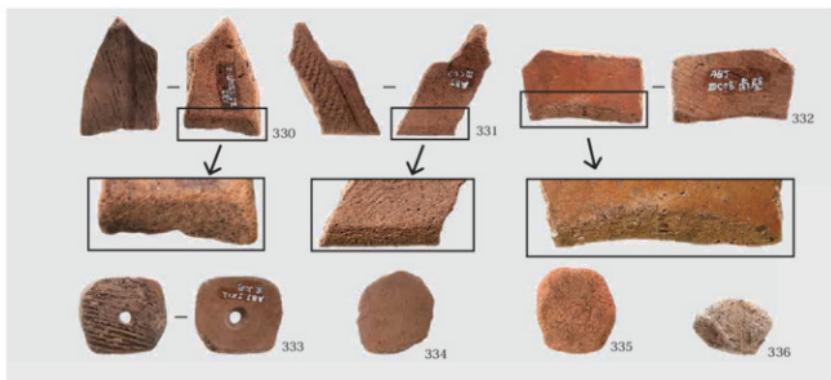
中野市試掘資料 (SB01 出出土器) (S 1/4)



中野市試掘資料 (SB01 出出土器) (S 1/3)



中野市試掘資料 (SB01 出出土製品) (S 1/2)



土製品 (S 与 1/2)



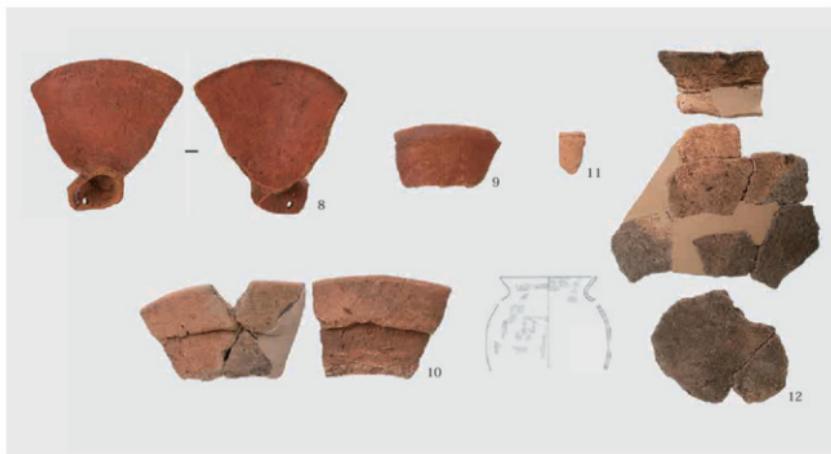
菅玉、ガラス小玉 (S 与 1/1)



SK191 出土土器 (S 与 1/4)



SK191 出土金属器（ロクロガンナ）（上：S 約 1/2、下：先端拡大）



前期遺構外出土土器 (S 約 1/3・1/4)



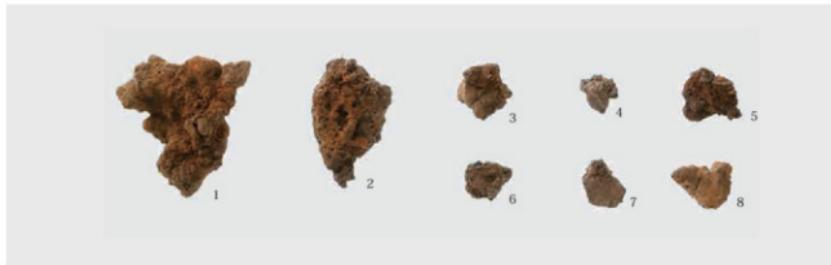
遺構外



SK・SF・遺構外出土土器 (S ≈ 1/4, 14 のみ S ≈ 1/1)



遺構外出土土器 (S ≈ 1/3)



SK361 出土鉄滓 (S ≈ 1/3)



調査範囲南側遠景（北東より）



調査範囲中央遠景（東より）



調査範囲北側遠景（南東より）



T1 西端、北壁断面（南西より）



T1 下部、北壁 7 断面



T2 下部、北壁 1 断面 煙地造成（古時代）の盛土状況



T2 下部、完掘状況（西より）



T3 全景（北より）



T5の掘削作業（西より）



T11上部、北壁断面（南東より）



T11下部、北壁断面（南西より）



T8西側、北壁断面（南東より）



T8東側、北壁断面（東より）



P4北壁断面



T13全景（南東より）



T14下段東側、北壁断面



T15 北壁断面（南西より）



T15 北壁、土壌サンプル採取地点



SD01 北壁断面



SD01 実掘（南東より）



T17 断面全景（北東より）



T19 全景（南東より）



T18 南側、西壁断面（南より）



T18 北側、西壁黒色粘土（アップ）（北東より）



T18 北壁断面、科学分析土壤サンプル採取状況



SQ01 (H26 年度)、土器出土状況 (南東より)



SQ01 (H27 年度)、土器出土状況 (南より)



T21 北側、東壁断面



T21 北側、IV層群 木出土状況 (南より)



3区完掘状況 (南より)



SQ01b 土器出土状況 (南東より)



3区完掘状況 (北より)

報告書抄録

平成 28 (2016) 年 3 月 18 日 発 行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 112

琵琶島遺跡 壁田城跡 ねごや遺跡

一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

— 中野市 —

発行者 長野県北信建設事務所
(一財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026・293-5926 Fax 026・293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 華友印刷株式会社
〒 381-0036 長野県長野市平林 1-34-43
Tel 026・243-2351 Fax 026・251-0001